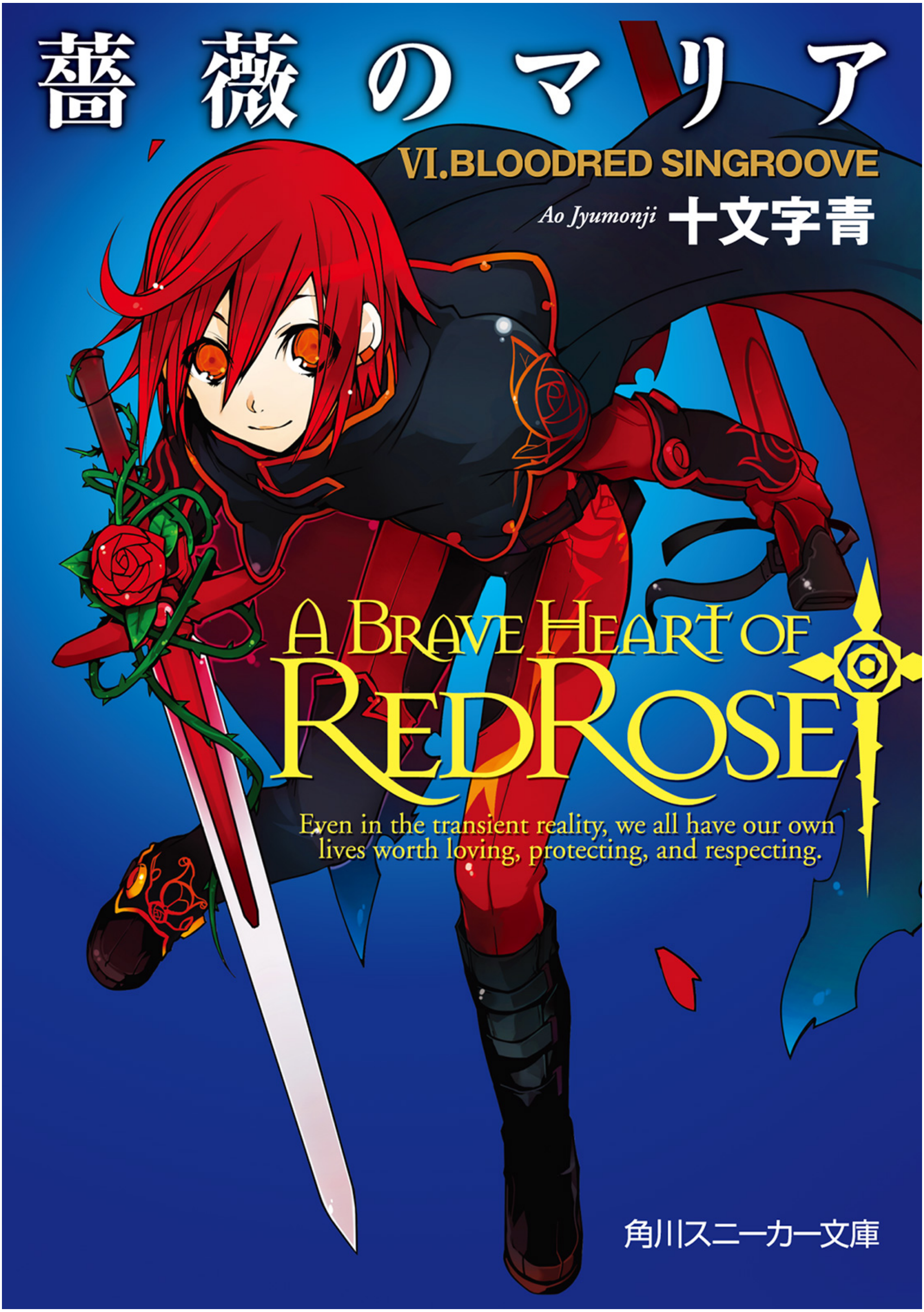

薔薇のマリア
VI.BLOODRED SINGROOVE
Ao Jyumonji 十文字青
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

Ⅵ.BLOODRED SINGROOVE




「……〝降臨〟、
といわれています……
異界生物(フリークス)が、異界の
扉を通らずに、
この世界に確固として
存在しはじめる……
とても、非常に……
珍しい現象ですが……」
サンランド無統治王国 ジェードリ・バルモア地区
〝サンブレイク・ホテル前〟
かつて魔導王だった。〝狂乱の乙女(フレンジー・メイデン)〟
サリア・ベル。不老不死を求めて、
悪魔に魂を売り渡し、贄の園に堕ちた。
哀れな女だ——。


わしはな。アホの中のアホや。キング・オブ・アホやで。それでええねん。わしはワレの生きたいように生きるて決めとんのや。もともと望まれもせんと生まれて、闇に葬られるはずやった命やからな。この命はもうわしだけのもんや。わしがどう使おうと勝手やろ。わしは、わしが信じるもんのためにガッツンガッツン生きて、いつか笑て豪快に死んだるわ。

薔薇のマリア

Ⅵ．ＢＬＯＯＤＲＥＤ ＳＩＮＧＲＯＯＶＥ

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅵ

—BLOODRED SINGROOVE—

Ao Jyumonji

First published 2006 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration ： *BUNBUN*
design work ： *design CREST*

A BRAVE HEART OF RED ROSE

VI

CONTENTS

chapter. 1　闇に生まれし者は——7

chapter. 2　帰れないかもしれない——18

chapter. 3　再会にまつわる諸事情——28

chapter. 4　退路——59

chapter. 5　だいそれたこと——80

chapter. 6　火を見るよりも明らかな——99

chapter. 7　愛が世界を救う——119

interlude　神の子——130

chapter. 8　些細な予言——140

chapter. 9　北海から——152

chapter. 10　わからないことだらけで——168

chapter. 11　君に捧げる詩——178

chapter. 12　僕があまりに無邪気だったとして——186

chapter. 13　ロシュよ——215

onlookers　猫と姫——221

chapter. 14　言い訳のように——225

chapter. 15　赦されるためならば——416

あとがき——426

CONTENTS

chapter.1　闇やみに生まれし者は

chapter.2　帰れないかもしれない

chapter.3　再会にまつわる諸事情

chapter.4　退路

chapter.5　だいそれたこと

chapter.6　火を見るよりも明らかな

chapter.7　愛が世界を救う

interlude　神の子

chapter.8　些さ細さいな予言

chapter.9　北海から

chapter.10　わからないことだらけで

chapter.11　君に捧ささげる詩

chapter.12　僕があまりに無む邪じゃ気きだったとして

chapter.13　ロシュよ

onlookers　猫ねこと姫ひめ

chapter.14　言い訳のように

chapter.15　赦ゆるされるためならば

あとがき

A BRAVE HEART OF RED ROSE

VI

MAIN CHARACTERS



Katari
カタリ

エアヘッド半魚人。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



"Sir Judas" Aronz Needlespear
"サー・ジューダス"アロンズ・ニードルスピア

血塗れ聖堂騎士団団長。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。



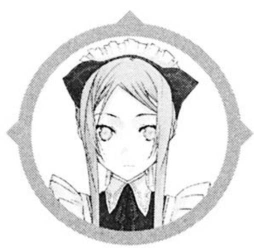
"Sir James" Daredevil
"サー・ジェイムズ"デアデビル

血塗れ聖堂騎士団
「裁きの石」隊長。



Alpha
アルファ

白狼。



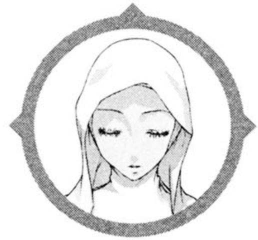
Claudia
クローディア

ジョーカーの召使い。



"Saria-Bell"
サリア・ベル

狂乱の乙女。



"The Sin"
〝罪そのもの〞

罪深き女。



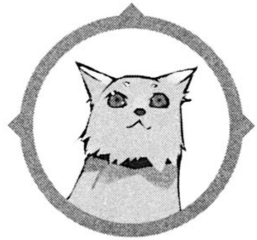
Carlo Bossi
カルロ・ボッシ

パンカロ・ファミリーの若頭。



Marunaka
マルナカ

トラービト。



Judi
ジュジ

猫。



Amari
阿嚒李

姫。

and the others

Tomatokun&ZOO
トマトクンとZOOの仲間たち

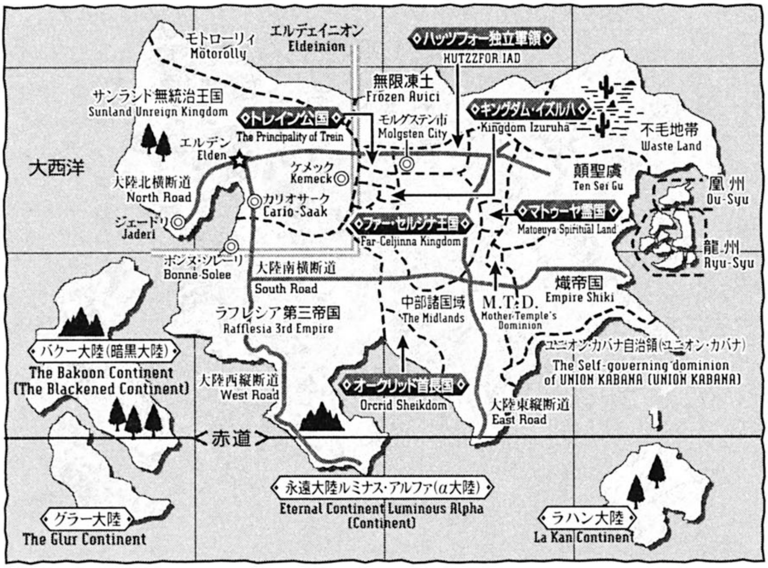
Evelina, Bobo Faccio etc.&Pancaro family
エヴァリーナ、ボボ・ファッチョ他パンカロ・ファミリー

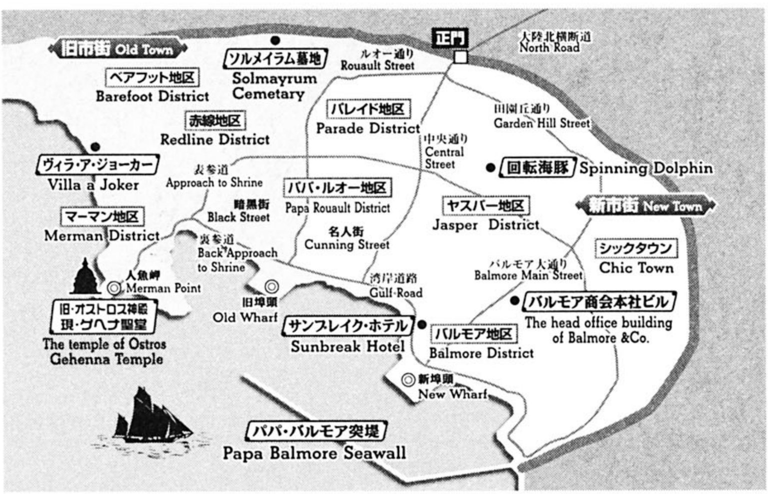
"Sir Andrew"Henry Blackmore&"Sir Bartolomeus" Ionea Brantlow etc.
〝サー・アンドリュー〞ヘンリー・ブラックモア&〝サー・バーソロミュー〞イオネア・ブラントロウ他
血塗れ聖堂騎士団

Ricou&Luca
リクとルカ

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Jaderi: the Seaside town of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 ジェードリ

MAP製作 On Graphics

Omenage 897 11th revolution 5th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区

〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.1

闇に生まれし者は

砂さ漠ばくだった。

見み渡わたすかぎりの風景が、

ひび割れたこの心が、世界全体が。

乾かわききった砂の海にひっそりと咲さく花だった。

あなたが、あなただけが。

あなたはやがて、はかなく絶えて、はらはら散って、この手をぬらした。

この胸はまだしめっている。

あなたを何と呼ぼう。

いまだ名づけることさえできない、この思いを。

　暗闇になじみ、闇夜にまぎれる。

　音を立てず、体たい臭しゅうをも消す。

　獣けものですら、その気配を察知することは叶かなわない。

Assassin

　彼は、遥はるか遠いラハンの地で、そう呼ばれる者の一人だった。

　ラハンの古語で「闇の子」の意だという。

　その名のとおり、砂色の衣を脱ぬぎ捨て、黒い薄うすて手での上下

姿となって、漆しつ黒こくの仮面をかぶった彼は、ほとんど闇に同化している。

　彼は闇をまとう者だ。そして、闇をかきわける。闇そのものとなり、ひそむ。彼は巨きよ大だいな柱の陰かげにひそんでいる。

　大だい柱ちゆう廊ろう。

　かつての大海王神オストロス神しん殿でんは、今、暴ぼう虐ぎやくの占せん領りよう者しやたちによって、ゲヘナ聖堂と呼ばれているらしい。その背骨にあたる長い階段だ。高い天てん井じようが無数の柱だけで支えられている大柱廊は、入り口から拝はい殿でんを貫つらぬいて、大いなる祈いのりの場まで達する。

　その片かた隅すみに彼はいる。柱にぴったりと寄り添そって、機をうかがっている。

　大柱廊には等とう間かん隔かくに歩ほ哨しようが立ち、それに加えて巡じゆん回かいもいる。闇と化した彼といえど、移動できる隙すきはそう多くない。多くはないが、ある。彼は決してそれを見み逃のがさない。

　じりじりと動く。あるいは、ひたひたと。

　ひそかに侵しん入にゆうし、目で見て、耳で聞き、鼻で嗅かいで、肌はだで感じ、入手した情報のすべてを持ち帰る。それが彼の任務だ。与あたえられた任務を果たす。彼にとって、それは呼吸に等しい。生存の証明とさえいえる。

　だが、不意に乱れた。

　彼は夜空を振ふりあおいだ。

　見られている。

　──ように感じた。

　空に？　またたく星に……？

　不快、という言葉が頭に浮うかんだ。

　彼はそれを打ち消さない。不快。たしかに、不快だ。その感覚

を、一つの情報として心にとめておく。ただし、乱れは正す。彼は一いつ瞬しゆん後にはふたたび闇となった。隙を見つけると同時に移動する。次の柱、また次の柱へと。闇の子であり、闇そのものである彼は、闇に親しみ、闇を渡わたり歩いて、前進する。向かうは大いなる祈りの場だ。可能ならば、その先の奥殿まで行く。すでに、拝殿、僧そう房ぼう、奉ほう殿でんはおおよそ見て回った。もはや、ここは名実ともに神殿ではない。その実情を彼は知ったが、まだ不完全だった。

　何かが、ある。

　いや。

　──いる。

　それを知る必要がある。探さぐりあてねばならない。この不快感の源を。かつてアッサシンと呼ばれた者の経験か、もしくはただの勘かんか。そうかもしれない。そうではないかもしれない。とにかく、彼を突つき動かすものがある。この先にいるのだ。彼は柱の陰を奔はしる。闇となって柱から柱へと駆かけ渡る。長い階段を上ってゆく。やがて歩哨が途と絶だえた。巡回もいない。彼は足を速めた。吸いよせられるように、誘さそわれるように進んだ。進むごとに、まとっていた闇が少しずつ引き剝はがされてゆく。その事実に彼は薄うすうす気づいている。このままでは、彼は闇そのものではなくなってしまう。闇から逸いつ脱だつしてゆく。階段を上るごとに。いいのか？　よくはない。だが、大いなる祈りの場はすぐそこだ。

　ふと、足を止めて、音を立てずに息を吐はいた。

　見つけた。

　いまだしめったままの胸を、ざわざわと騒さわがせる、何かを。

　それは不安だ。戸と惑まどいでもある。

　彼は、だが、漆黒の仮面をかぶっている。おのれが生まれ出いでし闇の中にすべてを閉じこめ、封ふうじこめる仮面だ。彼は闇にならねばならない。彼はまたもや闇をまとおうとする。闇となって、闇を進み、さらに階段を上った。この上はもう大いなる祈りの場だ。瞬間、疑いが頭をよぎる。果たして、自分は闇になりきれてい

るのか、否いなか。あの満点の星空に見下ろされて。

　視線を感じる。やはり、見られている。

　風。強い、風だ。

　大いなる祈りの場は、大柱廊と同じように壁かべがない。天井は数十本の柱だけで支えられている。円形だ。明かりはなく、暗い。海風が吹ふきすさんで、潮のにおいが染しみついている。さながら、海流同士が激しく衝しよう突とつしている海中のようだ。

　その中央に、いる。

　片かた膝ひざをついて、両手を組みあわせ、頭こうべを垂れている。

　人だ。男だろう。

　男のかたわらには、堂々たる巨きよ軀くの馬が傲ごう然ぜんと首をもたげて佇ちよ立りつしている。

　それから、稀まれに見るその馬体にも見み劣おとりしない巨きよ漢かんが、男に向かってひざまずいていた。

　並んで、男がもう一人いる。

　さらに、あれは━巨大な十じゆう字じ架かだろうか。

　彼らは動かない。祈りでも捧ささげているのか。唐とう突とつに思った。退ひくべきか。

　それとほぼ同時だった。

「サー・ピーター、サー・ジェイムズよ」低く、ぬくみのある、鼓こ膜まくを震ふるわせるというよりも、頭の中に染み入ってくるような声だった。「━ロシュの仰おおせのとおりでした。客人です。丁てい重ちようにおもてなしを」

「ハッ……！」「御ぎよ意いのままに」

　立ちあがった。巨漢と、もう一人の男が。向かってくる。ダンダンダンダンダンものすごい足音を立てて。あるいは、石の床ゆかの上を

滑すべるように。

　闇やみはすでに剝がれた。闇にまぎれるための黒い衣服と仮面は、もはや道どう化けの衣い装しように等しかった。彼は、だが、すぐさま反応していた。逃にげだした。階段をまっすぐに駆け下りる。身を隠かくすこともせず、逃げる。「──曲くせ者ものだ！　者ども、出あえ……！」巨漢の声だ。後ろから何か飛んできた。彼は振り返らない。とっさに身体からだの向きを変えて、よける。槍やり。巨漢は遅おそい。もう一人は速い──が、今、槍を投じたことで、やや距きょ離りがあいた。ただ、歩ほ哨しようたちが集まってきて、行く手をふさごうとしている。彼らの数はまだ多くないものの、そのうち増えるはずだ。続々と増えるだろう。仮面の奥で、砂色の瞳ひとみが輝かがやきを強めた。ようやく、殺せる。そうだ、殺せ！　殺せ、殺しまくれ！　思うままに、血をむさぼれ……！

　この手で命を摘つみとるたびに、砂さ漠ばくに咲さいて散った花の夢を、あなたを抱だく夢を見る。

　それはとてもかなしいことだと、あなたは言った。それは復ふく讐しゆうで、裏切りでもあるのだと。

　だが、それでも、あなたの夢を見たい。せめて夢の中であなたを抱きたい。

　彼は音もなく鞘さやから刃やいばを抜ぬいた。

　右手で、刺し突とつ斬ざん撃げき両りよう用よう短たん剣けん、雄おすのグレアデ。左手で、斬撃兼けん解体用短剣、雌めすのリレッザ。

　ただ斬きってもいい。引き裂さくのもいい。刺さし貫つらぬくのもいい。引き剝がすのもいい。かき回せばいい。断たち切って斬り分けろ。縦に裂け。横にかっさばけ。縦横に斬り刻め。すべての感かん触しよくが刻まれて刻みつけられ、もう抜けだせない。抜けだすことなど思いもよらない。抜けだす必要はない。Ａｈｈｈ……！　殺せ。殺せ！　殺せ！　生命の破は壊かいには味がある。極ごく上じようの味だ。それは、あなたの舌のように、甘い。

　あの味を味わうために彼は近づく。歩哨だ。彼の速度に驚きよう愕がくして息をのんでいる。兜かぶとをかぶり、鎧よろいを着て、剣と盾たてで武装している。彼は雄のグレアデで兜をはねあげ、雌

のリレッザで鼻を削そいでやって、頸けい動どう脈みやくを斬り裂きつつ、雄のグレアデで目玉をくりぬいて、その奥の脳を損傷させた。間をおかず、五メーテル走って別の歩哨の前にしゃがみこみ、膝ひざ裏うらに雄のグレアデを埋うめこんで、股ももの鎧の継つぎ目を雌のリレッザできれいに斬り裂きながら装そう甲こうをめくり、下腹部を雄のグレアデでめちゃくちゃにしてやった。違ちがう歩哨が駆けよってきた。振ふり下ろそうとした剣を持つ右手の肘ひじに雄のグレアデを叩たたきこんだ。Ａｈａ！　穴だ！　穴があいた！　彼は嬉き々きとして穴を拡ひろげた。解体した。悲鳴があがった。それを聞きながら彼は息を吸いこんだ。吐きながら殺した。「──い、一気に……！　囲んで、一気に行け……！　ばらばらに突っこむな！」殺した。「うわあぁっ……！」殺した。「──怯ひるむな！　我々は聖なる炎ほのおに……！」殺した。「ロシュ──」殺した。「ロ、ロシュの名のもとに……！」殺した。殺した！

　彼を阻はばむ者は、すぐにいなくなった。もっとも、それは一時的な空くう隙げきに違いない。だが、彼にとっては十分だった。殺して、殺して、殺して……！　殺す快感にうち震えていても、彼は任務を忘れていなかった。情報を収集して、持ち帰る。彼は脱だつ出しゆつしなければならない。

　仲間たちのもとへと帰らねばならない。

　そうだ。

　彼には仲間がいる。

　闇に生まれ、生命を闇に葬ほうむり、やがて闇に還かえってゆく宿命の闇の子にも、仲間が。

　一いつ瞬しゆんだった。彼らの顔が思い浮うかんだ。仮面に隠された彼の口くち許もとがゆるんだ。殺人の快感が失うせていた。

　信じがたいことだった。彼はわずかにうろたえた。ほんの少しだけだ。彼は腰こしの引けた歩哨どものまんなかを突つっ切ろうとした。帰るために。その足が止まった。背後だ。知らずに雄のグレアデが出た。火花が散った。弾はじいた。剣。二合。三合。振り向きざまに、打ちあった。槍を投げてきた男か。苛か烈れつで精せい緻ちな剣筋だ。速度もある。膂りよ力りよくも十分だ。しかし。

「セイッ……！」

　右から左への斬り下ろしから、即そく座ざに手首を返して斬り上げてくる。男の剣技は正確すぎた。読みどおりだった。男が斬り上げるタイミングで、彼は懐ふところに入ろうとした。その瞬間だった。

「──くっ……！」

　男は跳はねるようにして後ろに倒たおれこんだ。

　男は兜をかぶっていなかった。

　整った顔が、引きつって、ゆがんでいた。

　男は転がるようにして逃げた。

　明らかに、自身の敗北を悟さとった態度だった。

　腕うでは悪くないが、敵する者ではない。逃とう走そうが最優先される今このときに、追つい撃げきする必要はないと判断した。彼は踵きびすを返して歩哨たちの間を一息に駆かけ抜けた。

「お、追え……！」「何をしている！」「逃がすな……！」

　彼はすべてを斬り裂くように逃げる。実際、雄のグレアデと雌のリレッザですれ違いざまに斬り裂きながら逃げる。柱のそばの篝かがり火びを蹴け飛とばして逃げる。大だい柱ちゆう廊ろうから通路に入る。右式しき殿でんへの通路だ。その先には右奉ほう殿でんがあり、さらに右僧そう房ぼうがある。僧たちの宿舎だった僧房は、そのまま兵士たちの寝しん所じよとして使われているようだ。その右僧房からだろう。騒さわぎを聞きつけて、大勢の兵士が押っ取り刀で駆けつけてきた。前後から挟はさまれる恰かつ好こうになった。彼は、だが、止まらない。大柱廊にかぎらず、元オストロス神殿の通路には、基本的に壁かべがない。基き礎その上に石の床ゆかがあって、天てん井じようが柱に支えられている。彼は躊ちゆう躇ちよせずに外に躍おどりでた。すぐ先は断だん崖がいだ。その下は海だ。「──追いつめたぞ！」「囲め！　囲め……！」「袋ふくろの鼠ねずみだ！　包囲してとらえろ……！」

　逡しゆん巡じゆんはなかった。

　彼は追っ手たちを嘲あざ笑わらうように身を投げた。

崖がけだ。

断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきだ。

空気のかたまりを感じた。それがぶつかってきて、彼の身体は一瞬、浮いた。いや、浮いたような気がしただけで、もう落下しはじめていた。耳許で轟ごう々ごうと風が鳴って音が消し飛んだ。感覚が吹ふき飛ばされそうになった。その中で、彼は雌のリレッザを鞘に収め、仮面を脱ぬぎ捨てた。雄のグレアデを両手で持った。身体を縦に回転させた。回転の勢いをのせて、雄のグレアデを突きだした。

絶壁に突き立てた。

「――――ッ……！」

波音が聞こえる。

遠くに大勢の声も聞こえる。

断崖にぶら下がったまま、彼は一つ息をついた。

瑠璃繁縷ピンパーネル。

この身に花の名など似つかわしくない。わかっている。

だが、あなたが呼んでくれたその名を捨て去ることはできない。

仲間たちが呼んでくれるその名を捨て去るつもりもない。

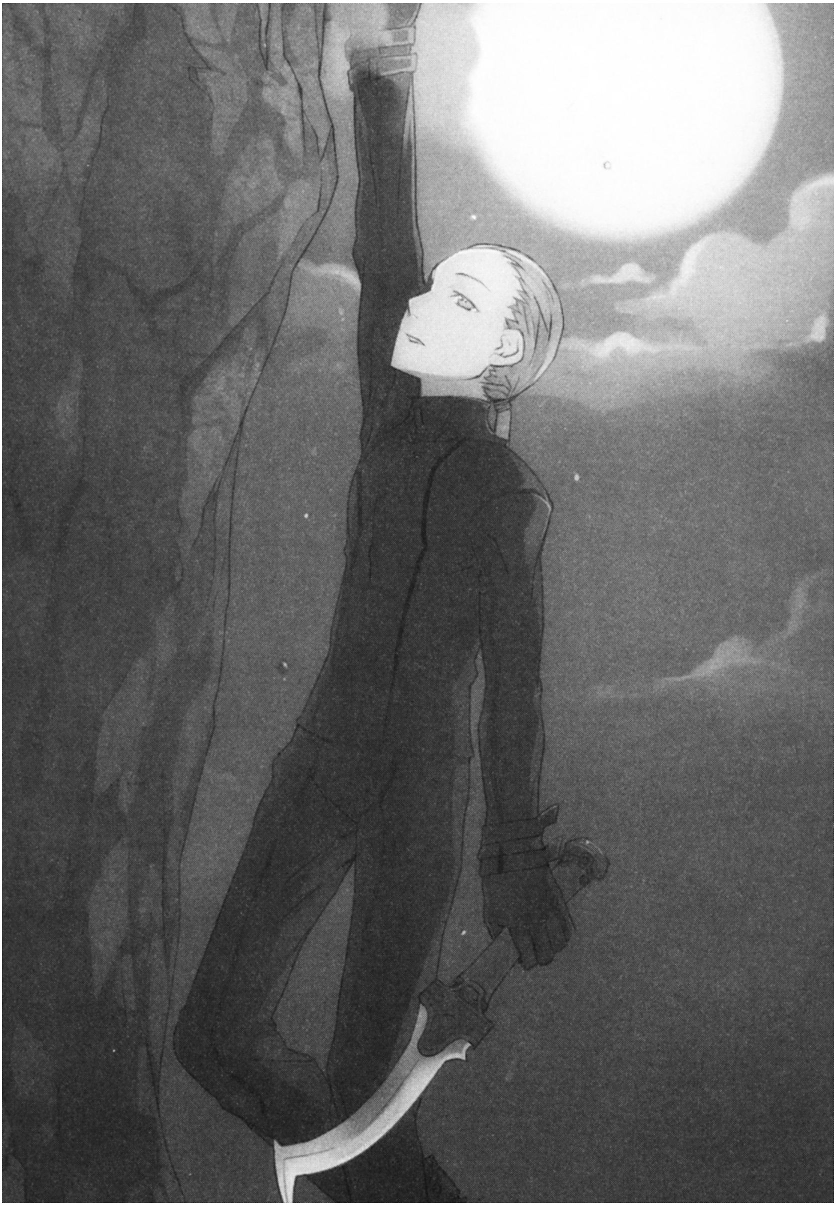
彼は仲間たちのもとへと帰るだろう。

恩人であり、主とも仰あおぐ男が彼に言った。「お前のことだからわかってると思うが、戻もどってくるところまでが仕事だからな。ちゃんと帰ってこいよ」

「はイ」

と、低く呟つぶやいてみた。

そのとき、彼は微笑ほほえんでいたかもしれない。



Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ベアフット地区

"a former buccaneer's den"

chapter.2

帰れないかもしれない

—約束、したんだ。

ずっと、そばにいるって。

必ず、帰らなきゃ、ならない。

帰らないと。

帰るんだ。

おれは、帰る。

帰る。

—ルカ。

ジョルジュ。ステラ。ラッチャ。テッド。アンナ。ミミ。

みんながいる。ローラの家に。おれは、帰らないと。帰りたいんだ。こんなところでぐずぐずしている場合じゃない。こんな、暗くて、湿しめった—ここは、どこだ……？

死のにおいがたちこめている。

生き物の死体がたくさんある。

おれは、生きているのか？

それとも、おれも死んでいるのか？

身体からだが、動かないんだ。呼吸は、しているような気がする。音が、する。ひゅう、ひゅう、息を吸って、吐はく音がする。ごほげはぐは、と、たまに咳せきが出る。喉のどが、痛い。胸が、痛い。耳鳴りが、する。おれは、何かを、吐きだす。たとえば、胃の内容物。いや。もう、からっぽだ。これは、血だ。血と、血のかたまりだ。なんだか、腐くさったにおいがする。腐っているのは、おれかもしれない。腐ふ敗はいし、崩くずれ落ちて、消える。おれは、そのにおいを嗅かいでいる。死のにおいだ。おれは気づく。

おれはまだ、死んでいない。

少しずつ、死のうとしている。

どうして……？

おれは、

おれは──、

戦った。

サー・ジューダス。

ああ。

静かに狂くるったあの男を、おれは殺そうとした。あの男を殺して、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの主立った騎士を殺して、エンツォさんたちを殺やった化物も殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、殺して、おれがこの手で、殺して──おれは人間じゃないから、その力があるはずだと。そんな力もないのなら、おれには価値がないと。おれはそう思ったんだ。おれは守ることができるはずだと。

もうたくさんだった。

ローラが死ぬなんて、想像していなかった。

ハーヴェイがあんなふうになるなんて。

ファミリーの人たちが、あんなにたくさん死ぬなんて。

終わらせたかったんだ。

人間のふりをやめてしまえば、おれにそれが、できるんじゃないかって。

そうして、素知らぬ顔でおれは帰るつもりだったんだ。

戻れると思っていた。

本当に。

ルカ。

ああ、ルカ。

変だな。

こんなふうになってから感じるなんて、間の抜ぬけた話だけれど。

好きだよ。

ルカ。

おれを好きだと言ってくれた。

おれも、おまえが好きだよ。

月と海に見守られて、おまえを抱だきしめていたとき、おれはとても安らかな気持ちだった。あたたかくて、満たされていた。いろいろなことを思い出した。おまえがいつもおれを待っていてくれたこと。たまにおまえを捜さがしに行ったこと。おまえはよく、扱あつかいづらい力を操あやつれるようになろうと、夜の海岸で一人、練習していた。おまえはたまに一人で泣いていた。父親が死んだ海に向かって泣いていた。裸足はだしの海岸でおれを見つけてくれたのは、おまえだった。

おまえはいつだって、自分を守るために誰だれかを傷つけることを恐おそれていたんだ。

おれもそうだった。

最初の捧ささげの儀ぎ式しきで、おれは失敗した。偽にせ物ものの王子として、穢けがれし者どもの国の民たみに奉ほう仕しし、慰なぐさめなければならないのに、おれは逆に傷つけた。

怖こわかった。

怖かったんだ。

彼女には腕うでが五本あった。足は三本だった。全身が黒く硬かたい殻からに覆おおわれていた。目は複眼だった。口には無数の鋭えい利りな牙きばが何重にも生えていた。「ををを美シイ王子様わたシニ恵めぐみを慰めををををををを」と彼女は迫せまってきた。おれは黙だまって彼女に捧げなければならなかった。それがお

れに与あたえられた役目だった。おれは喜んでそれをしなければならなかった。彼女を受け入れて、彼女を慈いつくしんで、彼女を愛あい撫ぶして、彼女を慰めなければならなかった。求められれば、誰にでも。修道僧モンク以外なら、たとえどんな容姿でも、どれだけ機能が欠けつ如じよしていても。それが王や女王や王子や王女の神聖な仕事だった。

　でも、気がつくと、おれは叫さけんでいた。

　おれは変わっていた。

　彼女が望む「美しい王子」ではなくなっていた。

　それどころか、彼女は死んでいた。

　おれが殺したんだ。

　儀式を見守っていた修道僧モンクが言った。

「所しよ詮せん、模造品、か……。失敗、だ……。──処断、を……」

　おれは追放された。果てなき道。どこに通じているとも知れない、かすかな光もない道を、おれは歩いた。歩いた、はずだ。覚えていない。おれが覚えているのは──、

　そう。

　おまえの手がおれにふれた、あの瞬しゆん間かん。

　おまえの顔を見た。

　ルカ。

　会いたい。

　おまえのところへ帰りたい。

　寒いんだ。

ひどく、寒い。

凍こごえそうなんだ。

抱きしめて欲しい。

どうかおれをあたためてくれないか。

──血、だ。

足りない。

そうだ。サー・ジューダス。あの男にやられた。あの光の、槍やりで──刺さし貫つらぬかれた。あの男は反応できなかったはずなのに。予測されていた。身体中、穴だらけにされた。傷が。血が。流れた。流しすぎた。おれは逃にげた。大いなる祈いのりの場から飛び降りた。下は海だった。おれは人間じゃない。海面に叩たたきつけられても、死ぬことはなかった。全身がガタガタになっても、生きのびた。おれは泳いだ。漂ただようように泳いだ。そして、たどりついた。ここは──拠きよ点てんだ。ファミリーの集合場所の一つ。ニーノ・パンカロが指揮をとっていた拠点だ。だから、か？　戦いの跡あと。まだ回収されていない、死体。死体。死体。双そう方ほうの死体。痛い。身体からだのあちこちが痛い。動かない。足りない。血が。力が。動く、ためには──帰る、ためには──、

喰くえ。

と、誰かが言った。

誰だ？

喰う？

何を？

おれが？

なんで？

なぜ？　だって、餓うえているんだろう？

餓えて……？

　違ちがうか？　必要なんだろう？　力が。

　必要だ。

　じゃあ、喰えよ。

　喰え。

　喰って、力にしろ。

　力に？

　ああ。そうだよ。喰うんだ。喰わないと、死ぬぞ。

　おまえは死ぬ。

　喰わないと、死ぬ。

　そのうち血がなくなる。意識が途と切ぎれる。心臓が動かなくなる。脳が働かなくなる。おれは腐くさる。腐って、朽くちる。永遠に死ぬんだ。もちろん帰れない。ルカに会うことなんてできない。喰えよ。喰え。喰って、生きるんだ。生きのびるんだ。「失敗作、だ……」喰え。「喰ろうて……吸収、する型は……駄だ目めだな」喰え。「衝しよう動どうの……抑よく制せい、が……」喰え。喰うんだ。「だが……あの状態から、よくも……ここ、まで……」喰え。必死に這はえ。這って、探さぐれ。「データ、は……採れた。貴重な、データだ……」最後の力をふりしぼって、つかめ。「我が国の、存続の、ために……」肉。爪つめを立てろ。引き裂さけ。かぶりつけ。喰え。生きるためだろう。ためらうな。生きるんだ。喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰って、喰らって、生きるんだ。生きるための力にするんだ。ああ。うまい。うまい。久しぶりだ。うまい。なんてうまいんだ。

　そういえば、あの女もうまかった。

　最初の捧ささげの儀ぎ式しきで、生意気にもおれを犯おかそうとした、あの女ともいえない女も。

　おれは殺して喰ったんだ。

　うまかった。

修道僧モンクたちが何か喋しやべりながら見ていた。

おれが食事している場面を。

おれは喰った。喰いつづけた。骨までしゃぶって、嚙かみ砕くだいて、喰った。

うまかった。

馬ば鹿かどもめ。

不能の修道僧モンクどもめ。

おれを失敗作だなんて。

こんなにうまいのに。

喰って、それを、みずからのものにする。地べたを這いずりまわる蟲むし同然の姿だったおれは、そうしてやっとあの姿を手に入れた。そのためにおれは喰った。たくさん喰った。おれはあのひとの姿形を思い浮うかべながら喰った。おれは願った。喰って、喰って、むさぼるように喰って、ようやくおれは手に入れた。

あのひとに化ける力を。

だから、まただ。

また喰って、こうして喰って、おれは手に入れる。力を。人間のふりをする力を。

だって、帰らないと。ルカたちのところに帰らないと。そのためには、喰わないと。うまい。喰わないと。うまい。うまい。喰うんだ。うまい。ああ。うまい。うまいよう。うまい。これ、うまい。人間。人間だ。人間、うまい。どうしよう。癖くせになりそうだ。うまい。うますぎる。ああ。ふふ。おれ、力が戻もどりさえすれば、暗くても結構見えるんだ。すごいだろう。おれは、人間じゃないから。うまいなあ。人間。おれ、人間を、喰ってる。人間を、喰っちゃってる。

うまい。

うまいよ。しかも、これ──、

　知ってる、人だ。

　たしか、ファブリツィオ・センシーニ。

　ファブリツィオさん。

　ファミリーの人だ。話をしたこともある。面めん倒どう見みのいい人で──あれ？

　おれ、知ってる人を、喰くっちゃった……？

「……る……か……」

　おかしいな。

　帰りたいのにな。

　そのために、喰ったはずなのに。

　おれ、もしかしたら、帰れないかもしれない。

　約束、破ってしまうかもしれない。

　なんだか、そんな気がする。

　そんな気がして仕方ないんだ。

　取り返しのつかないことをしてしまったとき、人間はどうするんだろう。

　ルカ、おれは人間じゃないから、わからないんだ。

　ぜんぜん、わからないんだ。

Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

“回転海豚(スピニングドルフィン)”

chapter.3

再会にまつわる諸事情

　ジェードリは坂の街だ。もちろん、場所によって傾けい斜しやがゆるやかだったり、少々急だったり、あるいは平らだったりするものの、基本的には海から離はなれるにしたがって高くなってゆく。

　おかげで、海岸からやや遠いヤスパー地区にあるこの宿でも、窓の向こうに海が見える。南の方には、そこだけ大都会といったおもむきの、高層建築がぽつぽつ立っているバルモア地区。少し北に視線を移せば、旧埠ふ頭とうがあって、船工場や倉庫が建ちならぶ名人街があり、暗黒大陸出身の人々が住む異国情じよう緒ちよあふれる暗黒街がある。そして、さらにその北には──、

　人魚岬みさき。

　驚おどろくべきことに、かつてジェードリでは、半魚人ならぬ人魚たちが、人間たちと仲よく暮らしていたのだという。そのせいで、この街には人魚がらみの地名がやたらと多い。たとえば、人魚マーマン地区。人魚坂。人魚橋。人魚岩。等々。人魚岬もそのうちの一つなのだが、問題はその場所自体ではなくて、そこにある建物だ。

　大海王神オストロス神しん殿でん。

　いや──、

　元、というべきか。

「血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ、ねえ……」マリアローズは窓まど際ぎわの椅い子すの上でうーんと唸うなりながら、立てた右みぎ膝ひざを両手で抱かかえて胸に引きよせた。「なんだかよくわかんないけど、何もよりにもよって僕らがきたときに──ってかんじだよね、実際」

「いや、いや、いや、待てや、お前じぶん」とマリアローズにつめよってきたのは、人魚ならぬ半魚人だ。「あの血みどろ殿堂騎き士し団だんとかっちゅうヤツバラのおかげでこの街がどないにワヤなことになっとんのか、マリアローズ、お前じぶんも昨日からさんざんっぱら聞いとるやろが。それについてはなんとも思わんのかい」

「思わないっていうか。まあ、あんまり思わないけど。だって、初めてきた街だし。知ってる人がいるわけでもないしさ。てゆうか、

チミドロなんとかじゃなくて、チマミレ聖堂騎士団でしょ。見知らぬ他人のこと心配するより、自分の頭のこと心配したら？」

「わしの頭のことやったらな。ゆわれんでも毎日死ぬほど心配しとるから大だい丈じよう夫ぶや。ホンマに生まれつき出来が悪わるうてなあ。不ふ憫びんで不憫で──って、誰だれが頭弱ぁてかわいそうな子やねん！」

「………………」

「な、なんや。なんやねんな、その目！　そ、そないな目で見んでくれや。なんや、こう、同情するみたいな、憐あわれむみたいな……」

「だって、かわいそうだし。かわいそうになるくらい、おもしろくないんだもん」

「おもろないってゆうなや！　おもろないって、それ、わしのアイデンテテーが崩ほう壊かいのピンチピチピチ危機説やないか！」

「え……？　じゃ、もしかして、今まできみ、自分のこと、おもしろいと思ってたの？　嘘うそ。マジ？　ばか？」

「……そ、そこそこな。ちょぴーっとくらいは、おもろいんやないかなーと……た、ため息つくなや！　せやから、そのかわいそがる眼まな差ざしはやめいっちゅうとるやろ！　ほ、ホンマにやめてくれ！　お願いや！　泣けてくる！　泣いてもええんかい！」

「だめ。気持ち悪くてうっさくてうざくて迷めい惑わくだから絶対やめて」

「うわーん！　マリアローズがわしのこといじめよるー！　いじめっこやぁっ！　ここにいじめっこがおるー！」

「ま、冗じよう談だんはこのへんにしといて──」

「冗談かい……冗談なんかい……はは……ひょっほほ……またえらい長いジョーキング・コーナーやったな……」

「何もかもぜんぶきみのせいでしょ？　てゆうか、きみの場合、存在自体が冗談みたいなもんだけどさ。とにかく、僕としてはべっつにーってかんじでも、他ひ人と事ごとじゃない人もいるっぽいか

ら」マリアローズはちらりと髭ひげを見た。「──そこまで徹てつ底てい的にどうでもいいって思ってるわけでもないんだけどね。ホントは……」

　はるばるエルデンからやってきたＺＯＯの一行は、この宿「回転海豚スピニングドルフイン」に四室とっている。部屋割りは、トマトクンと髭が大おお海豚いるかの間、カタリとピンパーネルは灰色海豚の間で、ユリカとサフィニアが飛び海豚の間、それからマリアローズが鼠ねずみ海豚いるかの間だ。このうち、大海豚の間と灰色海豚の間は内ドアで繫つながっていて、団体客用の一部屋として利用することができる。マリアローズたちは、朝っぱらからその大海豚＋灰色海豚の間に集合して、今後の対応について協議しているわけだが──おそらく、誰より現在のジェードリの状じよう況きように関心があって、胸を痛めてもいるだろう髭は、ベッドに腰こしかけ、腕うで組ぐみをして、目をつぶって黙だまりこんだままだ。

　あえて「どーでもいーんじゃない？」みたいな投げやりな言い方をしてみせれば、何か反応してくれるんじゃないかと、ちょっぴり期待していたのだが。

　釣つれたのはマッチョ髭じゃなくて、半魚人のほうだった。この結果は釣つり師しマリアローズの腕が悪かったせいか。いや、食い意地の張った半魚人が、見境なく食いついてくるから悪いのだ。お呼びじゃないっていうのに、かろうじて魚以上人間未満のくせに、馬ば鹿かカタリめ。

「──とりあえず」マリアローズは気をとりなおして皆みなを見まわした。「話をちょっと整理しとこうよ」

「しょう、ね……」こんなときに話をあわせてくれるのは、結局、マリアローズの向かいの椅子にサフィニアと並んでちょこんと腰かけているユリカしかいない。「着ちゆいた先しやきからいきなりこんなことになっていて、このままだと、どうしたらいいか、判断しようがないわ」

「ん──や、その時点でもう混乱してると思うんだよね」

　マリアローズがそう言うと、窓際に突つっ立って外を見ていたトマトクンが「む？」とこっちに顔を向けた。む、じゃないよ、とマリアローズは思う。園長マスターのきみがちゃんといるってのに、なんで僕が仕切って話をまとめて議事進行しなきゃならないのさ。

だいたい、昨日の夕方、ジェードリに到とう着ちやくしたときもそうだった。ジェードリの門を通り抜ぬけた直後、「ヌオオオオ！　シンデンガー！　シンデンガー！　シンデンガァァァ……！」と叫さけびながら馬車から飛びだした髭は、もうすっかりまともじゃなかった。というか、人間の域を超こえていた。素す手でで道路をボッコボコのメタクソにして、馬車に足止めを食わせるような生き物が人間だとは思いたくない。

それでも、仲間であることには変わりないので、まずカタリが髭に追いすがって、「ど、どないしたんや、髭！　とりあえず、落ちつけて！　な！　落ち──」「シンデンガッ！」「づぐぉっ」裏うら拳けんの一いち撃げきでたやすく沈しずめられた。そこまではかぎりなく予定調和に近い経過だったが、つづいて髭をとりおさえようとしたピンパーネルがいとも簡単に振ふり払はらわれると、これは由々しき事態だった。当然、マリアローズやサフィニアでは、危なくて近づけたものじゃない。ユリカの悲痛な制止の声さえ、髭の耳には届いていないようだった。じゃあ、どうする？　ほっとく？　それもアリかと一いつ瞬しゅん思ったが、一瞬だけだった。身内の不始末（？）だ。僕らがどうにかしないと。「──って、トマトクン！　ボケーッボサーッとしてないで、止めてよ！　あの筋肉！」「む？」「む、じゃないだろ！　早く！　街が滅ほろぶ前に！　きみがやらなきゃ誰がやるんだよ！」「そうか。やむをえんな」

そんなこんなで、トマトクンの剛ごう力りきによって、髭の行動の自由を奪うばうことにはどうにか成功したのだが、シンデンガシンデンガの狂くるおしい叫びはやまなかった。それだけじゃなくて、髭は、たぶん──泣いていた。トマトクンに組み伏ふせられて、顔も口髭も顎あご鬚ひげも埃ほこりまみれだったけれど、おそらく、涙なみだを流していたと思う。ユリカが泣きそうになっていたのはそのせいだろうし、サフィニアもしんみりして、マリアローズもなんだか湿しめっぽい気分になってしまった。

まあ、髭は落らく涙るいしつつも「ハナセ！　シンデンガ！　シンデンガー！」と怒ど鳴なりまくり、暴れつづけていて、さすがのトマトクンもちょっと辟へき易えきしていた。まさか、トマトクンが髭を取り逃にがすとは思えなかったが、万が一ということもある。「神しん殿でん、って──」考えた末に、マリアローズは人魚岬みさきの方へと目をやったのだった。「あれ、だよね」

かつて髭が籍せきを置いていたという、大海王神オストロス神殿。その奥殿の灯台に、巨きょ大だいな旗が翻ひるがえっていた。

赤地に黒十字。単純な意い匠しようではあったが、どことなく不ふ吉きつな印象だった。髭の僧そう服ふくにも描えがかれているオストロスの〝海の紋章Ostor Emour〟とは似ても似つかなかった。それに、建物に旗を立てる。その行こう為いの意味するところは、はっきりとではないにしても、なんとなくわかろうというものだ。「──情報収集、しようよ。まずは、さ」「ハナセ！　セッソウハシンデンガ！　シンデンガァァッ……！」マリアローズは聞きわけのないこどもみたいな髭の前にしゃがみこんで、つまみあげた耳みみ許もとで思いっきり叫んだ。「情・報・収・集！　ぜ・ん・ぶ・それから！　わかった？　わかんない？　でも、わかれ！　いい？」

ただ、そうして鉛なまりのかたまりでものみこんだようなひどい顔つきの髭を無理やりうなずかせてからも、結構大変だった。まず、どこぞの破は戒かい僧そうが道路をぶっ壊こわしたせいで、徒歩で宿へ向かわないといけなかった。しょうがないので、無む駄だに人当たりがいい半魚人を中心として通行人に聞きこみをしながら歩いていると、時折、髭が暴発しかけた。これを押しとどめるのがまた一苦労だった。いや、二苦労三苦労それ以上だった。また、人によって言うことがまちまちなので、やはり神殿の様子を直じかに確かく認にんしないと、みたいな話になったら、髭やカタリが「拙せつ僧そうが」「わしが」とうるさくて、結局、ピンパーネルに偵てい察さつをお願いすることにした。ちなみに、これもマリアローズの発案だった。トマトクンは「うむ」と鷹おう揚ように首を縦に振ってみせて、ただ承認するだけだった。なんで僕ばっかり……？

「──とにかく。そんなかんじで、今、ジェードリが置かれてる状じよう況きようはだいたいわかったし、ピンパーネルが一仕事してくれたおかげで、神殿の中がどうなってるかまで把は握あくできた。ここまではいいよね？」

ユリカが愛らしく、サフィニアがひっそりと、カタリは床ゆかの上で転がりながらうなずいた。トマトクンは顎を撫なでながら、じっとマリアローズを見ている。ピンパーネルは──気がついたら、髭の隣となりにいた。とくに何もしていない、じっと座っているだけだが、もしかしたら、髭を慰なぐさめているつもりなのだろうか。そういえば、髭とピンパーネルはトマトクンの家に居候いそうろうしているので、それなりに仲がいいのかもしれない。あの二人の友情というのも、ちょっと想像しづらいけれど。

「で、あー、こうなっちゃってるんだ、そりゃたいへん、どうしよう──っていうのが今の僕らなわけだよね。それはわかるんだけど

さ。この街ってば、あからさまに不ふ穏おんな空気漂ただよいまくりだし、一部焼け野原だったりして、見事な荒こう廃はいっぷりだし、たしかに、のんびり観光とかしてる場合じゃないと思うよ。けど、その前に、なんか忘れてない？」

「忘わしゆれてれて……？」

　ユリカが愛らしく首をひねった横で、サフィニアが両手で口を押さえた。

「……あ」

「を？　なんやなんやなんやなんや？」

　てゆうか、うっさいんだけど。床で身み悶もだえるように回転しながら、サフィニアとマリアローズを交こう互ごに見ている半魚人なんか、そのまま回りすぎて気持ち悪くなって息絶えてしまえばいいと思う。それより先に、いっそ踏ふみ殺して楽にしてくれようか。いや、そこまで手間をかける価値は見いだせない。サフィニアが気づいてくれたようだし、無視しよう。無視。

「……わたしたち、そもそも……ジョーカーさんに、お会いするために……ジェードリまできたんですよね」

「だったと思うよ？」

「しょういえば、しょうだったわね。しゅっかり忘わしゆれてたわ」

「ま、どっちにしても、今日、そのジョーカーさんの別べつ荘そうを訪ねるつもりだったわけだから、まだ予定は狂ってないんだけどね。というわけで、当面、やるべきことはあるんだよ。まずは目的を果たす。一応、病気ってことだったんだし、こんな状況だからこそ、無事を確認するためにも、ジョーカーさんに会う。そのあとのことは、それから考える。それでいいんじゃないかな。どうせ十日間もいるんだし。馬車の中でガイドブック見ながら立てた計画も、すかすかで自由行動だらけだったしね。ただ、一つ、問題があって──」

　マリアローズはまた髭に目をやった。ユリカやサフィニアも察してくれたようだ。

そう、問題は髭だ。

昨日のすさまじい暴れっぷりから一転して、今の髭は黙もくして語らない。無事、神殿の偵察から戻もどったピンパーネルの報告を聞いている間も、眉まゆをつりあげて押し黙だまり、目を真っ赤にして身体からだを震ふるわせてはいたものの、ほとんど声はもらさなかった。そんな髭の心中を正確に慮おもんぱかるすべはないが、穏おだやかとは程ほど遠い気持ちでいることは間ま違ちがいない。

きっと髭は耐たえているのだ。必死にがまんしている。

何しろ、噂うわさによると、神殿の僧そうたちは皆みな殺ごろしにされたらしい。ピンパーネルも、僧らしき者の姿はまったく見かけなかったと言っていた。殺された僧の中には、髭が寝しん食しょくをともにした者もふくまれていたかもしれない。また、神なんてクソ食らえと思っているマリアローズには、想像することしかできないが、古巣の神殿がオストロスに仕えぬ者どもに荒あらされ、占せん領りようされているという事実自体、髭にとっては非常に屈くつ辱じよく的だろう。不殺の掟おきてを破って破門されたという髭だが、大海王神オストロスへの敬愛と忠誠は、日ひ頃ごろから口にしてはばかることがない。髭がいつも着ている暗青灰色スチールブルーと黒の僧服は、大海王神オストロスに仕える僧の装しよう束ぞくなのだ。

ことによると、現在のジェードリでその僧服を着ているのは、髭一人だけかもしれない。

そんなときに、仲間に会いに行く？　冗じよう談だんじゃない。そんな気分にはとうていなれない。髭がそう思っていても、ぜんぜんおかしくない。

「……拙僧は」皆みなの視線を感じたのか、久しぶりに髭が口を開いた。もっとも、髭は誰だれとも目をあわせようとしなかったし、口調も歯切れが悪かった。「──いや……皆に従おう」

「いいのか」

トマトクンに短く問われると、髭は呻うめき声にも唸うなり声にも似た苦しげなため息をついた。

「──心を静め、考えてみたのだ。あの旗印。神の名を語る、血塗れ

ブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。彼かの者どもの正体については、思いあたる節もないではないが、それはこの際どうでもよい。それよりも事実だ。我が大海王神オストロスの神しん殿でんは汚けがされ、僧たちは殺され、祭さい壇だんは打ち壊こわされて、滅ほろぼされた。それは動かしがたい事実なのだ。今さら拙僧が軽けい挙きよ妄もう動どうしたところで、事実が変えられるものではない。ことに、死んだ者は決して戻らぬ。僧が……七百名ほどもいたはずの僧たちが残らず殺されたのだとしたら、無念だが、神殿の再興は難しかろう。もとより、拙僧は破門された身だ。神殿に足を踏み入れることさえ許されぬ」

「お前が心底納なつ得とくしてそう言ってるなら、それはそれでべつにいいんだがな」

「……納得しているようには見えぬか」

「皆に聞いてみたらどうだ」

　トマトクンが少しだけ口くち許もとをゆるめ、顎をしゃくって一同を示してみせた。

　うながされて髭ひげが視線を巡めぐらせた先に並ぶ顔、顔、顔は、マリアローズもふくめて、気づかわしげだったり、不ふ審しんそうだったり、沈ちん痛つうな面おも持もちだったり。髭が理り屈くつで自分を説き伏ふせようとして、どうも失敗気味なことは、当然、全員わかっている。

「もし──」ユリカが一度きゅっと下した唇くちびるを噛かんでから、髭に微笑ほほえみかけた。「破門のことがあって、トワニングがどうしても神殿に入れないなら、わたしたちが入ればいいわ。しょうしゅることで何ができるのか、しょれはわからないけど、しょの必ひち要ゆようがあるなら、わたしたちがいる。だから、何か、どうにかしたいと思ったら、わたしたちに言って。みんなで考えて、みんなで動けば、できることだって、何かあるかもしれないし──」

「ちゅうかな、アレやん？　ぶっ壊されてもうた神殿に破門されたとかなんやとか、もうええんちゃう？　チャラやろチャラ」

「……またこの腐くされ魚は、デリカシーがないっていうか、なんていうか……」

　マリアローズは半魚人の無神経な発言に思わず頭を抱かかえたが、意外にも当の髭が笑いだした。

「ふ……そうか。そうだな。カタリ、たしかにお前の言うとおりやもしれぬ。しおらしくしてみせたところで、所しよ詮せん、拙僧は破は戒かい僧そうだ。人の命を呼び戻す僧の身でありながら、今までこの手で幾いく人にん殺あやめてきたことか。それが掟だなんだと、片腹痛い」

「せやで！　髭は髭らしゅう、グジグジ考えとらんで、気に入らんヤツバラはマッスルマッスルで残らずぶっ飛ばしたったらえええねん！　スカーっとな！　ボコボコのズタボコにみぃーんなしばき倒たおしたったらえええねやんか！」

「うむ。一理ある」

「おっしゃーッ！　そうと決まれば……！　今からいっちょ行って、チンチロベントー騎き士し団だんババーッと片づけたるか！」

「むむむ……！　やらいでか！」

「や、あのさ。やらいでか、じゃないから。やめて。ね。お願いだから。頭冷やせっての。ピンパーネルの話聞いたでしょ？　何百人もいるんだよ？　騎馬までいるんだよ？　いくらなんでも、僕らだけじゃ無理だから」

「アホダラァッ！　不可能を可能にするのんが漢おとこの道じゃボケェッ！」

「左様！　──否、否ァァッ！　そもそも、拙僧の筋肉に不可能など……！」

「ダメだこいつら……脳が膿うんでるやつと脳まで筋肉なやつが相手じゃ話が通じないし……」

　でも、髭がちょっとだけ──いや、かなり元気になった。その点については、まあ、よかった──と思っていいのかどうか。これから暴走寸前の半魚人＆髭を止めないといけないことを考えると微び妙みょうなところだが、あの暗くて重苦しい雰ふん囲い気きよりはいくらかマシだろう。マシ、なのかな……？　本当に？　自信は持てないけれど、少し気分が軽くなったことはたしかだ。初めてといってもいい旅行がこんなことになってしまって、ゆっくり港町の情じょ

う緒ちよを満まん喫きつするなんて無理そうだが、ある意味、ＺＯＯらしいといえば、そういえないこともない。

「……結局、平へい穏おん無事ってわけにはいかないんだよね。なぜか」

「も……もっもしか、して……わたしの……せい、だったり……」

「や、サフィニアのせいとかじゃないと思うよ。好んでトラブルを引きよせてるっていうか、顔突つっこみまくるっていうか、事態をひっかきまわしてややこしくするっていうか、そういう傍はた迷めい惑わくなやつも約一名？　一匹ぴきくらいいるし。あ。トマトクン、髭、押さえて。ピンパーネルはカタリをお願い。面めん倒どうだったら三枚に下ろしちゃっていいから」

「うむ」

「はイ」

「──ふんぬぅァッ！　は、放せェェィッ、トマトォォッ！　拙僧は！　拙僧は！　拙僧の虹にじ色いろの筋肉はァァァッ……！」

「をたわっ！　ばッホンマに抜ぬくなやピンプ！　ジェードリはオストロス神殿以外に祭壇ないて有名な話なんやで！　その神殿があのザマや、いッくら死に慣れテーラーのわしでも、死んでもうたらシマイやがな……！」

「年ねん貢ぐノ・納め時death」

「で、デスゆうた！　今、デスゆうたやろ、お前じぶん！　ちゅうか、年貢の納め時て、どこでそんな言葉覚えよったんや！　いっぺんお前じぶんの言語中ちゆう枢すう見てみたいわ！　めっちゃ怖こわいっちゅうねん、デスて……！」

「──あーもう、うっさい……」

　マリアローズは顔をしかめて両手で耳をふさいだ。ユリカとサフィニアもやれやれといった表情だ。

　ともあれ、髭と半魚人が落ちついたら、やはり今後のためにも、当初の目的をさっさと果たしてしまったほうがいいだろう。ピンパーネルによると、神殿には百や二百ではきかない数の武装した占

せん領りよう者しやたちがいるらしい。しかも、元アッサシンの巧こう妙みようなな侵しん入にゆうが気どられていた様子もあったとのことだ。その件については、トマトクンも軽く驚おどろいていたくらいだし、装備は軍隊並みで、頭数もいて、馬までそろえているとなれば、侮あなどりがたい相手だと考えなければならない。そんなやつらを、マリアローズたちの力だけでどうこうしようなんて、ちょっと考えられないが──仮にもし万が一やるにしても、状じよう況きようはある程度、把は握あくできたとはいえ、わからないことがまだまだたくさんある。ありすぎる。

　だいたい、髭は思いあたる節があるとか言っていたけれど、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツって？

　彼らは船に乗って現れ、しばらくして、いきなり神しん殿でんを襲しゆう撃げきしたという。

　いったい、連中はどこからやってきたのか？　やつらの目的は？　なんでまた、赤線地区を焼き払はらったりしたのか？

　その赤線地区をとりしきっていたパンカロ・ファミリーが、一昨日の夕方、神殿前など複数の場所で血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツと激しい戦せん闘とうを繰くり広げて、双そう方ほうに多くの死傷者が出たようだ。そのあたりの経けい緯いについても、事後間もないということもあって、さまざまな情報が錯さく綜そうしている。ファミリーの誰だれそれが死んだらしいとか、いや、じつは生きているとか。やたらと馬ば鹿かでかい化物が現れて、そいつがファミリーを蹴け散ちらしたんだとか。そんなわけのわからない、うさんくさい話も飛び交かっているくらいなのだ。

　まあ、エルデンで侵入者クラッカーなんてやっていると、大小様々な異界生物フリークスを相手にする機会があるし、たいていのことには驚かなくなってしまうが、それでも──なんか、変だ。

　この街では、今、普ふ通つうじゃないことが起きている。そんな感覚はマリアローズにもある。

　予感、というほど、はっきりしたものではないのだが。

　漠ばく然ぜんとした、胸むな騒さわぎ。なんだか、やばいんじゃないかな、というかんじ。関かかわらないほうがいいのかもしれない、と思う。深入りすると、きっと痛い目を見る。

──なんだって、そうだけど。

怖いから、不安だから、近づかない、立ち入らない。安全策。それも一つの方法だと思う。

マリアローズだって、そうしていた。自分のことは自分でやる。他人には極力頼たよらないで、誰も助けない。目の前で泣いている人がいても、見なかったことにする。疲つかれるのも、傷つくのもいやだから、距きよ離りを保つ。誰ともふれあうことのない距離を。

生きている人を思うことが怖かった。生きている人は、どうせいつか死んじゃうから。もしかしたら、僕のせいで誰かが死んじゃうかもしれないから。そんなのもう耐たえられない。一人でいい。一人で生きて、一人で死ぬ。それでいいと思っていた。

ところが、人生って本当にままならないもので。

僕の心は隙すきだらけで。失ったぶんだけ、隙間があったみたいで。

一人、二人と、いつの間にか滑すべりこんできて、はさまって、抜けなくなっていて。

僕はいつから一人きりじゃなかったんだろう？

ぱっ──と、あいつの顔が脳のう裏りに浮うかんで、慌あわてて消した。

違ちがうって。そうじゃなくて。やっぱり、モリーかな？　最初は。うん。侵入者クラッカーを始めてすぐ、怪け我がをして、アサイラムに行った。そうしてモリーと出会ったことが、そもそものきっかけだと思う。そういうことにしておこう。精神衛生上、そのほうがよさそうだし。実際、そのはずだし、とにかく──、

気がつけば、僕は一人じゃなくなっていた。

いや、そのために、自分自身で選せん択たくや決断もしてきた。

もちろん、必ずしも、ああすればこうなると、いつもわかっていたわけじゃない。迷うこともあった。それどころか、迷いまくりだった。たとえば、あのとき、二度目の閉へい鎖さ魔ま宮きゅうで

トマトクンが言った。「俺たちの仲間になるかどうかは、お前の自由だ」と。その舌の根も乾かわかないうちに、こうも言った。「――べつにな。お前がうちに入らなかったとしても、仲間は仲間だからな」

　僕は望んで、選ぼうとして、でも、ぐずぐずして、トマトクンや、他ほかのみんなに背中を押されて、なんとかここまでやってきた。

　泉セン里リでの戦いのあと、はっきりと思ったんだ。

　ここが僕の居場所なんだ、ここにいたい、って。

　僕は一人じゃない。

　もう戻もどれないし、戻らない。

　今の僕には仲間がいる。彼らのために、僕は傷つくかもしれない。彼らを傷つけることだってあるかもしれない。危険を冒おかさないといけないこともあるだろう。正直、怖い。僕には力がないし。守られてばっかりだし。何ができるのかわからないし。何もできないんじゃないかとさえ思う。僕なんかいないほうがいいんじゃないかな？　かえって邪じや魔ましてないかな？　不安だよ。不安で、不安でたまらなくて、逃にげだしたくなることもあるよ、でも――、

　好き、なんだ。

　僕はみんなが好きなんだ。

　だから、一いつ緒しよにいたい。離はなれたくない。そのためなら、なんでもしたい。

　単純なことだけど、なぜか気づかなかった。きみに訊きかれるまでは。

『キミだって彼らのことが好きなんだろう？』

　なんでわかるんだろう。

　きみはどうして僕のことがわかるんだろう。

『きみに僕の何がわかる』

『ぜんぶわかるサ』

いつだったか、そう答えたきみの薄うす青あおい目は、やけに真しん剣けんだった。

どうして、

きみは、

僕が、

──好き、だから……？

みるみるうちに、全身の血が頭に集まってきた。頬ほお。鼻。耳。頭の中。唇くちびるまで熱っぽい。な、なんで？　わかりきったことなのに。そんなの、あいつがいつも口にしてることだし。今さらってかんじで。や、もちろん、ものすごく迷めい惑わくだけど。そういうのもすべてきれいさっぱり終わりにしようって、心に決めて旅に出たわけで。顔をあわせることもなければ、きっと自然に忘れていって、どうでもよくなって、とか──それなのに、なぜだかときどき思い出してしまう。たぶん、関わりすぎたんだ。追い払はらっても、追い払っても、めげずにかまってくるから、ついそのままにして。放置しすぎた。あーもう、ってことは、これもやっぱり僕のせい？　自じ業ごう自じ得とくってこと……？

「マリア」

声をかけられて顔をあげると、サフィニアが不思議そうに眉まゆをひそめていた。

「顔……すごく、赤いけど、どうしたんですか……？」

「あら、本当、しゅごい真っ赤。もしかして、熱ねちゆでもあるんじゃないの？　環かん境きようが変わると、たまにしょうゆうことってあるから」

「あ、え？　や、ち、違う違う、大だい丈じよう夫ぶ、ぜんぜん平気！　あ、こ、な──か、考え事、してて、ちょっと、その……べ、べつに、本当に、まったく、さっぱり、てゆうか、ようするに、つまり、な、なんでもないから」

「考え事で……そんなに、顔、赤くなったりするものでしょうか……」

「な、なるよ。なることあるでしょ？　に、人間の想像力に限界はないしさ。どんなことだって、そりゃありえるよ。そんなの、サフィニアだって、たまに妄もう想そう爆ばく発はつで顔まっかっかにしてぼーっとしてたりするじゃないか」

「……と、いうことは……マリアも、何か妄もう想そうしてたんですね……誰だれと、ですか……？」

「や、だ、誰って、ち、違うって！　そーゆーんじゃないから！」

「あ、もしかして」

「って、ユリカ、何、その心当たりあるみたいな顔？　ないでしょ？　あるはずないよ。だって、僕にないんだから、ユリカにあるはずないんだってば！」

「……ユリカ、誰のことですか……？　こっそり、教えて……」

「ええとね──」

「そこ、内ない緒しよ話ばなし禁止！　絶対ダメ！　勝手に創作しない！　ないったらないんだから……！」

　マリアローズはユリカとサフィニアの間に割って入り、強ごう引いんに二人を引き離そうとして、途と中ちゆうで手を止めた。ドアがノックされたからだ。

「れ？　なんだろ」

　こういうとき、誰かに言われるまでもなく「ほいほい」とドアを開ける半魚人が、今はピンパーネルに組み敷しかれて、暴れている──って、まだやってたのか。髭ひげにいたっては、知らぬ間に上衣うわぎを脱ぬいでトマトクンに力比べを挑いどみ、互ご角かくの勝負を演じているし、こっちはこっちで雑談に講じていたしで、あのうっとうしい緊きん張ちよう感かん、切せつ迫ぱく感はどこへやら。

　ともあれ、何者かがドアを叩たたいたことは事実だ。無視するわけにもゆかない。マリアローズはユリカやサフィニアとうなずき交

かわしてから、ドアのほうへと向かった。ジェードリはエルデンほど物ぶつ騒そうではないようだが、一応、のぞき窓でドアの外を確かく認にんすると、たしかに人がいる。宿の従業員ではなさそうだ。

　女性だった。

　それも、かなり背が高くて、黒い肌はだの━めちゃくちゃ、すごい、吃驚びつくりするような、美人だ。

　べつに、美人に悪い人はいない、と思ったわけではないが、マリアローズの手は自然と内うち鍵かぎを外してドアを開けていた。もしかしたら、のぞき窓越ごしではなくて、ちゃんと彼女を見てみたかったのかもしれない。実際、それだけのものではあった。いや、もの、なんて表現は失礼だろう。ユリカもかなり稀け有うな美び貌ぼうの持ち主だし、あいつも━まあ、ちょっとそこらにはいそうもない、作り物めいたきれいな顔をしているものの、彼女は少々違ちがう。

　美が稀き少しよう価値だとするなら、彼女はまさしく美そのものだ。

　暗黒大陸の人々のような、でも、少し色あいが明るくて、なめらかで━こんな言い方はどうかと思うが、なんだかおいしそうでさえある肌も。

　整っていながら、どこか危あやうい、というか、わずかでも狂くるえばたちまちバランスが崩くずれてしまいそうな顔立ちも。

　とにかく手足が長くて、頭が小さくて、背が高くて、すらりとしていて、ほれぼれとするしかないスタイルも。

　黒くろ髪かみを細く何本にも編んだ髪形や、どこか野性的なデザインの皮革製の衣類も、彼女にはぴったりだ。

　そして、何より、彼女の目だ。

　なんてきれいなエメラルドグリーンだろう。

　マリアローズの瞳ひとみもかなり珍めずらしい色だし、それに比べれば、緑色の目は少ないとはいえ、まるっきり見かけないというほどではない。でも、彼女の目は別だ。あの色は、この世に二つと

ないのではないかとさえ思わせる。

　まるで、多種多様な命をはらんだ深い神秘の森が、そのまま結けつ晶しよう化かしたかのような──、

　その妙たえなる目が、かすかに笑った。

「あたしはロム・フォウという。ここにＺＯＯの人たちがいると聞いて──」

「おおおおおぉゥッ！　ロム・フォウ！　ロム・フォウやんか……！」

「ロム・フォウ！　久ひしやしぶりね！」

　彼女が言い終える前に、カタリとユリカが走ってきてマリアローズを押しのけた。え？　な、何？　もしかして知りあい？　──どうやら、そうらしい。

「ユリカ。カタリ。久しぶり。元気そうだね」

「ロム・フォウも」

「ダッハハッ！　そらもう、めっちゃ元気やで！　久々にロム・フォウの美貌拝ませてもろて、さらに元気百億倍や。ちゅうか、しばらく見んうちに、また別べつ嬪ぴんになったんちゃうか」

「どうだろう。いくらか時も流れたからね。もしかしたら、何か変わった部分もあるかもしれない。ところで──」と、ロム・フォウはマリアローズに向きなおった。「きみとは初対面だね。初めまして」

「……は、初めまして」

　とっさにそう応じたマリアローズを、エメラルドグリーンの瞳がじっと見つめている。本当に深くて、とてつもなく澄すんでいて、静かな色だ。あるがままを映して、すべてを拒こばまず、受け入れる目だ。マリアローズはすぐに自分が何をすべきか悟さとった。

「僕は……マリアローズ。ロム・フォウ、さんは──」

「ロム・フォウでいいよ。きみのことは……そうだね、マリアと呼

んでもいいかい」

「うん、もちろん。じゃ、ロム・フォウ、ＺＯＯを訪ねて、ここにきたってことは──」

「そう。あたしもＺＯＯだよ。きみもだね」

　僕もＺＯＯ。

　ちょっと新しん鮮せんな響ひびきだ。

　なんだか少し照れくさくて、控ひかえめにうなずいてみせるのがやっとだった。

「……まだ、入って日が浅いけどね。たぶん、一番の新しん参ざん者ものってことになるんじゃないかな」

「あたしはＺＯＯができたときからいるけれど、人がたくさんいる場所は苦手で、街を離はなれていることが多いんだ。会えてよかったよ。よろしく、マリア」

「よろしく」

　マリアローズはロム・フォウが差しだしてきた手を握にぎった。しっとりと、つつみこむような力の入れ方だった。繊せん細さいな人なんだ。

　そういえば、ロム・フォウは剣けんの他ほかに弓と矢や筒づつを持っている。弓矢は、矢をつがえて弦つるを引っぱって放せば、ただまっすぐ飛んでゆくというものじゃない。ちゃんと狙ねらって的に当てるためには、微び妙みような力加減が必要となる。こんな手をしているロム・フォウは、きっと弓矢の扱あつかいが上手だろう。そんなことを思った。

　でも、ＺＯＯができたときから、って──そもそも、ＺＯＯはいつできたんだろう。前に、結成十年はたっていないと聞いたような気がするけれど。たしか、四巡じゅん月げつ十一番日。それがＺＯＯが結成された日で。リルコとかいう人が、その日をトマトクンの誕生日ということに決めてしまったとかなんとか、髭ひげが言っていた。

「ロム・フォウ。久方ぶりだな」

　その髭が、上半身裸はだかのままドアのほうへと歩いてきた。懐なつかしそうに目を細めて、かすかに髭を微笑ほほえませているが、半はん裸らではかなり変態っぽい。

「よもや、この街でお前に会うことが叶かなうとは思わなんだぞ」

「あたしは、少しだけみんなと会えるような気がしていたよ。ところで、トワニング、服を着たらどうかな」

「あいすまぬ。つい癖くせでな」

「どんな癖だよ……」

　おかげで、思わずつっこんでしまった。通常、十人以上で行うという蘇そ生せい式を独力でなしとげてしまう異能の持ち主で、医術式もできて、しかも鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術じゆつの達人でもある、たぶん一種の天才なのだろう髭だが、ナントカとナントカは紙一重というやつか。ロム・フォウも、さすがに微び苦く笑しようを浮うかべているし──と、不意に、その表情が変わった。髭ではない、カタリでも、ユリカでもない、もちろん、マリアローズでもない、別の誰だれかを見て、ロム・フォウの顔が少しだけゆがんだ。

　そのときのロム・フォウは、たしかに苦しそうだった。

　でも、それは一いつ瞬しゆんだった。

　ロム・フォウは目を閉じて、一つ息をついた。

　自分自身を静めようとするように。

　押し殺すように。

　あふれだしそうな何かを、せきとめようとするかのように。

　ロム・フォウの手が、胸を押さえている。

　おそらく、そこにだいじなものを抱かかえているんだ。

　たいせつな、思いを。

　瞼まぶたが押しあげられると、エメラルドグリーンの瞳ひとみは輝かがやきを増していた。

　マリアローズは振ふり返った。男は、忠犬のごときピンパーネルを従えて、寝ね起おきみたいなぼんやりした顔つきで顎あごを撫なでていた。

「ちょっと見ないうちに、でかくなったな」

「……もう、こどもじゃないよ」ロム・フォウの声こわ音ねがさっきまでとは明らかに違ちがう。そうじゃないと言いつつ、拗すねているこどもみたいだ。「背は前と変わっていないと思うけれど」

「そうか。まあ、最初に会ったときは、お前、だいたい──」と、トマトクンが手で示した高さは、自分の腰こし以下だった。「これくらいだったしな。そのときの印象がまだ残ってるのかもしれん」

「いくらなんでも、そんなに小さくはなかったはずだよ」

「む？　そうだったか」

「いいよ。トマトは昔からそうだ。変わってない」

「いや、変わったさ。お前たちと出会って、俺も少しはな」

「そう。──そうだね。人も、森も、変わってゆく。変わらないと思うのは、そう思いたいだけかもしれない。あの山もきっと変わっているだろう」

「帰りたいのか」

　トマトクンに問われて、ロム・フォウは首を横に振った。

「もう帰るつもりはないよ」

「そうか。まあ、もしいつかその気になったら言えばいい。みんなつきあうぞ。たまには船旅も悪くない」

「もし、その気になったらね。言うよ」

　二人が何を話しているのか。マリアローズにはよくわからなかった。でも、二人はずいぶん前からの知りあいで、ロム・フォウは船でなければ行けないような場所からやってきたらしい。おそらく、暗黒大陸だろう。それくらいは察することができたし、ロム・フォウがトマトクンに特別な感情を抱いだいているらしいことも、なん

となく感じた。だから、か。

　ピンパーネルが言葉少なに挨あい拶さつをして、ロム・フォウがそれに短く、だが、そっけなくはない返事をしても、彼女は一人まだ離はなれた場所にいた。

　うつむいて、もじもじしている。何か言わないと。せめて「どうも」くらい言って頭を下げないと、感じが悪いし、雰ふん囲い気きも悪くなってしまう。そう思ってはいても、足が動かない。声が出せない。顔があがらない。どうしよう？　どうすればいいの？　そんな彼女の心の叫さけびが聞こえてきそうで、マリアローズは少々胃が痛くなった。

　あげくの果てに、よりにもよってトマトクンが「ん？　どうした、サフィニア」とか声をかけたりするものだから、もうたまらない。あのねえ。きみがそれを言う？　他の誰でもなく、きみが言っちゃうわけ？　そりゃないでしょ、いくらなんでも。

「……あ……いえ……べ、べ、べ、べっべつに、わたしは……その……大だい丈じよう夫ぶ、です。なんでも、ありません、から……」

「そうか？　そうは見えんが」

「そりゃそうだろうね。あれが大丈夫そうに見えるなら、いっぺん死んじゃったほうがいいと思うよ。いっそのこと」

「俺はそう簡単には死なんぞ。カタリとは違うからな」

「いやいやいや。わしかてこのごろめっきり死んでへんねんで。ふっふっふっ。残念やけど、このままやったら、近いうちに死にマニアの称しよう号ごうは返上っちゅうことになるかもわからんなぁ。ゲッヘッヘッヘッヘッ」

「や、それ、完全に汚お名めいだからね。残念とか言ってる場合じゃないから。さっさと返上しないとマジで手て遅おくれになるよ。べつにいいけどさ」

「べつにええことあるかボケェッ！」

「たしかによくはないけど、マリアの言うとおり、カタリはちょっと気をちゅけたほうがいいと思うわ。知っている人の死体を運ぶ

のって、結構いやな気分なのよ」

「死後硬こう直ちよく・運びヅラいdeath」

「ぬぶうごっ。ご、ごっつうリアルやな、それ。ちゅうか、ピンプ、デスはやめろて！　デスは！　あーなんか怖こわなってきたわ。チキチキチキン肌はだがァッ！　せやけど、そらそうやろな。気分悪いわな。えろうすんまへん……これからは気ィつけて、あんまり死なんように……」

「あんまり、じゃなくて、絶じえつ対たい！」

「絶対、死なんように……」

「ま、無理だろうけどね。半魚人だし」

「半魚人とか人とか関係あるかダァホ！　ん？　あるか？　あるかもな？　どっちやろ？　あろれ？　なんやもう、わからんくなってきたわ……」

　などという不毛なやりとりを、最初はやや呆ぼう然ぜんとして見ていたロム・フォウだが、そのうちくすくす笑いだした。そして、話が途と切ぎれたときだった。

　ロム・フォウは軽くうなずいて、野生の動物みたいな足どりで歩きだした。

　近づいてゆく。

　立ち止まった。

　サフィニアの目の前で。

「久しぶりだね、サフィニア」

「……あ」

　サフィニアは顔色を赤青、目を白黒させて、かわいそうなくらいうろたえまくっている。そうして「あ」とか「う」とか「は」とか「と」とか、短い音を断続的に発した末に出てきた言葉が「……ぅお……おっおはよう……ござい、ま……す……」だった。

　サフィニア、それ、なんか違う。

「おはよう」

　でも、そう応じてみせたロム・フォウには、何かふくむところがあるのか。それとも、何げなく「おはよう」に「おはよう」を返しただけなのか。不明だが、サフィニアはよく頑がん張ばった。顔をあげて、かなり無理やりでぎこちなくて引きつっていたけれど、なんとか笑え顔がおらしきものを作ってみせた。

　ただ、そこまでが限界だったようだ。

「……おっ……おはよう、ござい……ます……」

「うん。おはよう」

「……お……おはよぅ……ござぃ……」

「おはよう」

「……ぉはょ……」

「や、ちょっと待って、それ、延々ループしそうな気配が濃のう厚こうっぽいよ？　いつまで繰くりかえすつもり？　終わんないよ？　そのへんで止めとかない？」

「……は、はい……そ、そう、です……ね……すっすみま、せん……あ、あの……ロ、ロム・フォウ」

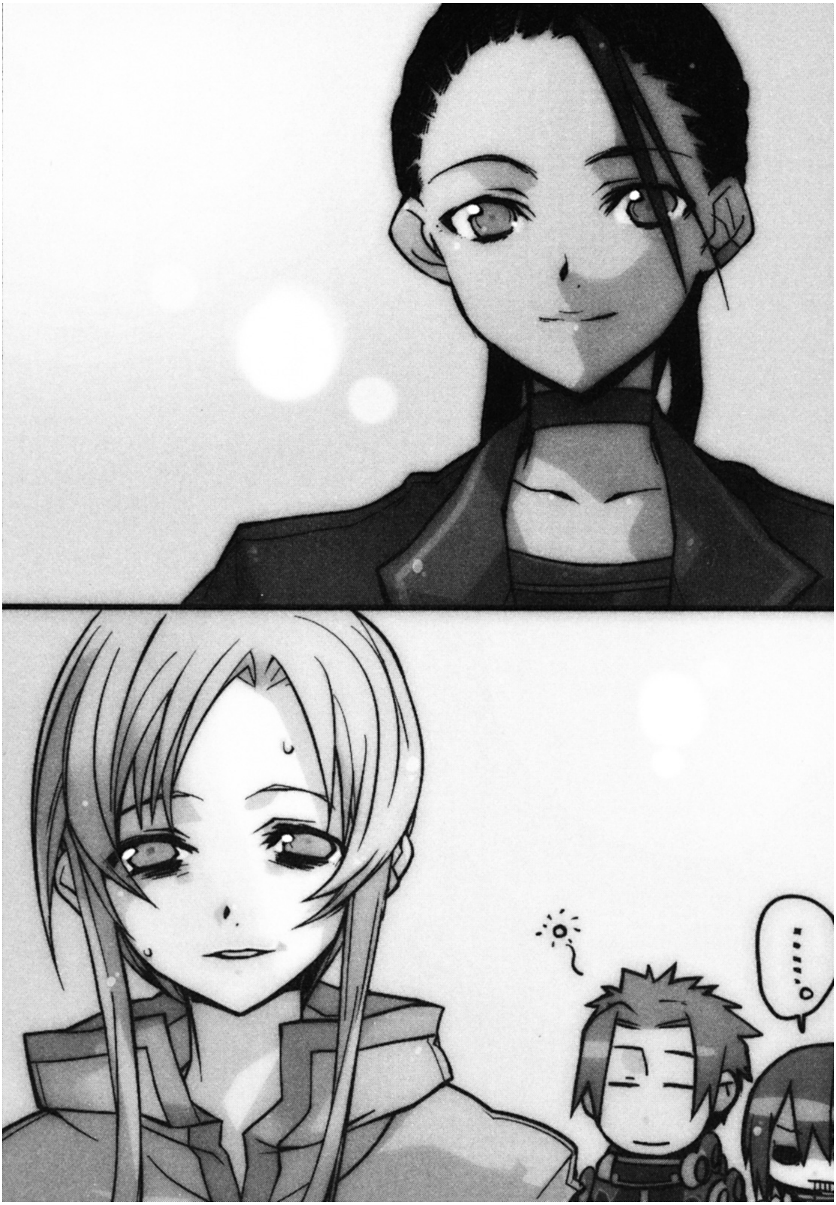
「うん？」

「……ご、ご無事で……何より、です……」

「ありがとう」

　やっぱりちょっと奇き妙みような挨あい拶さつではあったものの、ロム・フォウが今までよりやわらかい笑みを浮うかべると、サフィニアもようやく少しだけ肩かたの力が抜ぬけたようだった。マリアローズもなんだかほっとした。心情的にはサフィニアの肩を持ちたいところだが、ロム・フォウだって敵意なんか抱きようもないタイプの人だ。できれば、仲よくして欲しい──なんて、他ひ人と事ごとだから言えることなのかもしれないけれど、あの独特の緊きん

張ちよう感かんはきつい。というか、その原因、諸悪の根元が、なまあたたかい眼まな差ざしで二人を見守っている姿がなんとも許しがたい。



あのさ、ぜんぶきみのせいなわけでしょ？　わかってるのかな。

わかってないか。わかってたらあんな態度でいられないよね……。

　マリアローズがため息をついていると、ロム・フォウが「ああ、そうだ。忘れるところだった」と皆みなを見まわした。

「友だちが外にいるんだ。ここに連れてきてもいいかな」

「ほう」トマトクンが軽く目を瞠みはった。「人嫌ぎらいのお前が友だちなんて、珍めずらしいな」

「べつに、あたしは人が嫌いなわけじゃない。少し苦手なだけだよ」

「で、そのツレて、お、おと、男か？　男なんかぁぁッ！　いつの間にぃぃッ！　わしは許さへんで！　わしの目の黒い間はッ！」

「……なんで人間ならまだしも、半魚人の許しが必要なんだよ。わけわから──」

「うん」と、ロム・フォウがうなずいた瞬しゅん間かん、半魚人が跳とびあがり、トマトクンと髭ひげはむしろきょとんとして、ユリカもそれなりにびっくりした様子で、サフィニアは右の拳こぶしを握にぎりかためて突つきあげかけた。もっとも、サフィニアのガッツポーズは完成しなかった。

　ロム・フォウは平然と言った。

「イヌなんだ」

Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝パンカロ家〟

chapter.4

退路

目をつぶって息を吐はくと、地面から何か無数の手みたいなものがのびてきて、つかまれ、引っぱられて、そのまま地の底まで引きずりこまれる。そんな感覚に襲おそわれる。

力が出ない。

全身の穴という穴から、気力が抜け出ていってしまっているかのようだ。

この身は所しよ詮せん、殻からにすぎない。

中身がつまっているからこそ、人として生きていられる。

だから、何かを憎にくんだり、誰だれかを愛したり、ぶん殴なぐったり、ぶっ殺したりして、たしかに中身があるんだと確かく認にんする。

何も思わず、何もせず、何も感じなければ、人は人ではありえないのだ。何か一つでいい。俺が俺であり、俺は人だと実感させてくれる何かが間ま違ちがいなくあれば、それにすがって、生きてゆける。

主あるじを失ったパンカロ家は、打ち捨てられた廃はい屋おくのような有様になった。

音はする。たとえば、どこかで若い連中が何かしゃべっている。耳を澄すませば、リビングに置かれた大時計の音も聞こえる。

だが、長兄が弾ひく信じられないくらいへたくそなピアノの音は、もう聞こえない。べつに聞きたくはないが、もし聞きたくなっても、二度と聞くことはできない。次兄の怒ど鳴なり声も思い出すことしかできない。親おや父じが重々しい声で何か指図してくれることもない。ひどい火傷やけどを負っただけでなく、身体中にありとあらゆる怪け我がをしたチーロ坊ぼつちゃんは、まだ治ち療りよう中だ。意識すら戻もどっていない。

エヴェリーナが、忘れ去られた置物みたいにキッチンの隅すみに突っ立って、じっと天てん井じようを見つめている。

そうだ。俺たちは取り残された。親父が、ウーゴさんが、ニーノ

さんが、ジョゼッペ・ザンニーニが死んだってのに、なんで俺たちは生きてるンだ。初めてです。親父。恨うらみますよ。あんたを恨みます。口にはすまい。もう二度と思うこともあるまい。一度きりだ。だが、許しも乞こわない。なぜだ。なぜ、俺に死ねと命じてくれなかった。一言でよかった。一いつ緒しよに死ね、と。それでよかったンだ。何も、老いて心臓が止まるまで、だらだら生きてゆくだけが人生じゃねえ。思うままに生きて、死ぬべきときに、死ぬべき場所で死ぬ。どうせ、終わっちまえば後こう悔かいする間もないだろうから、それでいい。だったら、俺はあんたを守って死にたかった。みんなそうだったンだ。死ぬときはあんたのためと決めていた。とうにあんたに捧ささげた命だった。

　親父。

　俺を人間にしてくれた。

　無む鉄てつ砲ぽうな若い殺し屋だった俺は、人間に憧あこがれて、しかし、人間になりきれていない餓が鬼きだった。「お前は私の子だ」とあんたに言われて、俺はようやく人間になった。

　もう思わない。だから、最後に言わせてくれ。親父。馬ば鹿か野や郎ろう。何、死んでやがるンだ。おかげで俺はすっかりからっぽじゃねえか。あとに残された俺たちは、いったいどうすりゃいいンだ。

　カルロ・ボッシはリビングの端はしに立っている。思えば、今まで、ダイニングとつづきになっているこの家のリビングでは、飯を食わせてもらうとき以外、座ったことがない。リビングのソファには、パンカロ家の者か、親しん戚せき筋などの幹部たちか、客人か。ジョゼッペは、いつもダイニングの椅い子すに腰こしかけて、オレンジジュースを飲んでいた。エヴェリーナも、仕事の合間に一息つくため、ジョゼッペの隣となりに腰を下ろすことがあった。

　カルロは立っていた。これからも座ることはないだろう。

　今、リビングのソファには、気が弱いのか図太いのかよくわからない、ニーノの舎しや弟ていだったボボ・ファッチョと、客人が一人、腰かけている。

「何度も言ってるが」カルロは客人に声をかけた。「リクについて教えてやれることはない。何かわかったら、知らせてやる。家に帰

れ」

「……もしかしたら、リク、ここにくるかもしれないし」

客人は女だ。まだ若い。リクと同じくらいか。やけにきれいな顔をしているが、身なりは女らしくない。どこか雑な印象がある。

聞けば、彼女は、この前、ハーヴェイ・クロドウェルに殺害されたローラという娼しよう婦ふの家に住んでいるらしい。つまり、リクの同居人だ。ルカという名前は、たしかカルロもリクの口から何度か聞いたことがある。イビツに「なんや、ジブンの女か」とからかわれて、リクは落ちついて否定していた。そんな記き憶おくもおぼろげに蘇よみがえってくる。

「あいつが戻るとしたら、ここよりあんたのところじゃないか」

「家には、あたし以外にもいるから」

「そろそろ日が暮れる」

カルロは窓の外に目をやった。

あの夕ゆう陽ひと日にち没ぼつの瞬しゆん間かんを、カルロは死ぬまで憎みつづけるだろう。

「暗くなる前にさっさと家に帰れ。今はわざわざ餓鬼を送ってやれるほど余よ裕ゆうがない。ここにいられると迷めい惑わくだと、はっきり言ったほうがわかりやすいか」

「あたしのことは、気にしなくていいです。自分の身くらい、自分で守れるし。だから、いたいだけ、ここにいます。帰りたくなったら、勝手に帰るから。──信じて、るんです」

女と喋しやべるのは好きじゃない。話がぽんぽん飛んで、つきあうのが面めん倒どうだからだ。

カルロはパンカロ家のリビングを侵おかそうとしている橙だいだい色いろの洪こう水ずいをにらみつけた。

喋りたいなら勝手に喋ればいい。女の独り言になど興味はない。

「──リクが……帰ってこないわけ、ないから。だって、カルロさん

だって見てないんでしょ。リクが……死ぬ、場面とか。言いましたよね。リクがどうなったかは、わからないって。でも、約束したから。リクは、約束を破ったりしないから。そういう……人だから。けど、家にいると……なんか、おかしく、なっちゃいそうで。だけど、ローラがいなくなって、たいへんなときで……泣いたりとか、わめいたりとか、そんなこと、やってる場合じゃないし。でも、みんな、なんか、変にやさしいから……甘えちゃいそうで……つらい、から。かえって、家にいないほうが、楽で……」

　だが、ボボ・ファッチョ。女が話しながら涙なみだぐんでいるのはまだしも、なんでてめえがぐすぐす鼻をすすって泣いてやがる。

「……す、すんません。な、なんか、ニーノ兄貴のこと、思い出しちまって……」

　関連性がまったく見いだせない。どうやったら、今の話とニーノさんが繋つながるンだ。

「も、もう……いないんですよね。し、死んじゃったんですよね。ニーノ兄貴……まだ信じられないっていうか。こ、殺しても……死なない、みたいな人だったのに。お、俺なんか、何回もヘマして、お、怒おこられて、殺されかけて。ひどい人だったんですけど……でも、なんでか、俺のこと、見捨てないでくれて。俺なんか、デブだし、とろいし、くさいし、女にもてないし、いじめられっ子だったし……こんな役立たずの俺が、ニーノ兄貴の、しゃ、舎弟、で、いられただけで……す、すげえ、なんか、しあわせだったんだな、とか……今さら、こんなこと思っても……」

「たくさん、死んじゃったんですよね……」

　ルカがぽつりと呟つぶやいた。

「――ごめんなさい……あたし、自分のことばっかり、考えて。リクのことだけで、頭がいっぱいで。みんな、つらいんですよね。ここにいる人たち、みんな。リクが、いつも言ってた。ファミリーの人はいい人ばっかりだって。ファミリーの人たちが大事だって。だから、リクは戦ったんだ。きっと、守ろうとして……」

「あいつは」

　言いかけて、カルロは迷った。だが、口にしかけた言葉を引っこ

めるのは、性しようにあわない。

「若いわりにできた男だった。いろんな意味でな。とにかく腕うでが立った。俺もあいつが死んだとは思っちゃいない。あんたも信じて待っていてやればいい。ただ、ここは連中に場所が割れてる。安全とはいえない。あんたに何かあったら、誰だれがリクを待ってやるンだ。悪いことはいわない。家に帰れ。俺たちも怪け我が人が動かせる状態になったら、すぐに身を隠かくす」

「……わかり、ました。そう、します」

「ボボ・ファッチョ。暗くなってきた。家まで送ってやれ」

「は、はい、カルロ兄貴」

「いえ、あたし、本当に……一人で帰れますから。それに、さっき、余裕がないって──」

　ルカはソファから立ちあがって、逃にげるようにドアのほうへ向かおうとしている。だが、カルロはかまわずボボ・ファッチョに首を振ふってみせ、ルカを送り届けるよう無言で指示した。

　リク。朴ぼく念ねん仁じんとはいわないが、色いろ恋こいとは無む縁えんに見えたお前にも、こんな女がいたのか。どうも餓が鬼きの飯まま事ごと遊びの域を出ていないようにも思えるが、てめえを待ってくれてる女がいる。それは事実だ。帰ってこい。女どもに薄はく情じようだ冷血だなんだとなじられてばかりいる俺のような男になりたくなければ、戻もどってきてやれ。──生きていてくれ。

　俺も、俺にできることをやる。

　少しでも気を抜ぬけば腑ふ抜ぬけちまいそうだが、まだパンカロにはチーロ坊ぼつちゃんがいる。あの無残な戦いの生き残りも百人はいるし、そのうちの半分ほどがこの家につめている。戦いに参加しなかったファミリーの者だって大勢いる。親おや父じたちが死んで、意い気き消しよう沈ちんどころか絶望しきっている彼らを捨て置くわけにはゆかない。

　しかし、主立った幹部はほとんどくたばった。生きていて動けるのは年寄りか、赤線地区の再興にとりかかっていて、他ほかのことには手が回らない者だけだ。不本意ながら、俺しかいない。俺が全体の指揮を執とって立てなおさなければ、ファミリーは崩ほう壊か

いする。パンカロの名が消えてなくなる。

　そうはさせるかよ。

　親父が一代で築いたファミリーを、ここで潰つぶしてたまるものか。

　ウーゴさん。ニーノさん。死者に鞭むち打うって悪いが、やっぱり俺はあんたらが嫌きらいだ。二人して好きなように生きて、好きなように死にやがって。本当なら、実の息むす子このあんたらが背負わなければならなかったはずの荷物を、俺に押しつけて。

　だが、俺は下ろさねえからな。この荷物と看板、チーロ坊ちゃんが立派に背負えるようになるまでは、なんとしてでもこの俺が守りとおしてやる。親父は最後に俺に命じた。「ここにいる連中、見事に逃がしてみせろ」と。ああ、やってやるさ。やってやろうじゃねえか。安い命だが、身命を賭として必ず生かしてみせる。ファミリーを。その誓ちかいを胸に、カルロは壁かべに立てかけてあった愛刀を手にとった。サハ・リドル作の「蓮れん華げ」だ。──また、日暮れ、か。

　ボボ・ファッチョとルカが出て行って、静まりかえっていたリビングの空気が、遠くからの不ふ穏おんな気配に波立った。駆かける足音。戻ってくる。ボボ・ファッチョとルカだ。

「──か、カルロ兄貴……！　た、大変です！　やつらが！」

「わかってる。こい」

　カルロはボボ・ファッチョらの脇わきをすり抜けてリビングを出ると、階段を上って二階にあるチーロの部屋に入った。大男のチーロには不ふ釣つり合いな狭せまい部屋だ。亡なき御ご母ぼ堂どうが選んだ家具類は餓鬼のころのままだが、数年前、寝しん台だいだけ体格にあわせて買いかえた。おかげで、寝台に半分占せん領りようされているような有様で、さらにチーロの巨きょ体たいがその寝台を埋うめつくしていた。

　チーロは、髪かみの毛が焼け焦こげてなくなり、右腕が例の義手になっているだけで、外傷はないように見える。だが、問題は中だ。骨。神経。内臓。等々。今も二人がかりで治ち療りようをしている医術士によると、これまで手がけたことがないほどひどい状態

で、少しずつ慎しん重ちように治療を進めるしかないという。また、意識がないだけに、脳の損傷がどの程度か、それが一番怖こわい。そのせいで、動かすことができずにいたのだが、こうなってしまえばそうも言っていられまい。

「治療は中断してください。地下室に入ってもらいます」

　医術士二名は、コッペンという姓せいを持つ中年の夫婦だ。二人とも、とてつもなく地味で陰いん気きだが、ファミリーとのつきあいは長い。こんなときも、慌あわてず騒さわがず、黙だまって言うことを聞いてくれる。それが最善だと了りよう解かいしているからだ。

　ただ、こう見えて、旦だん那なのほうはもともと博ばく打ち狂ぐるいで、多額の借金を作った過去がある。女によう房ぼうが思いきってエンツォ・パンカロに相談を持ちかけ、博打を絶つことを条件に、借金を肩かた代がわりしてもらう約束をとりつけなければ、おそらく海に浮うかぶ羽目になっていただろう。

　そんな女房の愛情とエンツォ・パンカロの俠きよう気きが、旦那を改心させたのか。以来、コッペン夫妻は商売に専念するようになった。何かあれば、頼たのまれなくてもパンカロ家に駆けつけ、医術式の腕を振るった。今回も同じだった。「──私たちが受けたご恩に比べれば」と、死人めいた声で女房が語った。「たいしたことはありません。まだ返し足りませんのに……」

　そうだ。親父。あんたはまだ死ぬべきじゃなかった。誰もがそう思っている。

　だが、死んだ。死んでしまった。

　恐おそれられながら、深く敬愛されていた、間ま違ちがいなく、人徳とでも称しようすべきものを持っていたあんたは、もういない。

　それでも、コッペン夫妻はまだ手を貸してくれる。

　あんたの遺産を、このパンカロ・ファミリーを、失うわけにはゆかない。潰させない。ファミリーの一員でもないのに、そんなふうに考えてくれている人たちがいるのだ。

　だから、俺は、必ずこの苦境を脱だつして、大急ぎで丘おかの上

の墓地に埋まい葬そうするしかなかった親父たちの葬そう儀ぎを、盛大にやる。カレーナ人らしく、泣いて、叫さけんで、笑って、飲んで、歌って、踊おどって、涙なみだにまみれた笑え顔がおで、親父たちを送りだしてやる。決意が重なるごとに、荷物はどんどん重くなるが、この足は止めまい。カルロは追いついてきたボボ・ファッチョを振り返った。エヴェリーナもついてきている。あとは、ルカも。

「ボボ・ファッチョ、チーロ坊ぼつちゃんを背負って地下室に運べ。あそこは親父が奥方や家族を守るために造らせた頑がん丈じような部屋だ。外からはまず開けられない。場所も見つかりづらい。万一焼き討ちされても大だい丈じよう夫ぶなようにできてる。エヴェリーナさん、ボボ・ファッチョを手伝ってやってください。それと、申し訳ないが、コッペン夫妻にも同行してもらいます。地下室でチーロ坊ちゃんの治療をつづけてください」

　ボボ・ファッチョとエヴェリーナが、勇んでチーロの部屋に飛びこんできた。コッペン夫妻も、うなずくなり、そこらに広げてあった道具一式を鞄かばんにしまいはじめた。外にはイビツがいる。チーロを地下室に運びこむくらいの時間は、なんとか稼かせいでくれるだろう。しかし、家に帰しそこねたこのお嬢じようちゃんをどうするか。いや。考えるまでもない。

「ルカ、だったな。あんたも地下室だ」

「あたし、は……」

　そういう性質タチなのか、ルカは一いつ瞬しゆん、あらがおうとしたが、素す直なおに折れてくれた。

「……はい。邪じや魔まになると、いけないし」

　カルロはそれには答えず、ボボ・ファッチョに「急げ」と一声かけて一階に下りた。まずいか、と思った。音が近い。声。悲鳴。剣けん戟げきの響ひびき。もっと大きい、何かがぶち壊こわれるような音。破は砕さい音。カルロはズボンのポケットから出した指輪を左手の指につけて、蓮華の鞘さやを払はらった。玄げん関かんのドアを蹴け破やぶる勢いで開け、外に出た。舌打ちをしそうになった。こらえて走った。

　押されている。それどころか、崩くずれかけている。

　こっちは約五十。正面だけではなく、裏手にも配置されていたはずだから、実際はそれより少ないか。相手はどれくらいだろう。わからないが、こちらより多いことは間違いない。イビツは門を閉ざして、押しよせてくる敵を食い止めようとしたのか。だが、すでに突とつ破ぱされている。あのでかい音は、門がぶち破られる音だったようだ。敷しき地ちを取り囲んでいる塀へいも、乗り越こえようと思えば乗り越えられない高さではないので、そこから侵しん入にゅうしてくるやつもいる。鎧よろい兜かぶと。剣けん。盾たて。赤と黒。やつらだ。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

「イビツ、下がれッ……！」叫びつつ足を速めた。イビツは門の中央あたりだ。なんとか踏ふみとどまっているというかんじだったが、カルロの声を聞いて、「退ひけ、退くんや！」と周りに命じながら自分も踵きびすを返した。敵に尻しりを見せるなんて危険のようにも思えるが、これでいい。相手は金属鎧で完全武装している。こちらは軽装だ。身軽なぶん、小回りがきくのはこっちだが、破は壊かい力では相手に分がある。まともにぶつかりあっては勝ち目がない。有利に戦える場所を選ぶ必要がある。そのためには、ひとまず退かねばならないが、相手も黙って見み逃のがしてはくれまい。カルロは必死に逃にげてくるイビツらとすれ違ちがって、追ってくる敵に突つっこんだ。

　蓮れん華げ。

　いわずとしれた名めい匠しようダグラス・トゥースや、古典派の代表格マーロン・ロドニーら、昔気質の鍛か冶じ士したちは、サハ・リドルを邪じゃ道どうとそしるという。

　たしかに、彼が妹の彫ちよう金きん師しニア・リドルとともに生みだす刀剣は、従来のいわゆるモトロール刀の枠わくからはみだしている。たとえば、カルロが持つ蓮華も、刀身は肉厚、重じゆう厚こうで、見るからに豪ごう刀とうのたぐいでありながら、蓮はすの花をかたどった美しい鍔つばと、湾わん曲きよくしつつ凹おう凸とつがある奇き妙みような形状の柄つかを持つ。普ふ通つうに扱あつかえば、凡ぼん百ぴやくの刀剣にも劣おとるなまくら以下だ。ところが、ニア・リドルが作った指輪をつけて握にぎることで、柄と見事に噛かみあう。さらに、手首や肘ひじ、肩かた、五本の指を駆く使しする独特な振ふり方を身につければ、大岩をも砕くだく威い力りよくを発揮できる。

　もっとも、いくら蓮華をうまく使えるようになったところで、他

ほかの剣にはまったく通用しない技術だ。すぐれた剣士でも、蓮華使いとしてはずぶの素人しろうと。卓たく絶ぜつした蓮華使いが、上等な剣士だとはかぎらない。大おお振ぶりなだけでなく、鍔や鞘も腰こしに提さげたり背負ったりするのに適した形状ではないため、携けい帯たいにも不便だ。奇き剣けん、といっていいだろう。

　ただ、並外れた蓮華使いは、カルロ・ボッシのような芸当を軽々とやってみせる。

「──ッ……！」息をつめ、蓮華を左から右へ。肩から入って、肘を回し、手首を回転させて、指を一本ずつ解放し、最後にすべてを一気に止める。そんな感覚だ。カルロにとってはもう呼吸同然の動作だが、身体からだに覚えこませるまで何年もかかった。一度馴な染じんでしまえば、馬ば鹿からしいほど斬きれるようになる。

　ガッ──と、短く鋭するどくも重い音がした。

　呆あっ気けなかった。兜かぶとごとだった。頭を横に両断した。立てつづけに、そいつの右みぎ隣どなり。もう一人。蓮華を左上から右下に振り下ろして、袈け裟さ懸がけに斬った。手首を返し、左に跳とんで、別のやつの腰のあたりをまっぷたつにしてやった。あっという間だった。三人殺やった。カルロは短く息を吸って、また止めた。すかさず前進して、ちょっと腰が引けているやつの頭頂部に蓮華を叩たたきつけ、股こ間かんまで斬り下ろした。噴ふきだす熱い液体を浴びながら、かすかにも揺ゆるがない自分を不思議とは思わなかった。微み塵じんも、だ。カルロは目の周りだけ袖そでてぬぐって身をひるがえし、後退中のイビツたちを追いかけて、追いつき、家屋の玄関前で足を止めた。

「チーロ坊ちゃんは地下室に運ばせた。連中の目的はなんだと思う」

「さあ。頭おかしいやつらの考えとることはわからしまへんわ。ま、わてらのこと根絶やしにしたろとかね。おおかた、そんなとこちゃいまっか。お互たがい様やけどね。わいかて、できるんやったら、今すぐあいつら皆みな殺ごろしにしたってやりたいですわ」

「ああ。だが、少なくとも今は無理だ」

「どないします」

「死ぬな。殺せるだけ殺せ」

「むつかしい注文でっせ」

「家を使わせてもらう。親おや父じたちには申し訳ないが、広い場所では不利だ」

「了りよう解かい」

　カルロが「行け」と短く命じるなり、イビツをふくめた生き残りの二十名ほどが家屋の中に駆かけこんでいった。そのときにはもう、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが目と鼻の先まで迫せまっていたが、カルロはイビツらを追わなかった。先頭を切ってカルロに突っかかってきた者が、三人、いや、四人か。おそらく、一いつ斉せいに襲おそえばなんとかなるとでも思ったのだろうが、よく見れば微び妙みように足並みがそろっていない。カルロからの距きよ離りは四人ともばらばらだ。戦せん闘とうの昂こう揚ようで頭に血が上っていれば気にならない程度のズレかもしれないが、カルロは奇妙に醒さめている。最近、斬りすぎたか。恐おそれも、怯おびえも、一いつ切さいない。俺はもう、紙切れみてえに人が斬れる。

　まず、左のやつだ。踏みこんで、剣を持った右みぎ腕うでを斬り飛ばし、右に体を捌さばいて中央のやつの右みぎ肩かたに蓮華を叩きこんだ。そいつの剣を右手で奪うばいとって、突とつ進しんしてきた右のやつに向かって振り下ろすと、盾で受け止められたが、ほぼ同時にその右足をカルロの蓮華が斬り払はらっていた。遅おくれて盾を前に出して体当たりしてきたやつは、横にステップを踏んでギリギリかわし、すれ違いざまに足払いをかけてやった。バランスを崩くずしたその背中に蓮華を見み舞まってから、ようやくカルロは家屋へと向かった。ただし、玄げん関かんではない。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを引きつけて、引き連れつつ、側面に回りこみ、エヴェリーナがよく使っている客間の窓を叩き割って、そこから中に入った。敵を分散させる狙ねらいだった。図に当たった。

　馬鹿が何人も追ってくる。

　こい。どんどんこい。きたらきただけ殺してやる。たやすく、作業的に、処理するように、次々と殺してやる。無価値にさえ思える、つまらない、無味乾かん燥そうな死を与あたえてやる。

俺は笑わない。

嘲ちよう笑しようしない。

怒おこることもしない。

ただてめえらを淡たん々たんと奈な落らくの底へと突き落とす。

死こそがてめえらにふさわしい唯ゆい一いつの運命で、てめえらが死ぬのはごく自然で、当然のことだからだ。

それが俺の復ふく讐しゆうの形だ。

だから、カルロ・ボッシ。お前は、静かに、絶え間なく、手て際ぎわよく、敵を殺せ。殺すためだけに、殺せ。殺し次し第だい、殺せ。

蓮れん華げよ、どこまでも斬れ。斬って、斬って、斬りまくれ。敵がいなくなるまで。斬るべき敵がいなくなるまで。

もっとも、後続は間もなく絶えた。こっちの魂こん胆たんが見み透すかされたか。それとも、ついてきたやつはあらかた斬ったのか。ここで何人斬った？　四人。五人。そんなところか。

次は、玄関──いや、リビングのほうが、かなり騒さわがしい。廊ろう下かなら、最悪、前後を挟はさまれるだけですむが、リビングは窓が多いから、包囲される可能性がある。それくらいイビツもわかっているはずだ。ということは、押しこまれたか。カルロはリビングへ急ごうとした。その足が止まった。これは──なんだ？　匂においい……？　血なまぐささとは別の──そうだ、焦こげくさい。火か。

予想していなかったわけではない。赤線地区を焼き払った連中だ。焼き討ちはやつらの常じよう套とう手段だと考えるべきだし、この家に立て籠こもれば、当然、火をつけてくるだろう。それはもう織りこみずみだったとはいえ、親父たちに顔向けできないとの思いは、やはりある。チーロ坊ぼつちゃんが目を覚ましたら、どれだけ嘆なげき悲しむか。

だが、この家は捨てるしかない。大事なものを秤はかりにかけて、どちらかを選ばねばならないとき、決断できずに両方失う。そんな愚ぐを犯おかすわけにはゆかない。親父が生きていて、今この

場にいたら、きっとこうするだろうと思う。そんなものを支えにしなけりゃならねえ俺は、まだ覚かく悟ごが足りねえンだろうが。

　カルロは顔にこびりついた自じ嘲ちようと返り血を右手でぬぐいながら、廊下に出た。案の定だった。煙けむりは玄関からか。リビングのほうには、まだ血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツがいる。カルロは無言で駆けよって一人の背中を蓮華でぶった斬ぎった。そいつの悲鳴を聞いて振ふり向いたもう一人の頭を縦に割ると、人ひと垣がきに隙すき間まができた。そこに滑すべりこんで、一気にリビングに突とつ入にゅうした。

「──イビツ……！　裏からだ、退ひけッ！」

「へいっ……！」

　イビツの返事を聞きながらも、カルロは一人二人斬り伏ふせたが、窓はぜんぶ割られ、そこから入りこんできた敵でリビングがほとんど埋うめつくされている。イビツらはキッチンまで後退していた。ソファやらダイニングテーブルやらでバリケードを作り、なんとかしのいでいたようだ。廊下でも何人か死んでいたが、こっちは何人生き残っているのか。いや、今は考えまい。

　カルロは蓮華を振りまわして敵を追い散らしつつ、ソファやテーブルを飛び越こえてキッチンに入った。キッチンの奥には物置の小部屋へと通じるドアがあって、そこに裏口がある。裏から出て、裏庭を突つっ切って、塀へいを乗り越え、いったん逃にげる。家屋が焼け落ちたあと、地下室にいるチーロたちを助けだす。これは、命を狙われることも少なくなかったエンツォ・パンカロの備えの一つだ。側近のカルロは、その手順から何からすべて教えられていた。もちろん、不安がないわけではないが、あの状態のチーロ坊ちゃんを連れて逃げるよりは可能性が高い。イビツはすでに小部屋に入った。他ほかには十人ほどいるか。敵は追ってこない。火が回りはじめているから、退いたのかもしれない。カルロは最後に小部屋へと入り、裏口から出て、愕がく然ぜんとした。

　イビツたちは、裏庭で立ちすくんでいた。

　それもやむをえまい。

「──突撃準備Ready for charge.」

数十人。

騎き馬ばも十騎ほどいる。

縦一列になって、きれいに並んでやがる。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツだ。

別働隊か。

裏で待ち構えてやがったとは、用よう意い周しゅう到とうなことだ。

加えて、ここでまごまごしていたら、前から攻せめてきた連中もじきに駆かけつけてくるだろう。完全に包囲され、殲せん滅めつされて、そうなれば、当然、チーロ坊ちゃんたちを救いだしてやれる者は誰だれもいなくなる。地下室には水や食料がいくらか用意されているし、換かん気き口こうもあるので、窒ちつ息そくすることはないとはいえ、十日も二十日も快適に生活できる場所ではない。

おそらく、パンカロ・ファミリーは終わる。

消えて、なくなる。

「誰でもいい。生き残れ」

カルロは袖そでで顔をぬぐって、蓮華を構えた。答える者はいなかったが、怖おじ気づいているわけではあるまい。そんな腰こし抜ぬけなら、とうに生きてはいないはずだ。イビツ。アントーニ。トマーゾ。ニコロ。ハンフリー。ゲオルグ。ロジャー。あとはゴンゴか。どいつもこいつも信用できる。たとえ一人になっても、チーロ坊ちゃんをなんとかしてやれるだろう。

だから、誰でもいい。一人でいい。突っ切って、生きのびろ。

俺が血路を開く。やつらの血肉で、大輪の蓮華の花を無数に咲さかせてやる。

カルロは前に出た。

中央の騎馬が、空に突きあげていた騎兵槍ランスを振り下ろした。

「突撃」charge.

　そのときだ。

　騎馬どもが馬をあおり、徒歩の兵どもが駆けだそうとした、まさにその瞬しゅん間かんだった。

　そいつは、斜ななめ後ろから血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの隊列に襲おそいかかった。

　二、三人の歩兵を刈かりとるように吹ふき飛ばし、さらに別の二人を一挙に蹴け飛とばして、ほんの数瞬で血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを混乱に陥おとしいれた、そいつは──、

　なんだ……？

　あれは。

　人、なのか。

　いや。違ちがう。違うだろう。違うはずだ。

　たしかに、そいつには腕うでと足が二本ずつあり、胴どう体たいの上に首があって、頭がついている。何か布のようなものを身体中に巻きつけていて、容姿はよくわからないが、形としては人間だ。もしくは、人間にかなり近い。

　だが、あれは、違う。

　人の動きじゃない。人の力じゃない。

　別物だ。人とは違う何かだ。

　チリッ、と、頭の端はじっこの方で、火花みたいなものが散るような感覚があった。

　人の動きじゃない。人の力じゃない。

　俺は、それを、どこかで──感じた？

　見たことがある……？

　どこで？

「な、なんや、あの化物……」

　イビツが呆ぼう然ぜんとそう呟つぶやいた。

　化物、というその単語に、なぜか違い和わ感かんを覚えた。

　あれが、化物だと？　そうなのか？　なぜ俺はしっくりこない……？

　気持ちが悪い。不快だ。わけがわからねえ。そのこと自体が苛いら立だたしい。

　カルロはもやもやしたものを吹き払はらうように、「行くぞ」と皆みなに号令をかけて突撃をしかけた。イビツらも遅おくれてついてきた。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは、突とつ然ぜん現れたあの化物めいたやつに気を奪うばわれ、ほとんど足が止まっている。好機だ。中央の騎馬。突撃だなんだと命令を下していたあいつが、この一隊の大将だ。カルロはまっすぐ駆けていった。やつは化物の対応について手下どもに何やら指示を飛ばしていたが、それでもカルロの接近に気づいた。気づいてすぐ馬から飛び降りたのは、敵ながら好判断だった。それとほぼ同時に、蓮れん華げがやつの乗馬の首を叩たたき斬きっていたからだ。そのうえ、地面に着地するなり、やつは素す早ばやく「撤退Retreat.！」と叫さけんだ。叫びつつ走って、近くの騎馬に相乗りし、あげく、その騎手を下馬させて、手下どもに何度も撤てつ退たいを命じながら左方向に馬を進めた。鮮あざやかとはいいたくないが、なかなか思いきりのいい指揮だった。

　敵が退ひいてゆく。

　逃にげる。

　あの大将を先頭にして、一も二もなく逃げてゆく。

「──兄貴、今のうちに、わてらも！」

「ああ」

　カルロはそう答えながらも、足を動かすことができないでいた。

　見つめていたのだ。あの化物を。

　やつも、宵よい闇やみの中、遁とん走そうする血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツのくそったれどもを追うこともせず、カルロを見ている。少なくとも、身体からだをこっちに向けている。

　もっとも、それは短い時間だった。

　化物は不意にうつむいて身をひるがえし、もときたほうへと駆け去っていった。

　その背中。後ろ姿。まさか、と思った。だが──、

　いや、

　ありえない。

「兄貴……？　はよう逃げんと、前から攻せめてきよった連中が！」

「わかってる」

　俺は、何を。

　あの化物みたいなやつが──、

　そんなわけがない。

　そんなはずねえだろうが。

Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区
〝バルモア商会本社ビル〟

chapter.5

だいそれたこと

バルモア大通りに面しているバルモア商会本社ビルは、今年で築百二十三年になる。もともと堅けん牢ろうな造りで、また、数回の増改築を経てきたとはいえ、港町ジェードリの中興の祖である大商社の本ほん拠きよ地ちとしてはいかにも手て狭ぜまだし、機能的にも不備がある。今は周囲の建物を買いあげて別館として利用したり、設備の古さは我が社の歴史を物語るものとして社員たちにも理解させているが、この状じよう況きようも近いうちに変わる。現在、もっと新埠ふ頭とうに近い土地の買収が終わりかけていて、計画どおりにゆけば、来年末ごろには新社屋の建設に着工できるはずだ。新生バルモア商会の真新しい社長室は、壮そう麗れいで、絢けん爛らん豪ごう華かで、この世に二つとない特別な空間となるだろう。そう、足を踏ふみ入れた瞬しゆん間かん、誰だれもが目を瞠みはって、息をのむような。

その社長室の創造主として、私は歴代の社長たちに感謝され、畏い敬けいされて、讃たたえられる。

社長室には、パパ・バルモアと呼ばれた初代社長にして初代会長のエドウィン・バルモアと、このケヴィン・バルモアと、その時々の社長の肖しよう像ぞう画がが並んで飾かざられるのだ。

いつまでも、いつまでも。

嗚あ呼あ、バルモア商会よ、永遠なれ……！

──などと夢想することは、決してない男だと目されてきた。

ケヴィン・バルモアは、つい最近、三十七歳になった。

三十三歳で父ボリス・バルモアから社長職を受け継ついで、今年で四年目になる。

ちなみに、ケヴィンはボリスの四男で、兄が三人、弟が二人、姉が二人、妹が三人いる。六男五女。ほとんど母違ちがいの兄弟だ。

常務だった四男坊ぼうが、副社長の長男や専務の三男を押しのけて社長に就任するにあたっては、当然、すったもんだした。最終的には、父の意向と、入念な多数派工作が功を奏し、若き新社長が誕生したのだが、それはケヴィンにとって単なる通過点にすぎなかった。

ケヴィンはまず、二人の兄を容よう赦しやなく遠方の支社へ飛ばした。兄を支持した者どものうち、早々にケヴィンに忠誠を誓ちかわなかったウスノロも、容赦なく左さ遷せんした。この徹てつ底ていした人事攻こう勢せいは、敵味方を震ふるえあがらせた。新社長には逆らうべからず。そんな空気を作ってから、ケヴィンは社長直属の全社調査室を発ほつ足そくさせ、社内に監かん査さの雨を降らせて、人的、物的、金銭的な無む駄だを省く作業を強力に推し進めた。先代ボリスの、大だい胆たんだが遺い漏ろうの多い、冒ぼう険けん的な、放ほう漫まんにも近い経営を改善する。それが質しつ実じつ剛ごう健けんを旨むねとするケヴィンの命題だった。

こうしてバルモア商会は、三年でじつに二十一パーセントの経費削さく減げんに成功し、経常利益は順調に成長しつづけている。

ケヴィン・バルモアは、「まだ若く、情より利を重んじすぎるきらいはあるが、やり手の社長」との評判を確立しつつあった。

そのケヴィンの前に立ちはだかっているのが、前社長の時代から計画が進められ、予算も組まれていた新社屋建設だった。

中止すべきか。

進めるのか。

現在の社屋がすでに老ろう朽きゆう化かしていて、別館も増えすぎ、きわめて利便性が低いことは事実だ。正直、売りは歴史を感じられるという一点しかない。その歴史も、たかだか百数十年だ。当時としては先進的だったのだろう、ラフレシア第三帝てい国こくの建築様式を模した外観も、ジェードリの街並みには今ひとつそぐわない。さらに、建設に携たずさわる業者とはもう仮かり契けい約やくまで結んでいるし、設計もとうに終わっている。常識的に考えれば、今さら中止にはできない。

ただ、今年の五巡じゆん月げつに、系列会社の調査団がグラー大陸で新たな鉱脈を発見し、この独どく占せん権けんの問題で当地の政府と折せつ衝しよう中なのだが、どうも莫ばく大だいな資金がかかりそうな模様なのだ。というより、金をかければ、いい方向に持ってゆける自信がケヴィンにはある。その金に見あうだけの利益を回収できる見こみも十分ある。だが、オンプチスカ、ボンヌ・ソレー、ロレンツィなどの土地と港の賃借金及および使用料十二ヶ年分の支し払はらい期限がなぜか同時に迫せまっていて、ラフレシア

における納税も十二巡月頭なので、こんなときに限って自由に動かせる金が多くない。これも父の野放図のせいなのだが、しかし、今さら言っても詮せん無きことだし──、

　とにかく、多た忙ぼうを極きわめる身なのだ。

「社長、お客様はご指示のとおり、社長室にお通ししてお待ちいただいております」

「わかっている」

　いまいましい。

　三歩下がってついてくる秘書の美声すらも、今はわずらわしくてたまらない。

　ケヴィンは左手で眼鏡めがねの位置を直しながら、右手でネクタイをわずかにゆるめた。むろん足は止めない。むしろ速めた。客。客？　客だと？　いきなり来社して会長の名を出し、不在を告げると、だったら社長でかまわない、とその客とやらはのたまったらしい。社長でかまわない？　ふざけるな。もはやバルモア商会は名実ともに私のものだ。会長などお飾りですらない。だいたい、あの男は年の半分もジェードリにいないではないか。昔から港ごとに女がいるような男だ。女が望めば結けつ婚こんもする。当然、重じゅう婚こんだ。妻が十四人だか十五人いることが、あの男にとって一番の自じ慢まんだ。去年もオークリッド首長国で知りあった十七歳の娘むすめと結婚するとか言いだして、一応、止めたが、あの男が聞き入れるはずもなかった。七十二歳にもなって、十七歳の小娘と手を繫つないで耳みみ許もとで愛を囁ささやくような男の血が、自分の身体からだに流れている。そのことを考えるたびに、鳥とり肌はだが立つ。

　気色が悪い。

　そんな男の客だと……？

　本音をいえば、追い返してしまいたい。

　だが、私は社長だ。バルモア商会の代表者だ。責任者だ。

　あの男のことは許せないし、自分でも恐おそろしくなるほど嫌きらいだが、それは私情だ。あの男は不思議なほど顔が広く、各国の

キーパーソンとも交流があり、一部とは親友のように親しくしている。その人脈が社業に与あたえているプラスの影えい響きよう、貢こう献けんは小さくない。

　わかっている。

　わかっているのだ。

　いまだに、バルモア商会といえば、ボリス・バルモアの名が一番先に出る。ケヴィン・バルモア？　ああ、あのボリスから社長の椅い子すを譲ゆずられた若いやつか。結局、それが一いつ般ぱん的な評価なのだ。

　わかっている。その事実は冷静に受け止めている。

「だからこそ、だ……」

　ケヴィンは社長室の扉とびらの前でそう呟つぶやいて、一つ息をついた。会長。ボリス・バルモア。何する者ぞ。見ていろ。いつか誰だれもボリスの名など思い出さなくなる。そうしてみせる。私は社長だ。泰たい然ぜん自じ若じやくと構えて、会長の客とやらを丁てい重ちように、慇いん懃ぎん無ぶ礼れいに、適当にあしらってやる。野良犬を蹴け飛とばして追っ払ぱらうような真ま似ねはしない。餌えさくらいやろう。高級な餌を。そして、鷹おう揚ように送りだしてやる。

　秘書がドアを開けた。ケヴィンは口許に笑えみをたたえて、社長室に足を踏ふみ入れた。

「お待たせいたし——」

　絶句した。

　微笑ほほえみなど一いつ瞬しゆんで消し飛んだ。

　なんだ。

　どういうことだ。

　社長室は、広大とはいえないものの、必要十分な広さはある。前社長の時代には、世界各地の貴重品名物土産みやげ物ものなどの展示室と化していたが、今はすっきり片づいていて、余分なものは何

もない。大きな出窓の前に執しつ務む机があって、秘書用の机があり、応接セットがあって、資料などが整理された棚たながあり、衣い装しよう棚だながある。ほとんどそれだけだ。

　ケヴィンのお供をしていた秘書とは別の女性秘書が、執務机の前でおろおろとこっちを見て、あっちを見て、それを繰くりかえしている。

　ちなみに、あっちというのは、執務机のほうだ。

　なぜならば、ラドゼニー材のどっしりしていながら洗練された執務机の向こうに、人がいるからだ。

　その男は、耐たい久きゅう性せいが抜ばつ群ぐんで、長く使えば使うほど味が出る一角水牛革かわ張ばりの椅子に、足を組んでふんぞり返っている。

　男のかたわらには、見たこともないような、金色とも銀色ともつかない髪かみと目をした美女が立っているが、そんなことはどうでもいい。

　誰だ、こいつは。

　どうして社長の椅子に。

　いったい何を考えているのだ。

　なぜそんな目で私を見る。

　冷たい、侮ぶ蔑べつするような、見下すような、青みを帯びた黒い瞳ひとみで──、

「お、お待たせ、して……」

　声がうまく出せない。喉のどがカラカラだ。私は、震ふるえている。気け圧おされている？　この正体不明の、わけのわからない、無礼な男に？　馬ば鹿かな。そもそも、私はなぜ、この期ごに及およんで腰こしを低くして待たせた詫わびなど述べようとしているのだ。いくら会長の客だといっても、限度というものがある。礼もすぎれば卑ひ屈くつになる。秘書たちも見ている。威い厳げんを。社長としての、体面を。ケヴィンは一つ咳せき払ばらいをして、椅子に座っている男を見下ろすように背筋をのばした。

「何かご用ですか。会長に会われたいとのことだったと承うけたまわっておりますが」

「あの道楽ジジイは息災か」

「……会長は、先巡じゆん月げつから休きゆう暇かをとって出社しておりません。会長にかぎらず、社員のプライベートについては関知するところではありませんので」

「貴様の父親だろう」

「それが──」

　危あやうく声が揺ゆれそうになった。

　必死にこらえたが、顔は若じやつ干かん引きつってしまったかもしれない。

「それが、どうかしましたか」

「嫌いか。あのジジイが」

「好きも、嫌いも……」

「愛あい憎ぞう半ば、というやつか。ふん。まあ、いい父親ではあるまいな。友とするには悪い男ではないが」

　ああ、最悪だよ。

　父としても、上司としても、いいかげんで、ずぼらで、何もわかっていないのにわかったようなふりをして、なぜか人心を掌しよう握あくすることには長たけていて、敵を丸めこむのがうまくて、憎にくめば憎むほどこちらが悪者になりそうで、腹立たしくて、最低で、最悪だった。

　だが、もう過去のことだ。

　私はすでに、あの男を父親だなどとは思っていない。今は利用価値があるから、あの男の顔を利用しているだけだ。

「会長のご友人が、私に何か？」

「阿あ呆ほう。人に物を尋たずねるのなら、それなりの態度と礼れ

い儀ぎというものがあるだろうが。あの放ほう蕩とうジジイはそんなことも貴様に教えなかったのか」

　──阿呆。

　阿呆、だと？

　なぜ私がそんなことを言われなければならない？

　態度？　礼儀……？　勝手に社長専用の椅い子すに座り、自分が世界で一番偉えらいとでもいうような顔をしているこの男が、どの口でそんなことを？　──いや、待て。ケヴィン・バルモア。落ちつけ。大人になれ。いや、私は大人だ。もう三十七歳だ。老境に入っても思春期というか幼児期から抜ぬけだせない父とは違ちがう。

「……申し遅おくれました。私はケヴィン・バルモア、当バルモア商会の社長を務めさせていただいております。お待たせして申し訳ありません。ご用の向きをうかがいましょう」

「知っているさ。ケヴィン・バルモア。あの遊ゆう蕩とうジジイの餓が鬼きのなかでは出来がいいほうだが、思考の柔じゆう軟なん性に欠け、視野が狭せまく、容姿は月並みで、センスも悪い」

「な……」

「アール・ベルアノンのスーツにその派手な色のネクタイはあわんぞ。どうせなら、シャツも古くさいくらいオーソドックスな形のものを選ぶことだ。軽けい薄はくな眼鏡めがねはよせ。洒落しやれっ気を出したつもりかもしれんが、バランスが悪いと卑いやしく安く見えるだけだ」

　ケヴィンは思わずネクタイと眼鏡をさわった。秘書たちの視線を感じる。今朝、妻が選んだネクタイとシャツを拒こばみ、あえてこの組み合わせにした。眼鏡は多数持っているが、ケヴィンが選ぶと、いつも妻に反対される。妻はわざと夫に地味なものを着せたがっているのだと考えていた。嫉しつ妬としているのだ。かわいらしいジェラシーだ。だが、自分の顔が十人並みで、とりたてて特とく徴ちようもないことは幼いころから自覚している。父は若いころ、男くさい美男子だったし、兄弟も容色にすぐれている者が多いから、ひそかに劣れつ等とう感を抱いだいてもいた。

　それゆえに、せめて衣服や眼鏡で少しくらいアクセントをつけた

い。べつに女の気を引こうとか、そんなつもりはない。ただ、外見は軽視すべきではない。人の第一印象を形成するのは、見た目、話し方、仕草などだ。だから──それが、裏目に出ていたというのか……？

「まあ、靴くつは悪くない。マルクセル・ブラン。いい職人がいる。あそこの靴は逸いつ品ぴんだ」

「……それは……」

　妻が誕生日のプレゼントに買ってくれたものだ。デザイナーズブランドの発はつ祥しょう地ち、カリオサークの老舗しにせであるアール・ベルアノンのスーツをすすめてくれたのも妻だ。

　ああ、カトリーナ……！　仕事でストレスがたまりがちだし、そっけなくすることもある、ときには罵ののしってしまうことさえある、私はきっといい夫ではないだろう、でも、私が心を開くことができる相手は、結局、君だけだ！　君だけなんだ……！

「貴様のことは──」男が優ゆう雅がに傾かしげた首に手をあてて、わずかに眉まゆをひそめた。「あのジジイから聞かされたのだ。どういうわけか、跡あと取とりのことで悩なやむと己おれに相談する愚おろか者が多い。ようするに、おのれの胸のうちで結論は出ているが、決断を下しかねているのだろう。くだらん。決断を下す前にくたばる救いがたい馬ば鹿かもいるしな。無意味なことだ……」

　何か引っかかる男の言葉ではあった。しかし、それ以上に引っかかるのは、いつの間にか、ケヴィンが立っていて相手が椅子に座っているこの関係が、あたりまえのようになってしまいかけていることだ。見れば、二人の秘書も、黙だまって男の声に耳を傾かたむけている──というか、見とれているのか。

　たしかに、あのどこか昏くらい、それでいてやけに強い輝かがやきを宿した双そう眸ぼうだけでなく、きれいに整えられた髭ひげも、肩かたに届く黒くろ髪かみも、男性的な強さとやや女性的な優美さを兼かね備えた顔立ちも、女にとってはそうとう魅み力りよく的なのだろうが。

　もっとも、男の脇わきでひっそりと、それでいてすっとまっすぐ立っている女の美しさのほうが、ある意味、それ以上に稀き少しよう価値が高いかもしれない。いや、間違いない。なんたる美女だ。

こんな女性がいるのか。いていいのか。ハッ！　違う、そうではない、カトリーナ、誤解だ。私が愛しているのは君だけだ。本当に、君だけ──と、不意に彼女がケヴィンを見た。

　目があった、はずだ。

　ところが、彼女の金色とも銀色ともつかない瞳ひとみに、ケヴィンは映っていなかった。まぎれもなくこっちを見ているのに、見ていない。表情もまったく変わらない。にこりとするどころか、呼吸しているのかさえ疑わしい。

　完全な無関心で、完かん璧ぺきな無表情だ。

　彼女は態度で宣言しているのだ。

　あなたなど眼中にない、と。

　それどころか、あなたには興味がないと表明することさえ厭いとっている。

　男がようやく名乗った。

「己おれはジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ。ケヴィン・バルモア。あのジジイがいないのなら、やむをえん。貴様に尋ねる。今、バルモア商会が動かせる私兵はどれくらいだ」

「──私兵……？　我々の、ですか」

　正直、意表を突つかれた。

　ド・ジョーカー。ジャン・ジャックはファーストネームだろう。ド、だと？　名前からすると、ラフレシア第三帝てい国こくの貴族か。いや、だが、ジョーカーなどというふざけた拝領名があるものか。男にはどこか貴族的な雰ふん囲い気きがあるので、思わずそういうものかと信じてしまいそうになるが、偽ぎ名めいに違いない。しかし、なぜ我々が動員できる私兵の数を……？

　読めない。

　この男はいったい何を考えている？

「申し訳ありませんが、我が社のセキュリティーに関かかわる情報

です。社外の方にはお教えしかねます」

「ロックバード中隊とハミングバード中隊はまだジェードリにいるのか」

「……お答えできません」

「では、グラー大陸で見つかったヘキセンドラムの鉱脈は独どく占せんできそうか。あの一帯はアザナエル人のテリトリーだものな。現地のヒュイット王国も容易には手を出せまい。最さい新しん鋭えいの装備に身を包んだ私兵を送りこみ、王国軍と共同してアザナエル人を排はい除じよし、貴様は鉱脈の独占権を手に入れ、王国は領地と奴ど隷れいと定期的な収入をえる。悪くない取引だな。一時的に戦費等々で金はかかるだろうが、長期的に見ればそれ以上の利益が見込める。新社屋の建設も中止したくなるわけだ」

なんだ？　どうしてこの男はそんなことまで知っているのだ？　内心の動どう揺ようを押し隠かくすことで精せい一いつ杯ぱいのケヴィンを嘲あざ笑わらうように、ド・ジョーカーは髭を撫なでながら唇くちびるをゆがませた。

「忠告してやる。やめておけ。アザナエル人は強い。戦場を知らぬ貴様には、想像もつかんほどな。〝彷徨えるワンダ星神リングソオル〟とおのが剣けんと信義のみに仕える彼らは、他ほかの何なん人ぴとにも屈くつすることはない。たとえ最後の一人になろうと、彼らは戦い、殺すぞ。ケヴィン・バルモア、貴様も命を狙ねらわれる。アザナエル人の一部は、〝彷徨えるワンダ星神リングソオル〟にならい、世界中を旅しているのだ。ある者は仮面をかぶって彼らの特徴的な面めん貌ぼうを隠し、またある者は別の手段で顔を変え──もちろん、このジェードリにもいるだろうよ。そして、漂ひよう泊はくの身となろうとも、アザナエル人はあの乾かわいた大地を忘れることはない。〝彷徨えるワンダ星神リングソオル〟が身を横たえたという〝星の台座スターテーブル〟を汚けがす者を、彼らは許さんだろう。全世界に散ったアザナエル人を根絶することなど、事実上、不可能だ。貴様は一生、暗殺の恐きよう怖ふに怯おびえて暮らすことになろうな。一いつ瞬しゆんたりとも気の抜ぬけん、脅きよう威いと緊きん張ちようと狂きよう気きへの誘いざないに満ちた、なかなかに愉ゆ快かいな未来予想図だ」

「……せ、戦力的には、軍事の専門家に分ぶん析せきさせて……」

「欠伸あくびが出るな」

「は……？」

「戦いくさとは、人と人が戦うものだ。いや──人以外の場合もあるだろうが。ともあれ、戦を語りたいのなら、貴様も一度は戦場に出てみるがいい。目の前で人が人を殺し、殺され、殺しあい、屑くず虫むしのごとくばたばたとくたばってゆく。その渦か中ちゆうにあって、その手で人を殺してみろ」

「私は……事業家です。戦場になど……」

「だから、他人に戦争をさせて、貴様は高みの見物か。それですむのなら問題なかろうがな。己おれは忠告しているのだぞ。それではすまん、と。アザナエル人に戦を仕し掛かければ、いずれ貴様の寝しん室しつが戦場になる。狭せまい戦場だ。逃にげ場はない。せいぜい剣の腕うでででも磨みがいておくことだな。アザナエル人は妙みように律りち儀ぎだ。寝ね込みを襲おそわれても、その場で決けつ闘とうを望めば、おそらく応じてくれよう」ド・ジョーカーはさも愉たのしげに低く笑い、足を組みかえた。「──まあ、いい。未熟で愚ぐ鈍どんな社長が犯おかしたたった一つの重大な過失によって、ジェードリ中興の祖であるバルモア商会が無残についえる。それもまた一興だ。貴様らの会社がどうなろうと、己おれの知ったことではない」

　むろん、ケヴィンにとっては「知ったことではない」ではすまされない。それどころか、バルモア商会の命運は、妻のカトリーナと秤はかりにかけたくないくらいの重大事だ。もし、どちらか一方を選べと言われたら、選ぶ前に気が狂くるってしまうかもしれない。

　それゆえに、ケヴィンの頭はすでに忙いそがしく回転しはじめている。

　考えてみれば、ヘキセンドラム鉱脈の独占権獲かく得とく問題については、どこかに焦あせりがなかったか。父の放ほう漫まん経営を正す。それが至上命題だったはずなのに、いつの間にか欲が出てきてはいなかったか。そろそろ父に負けない大事業に着手したい。ケヴィン・バルモアの名を知らしめたい。もう「あのボリス・バルモアの息むす子こ」とは呼ばれたくない。そんな気持ちなど微み塵じんもなかったと断言できるか。

　実際、急きゆう遽きよ立ちあげた社長付の特別戦略会議室に集めた人材も、吟ぎん味みの上に吟味を重ねたとはいいがたく、急ごしらえの感が否いなめない。ラフレシアから呼びよせた軍事顧こ問もんも、軍人経験がない学がつ究きゆう肌はだの人物だ。話を聞いていると、理論的で説得力があってなるほどと思うが、考えてみれば、軍事的な素養のないケヴィンを納なつ得とくさせることに何ほどの意義があるのか。

　歴戦の傭よう兵へいとして名高いロックバード中隊の中隊長、ヘンドリック・カルマンに意見を求めたとき、「アザナエル人、ですか……一番やりあいたくない相手ですな」と言っていたことを思い出す。「もちろん、社命であれば、従うことは言うまでもありませんが」と付け加えて。

　今まで忘れていた。戦場に立つのは彼らなのに、その生の声を失念していたのだ。

　いや、思えば、私はいつもそうだったのではないか。

　一いつ般ぱんの社員にしても、私兵隊員にしても、「数」として勘かん定じようすることしかしてこなかった。

　戦争さえも、金と兵隊の「数」を動かすような感覚でしかとらえていなかった。

　ああ、カトリーナ、いったい私は何をやっていたのか……？

「──いろいろと、貴重なご助言をありがとうございます」ケヴィンはド・ジョーカーに向かって頭を下げた。「また、何かご無礼があったかもしれません。いえ、あったに違ちがいありません。このとおり、若じやく輩はい者ものです。何とぞご寛かん恕じよいただければと思います」

「ほう」ド・ジョーカーは短く息をついて、にやりと笑ってみせた。「どうやら底なしのうつけではないようだな。道楽ジジイの目もあながち節穴ではなかったということか。では、遅おそまきながら、めでたく貴様が殊しゆ勝しようになったところで、一つ頼たのみがある」

「頼み……ですか？」

「そうだ。ロックバード中隊ならびにハミングバード中隊、他、

ジェードリにいるバルモア商会所属の私兵隊が一千か？　ぜんぶで千五百はいるのか。己おれに指揮権をよこせとは言わん。ここぞというときだけでいい。己おれの指図で動いてもらいたい」

「な、なんですって？　馬ば鹿かな──失礼、いや、しかし、そんなことは……」

「貴様は社長だろう。貴様の命令があれば可能なはずだ」

「それは、不可能とは申しませんが」

「できるのならやれ」

「や、やれとおっしゃいましても、事情もわかりませんし──」

「事情か。ふん。まだるっこしいことだな。では、貴様、オストロス神しん殿でんを占せん拠きよした連中については、どの程度まで把は握あくしている」

「は……？　ああ、旧市街オールドタウンですか」

　かつて港町ジェードリにも受難の時代があった。海かい賊ぞくの跳ちよう梁りよう跋ばつ扈こなどで廃すたれかけたジェードリは、だが、バルモア商会の台頭によって息を吹ふき返した。それゆえに、私兵隊と義勇兵隊で海賊を殲せん滅めつし、新埠ふ頭とう、パパ・バルモア突とつ堤ていを完成させたバルモア商会は、ジェードリ中興の祖とも呼ばれているのだ。

　その後、バルモア地区を中心としたジェードリの新しい東半分は、新市街ニユータウンと称しようされて栄えた。

　一方、古くからある西半分は、旧市街オールドタウンと呼ばれるようになり、スラム化が進んだ。

　あけすけにいえば、大半の新市街ニユータウンの住民にとって、旧市街オールドタウンは目め障ざわりな存在だ。新しいジェードリの進化についてこられなかった怠たい惰だな役立たずどもの巣そう窟くつがベアフット地区だし、赤線地区の下品さ、低てい劣れつさ、汚けがらわしさといったら、目を覆おおうしかない。じつは、カジノを中心とした高級歓かん楽らく街がいをバルモア地区の南に作るというプロジェクトがある。この話にはバルモア地区に本社を置く複数の商社が絡からんでいるが、つまるところは赤線地区潰つ

ぶしだ。もろもろの事情で進展していないものの、今回の事件をきっかけに、あるいは新しい展開を見るかもしれない。その暁あかつきには、ジェードリの空気も少しはきれいになるだろう。結局、ド・ジョーカーではないが、ケヴィンをふくめた新市街ニユータウンのジェードリ市民にしてみれば、旧市街オールドタウンなんぞどうなろうと知ったことではないのだ。

　ただ、ジェードリで蘇そ生せい式を一手に引き受けていたオストロス神殿だけは別だ。正体不明の武装集団が神殿を占拠したあの事件は、驚おどろきだったし、重大な事態でもあった。

　だから、その件については、ケヴィンも情報収集を行わせていて、事実関係はだいたい把握している。先日、赤線地区で起こった大規模な火災や、名人街他で多数の死傷者を出した戦せん闘とうについても同様だ。

　とはいえ、それに対して、なんらかの手を打つところまでは考えていない。正直、会社にとってはヘキセンドラム鉱脈の独どく占せん権けんにまつわる案件のほうが遥はるかに重要だったし、日常の業務に支障が出ないかぎり、無視していい問題だと思っていた。営利団体としてのバルモア商会が追求すべきものは、まず経済的な利益なのだ。

「──血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ、でしたか。どうやら、ロシュ聖教に関係のある連中で、数百名の戦闘要員を擁ようしているようですが」

「脅きよう威いと見なしてはいないのだな」

「レイディーバード中隊をバルモア地区全域に展開し、警けい戒かいは強めさせております」

「ふん。天道虫レイデイーバード、か」

「我が社の私兵隊は、あくまで我が社の利益を守るためにあります。社長の私でも、その大原則から外れて運用することは基本的にできません」

「心配はいらん。己おれの頼みは、見事にその大原則とやらに合がつ致ちする」

「は……？」

「わからんか。やつらを捨て置けば、新市街ニユータウンの中心であるこのバルモア地区も、早晩赤線地区のごとき死し屍し累るい々るいの焼け野原と化すということだ」

「そんな、だいそれた──」

　苦く笑しようしつつ、言いかけたときだった。

　突とつ然ぜん、窓の外が明るくなった。

　社長室の出窓は南向きだが、かなり幅はばが広くて、そうとう張りだしているため、東から西までが見み渡わたせる。

　あれは──、

　西のほうか。

　ケヴィンは喉のどを鳴らして唾つばをのみこみ、ちらりとド・ジョーカーを見た。ド・ジョーカーはすでに椅い子すを回転させて、窓の方向に身体からだを向けていた。ケヴィンも出窓に近づいた。つい最近も同じような景色を目にした。炎ほのおに照らされて、夜空が燃えあがっているかのようだ。無数のまがまがしく渦うず巻まく煙けむりの槍やりが、その空を貫つらぬこうとしている。火事だ。大火事だ。前よりも近い。海沿いだ。旧埠頭の手前あたりだろうか。たぶん、暗黒街まではゆかない。名人街だ。燃えている。港町ジェードリを陰かげで支えている船大工など職人たちの街が、赫あか々あかと燃えている。

「とくと見ておくがいい、ケヴィン・バルモア。もしかしたら、そのうち貴様らを焼くかもしれん──あれが、聖なる炎だ」

　ド・ジョーカーの声こわ音ねは、むしろ愉ゆ悦えつに揺ゆれているようにさえ聞こえた。

　だが、見れば、腹のあたりで組みあわされたその両手には、傍はた目めでもわかるほど力が入っていて、指の先が血の気を失っている。ケヴィンは悪お寒かんを覚えた。ひどく恐おそろしかった。あの炎が。この街で起ころうとしている、いや、もう進行している何かが。そして、ジャン・ジャック・ド・ジョーカー──この男が胸のうちにひそめている、怒いかりの業ごう火かが。

Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・ヤスパー地区

〝回転海豚(スピニングドルフィン)〟

chapter.6

火を見るよりも明らかな

「えーと……つまり、こういうことかな」

　話の合間を見計らってそう切りだすと、大おお海豚いるかの間に雁がん首くびを並べているＺＯＯの面々の視線がマリアローズに集中した。カタリなんか「いきなりなんやねん」みたいな顔をしているけれど、そっちこそなんだよ？　いや、もちろん、思いがけず会うことができたロム・フォウと、思い出話に花を咲さかせるのが悪いとはいわない。楽しく皆みなで食事をとるのもいい。ロム・フォウの友だちの巨きよ大だいな真っ白い犬（というか、狼おおかみだと思うのだが）と、なんとかお近づきになろうと試みたりする気持ちも理解できなくはない。理解はできるのだが、もうとっぷり日が暮れている。一応、ジェードリの現状に関する話もちらほら出たし、お互たがいの情報をつきあわせる場面も時折あったけれど、いいかげんここらで誰だれかがまとめておかないと、明日になってしまう。でも、放ほうっておいたら、おそらく、きっと、絶対、誰も言いださないだろう。しょうがないから、まあ、僕が。

「──ジョーカーさんは、パンカロ・ファミリーのボスの友だちだった。で、パンカロ・ファミリーが、赤線地区を焼き払はらわれたことに対する復ふく讐しゆうとして、血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツに神しん殿でん前で決戦を挑いどんだとき、ロム・フォウとアルファも一いつ緒しよに駆かけつけた。けど、でっかい化物を倒たおしきれなくて、逃にげることになった」

「うん」ロム・フォウは片かた膝ひざを立てて床ゆかに直接座っている。野外生活に慣れているので、椅子などに腰こしかけるよりも、そっちのほうが落ちつくのだそうだ。

　ちなみに、そのロム・フォウと微び妙みような距きよ離りを保って横になっているアルファは、目を閉じてはいるものの、「迂う闊かつに近づいたらただではおかない」というかんじのオーラを発散させていて、かなりおっかない。だいたい、子犬だの猫ねこだのならともかく、このサイズの生き物を出入りさせるのは、宿しゆく泊はく施し設せつとしてちょっとまずいんじゃないの？　ロム・フォウはジェードリに立ちよる際、いつもこの宿を利用するらしいので、常連客ではあるのだろうが、大だい胆たんといえば大胆な経営方針だ。

「正直、ジョーカーにつきあう義理はなかったんだ。でも、この街

のおかしさみたいなものはあたしもどこか感じていて……うまく言い表せないけれど、とにかく、よくない気配だよ」

「ロム・フォウには、常人にはない不可思議な感覚があるのだ」

　そう口を挟はさんできた髭ひげは、相変わらずベッドに座って腕うで組ぐみをしている。髭の隣となりにピンパーネルが腰かけていて、その足あし許もとには、しつこくアルファにちょっかいをかけて半殺しにされたカタリが、いじけて丸まっていた。

「おそらく、父祖から受け継つぎし古く尊き血がもたらしているのであろうな」

「あたしにはよくわからないよ。なんとなく感じるだけだから」

「古く尊き血って……？」

　マリアローズが訊きくと、ロム・フォウは虚きよを衝つかれたようにエメラルドグリーンの瞳ひとみをまん丸くした。超ちようをつけても足りないくらいの美人なのだが、そんな表情をすると、なんだかあどけなく見えて、妙みようにかわいい。

「ああ、そうか。身内に尋たずねられると違い和わ感かんがあるけれど、マリアとは今日初めて会ったばかりだったね。ごめん。どうもそんな気がしないんだ」

「え？　そう？　なんでだろ」

「とけこんでいるからじゃないかな。あたしにとって、ＺＯＯは慣れ親しんだ群れみたいなものなんだ。あたしは山や森や野原が好きだけれど、みんなといると、やっぱりほっとする。街に長居しすぎれば、息苦しくなってしまうけれどね」

「うむ。人よりも獣けものや竜りゆうを友としたという聖王キュスの血族にして、王の親友であり、股こ肱こうの臣しんであったロム・ボルガの血を引くお前も、人の子というわけか」

「あたりまえだよ、トワニング。あたしは人間だ。あたしの父も母も人間で、二人が出会い、愛しあったから、あたしがここにいるんだよ」

「『愛して、憎にくんで、生きて、死ぬ。それが人生のすべて

だ』。ロム・フォウ、お前の父親の言葉であったな」

「うん」

「いしゃぎよくて、しゅてきな言葉ね」

　ユリカはサフィニアと並んで、マリアローズの向かいの椅い子すに座っている。サフィニアは、やっぱりロム・フォウとは話しづらい様子だが、その点については誰も気にしていないようだ。

　まあ、人間が三人いれば派は閥ばつができるという言葉もある。八人＋α（文字通りアルファ）いれば、そんなことがあってもおかしくない。べつに、是ぜが非でも一人一人全員が親密な仲にならないといけないわけでもないだろうし。サフィニアとロム・フォウみたいに多少気まずい関係があっても、半魚人のように人語が通じにくいやつがいても、皆、ＺＯＯだ。そのことは変わらない。それでいい、それだけで充じゅう分ぶんじゃないか──とは、なかなか割りきれるものでもないのだけれど。

「──てゆうか……え？　ってことは、ロム・フォウって、王様の子孫なの？」

「どうだろう。直系じゃないから、王様の子孫とはいえないんじゃないかな」

「拙せつ僧そうの知るかぎりにおいては、四百年前、暗黒大陸の半分と周辺海域を支配し、聖王キュスと呼ばれた一代の英えい雄ゆうがいた。ロム・フォウの祖先にあたるロム・ボルガは、その父の弟の息むす子こ、つまり、従弟いとこだといわれている。先も述べたとおり、聖王キュスの血族は、獣や竜と心を通わせ、これを従えたという。他ほかにも、聖王キュスが持っていたという超ちよう常じよう的な能力に関する記録は多く残されておってな。もしかしたら、オーバリストの一種であったのかもしれぬ」

「おーば、りすと？」

「……オーバリストは……魔ま術じゆつ士しの間で使われている、用語です……」しばらく押し黙だまっていたサフィニアが話にからんできてくれて、ほっとしたというのがマリアローズの正直な気持ちだった。「……どのような仕組みによって、もたらされる能力かは……正確にはわかっていません。少なくとも、現代の魔術では。

ただ……いわゆる、魔術とは異なる……〝念動力ＴＫ〟や、思念伝達、読心、透とう視し、未来予知といった〝超感覚ＥＳＰ〟など……常人にはない能力を、先天的に有している人は……ある確率で、間ま違ちがいなく、存在していて……彼らを、超ちよう越えつ者しや──オーバリスト、そして……彼らの超常的な能力を……オーバラーツと呼んでいます……」

「わたしたち医い術じゆちゆ士しが使ちゆかう医い術じゆちゆ式しきは、魔ま術じゆちゆの一系統としゃれているけど、むしろオーバラーツちゆに近いともいわれているのよ」

「でも、さ。そのオーバラーツって先天的な能力なんでしょ？　それだと、できる人はできるけど、できない人はできないってことにならない？　医術式っていえば、ベアトリーチェも今、モリーに教えてもらってるみたいだけど」

「……オーバリストを解かい析せきし……オーバラーツを我がものにしようという試みは……古くからなされてきたんです……」

「上古の超越者オーバ思想リズム、さらには、魔ま導どう王時代に復活した超越者リオーバ回帰思想リズムだな。ムフ」

　髭がまたぞろうざったい蘊うん蓄ちくを語りだしそうな風向きだった。サフィニアの話ならまだしも、髭の場合、声も無む駄だに大きいし、押しつけがましくて、聞いているだけで疲つかれてくる。第一、どうも話がずれてきているような気もするので、マリアローズは強ごう引いんに引き戻もどすことにした。

「ま、それはいいや。それより今はジョーカーさんのことだよ」

「あの男の考えていることは、あたしにはよくわからない。昔からそうだけれどね」どうやらロム・フォウは、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーという男のことが、あまり好きではないらしい。
「パンカロ・ファミリーの人たちと、赤線地区の庭の広い家に退いたところまでは一いつ緒しよだったんだ。でも、ジョーカーは何も言わずにすぐ姿を消してしまった。エンツォという人とはずいぶん親しかったようだから、埋まい葬そうに立ち会うのかと思っていたんだけれど、それもなしだよ。別べつ荘そうにも帰っていないみたいだね」

「なんか、変わった人なんだね……」

「うん。あたしは好きじゃないよ」

　そこまで一いつ片ぺんの迷いもなくはっきり言われると、かえってすがすがしい。

「ジョーカーは、昔からトマトにもよく突っかかるしね」

　ロム・フォウは一つ息をついて、白い狼おおかみの頭に手をのばした。アルファはとっさに目を開けて、ぎろりとロム・フォウをにらみつけたが、拒こばむことはしなかった。おとなしく撫なでられて、また目をつぶった。仕方ないな、撫でさせてやるか、とでもいいたそうな態度だ。なんでそんなに偉えらそうなわけ？　あと、ロム・フォウが「と」を発音するたびにビクッとするのは、いくらなんでも過か剰じよう反応だと思うよ……？　あえて誰だれとはいわないけど。

「トワニングにも嫌いや味みばかり言う。ユリカやサフィニアにはわりとやさしいけれどね」

「……なんでそんな人が仲間なわけ？」

「さあ。どうしてだろう」

「顧かえりみれば、拙僧にもよくわからぬな。もともとクランを作ろうなどと言いだしたのはリルコであったが──」

　その名前が髭ひげの口から出た途と端たん、さっきまでビクビクしていたサフィニアの全身から、ものすごい冷気のようなものがブワアァーッとあふれでてきた──ように感じた。ひょっとして、それっていわゆる、あれ？　殺気ってやつ……？　しかも、サフィニアだけじゃなくて、ＺＯＯ結成以来のメンバーで、かなり前からトマトクンを知っているらしいロム・フォウまで、かすかに表情を曇くもらせているってことは──、

　間違いないだろう。

　リルコとかいう人は、女だ。

　まあ、性別は名前からなんとなく想像がついていたけれど、おそらく、ただ女性だというだけじゃなくて──もしかして、トマトクンと……。

「なぜかは知らぬが、あのころ、ジョーカーはエルデンからあまり動こうとせなんだ。何かで離はなれることがあっても、すぐに戻ってきた。ようするに、あれはトマトにつきまとっていたのであろう。トマトの家に勝手に居候いそうろうしておったしな」

「それはトワニングも一緒だよ。トマトの家が広いからって、祭さい壇だんまで運びこませて」

「当時は、ロム・フォウ、お前とて拙僧と同じ身分であったであろうが」

「わ、同どう棲せい……」

　思わず呟つぶやいてしまった。しまった。僕としたことが、火に油を注ぐような真ま似ねを。

　見れば、案の定、サフィニアが下した唇くちびるをぎゅぎゅぎゅぎゅっと噛かんでうつむいている。それを知ってか知らずか、ロム・フォウは目を伏ふせて、アルファを撫でる手に少しだけ力をこめた。

「こどもだったんだよ。自分の足で立って歩くことも、まだ満足にできなかったんだ」

「目を離すと、一人で森へ山へと分け入ってゆき、行方ゆくえ知れずになった者の言うことではないな。お前を捜さがしだすのに、拙僧とトマトがどれだけ苦労したと思っておるのだ」

「それは一度だけだよ。あとはちゃんと断って出て行って、しばらくしたら自分で帰ってきたはずだよ」

「そうであったかな」

「そうだよ。そういう話はなんだか恥はずかしいから、やめてくれないかな」

　ロム・フォウは、わかりやすすぎるくらい素す直なおに恥じらっている。ずっと元気がなかったり、憤いきどおったり、カタリに扇せん動どうされていきり立ったり、しばらく平静とは程ほど遠かった髭も、エルデンを出て以来、一番くつろいでいるみたいだ。

　振ふり返って笑ったり、照れたり、愉ゆ快かいだったり、せつな

かったりする、思い出、記き憶おく。それらを共有することのできる仲間がいる。

　本当にすてきなことだし、ささやかながら、僕の中にも、そうした思い出が少しずつ積もりはじめているんだ。

　そんなふうに考えただけで、胸がほんのりあったかくなる。

　──でも、この異常なまでの話のまとまらなさ加減は、どうにかして欲しい。

　個々人の能力は高いし、何か事にあたったときの対処能力もずば抜ぬけているし、団結力だってあると思うのだが、どうも計画性とか、一いつ貫かん性とか、几き帳ちよう面めんさとか、そのあたりについては恐おそろしいほど乏とぼしい集団だ。

「えーと……ところで、話、戻していいかな？」

「うん」「うむ」「ええ」「……はい……」

「──ちゅうか、さっきからこのわしがひとッことも喋しやべっとらんのに、なんで誰もつっこんでくれへんのや……」

「静かデ・いいデス」

「わ、わしの存在理由は……」

「ないから、そんなもの。初めから」

　まあ、約一匹ぴきをのぞいて、物わかりは結構いいみたいなので、その点だけは面めん倒どうがなくて助かるのだが。

　ただ、ぜんぜん話に参加していないやつが約一名いる。

　ひょっとして、また寝ねてるんじゃ──と思って部屋の中を見まわすと、ジーンズにタートルネックのセーターというラフな服装に着き替がえたトマトクンは、窓まど際ぎわに立って、じっと外を眺ながめていた。園長マスターのきみがしっかりしてくれないから、僕なんかが苦労する羽目になっちゃってるんですけど……。

「ま、どっちにしてもさ。とりあえず観光でもして──ってわけにはいかないと思うんだよね。極きよく端たんにいえば、この街とか住

んでる人とかに縁えんもゆかりもないんだったら、さっさとエルデンに帰っちゃうべきだよ。それくらい物ぶつ騒そうな事態になってるって認にん識しきするべきじゃないかな」

「せやな」いじけていても、黙だまっていても、泣き言をいっても、誰もかまってくれないので、せつなくなったのだろう。カタリが起きあがって、無む駄だに力強くうなずいてみせた。「最初はジョーカーのオッサンと会うのんにかこつけて、たまにはのんきに物もの見み遊ゆ山さんっちゅうくらいの気分でおったわけやけど、状じよう況きようが変わってもうた。状況が変われば、目的も変わる。当然のことやな」

「目的って──え？　ちょっと待ってよ。何その目的って」

「わからんのかい」

「わかんないけど」

「アホか。わかるやろが、フツー」

「正確にいえば、わからないってより、わかりたくないっていうか……」

「ダァホ！　罪もない人々がぎょうさん殺されとるんやで！　マリアローズ、お前じぶんも見たやろが！　あの焼け野原！　赤線地区っちゅうのんはな、エルデンのクァラナド歓かん楽らく街がいにも負けへん超ちよう絶ぜつウルトラサービスがサービスサービスっちゅうて、最近、国中で話題沸ふつ騰とうなんや！　そないなスーパー・テクニッシャンズが──いやいや、どんだけの別べつ嬪ぴんはんが焼け死んでもうたと思とるんや！　わしかて夜こっそり抜けだして行ってこよ思て楽しみにしとったのに……」

「へぇー」「ふぅ……」「………………」

　マリアローズ、ユリカ、サフィニアあたりの冷たい視線の雨あられが魚顔にグザグザ突つき刺さっても、カタリは怯ひるまなかった。むしろ、逆ギレした。

「なんじゃボケェッ！　文句あるんかい！　そらわしかてなあ、彼女でもおったらそないなこと思わへんがな！　それでも勇気が出えへんくてなあ！　ああ、へたれや！　わしは神聖なる真性のリアルへたれや！　クァラナドでもオネエチャンのいるような店にはよー

入られん！」

「ナンパはよくしてるくせにね」

「連敗記録超ちよう更こう新しん中やけどな！　うるさいわ、アホダラァッ！　とにかくな、旅の恥はじはかき捨てっちゅうやろ！　旅先の解放感っちゅうかそのあたりにもナァイス・アシストしてもろて、今回こそは━てな！　内心、ひそかにそう思とったのに、この有様や！　どないやねん！　わしがなんか悪いことでもしたんか、おお！」

「や、悪いことしたかどうかは知らないけど……泣かないでよ」

「そら泣くわ！　な、涙なみだも出るっちゅうねん！　あのな、わしが、そ、そんだけでこないなことゆうとる思うなよ！　赤線地区はな、あそこで働いとったんはな、旧市街オールドタウンで生まれ育って、身でも売らんと食うこともままならんような人たちなんや！　それをやな、エンツォ・パンカロっちゅう漢おとこがやで！　赤線地区ビシィッとまとめて、貧しい連中にどんどん仕事紹しよう介かいしてな。旧市街オールドタウン、蘇よみがえらしよったっちゅうんは、むっちゃ有名な話なんや！」

「そうなの？」

「せや！　ジェードリには三人の父がおる！　一人はジェードリを造ったルオー兄弟商会のマルセル・ルオー！　もう一人は新埠ふ頭とうを建設したジェードリ中興の祖、バルモア商会の会長エドウィン・バルモア！　そして、ベアフット地区の救世主、パンカロ・ファミリーの首領ドン、エンツォ・パンカロ、パパ・パンカロっちゅうたら、そらもう漢の中の漢や！　漢の代名詞っちゅうても過言やない！　『サンランド現代漢列伝』にも出とるくらいの、ホンマモンの漢なんやで……！」

「何、その現代漢列伝って……」

「これや！」と、カタリが自分の鞄かばんからとりだしてみせたのは、一冊の本だった。

　マリアローズは手て渡わたされた本のタイトルを確かめた。なるほど。『サンランド現代漢列伝』。表紙をめくると、男たちの肖しよう像ぞう画がが何ページにもわたってつづき、そのあとの目次に

は何やら多数の人名が並んでいた。エンツォ・パンカロの名もある。マリアローズはちょっと読む気になれないが、いかにもカタリが好きそうな書物だ。

「……サインが、な……欲しかったんや……同じ漢道を歩むモンとして、その本にな……エンツォ・パンカロ──パパ・パンカロ直筆のサインがな……」

「それは、まあ、なんていうか……その、残念だったね」

「エンツォ・パンカロ、か」

　ロム・フォウの手が離はなれると、アルファがまた目を開けて、なんだか不満そうに低く喉のどを鳴らした。

「彼のことはよく知らないけれど、生き残った彼の息むす子この一人とは挨あい拶さつだけしたことがあるよ。チーロといったかな。どうやら、彼は父親と兄にかばわれて生きながらえたみたいだね」

「チーロっちゅうことは、三男やな。おとんと兄貴が身を挺ていして末っ子を……かあ！　くうっ、な、なんやせつない話やのう……うううぅぅっ……！」

「だから、泣くなってば」

「カタリ、ハンカチ。これ使ちゆかって」

「お、おう、すまんのう」

　ユリカが差しだしたハンカチで、カタリは遠えん慮りよなく顔をぬぐい、チーンと鼻をかんだ。

「……返しゃなくていいわ。しょれ、あげるから」

「を？　ちゃあんと洗って返すで？」

「洗ってもとれない汚よごれがあるんだよ。カタリ菌きんとか半魚人菌とか腐くされ魚菌とか」

「ぜぇんぶ一いつ緒しよやんか！」

「へえ。一緒だっていう自覚はあるんだ」

「そら、なんべんもなんべんもゆわれとるからな！　主にお前じぶんにな！　ちゅうか、お前じぶん以外そないなことゆうヤツおらへんけどな！」

「気ヅイて・ない……」

「な、何がや。何に気づいとらんのや。ゆうてみい、おお、ピンプ！　わしが何に気づいとらんっちゅうのや！」

「や、まあ、いいんじゃない？　気づかないほうがしあわせなことって、世の中には結構あったりするし」

「わしのしあわせくらいわしがおのれで決めるわボケェッ！　半魚人自決主義じゃ誰だれが半魚人やねんダァホ！　とにかーくッ！　わしらＺＯＯの新たな目的はァ！　観光あらため打だ倒とう・悪の血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツゥゥーッ！　目指せ、ジェードリの救世ェェー主ッ！　おっしゃー！」

「なんでそうなるんだよ……」

「なんでもへったくれもヘチマもヘソクリもヘモグロビンもビンビロビンもあるかい！　漢にはァッ！　たとえ火の中水ン中、諸もろ肌はだ脱ぬいでやらなあかんときがあるんや！　たとえば今がそのときや！　せやろ、髭ひげ！」

　そんなふうに話を振ふられた髭は、無言のままではあったが、眉み間けんに深い縦たて皺じわを刻んで大きく息を吐はいた。ロム・フォウとの再会もあって、せっかく少し明るさを取り戻もどしつつあったっていうのに、半魚人め、余計なことを。

　でも、髭だって、髭なりに無理をしていたのかもしれない。それに、原因を取り除かないかぎり、結局は根本的な解決にならない。ごまかして、まぎらして、先延ばしにして、なかったことにしようとしても、問題自体が消えてなくなるわけではないのだ。

　だから、「ま、髭はずっと前に神しん殿でんから追いだされちゃったんだしさ。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツもなんか危ない連中っぽいし、忘れちゃおうよ。ね？」なんて言えない。

　わかるからだ。

　もし、僕が何かに直面して苦しんだり、悩なやんだりすることがあったら、みんな放ほうっておかないだろう。それがわかるから、僕だって見て見ぬふりはできない。しちゃいけない。いや、何より、僕がしたくない。

　マリアローズは眉まゆをひそめて、軽く下した唇くちびるを噛かんだ。かといって、口に出して言うようなことでもないと思うんだよね。そんなこと。恥はずかしいし。なんかバカみたいだし。

「──パンカロ・ファミリーって……ようするに、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツに負けたんだよね。それで、そのエンツォ・パンカロって人が死んじゃって……どうなのかな？　被ひ害がいっていうか、損害っていうか」

「あたしが知っている範はん囲いのことしか言えないけれど、いいかな」

「もちろん」

「戦える人がぜんぶでどれくらいの数いたのか、あたしにはわからない。でも、赤線地区の外れにある大きな家まで逃にげてこられたのは、たぶん百人くらいだったと思うよ」

「百、か……相手は今もその倍以上いるんだよね。泉セン里リのときとは違ちがって、武装も向こうのほうが上っぽいし……練度っていうのかな。兵隊としての質も、あっちのほうに分がありそうだし。まともにやりあったら、勝ち目なんかなさそうだけど」

「そんなん気合いで逆転可能やろ」

「じゃあ、きみ一匹ぴきでぱっぱと連中皆みな殺ごろしにしてみせてよ。気合いで可能なんでしょ」

「おお、やったるわ。やったろうやないか！　見たったれや！　おっしゃァァーッ……！」

「……気合いだけで、なんとかなってしまうなら……誰も、苦労しないと……思います……」

「しょうよね。しょんな簡単なものじゃないわ。気合い以い前じえんに、たくしゃん努力をしても報むくわれないことだって、少しゆくなくないのよ」

「なんか、アレやん？　わしだけノーテンキのアホアホ仮面みたいやん？」

　トマトクンとアルファ以外の全員がカタリを見たが、皆みな、一言も発しなかった。目は口ほどにものを言うのだ。

「……ま、まあ、アレやな、つまり、その……冗じよう談だんはさておき、やな……血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツには恨うらみありまくりなはずのパンカロ・ファミリーと手を組むっちゅうのは、悪ないアイデアやと思うで。数は少ないっちゅうても、当然わしらよりは多いわけやしな」

「僕はべつにそこまで言ってないでしょ。それに、先方だって僕らと手を組みたがるかどうか、そもそも、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツとこれ以上やりあう気があるのか、とか、いろいろあるしね」

「せやけど、いっぺん話くらいしてみてもバチはあたらんのとちゃうか。なんや、わしらのわからんことも聞けるかもしらんで」

「うーん……」

　マリアローズは腕うで組ぐみをして、ちょうど同じように腕組みをしている髭の表情をちらっとうかがった。目があったけれど、髭は少し口髭を震ふるわせただけで、何も言わなかった。一時は激情に駆かられたり、カタリに煽あおられて暴発しかけたりしたが、もう自分の感情で事態を動かすことはすまいと決意しているかのようだ。それが大人の態度ということなのかもしれない。

　でも、僕らは見ちゃったんだ。

　嘆なげき悲しみ、怒いかり走りだそうとする髭を。

　今、髭がどれだけ我が慢まんしているか、みんなわかってるんだ。

　だから、そろそろ決めるべきなんじゃないかと思う。

　その役目は、当然、マリアローズではない。

「──トマトクンは、どう思う？」

「うむ」

　すぐに反応してくれたので、ちょっとだけ安心した。ずっと窓の外を見ていて、聞いていないようで、やっぱりちゃんと聞いていたんだ。

　けれども、待てど暮らせど、そのあとがない。

「あの、トマトクン……？」

「うむ」

「や、うむ、じゃなくて……聞いてる？」

「ああ」

「何を？」

「うむ」

「聞いてないよね？」

「む？」ようやくトマトクンがマリアローズに顔を向けた。「──なんだ。飯か」

「ご飯はもう食べたでしょ？」

「ああ、そうだったな。腹が減ってないから、妙みようだと思ったんだ」

「妙だよね。ホンットーに妙だね。こんな近くで、結構大きな声とかも出して喋しやべってたのに、なんでぜんぜん聞いてないんだろね。だいじなこと話してて、いざ決断ってときに、また一から説明しなおさなきゃならないなんて、ものっすごくめっちゃくっちゃ奇き妙みようだよね」

「そう怒るな。腹が減るぞ」

「減らないよ！　そんなにたくさん食べるほうでもないし！　ご飯の話はもういいから！」

「うむ。そうか」

　トマトクンはそう言うと、だるそうにため息をついた。あれ、と思った。とっさにサフィニアとロム・フォウに目をやったら、二人ともトマトクンを見てやや怪け訝げんそうな顔をしている。どうやら間違いなさそうだ。ぱっと見ただけでは、ちょっとわかりづらいけれど━トマトクンは、苛いらついている。機き嫌げんがよくない。

「……どうかしたの？」

「何がだ」

　とぼけているつもりなのだろうか。それとも、自分でも気づいていないのか。トマトクンは片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげて、首を傾かしげてみせた。

「何がって━僕はそれを訊きいてるんだけど」

「べつに、どうもしないが。ただ……」

「ただ？」

「いや。俺の気のせいかもしれん」

　ふうん、と聞き流してしまえる言葉ではなかった。だいたい、トマトクンの「気のせい」は気のせいなんかではないことが多いのだ。聖王キュスとやらに連なる者の古く尊き血を引くロム・フォウの感覚。トマトクンの独特の嗅きゆう覚かく。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの存在と、その暴ぼう虐ぎやく。これだけそろっていて悪い予感がしないとしたら、とんだ悠ゆう々ゆう閑かん々かんお気楽バカ一代だろう。

　寒気がした。

　背骨全体がいきなり凍こおりついてしまったかのような、かなり不快な悪お寒かんだった。

　それが先だったのか、あとだったのか、そのあたりは微び妙みようなところだ。

「━む……？」

　トマトクンがまた窓の外を見た。一いつ瞬しゆん後には冷たい風

が室内に流れこんできた。トマトクンが窓を開けたのだ。そのときにはもう、皆、ただならぬ気配を感じとっていた。

　何かが。

　何かが起きたんだ。

　何か、よくないことが。

　確かめるのは簡単だった。トマトクンみたいに開け放った窓から身を乗りだして、外を見ればいい。マリアローズたちはそうした。すぐにわかった。ここから南のほう━やや西寄りだ。近くはない。遠いといっても、遥はるか彼方かなたではない。

「火事……！」

「━違ちがい、ます……あれは……！」

　サフィニアはどさくさにまぎれてトマトクンの脇わきに身体からだを滑すべりこませていた。でも、今はそのことさえ忘れているようだった。翡ひ翠すい色の目で、煙けむりと炎ほのおとやけに黒々とした建物の影かげをにらみつけるサフィニアの横顔は、険しく、厳しく、強こわ張ばっていた。

「……魔ま術じゆつの、炎です……！」

Omenage 897 11th revolution 6th day

サンランド無統治王国ジェードリ・パパ・ルオー地区

〝名人街〟

chapter.7

愛が世界を救う

知りませんでした。私は何も知りませんでした。本当に知らなかったのです。

ああ、けれど、知らずに犯おかしたからといって、罪が赦ゆるされるわけではありません。

罪は罪です。

わかっています。教えていただいたのです。改心司教の御おん方かた々がたが、私に教えてくださいました。責め苦をもって、私に教えてくださいました。髪かみの毛をむしられ、水につけられ、爪つめを剝はがれ、指を一本一本締しめつけられ、皮ひ膚ふを少しずつ焼かれ、肉をつまみ出され、それを口に押しこまれ、糞ふん尿にょうを食事として与あたえられながら、くる日もくる日も私は私の罪について学びました。私はなかなか罪を認めることができなかったのです。愚おろかなことです。私は罪深い。あたりまえのことを理解するために、私は長い長い時間を費ついやしてしまいました。それだけをとってみても、ああ、なんて私は罪深いのでしょう。欺あざむく涙なみだと汚けがらわしい悲鳴の中で、私はようやく悟さとることができました。

私は魔術に手を染める大罪を犯した者です。

幼いころ、魔術師にさらわれて以来、私は魔術士としての教育を受ける身となりました。

そこから私の罪が始まったのです。

改心司教様はおっしゃいました。「そこにお前の意思があったようには思えぬかもしれぬ。だが、だとするなら、お前の運命が罪に汚けがされているのだ。それはさらに重大で、深刻な、罪だ。決してぬぐわれることのない、罪だ。逃のがれるすべのない、罪だ」

まったくそのとおりです。

私は罪を犯すべくして罪を犯しました。みずから望めば罪を犯さずにすんだ者より、私の罪はいっそう深いといわざるをえません。ぞっとします。もしあのまま罪を犯しつづけていたとしたら、ああ、恐おそろしい。罪が罪を生む。罪は膿うんで腐くさった罪の枷かせがこびりついて魂たましいから離はなれなくなる。恐ろしい。

本当に恐ろしいことです。

　さいわい、私はゲヘナ騎き士し団だんの「魔女狩がり」に遭あい、騎士の方々に保護していただいて、裁きを受ける機会をえました。

　じつは、私が〝預言者ザ・プロフエツト〟ユーバー・マリックの傍ぼう流りゆうトトゥーア家の者であったという事実は、裁判の途と中ちゆうで明かされたのです。覚えております。私の母親を名乗る高貴な女性が、私の胸むなもとにある痣あざを確かく認にんし、その他ほかの身体的な特とく徴ちようもあわせて、こう証言しました。「間違いございません。被ひ告こく人にんはまぎれもなく私の娘むすめです。モニカ・トトゥーアです。大聖堂教理大裁判官様に母として申しあげます。このうえは何とぞ厳しいご処置を」

　あのときは胸が張り裂さけるような思いもいたしましたが、母の主張は当然でした。

　罪は罰ばつせられねばならない。

　罪には相応の罰を。

　罪ある者にとっても、それが最善の救いなのです。

　こうして、「罪ある者のさらなる有罪」の判決を受けた私は、大聖堂の地下、氷結牢獄コキユートスに収容していただき、改心司教の御方々によって罪を自覚し自身を罰する貴重な機会をえることができたのです。

　私は素す裸はだかで、氷結牢獄コキユートスの冷たい壁かべに囲まれ、どろどろの汚お水すいが、膝ひざの下くらいの高さまでたまっている床ゆかに、座ることなど許されるはずもなく、やがて目を縫ぬってふさがれ、闇やみの中、永遠につづくかとも思われる暗闇の中、自分が眠ねむっているのか、起きているのか、それさえもわからない、ただ、耳みみ許もとで声がする、改心司教の御方々の声が、ささやく、私に、罪だ、罪ゆえだ、罪を認めるのだ、罪を知るのだ、罪罪罪罪

罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪、すべてが罪だ、私は、そう、私は罪深い、罪だ、私は、罪。

　私は、

　──〝罪ザ・そのシものン〟。

「つらくはないか。その……だいぶ揺ゆれるだろう」

　下から声がかかった。〝サー・ジェイムズ〟。本人は好んで〝向こうデア見ずデビル〟と名乗る。それは、孤こ児じだった彼に〝サー・ジューダス〟が与えた名だからだ。最初はモニカ・トトゥーアで、罪深い一人の魔ま女じょとなり、今は〝罪そのもの〟以外の何ものでもない女は見ることができないが、身の丈たけ二・五メーテルを超こえる大男だという。

　彼が担かついで歩いているのだ。

　女が架かけられた巨きょ大だいな十字架を。

　彼は兵を率いている。

〝裁きの石ジヤツジメントストーン〟。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの中でも、とりわけ騎士団長グランドマスター〝サー・ジューダス〟アロンズ・ニードルスピアに対する忠誠が篤あつい者たちで構成された親衛隊だ。

「気になされる必要はありません、向こうデア見ずデビル。もはやいかなる苦痛も苦痛として感じることができないほど、私は罪と同化しています」

「……そうか」

「はい」

　闇。

　はじめのうち、それは完全な闇ではなかった。

　瞼まぶたを縫いあわされても、眼球が生きていたからだ。



だが、役目を奪うばわれた目は、いつしか静かに息絶えた。

本当の闇が訪おとずれた。

私は闇の中で聞いたのです。

　改心司教の御方々の声を。言葉を。ロシュの教えを。『神は聖なる土地ゲヘナで、汚お物ぶつ、愚かな動物、罪人等、穢けがれし者共全すべてを焼き払はらい、穢れなき純じゅん粋すい者しやとして作り直す』。『いずれ天から降り、地の底からわきあがるロシュの炎ほのおから逃れるには、ロシュに帰き依えして〝計画〟に参加し、罪を落として穢れなき純粋者となる以外にない』。『人は主が浄じよう化かされるべきと示したまさにそのときに死す』。『人の形は罪に似る』。『罪はすなわち人である』。『罪に形はない。人が犯す罪はすべて罪である』。『人は穢れている』。

　そして、知ったのでした。

　彼らもまた、罪にまみれていることを。

　それは、しかし、自明の理ではありました。

　なぜならば、罪のない者など、この世にはいないのです。主たるロシュがそうおっしゃったと、〝預言者ザ・プロフエット〟ユーバー・マリックが証言したのでした。

　だから、私は裁かれねばならないのです。

　私たちは裁かれねばならないのです。

　すべてを、炎のもとへ。

　罪を洗う聖なる炎へ。

　ある日、私は正直に自分の思いを改心司教様に打ち明けたのでした。それは素そ朴ぼくな疑問でした。司教様、司教様はご自身の罪をすすごうとはお考えにならないのですか？　罪はどうすれば償つぐなうことができるのでしょう。私はどうするべきなのでしょう。改心司教様はお答えになられました。「もちろん、私も罪深い。であるから、私はロシュにこのようなお役目をいただき、日々贖しよく罪ざいのために力をつくしている。だが、それで罪が赦ゆるされるわけではない。私が死ぬとき、主たるロシュが定めたる私の死ぬべきときに、私の罪はようやく浄化され、私は〝計画〟に参加する純粋者となるであろう」

　―ああ。

　私は、でも、私は、どうでしょう。私の罪は赦されるのでしょう

か。私が死ねば、浄化されるのでしょうか。私の罪は、その程度のものでしょうか。司教様。司教様。私にはそうとは思えないのです。なぜなら、私の苦痛は、苦く悶もんは、傷は、痛みは、この闇は、絶望は、憎にくしみは、恨うらみは、罪の証しよう拠こであるすべての疵きず疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵疵痕あとは、あまりにも深く、消え去りがたい。このような罪が、私が死んだくらいで赦されるはずがない。私はそう思ったのでした。もっと痛みを。苦しみを。絶望を。罪を。誰だれも犯していないような、罪を。私を狂くるわせるほどの、罪を。私を押しつぶし、滅ほろぼすほどの、罪を。

私は我が身を触しよく媒ばいにして魔ま術じゆつを行うことにしたのでした。

我が師であった罪深き魔導師マジスタメルキオが、人生の最さい期ごに試みるつもりだったという禁じられた召しよう喚かん魔術を。

彼かの者は、責め苦のサリア・ベル。

かつての魔導王〝狂乱のフレンジー・乙女メイデン〟サリア・ベル。

彼女は不老不死を求めて悪魔に魂たましいを売り渡わたし、その陥かん穽せいに嵌はまって〝贄にえの園〟に堕おちたのでした。贄の園の住人となりはてた彼女は、痛みと恐きよう怖ふとそれから逃のがれたいという気持ちに支配されて、美しい魔導王だったころの面おも影かげは少しも残っていないといわれていました。氷結牢獄コキュートスの壁かべじゅうに自分の血肉で魔法円、魔法陣じんを描えがきながら、私はどこかで彼女に自分を重ねあわせていたのかもしれません。

美しく、奔ほん放ぽうで、才能にあふれ、欲深だったサリア・ベル。

私は彼女のようになりたかったのです。

私は彼女になりたかったのです。

彼女の力が欲しかったのです。

殺してやりたかった。

　ぜんぶ、全員、何もかも。

　罪ある者どもよ、知らずに罪を犯す愚おろかな者たちよ、私のように滅びてしまえ。

「〝罪そのもの〟よ。もうすぐだ」

「はい」

　わかっております、向こうデア見ずデビル。言われずともわかっております。私はそのためだけにあるのです。サー・ジューダスの理想を実現するための一助となる。今の私は、そのためだけに。

　あの方は、〝血のブラッツデイ水曜日・ウエンズ事件デイ〟でトレイン公国聖堂騎き士し団だん団長以下、二百余名の騎士とその他多数の文官武官を殺害して出国したあと、その行こう為いに対する「審しん判ぱん」を求めてモトローリィの大聖堂を訪れたあの方は、氷結牢獄コキユートスの視察をご希望され、私の独どく房ぼうの扉とびらをみずからの手でお開けになったのでした。あの独房は縦穴に近く、扉は天てん井じよう近くにありました。あの方はそこから私に声をかけられただけでなく、汚お水すいのたまる床ゆかまで下りてこられたのでした。召しよう喚かんしたサリア・ベルに蝕むしばまれ、ほとんど正気を失っていた私のそばにです。私は闇の中にあり、自身で見ることは叶かなわないのですが、おそらくさぞかしおぞましい姿をしていたでしょう。あの方は、ああ、あの方は、その私を抱だきしめてくださったのでした。「──とてつもなく深い罪だ。ですが、ロシュはあなたをお見捨てにはなりません。ロシュはいつか必ず死をもってあなたを赦し、清めるでしょう。私はアロンズ・ニードルスピア。ロシュの声を聞き、ロシュの名のもとに〝裁き〟を行うために遣つかわされた者です。モニカ・トトゥーア、ロシュの言葉を聞きなさい。あまねく世界の罪人は赦される運命にあります。それがロシュの意思です」

　ああ、ロシュよ！　主よ！

　あなたはこのように罪の深い私すらも、お救いくださるとおっしゃるのですか？

　愛……！

　それは愛のなせる御み業わざに違ちがいない！

私はまごうことなき愛を感じたのです。

愛のために、私は死のう。

まるで皮ひ膚ふのように張りついた苦痛を久しぶりに忘れ、恍こう惚こつとしている私に、あの方はつづけて囁ささやきました。
「──むろん、罪はすべての者にあります。大聖堂の罪も清められねばなりません。私にはロシュの声が聞こえます。モニカ・トトゥーアよ。サリア・ベルよ。私に力を貸しなさい。ロシュの教えから離はなれ、罪を深めるばかりの大聖堂を焼き払はらうのです。私たちは真実の〝計画〟を──ロシュの〝裁き〟を進めねばなりません」

そうです。〝火のバーニング日曜日・サン事件デイ〟は私の仕業です。正確にいえば、あの方を通してロシュが命じられたことを私が行ったのです。

また、ゲヘナ騎き士し団だんの中にも、あの方の理想に感かん銘めいを受け、あの方に従った者は、〝サー・ピーター〟ロイ・チャーチルをはじめとして、大勢いらっしゃいました。

すべてはロシュの御心のままに。

罪ある者たちを滅ぼして、浄じよう化かによる救いを。

きっと、改心司教の御おん方かた々がたも、大聖堂をつつんだ炎ほのおに焼かれて死に、汚けがれなき純じゆん粋すい者しやとなって、今ごろ天上でロシュのそばに侍はべっていらっしゃることでしょう。

もっとも、〝計画〟に参加していただく必要はありません。〝裁き〟はあの方が必ずや成し遂とげます。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

あの方がお決めになった私たちのおどろおどろしい名は、その覚かく悟ごを表すものです。

私も微び力りよくをつくします。責め苦のサリア・ベルが私に与あたえたこの力で。

「全隊止まれ……！」

　向こうデア見ずデビルの号令に従って、彼に率いられた〝裁きの石ジヤツジメントストーン〟が一いつ斉せいに足を止めた。

〝罪そのもの〟である彼女を架かけた十字架が、持ちあげられ、下ろされて、地面に突つき立てられた。

「〝罪そのもの〟よ！　ロシュとサー・ジューダス団長の名のもとに〝計画〟を、〝裁き〟を援たすけるのだ……！」

「はい」

　そして、私は歌う。

　罪の歌を。絶望の歌を。あるいは、希望の歌を。救いの歌を。ロシュを讃たたえる歌を。ロシュに乞こう歌を。

　それにサリア・ベルがこたえるでしょう。

　私はふたたび魔ま術じゆつに手を染める罪を犯おかし、深まりゆく罪をサリア・ベルがさらに汚しても、ロシュは私を救うというのです。

　なんてすばらしい！

　私はそこに愛を見るのです。

　神の愛を。

　──あの方の、愛を。

interlude

神の子

Omenage 861 9th revolution 6th day
A triple border area of The Principality of Trein,
HUTZZFOR I.A.D and Far-Celjinna Kingdom
“Karum Bashin”

「──いったい、いつまでつづくのだ。この戦いくさは……」

誰だれに言うともなく、そんなことを呟つぶやいた。もはや半ば習慣になってしまった感さえある。ノーマン・ニードルスピアは、トレイン公国聖堂騎士団東騎士館長としてではなく、一人の人間として、この戦争に疑問を抱いだいている自分自身に気づいていた。

我がトレイン公国と、ハッツフォー独立軍領、それにファー・セルジナ王国。三国が国境を接するカラム盆ぼん地ちが、さまざまな意味で要よう衝しようだということは理解している。

それゆえに、利害が衝しよう突とつする地であり、ぶつかりあった以上、手を引くことはできない。国の体面としても、実利的な面を考えても、最初に腰こしが引けた者が一番損をする。

さりとて、三者のうち一者が先んじて戦力を一気に増強しようとすれば、残りの二者が手を組もうとすることは目に見えている。

誰もが決着を望んでいながら、望ましくないほうへ天てん秤びんが傾かたむくことを恐おそれ、適度な兵を配備して、適度に血を流すことに終始している──。

「人は、かくも愚おろかなものなのか」

西騎き士し館長ジョン・マウザーと交代する形で、ノーマンが現地司令官としてカラム盆地の陣じん地ちに入ったのは四巡じゆん月げつ前だ。

おそらく、そのノーマンも、あと二巡月もすれば首都に呼び戻もどされ、別の者が代わりに「カラム盆地制圧軍」の指揮を執とることになるだろう。

引き継つぎの際、ジョン・マウザーに耳打ちされた言葉が蘇よみがえる。「たまらんぞ、ここでの仕事は。まあ、持ち回りだ。私も我が慢まんした。貴公も我慢することだな。戻ってきたら一いつ杯ぱいやろう」

仕事、か──と、ノーマンは顔をしかめた。仕事。仕事だと……？

聖堂騎士になって以来、もちろん俸ほう給きゆうはいただいてい

るが、どの任務も仕事と思ったことはない。私は人間だから、人の情を捨て去ることはできず、世せ俗ぞくの営みを否定するものではないが、聖堂騎士となったからには、すべてはロシュの御み心こころに添そうための行いと考えるべきだ。人として生きることはそもそも罪であり、生きれば生きるだけ罪をまとう。だからこそ、せめてロシュにつくす。そうしてはじめて、我々の罪は死後、浄化される。我々は純粋者となり、ロシュの〝計画〟に参加する資格をえることができる。

　あの男は真ま面じ目めすぎるのさ、と嗤わらわれることもある。

　聖堂騎士は、信しん仰こう者しゃである前に、国家を守護する騎士たるべきだ、という意見もある。

　しかし、カラム盆地で繰くりかえされる、許容範はん囲い内ですり減らしあうような、このむなしい戦せん闘とう行こう為いを見るがいい。

　これが人だ。人の集合体たる国家の選せん択たくであり、その結果だ。人は、共同体の利益を守るためなら、同族を殺すことさえも許容する生き物なのだ。

　しかも、餓うえてやむなく共食いをする獣けものとは違ちがい、多くの者は自分の手を汚さない。お前がやれと言われれば、いやだと顔をそむける。騎士たちは、その下の兵士たちは、貧びん乏ぼうくじを引かされたような表情で、同じように運悪く戦場に立つ羽目になった者たちを殺す。殺される。殺しあう。中には嬉き々きとして殺す者もいよう。だが、ようするに同じことだ。

　我々は、ある共通認にん識しきのもと、殺すことを認めあって、殺しあっている。食うわけでもないのに、殺すことを正当化している。我々はとことん下げ劣れつだ。どこまでも罪深い生き物なのだ。

「ロシュよ……私はどうすればよいのですか……」

　ノーマンは司令官用の天幕を出た。天幕とはいっても、土台も柱もしっかりしていて、ちょっとした一いつ軒けん家やの風ふ情ぜいだ。外には警護の者が六人ほどいて、何事かとノーマンを見たが、「いい」とだけ告げて、その場にとどまるよう目で指図した。

夜半だ。

星の降る夜だった。

比ひ喩ゆではなく、カラム盆地では、実際、多くの流星が見られる。

ノーマンは一人で天幕を離はなれ、空を見上げて野営地の中を早足で歩き、端はしまできた。すぐ先に、柵さくと呼ぶには立派すぎる頑がん丈じような柵があり、一定の間かん隔かくで篝かがり火びが焚たかれ、弓矢や刀とう槍そうを構えた歩ほ哨しようが立っている。一見、鼠ねずみ一匹ぴき通すまいという態勢のように思われるが、じつはそうではない。暗あん黙もくの了りよう解かいで、三軍とも夜や襲しゆうはしないことになっているし、こちらは密約で、ある種の者たちは見て見ぬふりをして通してやることになっている。

たとえば、ゴイツ、という男がいる。

一応、名乗りは「奔流のマーセナリーズごとき・ライク・傭兵隊トーレント」隊長だが、ゴイツの稼かせぎは傭よう兵へい働きではない。戦場荒あらしだ。戦死者が身につけている物品を剝はいで、売り払はらう。しかも、自分の手は汚よごさない。こどもを使う。篤とく志し家かのふりをして孤こ児じを集め、大人の手下に監かん視し、教育させて、彼らに戦場荒らしをさせているのだ。

言うまでもなく下げ劣れつきわまりない男だが、そんな鬼き畜ちくの所業を見すごすどころか、事実上、片棒をかついでいる騎士がいる。もちろん、金のためだ。警備担当の二等騎士あたりが、ゴイツから賄わい賂ろを受けとって、こどもたちを通してやる。仕事を終えたこどもたちが帰ってきたら、野営地に入れてやって、あとで彼らの稼ぎの一割か二割をもらい、部下の下級騎士たちに分けてやるのだ。金をばらまいて取り巻きを増やせば、出世の助けになる。ノーマンは何も考えず、ただひたすら理想の聖堂騎士像を追い求めてここまできたが、違う道を歩む者もいることは知っている。それどころか、むしろノーマンのような騎士は圧あつ倒とう的な少数派だろう。

現実、なのだ。

否定することはできない。目をそむけても無む駄だだ。それが聖

堂騎士団の実情だ。

　むろん、嘆なげき、憤いきどおって、改革を志したこともあった。天上のロシュにその是ぜ非ひを尋たずねもしたが、答えはなかった。当然だ。ロシュはかつて〝預言者ザ・プロフエット〟ユーバー・マリックを通じて、罪ある者をすべて滅ほろぼす道を示された。罪はいたるところにある。今さら一つ一つの罪について、ロシュが何をか言わん。罪は浄じよう化かされるべき。罪ある者は死すべき。真にロシュの御心に添おうとするのなら、罪にまみれた聖堂騎士団も滅ぼすしかない。しかし――、

「東騎士館長といえど、一騎士にすぎない私には……」

　子はいないが、妻がいる。年老いた両親もいる。ことに妻の両親は病気がちだ。私は失うことが恐ろしい。この執しゆう着ちやくも罪だ。罪。罪。罪。人の世は汚れている。汚されてゆく。私も汚れている。汚お物ぶつが汚物を嗤い、嫌きらい、裁こうとする。その矛む盾じゆんが私を苦しめる。私は逃にげている。妥だ協きようしている。迎げい合ごうしている。心のどこかで待ち望んでいる。いつか導き手が現れることを。すべての罪を背負いながら、怯ひるまず、容よう赦しやせず、罪ある者どもを裁く誰だれかを。

「私は、弱い……惰だ弱じやくだ」

　ノーマンは歩哨たちには一いち瞥べつもくれず、彼らが止めるのも聞かず、門を開けて柵の向こうに出た。それでも追ってこようとした数名の歩哨には、作り笑いをして言ってやった。

「これでも私は一等騎士の端くれだ。万の敵兵ならともかく、ろくに剣けんも使えないこどもにおくれをとると思うか」

　歩哨たちは、じつに気まずそうな表情で引き下がった。きみたちも、いくばくかの金を上の騎き士しからもらい、故郷に仕送りでもするのだろう。それは、だが、まぎれもなく罪なのだと、せめて自覚して欲しい。罪ある者として何をなすべきか、考えて欲しい。

　私も考えているのだ。

　すでに結論は出ているのに、考えつづけることで、ごまかしているのだ。

　――私は、卑ひ怯きようだ。

カラム盆ぼん地ち。

二十数年前まで、この地には、その名もカラムという都市国家があった。

絶えず三国の圧力にさらされながら、中立地として、どの国の敵にもならず、バランスよく利益を分配しつつ、自国の権益を確保するという、じつに困難な舵かじ取とりを宿命づけられた小さな国だった。

カラムの滅めつ亡ぼうについては、国家元首の交代に伴ともなう権力闘とう争そうにファー・セルジナが介かい入にゅうしたことが契けい機きとなったとか、ハッツフォーがカラム盆地経由でファー・セルジナに軍を進めようとしたことがきっかけになったとか、諸説ある。

いずれにせよ、戦場となったカラムは十日間あまりで無人の街となった。

その後も、三国の軍によって破は壊かいされつづけ、今は廃はい墟きよとさえいえないような瓦が礫れきの野と化している。

星降る空の下もと、ノーマンは三十分ばかりも歩いて、その瓦礫の野まで足をのばした。

昨日はこの場所で三日ぶりに戦せん闘とうがあり、陽ひが落ちるまでの間に二十一名の戦死者、行方ゆくえ不明者が出て、重軽傷者は五十一名だった。何事もなければ、明日、明後日は遺体の収容と行方不明者の捜そう索さくが行われるはずだ。その前、この晩が、戦場荒らしにとっては稼ぎ時ということになる。実際、目を凝こらすと、瓦礫の野のそこかしこで蠢うごめく人ひと影かげがあった。おそらく、そのほとんどがこどもだ。ゴイツだけではない。同じようなやり方で戦場荒らしをしている者は、何人もいるのだ。

高く売れる戦利品を持ち帰ったこどもは、粗そ野やな言葉で誉ほめられ、いくらかましな食べ物と寝ね床どこを与あたえられるだろう。

そして、またこの瓦礫の野に送りだされるだろう。

何も持ち帰ることができなかったこどもは、殴なぐられ、蹴けられる。

　場合によっては、殺されるだろう。

　それをわかっていながら、私はただ見ている。

　驚おどろくほど冷静に、観察している。

　こどもたちが死体から鎧よろい兜かぶとを剝はぎとり、それを他ほかのこどもが奪うばおうとし、とっくみあいになって、その隙すきに別のこどもが兜をかすめとろうとする。争っていた二人が、漁夫の利をえようとしていたこどもに飛びかかる。こどもはあっという間に蹴け倒たおされて、地面に頭を打ち、動かなくなる。二人は喧けん嘩かを再開する。

　いや、殺しあいを。

　私は見ている。

　その罪を。

　彼らが犯おかす罪を。

　真理のごとき罪を。

　私の罪を。

　世界の罪を。

　私は笑えみさえ浮うかべる。

「――ああ、ロシュよ、今は何も赦ゆるさないでください。地上のすべてを断罪してください。私たちが救われるには、もうそれしかないのだ。そうではありませんか、ロシュよ……」

　そのとおりだ。

　と、聞こえたような気がした。

　幻げん聴ちようだろうか。いや、違ちがう。たしかに聞こえた。聞こえたのだ。あれは――声？　誰の声だろう。なんの声なの

だ……？　頭に浮かんだある答えを否定するように、次々と疑問がわきあがってくる。心臓が暴れている。ひどく暴れている。息が乱れる。汗あせが噴ふきだす。ノーマンはあたりを見まわした。見つけるべくして見つけた。そう思った。これはロシュの思おぼし召めしだ。ロシュの意思だ。

　こどもだった。

　戦場荒あらしか。

　もとは壁かべか何かだったのだろう、二メーテル四方ほど板状の石の上で、そのこどもは祈いのっていた。祈っているようにしか見えなかった。ひざまずき、両手を胸の前で組みあわせて、夜空を仰あおいで、全身を震ふるわせるその姿勢を、祈りと呼ばずしてなんと呼ぼう！　ノーマンは脇わき目めも振ふらずにこどもに駆かけよった。こどもの身なりはみすぼらしかった。だが、高貴だった。明らかに祝福されていた。区別されていた。違う。このこどもは違う。すぐにわかった。こどもは歯をガチガチ嚙かみ鳴らしながら、呟つぶやいていたからだ。

「……聞こえる……聞こえる……声が、聞こえる……」

「声、が──」

　私も聞いた。その声を。だが、もう聞こえない。いくら耳を澄すましても、聞こえない。彼には聞こえているのだ。まだ聞いているのだ。あの声を。

　ノーマンはこどもの両りよう肩かたに手を置いて、じっくりと見た。体格からして、五歳か六歳くらいだろうか。こどもは頭に包帯を巻いていた。見開かれた目に、ノーマンは映っていなかった。唇くちびるが動いていた。聞こえる。聞こえる。声が。聞こえる。声が。そうか。そうなのか。聞こえるのか。あの声が。聞こえるのだな。ノーマンは深々と呼吸して、夜気を胸むねーいつ杯ぱいに吸いこみ、歓かん喜きとともに叫さけんだ。ロシュよ……！　感謝します！　それから、こどもを思いきり抱だきしめた。それはロシュだ！　ロシュの声だ……！　腕うでの中のこどもが初めてノーマンを見た。

「……ろ……ろ……しゅ……？」

「そうだ。神だ。私たちに救いをもたらす神。それがロシュだ」

「……ロシュ……」

「ああ、そうだ。きみはロシュが私のもとに遣つかわした子なのだ」

　妻は喜ぶだろうか。きっと喜んでくれるだろう。結けつ婚こんして以来、なぜかいくら欲ほつしても授さずからなかった。妻が親類や近所のこどもを見つめる目には、九の慈いつくしみと、一の寂さびしさが宿っていた。罪ある者ではあるが、今日ばかりは素す直なおに祝おう。私と妻に子ができた。それはロシュの意思だった。私は聖堂騎き士しとして、ロシュに従う。全面的に。

　この子は今から私と妻の子だ。

　そして、神の子だ。

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝パンカロ家〟

chapter.8

些細な予言

視線の果てで、海と空が接している光景は、いつまで眺ながめていても飽あきない。

エルデンは城じよう壁へきに囲まれた見事な円形の街だし、公園なんかに木立があるとはいえ、基本的にはどこもかしこもすごく人工的だ。マリアローズが住んでいる第十三区にいたっては、馬ば鹿か高い高層寺院だらけで、上から見下ろすぶんには気分がいいものの、下を歩いていると息苦しさを感じることもある。それと比べて、この解放感はどうだ。空気も違う。なんというか、人間以外の生き物の気配に満ちているのだ。風に独特のにおいがある。エルデンでは無色透とう明めいな太陽の光の色が、この街では暖色系だ。

こんなことになっていなければ、本当に楽しい旅行だったろうに。

きっと、マリアローズが今まで経験したことがないような──パパ・バルモア突とつ堤ていだとか、人魚関係の史し跡せきだとか、海だとか、いろいろな名所を仲間とわいわい騒さわぎながら巡めぐって、おいしいものを食べたり、珍めずらしいものを探したり、のんびりくつろぐ日もあったりして。

いつか目を細めて、「ああ、あんなこともあったねえ」みたいにみんなで語りあえるような、そんな大切な思い出の一つになっていただろうに。

もちろん、ジェードリだってサンランド無統治王国の街だ。危険はそこらじゅうに転がっているだろう。

でも、トマトクンがいて、ピンパーネルがいて、髭ひげもいて、ユリカが、サフィニアがいる。マリアローズだって、エルデンでもまれてきた。人並みの危機管理能力はあるつもりだ。半魚人も、間の抜ぬけたところはあるけれど、じつはそれなりに使えるほうだし、まるっきり頼たよりにならないというわけじゃない。少々火の粉が降りかかってきたところで、なんてこともない。

そして、どういう人かよくわからないけれど、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーに会って、偶ぐう然ぜん、ジェードリにいあわせたロム・フォウとも仲よくなって。アルファにびっくりして、でも、あんな大きな犬というか狼おおかみなんて初めて見るから、興

きよう味み津しんしんで。さわろうとして、吠ほえられて、腰こしを抜かしたりして。

　──僕、なんでこんなことを考えてるんだろ。

「ここ、だよね……？」

　太陽はすでに中天近くにある。ここは赤線地区の北の外れだ。南には無残に焼け落ちたかつての歓かん楽らく街がいが広がっている。一部では復興作業が行われているという話だが、見たかんじだとあまり活発ではないようだ。

　それもそのはずで。

　ジェードリの破は壊かいは、まだ終わってなどいない。現在進行形だ。昨夜は名人街が焼かれ、かなり大勢の死傷者が出たらしい。その消火活動も終わっていない様子で、ここからでも無数の黒こく煙えんの柱が見える。こんな不安定な情勢のなか、資材を集めて、建物を建てなおして──なんて、とてもではないが、やっていられないだろう。物理的な面だけじゃない。親しい人を失った悲しみにうちひしがれ、そこから立ちなおるための時間だって必要なはずだ。

　でも、事態は待ったなしで進んでいる。

　悪いほうへ、悪いほうへと。

　押し進めようとして、実際、次々と行動している者たちがいる。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

　ここは、連中に挑いどんで盛大に敗れたパンカロ・ファミリーの首領ドン、エンツォ・パンカロの邸てい宅たくだ。いや、だった、というべきか。

「焼けちゃってるね……」

「……全焼……です、ね……」

「しょうみたいね……」

「うむ」

「むう」

「はイ」

「なんちゅうこっちゃ……」

「てゆうか──」

　マリアローズはすぐ先にある門の周囲にざっと目を配った。門は壊こわれている。外側からぶち破られたらしい。そこらじゅうに血けつ痕こんがある。血で汚よごれた刀とう剣けん類も転がっている。死体こそ見あたらないものの、ここで激しい戦せん闘とうが行われたことは一目瞭りよう然ぜんだ。つまり、わりあいこぢんまりとした、ほとんど焼け落ちてしまっているあの家屋は、何ものかに襲しゆう撃げきされて、焼き討ちに遭あった。そういうことだろう。誰だれに？

「血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ、か……」

　髭が低く唸うなった。

　そのでかい手には何やら十字形の物体が握にぎられている。門の近くで見つけたものらしい。

「──ロシュのRos'ien黒十字Black Cross。やはり、拙せつ僧そうが思っておったとおり、ロシュ聖教に関かかわる者たちのようだな。だが、赤地に黒十字とは……無む垢くなる白に、裁きを表す黒十字がロシュ聖教の象しよう徴ちようのはずだが」

「ハッ！　気分転てん換かんに色変えよったんやろ。そんなんどうでもええわ」カタリは眉まゆをつりあげて地面を蹴け飛とばし、それでも足りないといったかんじで自分の腿ももを殴なぐりつけた。「ああ、けったくそ悪い。こんなんな、アレやで。自分らのやっとることは一等正しいて確信しとるアホダラの仕し業わざやで。人間、ワレが正しい思わんかったら、ここまでワヤなことはできへん。理由、根こん拠きよはなんでもええ。お国のため。正義のため。神サンの名のもとに。ようするに、ぜんぶ一いつ緒しよや。えてして、そないな連中が一番えげつないこと平気でしよって、傍はた迷めい惑わくなんや」

「傍迷惑、ね……」

　きみが言えた義理じゃないでしょ、なんて、ツッコむ気にはなれなかった。ここまで感情的になっているからには、カタリにも相応の理由があるのだろうし、たしかにこれは大迷めい惑わくだ。どんな主義、主張、信条のもとに火をつけてまわっているのか知らないが、知りたくもないし、知ったところで、認められるはずがない。サンランドには彼らを否定する法はないけれど、だからといって、なんでも許容されるだなんて思わないことだ。

　人を傷つければ、恨うらみを買う。

　恨みは復ふく讐しゆうを呼びよせる。

　強者は仕返しなんかものともしないかもしれない。でも、それをいいことに、暴ぼう虐ぎやくのかぎりをつくせば、弱者だって徒党を組んで、そいつをぶっ殺そうとするかもしれない。あるいは、誰かを雇やとって暗殺しようとするかもしれない。

　因果応報というやつだ。

　とはいえ、誰かを殺したからといって、必ず殺されるとはかぎらない。マリアローズの目の前で、むごたらしく殺されて、少しも報むくわれることがなかった人はたくさんいる。無意味な、哀あわれすぎる、死の行列。死んで、忘れ去られるだけで、生の痕こん跡せきをひとかけらも残すことができなかった人たち。基本的には、幸も不幸も不公平で不ふ均きん衡こうだ。

　でも、偏かたよりがあれば、流れができる。

　流れができれば、何かが変わる。

　エルデンでも、残忍公ザ・クリユーエルアザエル・ノーウェンダルクのクラン・クリューエルや、インモラル、最近ではＳＩＸ率いるＳｍＣなど、悪逆無道の輩やからがはびこる時代があった。しかし、彼らの天下はいずれも長くはつづかなかった。多少つづいたところで、魔ま導どう王たちが世界を分割統治した時代が終しゆう焉えんを迎むかえたように、いつかは終わるのだ。

　まあ、今の問題は、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツがジェードリでそうした一時代を築いてしまうのかどうか、ということなのかもしれないが。

「──昨日の夕方から夜だろうね」と、門の周りをさかんに嗅かぎま

わっていたアルファの首を撫でながら、ロム・フォウがこっちを見た。「あたしがここにきたときは、もちろん無事だったし、まだそれほど時間はたっていないと思うよ。アルファもそう言っているから」

「そっか。アルファも……って」

　マリアローズはアルファをまじまじと見つめた。

　視線がぶつかった。

　アルファの鼻に皺しわがよっている。剝むきだされた、あれは歯というよりも、牙きばだ。すっごい牙。こ、怖こわいんですけど。なんでいちいちにらむわけ？　なんのかの言って、や、言ってないけど、ロム・フォウにはべったりなくせに──てゆうか、アルファもそう言って？

「しゃ、喋しやべれるの？　その……アルファと」

「うん？　いや、喋るのは無理だよ」

「そ、そうだよね」

「ただなんとなくわかるだけなんだ。何を考えているか。何を言いたいのか。アルファもあたしのことがわかっているようだよ」

「そ、そうなんだ……」

「変かな」

「や、まあ、僕には真ま似ねできないってだけで……ちょっとびっくりしたけど、いろんな人がいるしね。とくに、ＺＯＯうちは……」

「そうだね」

「い、いいよね。そういうのも。なんか。ええっと……楽しいっていうか」

「うん。それぞれ違ちがう人が皆みなで一緒にいられるのは、すてきなことだね」

「しょうね。本当に……」

　ユリカが感かん慨がい深げにうなずいた。

　考えてみれば、ユリカと初めて会って、二十三歳だと聞いたときも、かなり驚おどろいたっけ。今はマリアローズも事情を知っているけれど、そのことについては、内心ずっと不思議に思っていた。でも、訊きけなかった。訊いてはいけないことなんじゃないかと思っていた。ユリカも訊いて欲しくないんじゃないかって。それは、たぶん、誤解だった。マリアローズが尋たずねれば、ユリカはきっとありのままを語ってくれただろう。話を聞いてショックを受けるマリアローズを気づかってさえくれただろう。ユリカはそういう人だ。でも、ユリカが抱かかえているものは、決して軽くない。おそらく、ユリカ以外には理解できないほど、重い。すごく、重い。

　みんな、そのことをわかっているんだ。

　ユリカだけじゃなく、誰だれも彼も、それぞれに違う重い荷物を抱えていることを。

　その荷物は、結局のところ、本人にしか背負うことはできないということも。

　本当につらいとき、一時的に肩かた代がわりしたり、支えたりすることはできても、最後にはやっぱり自分で背負いなおさないといけない。

　背負ったまま、自分の足で歩かないといけない。

　一人一人、自分の力で歩いてゆかないといけない。

　けれど、一いつ緒しよに歩くことはできる。

　たまに別の道を歩いても、また出会って、肩かたを並べて、足並みをそろえればいい。

　たぶん、それが仲間なんだ。

「──とりあえず」マリアローズは、大きな右手で黒い十じゆう字じ架かをもてあそんでいる髭ひげの腰こしのあたりをぽんと叩たたいた。「中、入ってみる？」

「……うむ。いや――」

　髭は低い声で曖あい昧まいに答えながら、トマトクンに目をやった。マリアローズは思わず身構えた。トマトクンが背中の大たい剣けんに手をかけていたからだ。その脇わきに控ひかえているピンパーネルも、少しだけ膝ひざを曲げて、いつでも飛びだせる体勢になっている。ロム・フォウは少し眉まゆをひそめているだけだが、アルファも恐おそろしげな唸うなり声を発しはじめた。誰かいる？　敵……？　見たところ、庭にも、焼けて崩くずれた家屋のあたりにも、人ひと影かげはないようだが。

「トマトクン……？」

「俺が先に行こう。相手の出方を見る。俺がやれと言うまで手は出すなよ」

　皆、無言でうなずいた。

　約一名、ではなく、一匹ぴき――というか、むしろ一頭を除いて。

「……アルファ！」

　ロム・フォウの制止を振ふりきって、きらめく純白の毛皮をまとった獣けものが駆かけだした。これまではＺＯＯ最速といえば問答無用でピンパーネルだったけれど、もしかしたらその座を譲ゆずることになるかもしれない。あの大きな身体からだで、あのスピード！　初速からすごいし、加速も尋じん常じょうじゃない。まあ、アルファがＺＯＯの一員なのかどうか、そのあたりは不明だけれど、とにかくあっという間だった。彼は門を抜ぬけて庭に入り、急停止して、空を仰あおぎ、聞く者の腹の底を震ふるわせる叫さけび声をあげた。おおおおおおおおおおおおおおおおん……！

　まるで、出てこい、臆おく病びよう者ものどもめ、とでもいいたげな態度だった。アルファは威い厳げんに満ちていた。反逆を許さない王者の風格が彼にはあった。

　その威い勢せいに気け圧おされて――かどうかは知らない。

　どうやら、家屋の陰かげや庭の木立に隠かくれて息をひそめていたようだ。十人、いや、それ以上の男たちがぞろぞろと姿を現して、アルファの前に集まってきた。彼らは年とし恰かつ好こうも身なりもばらばらだが、全員、武器ではなく、シャベルやらツルハシ

やらの土木用具を手にしていて、顔や服が真っ黒に汚よごれている。あれは、煤すす……？　ここで何かの作業中だった？

　もちろん、警けい戒かい心しんは抱いだいているらしいが、どうも敵意はない様子のそんな男たちを一いち瞥べつして、アルファが振り返った。

　そして、ふん、と鼻を鳴らしてみせた。

　アルファの視線の先には、トマトクンがいる。

　ひょっとして、あの仕草って「どうだ、腰こし抜ぬけのウスノロめ」みたいなかんじ……？

「うむ……」トマトクンは唇くちびるを変な形にひん曲げて、後ろ頭をボリボリ掻かいた。「まあ、まずいことになっちまいそうな雰ふん囲い気きでもないしな。べつにいいんだが」

「てゆうか、きみ、思いっきり挑ちよう戦せんされてるよね。イヌとかって、上下関係、すごく大事なんでしょ。ほっといたら、なめられるんじゃないの」

「とはいえ、俺が飼ってるわけじゃないしな」

　トマトクンの視線を受けたロム・フォウは、しなやかな指でそっと顎あごをつまみ、かすかに首を傾かしげた。

「あたしもアルファを飼っているつもりはないよ。エルデンの東で偶ぐう然ぜん知りあってから、気がついたら一緒に旅をするようになっていたんだ。だから、一番しっくりくる言葉は、やっぱり、友だちだね」

「だったら、俺たちもそれでいいんじゃないか。あいつが認めてくれるかどうかは、また別の問題だが」

「……なんか、紆う余よ曲きよく折せつありそうだね。友だちって関係になれるまでには。まだまだ」

　いずれにしても、結果的にアルファの行動は功を奏した、ということになるのだろうか。いや、アルファは出てきた男たちを攻こう撃げきしようとはしなかった。それどころか、振り返ってトマトクンを嘲あざ笑わらってみせた。ということは、ひそんでいた男たち

は敵ではないと、アルファは最初から感じていた。もしくは、知っていたのか。

「白い、狼おおかみ……」

　男たちが作る人ひと垣がきの中から、一人、進みでてくる者があった。かなり汚れているが、趣しゅ味みの悪い肩パットが入った紫むらさき色いろのスーツを着ていて、なんだか剽ひよう軽きんな顔をした細い目の男だ。

「何モンか思て隠れとったら、なんや、知りあいやんけ。おうおう。あの別べつ嬪ぴんはんもいてはる。たしか……そや、ロム・フォウゆわはったか」

「うん。あたしはきみの名を知らないけれど、顔は覚えているよ」

「イビツ、いいまんねん。覚えとってや」

「覚えておくよ」

「光栄やな。せやけど、あんたはんとその狼もたいがい目立ちよるけど、他ほかのお連れはんも勝まさるとも劣おとらずゆうやつでんなぁ」

　イビツと名乗った男は、右手に持ったシャベルを肩にかつぎ、左手をズボンのポケットに突つっこんだ姿勢で、マリアローズたちに無ぶ遠えん慮りよな視線を浴びせた。そう感じたのは、たぶん、イビツの眼まな差ざしにある種の鋭するどさがあったからだろう。探さぐりを入れられているのだ。イビツはマリアローズたちをあやしんでいる。

「──なんか用でっか？　わてら、これでも忙いそがしぃてね。お客はんの相手しとる暇ひまァないんですわ。どのみち、見てのとおりの状態で、茶ァの一つも出されしまへんしね」

「忙しい、か」

　トマトクンが大剣の柄つかから手を放して前に出た。こういうときのトマトクンは、妙みように自然体で、決して威い圧あつ的ではないのだが、どうしてか目を離はなせない。アルファさえ、ちょうど自分に向かって歩いてくる恰かつ好こうのトマトクンをじっと見つめたまま、身じろぎもしなかった。

「何が忙しいのか知らんが──」

　もっとも、トマトクンがすれ違ちがいざまに頭を撫なでようとしたら、「うおん！」と吠ほえるなり、走って逃にげてしまったが。

「事と次し第だいによっては手伝うぞ。力仕事ならそこそこ役に立てると思うがな」

「あんたはんは……」

　イビツはまだ訝いぶかしそうにしている。それはそうだろう。いきなりそんなことを言われても、じゃあ、頼たのんます、とはいかないはずだ。でも、イビツは一いつ瞬しゆん後にはぽかんとしている。マリアローズの予感というより、これは些さ細さいな予言だ。トマトクンが「俺か？」と顎を撫でた。

「俺は、トマトクンだ」

　果たして、マリアローズの予言は見事に的中した。

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・パパ・ルオー地区

〝旧埠頭〟

chapter.9

北海から

「いつも思うんだが──」

　ヘンリー・ブラックモアは、トレンチコートの襟えりを立てながら、隣となりの男にちらりと目をやった。白いシャツと臙えん脂じ色いろのネクタイに紺こんと白のストライプのスーツをあわせ、黒くろ革かわのジャケットを羽織った黒い肌はだの男が、暮れ方の旧埠頭に入港しつつある船団をじっと見つめている。禿はげ頭あたま。サングラス。百八十六サンチ、百十二キルグラハムの体たい軀く。見るからに堅かた気ぎじゃねえよ。

「とてつもなく柄がら悪いよな、お前……」

「貴公に言われたくはない」

「俺はぜんぜん柄なんか悪くねえよ。どっから見ても品行方正な青年紳しん士しってかんじだろ」

「寝ね言ごとは寝て言うことだ」

「俺が寝言を聞かせるのは女だけだ。野や郎ろうには寝顔も見せねえ主義でな」

「貴公の主義にかかわらず、中年男の寝顔など見たくもない」

「そいつはいいことを聞いた。今度、無理やり朝まで添そい寝してやる」

「非常に迷めい惑わくだ」

「正直、俺も嫌いやだけどな。つーか、人のこと中年呼ばわりしやがって。リリアン・イヌテロ、お前だってもう三十五だろ。立派な中年じゃねえか」

「三十四だ。貴公は三十七歳。私は貴公より三歳も若い。間違えないで欲しいっちゅうねん」

「……おい。なんだ、その自信ありげな顔。何に自信持ってんだ？　言っとくが、おもしろくねえからな。反へ吐どが出るほどクソつまらねえぞ」

「貴公はセンスがない」

「どっちがだよ……」

「どっちもどっちですね」と、〝サー・ピーター〟ロイ・チャーチルが、涼すずしい顔で口を挟はさんできた。無む駄だに顔がよくて、体つきもすらりとしていて、金持ちのボンボンみたいな服装もよく似合っている。本当に嫌いや味みな野郎だ。

まあ、チャーチル家といえば、ゲヘナ騎士団の一等騎士だけでなく、司教も何人か輩はい出しゆつしてきた名家らしい。実際、育ちがいいのだ。そういう人種に特有の、ごく自然に他人を見下しているような部分が、この男にはたしかにある。誰だれも彼もを欺あざむき、騙だまくらかして、おのれの快楽のためだけに生きてきたヘンリーに言われたくはないだろうが、こいつは信用できねえ。心底から信しん頼らいしたら馬ば鹿かを見る。どこかでその思いはぬぐえない。俺は嘘うそつきだが、友人に一番期待するのは誠実さってやつでな。何しろ、正直な人間ってのは、御ぎよしやすくていい。

「失礼しました」

そう笑え顔がおで謝ってみせながら、すぐに掌てのひらを返すような男は扱あつかいづらくてかなわねえよ。

「──つい本音をもらしてしまいました」

「ふん。まあ、無理に嘘をつくよりはマシなんじゃねえのか」

「そうですね。実直さは、罪ある者として最低限持ちあわせねばならない品性だと思います」

「同感だな」

「意見があって嬉うれしいですよ、サー・アンドリュー」

「そうかい。俺もな、ロイ、お前と意気投合できるなんざ、夢にも思ってなかったから、涙なみだが出るくらい嬉しいね」

「今後もかくありたいものです」

「まったくだ」

「ところで、サー・アンドリュー、ようやく何も言わなくても私のことをロイと呼んでくださるようになりましたね」

「親しみをこめて、な。なんなら、俺のこともヘンリー呼ばわりしたっていいんだぞ」

「やめておきましょう。あなたが私に向けてくださっているほどの親しみをこめられる自信はありませんから」

「そいつは残念だ。調子に乗って気安く俺の名なんぞ呼びやがったら、ぶっ殺してやろうと思ってたんだがな」

「ええ。そうだろうと予想していたこともあって、やめておいたのです。ヘンリー・ブラックモア、今、あなたを失うのは、サー・ジューダスの〝裁き〟にとってマイナスですしね」

「ロイ、お前まだ生意気盛りの二十九だろ。何かを手に入れるためには、リスクチャレンジってやつが必要だ。俺みてえなオッサンじゃねえんだから、失うことなんか恐おそれるなよ」

「こどものころから、老成しているとよく言われました」

「さぞかしかわいげのねえこどもだったんだろうな」

「そうですね。男性には必ずしも好意を持たれていなかったように記き憶おくしています。女性にはもてはやされてきましたが」

「はぁぁぁん。そいつはうらやましいねぇぇ～」

　ヘンリーは大おお袈げ裟さに肩かたをすくめてみせ、ロイが何か言う前に、波止場に背を向けて少し歩いた。いい眺ながめだ。昨夜、サー・ジューダスの指示で〝罪そのもの〟が焼き払はらった名人街は、日暮れに沈しずんで、滅ほろびの気配をいっそう色いろ濃こくしている。やがて、この光景がどんどん広がってゆき、この街を覆おおいつくして、この国をのみこむだろう。それが他ほかの誰でもない、自分の━血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの手によってなされるのだ。そう考えただけで、ゾクゾクする。何より、この先に待ち受けているだろう困難の数々に思いをいたすと、頭が割れそうなくらい楽しくてしょうがないのだ。

　そんな何もかも簡単にうまくいくはずがねえからな。

　パンカロ・ファミリー。やつらもなかなかに気合いの入った連中だった。

　これからも出てくるだろう。行く手に立ちふさがる、敵、敵、敵。一昨日の夜も、何ものかがゲヘナ聖堂に侵しん入にゅうした。そいつはサー・ジューダスに勘かんづかれ、ロイらに追つい跡せきされたのだが、まんまと逃にげおおせた。噂うわさでは、腕うで自じ慢まんのロイが、そいつにはまったく歯が立たなかったというから痛快だ。強いやつってのはいるもんだ。殺されてもいいなんてマゾみたいなことは言わないが、いっぺん手合わせしてみたい。全力で、おのれのすべてを出しきって、どんな手を使ってでも、そいつを殺してやりたい。

　行き当たりばったりに近いこの遊びは、まだ始まったばかりだ。お楽しみはこれからだ。脱だつ落らく者しゃはせいぜい残念がれ。いくら悔くやしがっても、お前らのゲームはもうおしまいだ。自分の力とツキのなさを恨うらむがいい。俺はお前らが楽しみそこねたぶんも、しっかり楽しんでやる。

　ヘンリーたちは、そのための新しい玩おも具ちゃを迎むかえにきたのだ。

　旧埠ふ頭とうに船がくる。

　四隻せきの船団だ。

　船型は一様ではない。ずんぐりしたカラックに、細長いガレオン、それからもっと小さな船もある。いずれにしても、商船風の外観ではない。古くさくて、かなり傷いたんでいるものの、間違いなく戦用の船だろう。それも、軍用船じゃない。見るからに、海かい賊ぞくの船だ。名人街があんなザマになっていなければ、もしかしたら、ちょっとした騒さわぎになっていたかもしれない。そう──ちょうど、しばらく前、鎧よろい兜かぶとに身を固めた兵士と馬を満まん載さいしたおんぼろ船団が入港したときと同じように。

「イオネア・ブラントロウ、か……」

　ヘンリーは縮れた髪かみの毛を引っかきまわしながら、一つ息をついた。

　昨日のことだった。あの女の使いが、ジェードリ入りを伝えるた

め、ゲヘナ聖堂にたどりついた。パンカロ・ファミリーとの抗こう争そうで予想以上に損そん耗もうした兵隊を、どう補ほ充じゆうしたものか。ヘンリーとリリアンが中年面づらを突つきあわせて頭を悩なやませていた、まさにそのときだった。

　できすぎている。だが、〝サー・ジューダス〟アロンズ・ニードルスピア、あの男につきあっていると、こんなことはしょっちゅうだ。驚おどろくに値あたいしない。だからこそ、不信心なヘンリーでさえ、思わずにはいられないのだ。

　あの男は、神かみ懸がかっている。

　ひょっとしたら、地じ獄ごくのようなトーロク山さん岳がく戦で俺があの男の副官になったのも、敵のまっただなかで孤こ立りつしていたリリアンを救う羽目になったのも、ぜんぶロシュの思おぼし召めしってやつなのか。だとしたら、あの男が人間離ばなれした小山みたいな体格の向こうデア見ずデビルを拾ったのもそうか。〝罪そのもの〟が氷結牢獄コキユートスに繫つながれていたのも、タイミングがよすぎた。ついでに、悪名高い海賊〝鯱の団キラーホエールズ〟首領の娘むすめ、イオネア・ブラントロウも投とう獄ごくされていた。

　そして、あの男は〝罪そのもの〟の力で大聖堂を壊かい滅めつさせ、みずから申しでて別行動をとったイオネア・ブラントロウが、今、海賊の残党や篤とく信しん者しやたちを率いて、手負いの血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツに合流しようとしている──。

「声が聞こえる、ねぇ……」

　あの男の口くち癖ぐせだ。その声とやらを根こん拠きょに、何にも動じず、揺ゆらがず、自信たっぷりというよりは泰たい然ぜん自じ若じやくとして事を行うあの男が、一昨日あたりから様子がおかしい。それは、だが、もう十年近くあの男を観察しているヘンリーだからこそ感じる、ほんのちょっとした違ちがいかもしれない。ヘンリーも、どこがどうおかしいと、はっきり言い表すことはできないほどの、微び妙みような──動どう揺よう、ではない。あれは、たとえば、ずっと母親だの乳う母ばだのに守られて、なんでも叶かなえてもらっていた餓が鬼きが、生まれて初めて自分の思うようにならない物事にぶつかった、みたいな──戸と惑まどい？　苛いら立だち？　まさか、あの男が……？

「馬ば鹿か馬鹿しいな」

　ヘンリーは鼻先で笑ってしゃがみ、チッチッと舌を鳴らした。猫ねこだ。灰色の猫が、ちょっと離はなれた場所からこっちをうかがっている。赤い首輪をしているので、飼かい猫かもしれない。なかなか近づいてこようとしないが、逃げる様子もないところを見ると、警けい戒かいしつつも、こっちに興味があるのか。

「べつにとって食いはしねえよ。お前、まずそうだしな。──冗じょう談だんだよ。いくらうまそうでも猫なんざ食ったりしねえって。よほど腹がへってなけりゃあな」

　そんなことを言いながら手をさしむけ、人差し指と親指をこすりあわせて音を立てていると、ようやく猫がそろりそろりと近寄ってきた。

「よし、いい子だ。大だい丈じよう夫ぶだよ。心配すんなって。においか？　好きなだけ嗅かげよ。俺は悪いやつじゃねえ。わかるだろ？　と、油断させといて──」

　つかまえてやった。首根っこだ。猫は抵てい抗こうしなかった。そのまま持ちあげて、ヘンリーが立ちあがっても、暴れずにおとなしくぶら下がっている。

「さあて。煮にて食うか、焼いて食うか。猫はどっちがうまいんだ？　嘘うそだよ。だから、食わねえって。つーかな。お前さん、ちょっとは鳴けよ。やばいとか思え。それとも、悟さとりきってんのか？」

　まるで、違う、と抗こう議ぎするかのように、顔をゆがめて猫が鳴いた。みゃー。

「そうかそうか。わかったよ。逆らわねえんじゃなくて、逆らえねえ。そうだろ？　つかまえ方にコツがあるんだよな、猫は。ちょっとからかっただけだ。そう怒おこるなって。ほらよ、放してやる」

　ヘンリーは猫を放ほうり投げた。空中で一回転して着地を決めた猫は、しかし、逃にげださずに、また少し離れたところでこっちを見ている。妙なやつだ。そんなに俺が気に入ったのか。さっぱり嬉うれしかねえな。女にもてるならまだしも、猫じゃあな。

「こう見えて、いつまでもお前にかまってるほど暇ひまじゃねえん

だよ。悪いな」

　手を振ふりながら振り向くと、すでに先頭のガレオン船が桟さん橋ばしに横づけして係留し、甲かん板ぱんから板を渡わたして下船や荷下ろしの作業が始まっていた。リリアンとロイの後ろ姿も、船のそばにある。なんだよ、俺を置いていきやがって。一声かけて行けばいいものを。そう思いながら鼻の下を指でこすって歩きだしたら、何やら気配を感じる。ヘンリーはちらりと後ろを見た。あの灰色の猫だ。ついてくる。

「物好きなやつだな」

　にゃー。

「海賊どもにとっつかまって、燻くん製せいか何かにされて食われちまってもしらねえぞ。連中は俺みたいに上品じゃねえからな。いや、あいつらは鼠ねずみ退治のために船で猫を飼ったりするんだったか。意外とかわいがられるかもな。まあ、好きにしろよ」

　どうやら好きにするつもりのようだ。ヘンリーはもう気にしないことにして、コートのポケットに手を突っこみ、口笛を吹ふきながら桟橋へと向かった。視線の先で、忙いそがしく立ち働いている男たちをよそに、リリアンやロイと何やら話しこんでいる女は、イオネア・ブラントロウだろう。父親は、北の海を荒あらしまわった海かい賊ぞく〝鯱の団キラーホエールズ〟首領ベン・ヘブラスカ・ブラントロウ。その一人ひとり娘むすめのイオネアは、豪ごう奢しゃな金きん髪ぱつを振り乱みだし、海のような青い目で獲え物ものを狙ねらう若く猛たけ々だけしい女海賊で、父親の右みぎ腕うでだった。我が儘ままで、傲ごう慢まんで、性格はきつかったが、頭がよく、とにかく美人だったこともあって、そのカリスマ性は父をしのいでいたともいう。

　だが、〝鯱の団キラーホエールズ〟は、モトローリィ海軍とゲヘナ騎士団の共同作戦によって、事実上、壊滅した。〝大いビッグ・なる鯱キラーホエール〟の異名をとったベン・ヘブラスカ・ブラントロウは壮そう絶ぜつな討ち死にを遂とげ、イオネアは生いけ捕どりにされた。大聖堂で裁判を受けたイオネアは、「罪ある者のさらなる有罪」の判決を言い渡され、氷結牢獄コキュートスで頭のいかれたサディスト改心司教どもにもてあそばれる身となった。

「よう。一別以来ってやつだな」

　ヘンリーが声をかけると、イオネアは感心したくなるほど几き帳ちよう面めんに身体からだをこちらへ向けて、深々と頭を下げた。

「サー・アンドリュー、お久しぶりです。我が栄光ある血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ東騎士館長殿どのにふたたびお会いできて光栄です」

「よせよ、そんな堅かた苦くるしい挨あい拶さつは。だいたい、今回の功績が認められて、お前さんも北騎き士し館長様だ。そうすりゃあ、俺と同格だろ」

「──北、騎士……館長……？」

　イオネアが顔をあげて声を震ふるわせた。

　ヘンリーはリリアンを見た。

「なんだ、まだ言ってなかったのか」

「これから言おうとしていたところだ。貴公が邪じや魔まをした」

「うるせえよ。こういうのはな、早い者勝ちだろ？　とろくせえんだ、リリアン、お前さんは昔から」

「……わ、わたくしが……わたくしのような者が、北騎士館長……」

　イオネアは今にも泣きだしそうだ。演技しているとは思えない。父親に甘やかされ放題で育ったせいか、傲ごう岸がん不ふ遜そんで、財宝や男をむさぼり、略りやく奪だつと殺さつ戮りくを恣ほしいままにして、氷結牢獄コキュートスに叩たたきこまれる直前にも「貴様ら全員いつか必ずわたしの前に跪ひざまずかせて足の裏をなめさせてやる」と言い放ったという女海賊の、これが今の姿だ。

　ここまで人間を変えてしまう改心司教の技術は、まったくもって見事なものだが、連中はやりすぎた。

　何せ、かつては神なんぞ糞くそ食くらえと思っていただろう〝罪そのもの〟やイオネアが、ロシュに深く帰き依えするあまり、大聖堂の欺ぎ瞞まんに気づいて、サー・ジューダスに従う道を選んだのだ。そのせいで、大聖堂は焼かれ、改心司教どもも皆みな殺ごろしにされたのだから、本当に自じ業ごう自得としかいいようがない。

　まあ、ヘンリーとしては、彼女らをうまく利用することで、この遊びがもっと盛りあがるのなら、あとのことはどうでもいいのだが。

　もっとも、〝罪そのもの〟もイオネアも、以前はそうとう美人だったらしい。その顔を傷物にしやがったことについては、少々抗議したいところではある。

「……そんな……わたくしが北騎士館長だなんて……わたくしのごとき罪深い者に、そのような大役は……」

「罪は誰だれでも背負ってるものさ」

　ヘンリーは笑え顔がおを浮うかべてイオネアの肩かたをやさしく叩いてやった。リリアンとロイの視線が突つき刺さって頬ほおが痛い。なんだ？　何か言いたいことでもあんのか？　とは訊きけない。やつらはたぶん、「嘘うそつきヘンリー」の正体を知っているからだ。リリアンはつきあいが長いから。ロイはきっと勘かんで。もっとも、ヘンリーの二枚舌の有用性も理解しているだろうから、何も言うまい。おそらく。

「イオネア・ブラントロウ。我々とて罪を背負いし者たちだ。だが、罪があるからといって、ロシュの御ご意思のもとに地上でなすべき大切な仕事に背を向けていいものだろうか？　罪の苦しみに耐たえて、その重責を果たしてこそ、我々はロシュに寄り添そうことができる。その勇気を持つことこそが、本当の意味で罪を自覚し、罪から救われる道なんじゃないか？」

「……サー・アンドリュー……」

　涙なみだでぬれているのは、イオネアの顔の右半面だけだ。左半面は、改心司教どもの拷ごう問もんによって無残に焼けただれ、目も鼻も口も、もとの形を失っている。それを隠かくさずに、あえてさらしているのは、罪をあからさまにするためだとか、自分の罪から目をそらさないためだとか、たぶんそんな理由からだろう。

　改心司教の洗脳が、まだきいているのだ。自由と暴力をこよなく愛したという亡なき〝大いビッグ・なる鯱キラーホエール〟が今の娘むすめを見たら、それこそ泣いちまうだろうな。

　哀あわれな女だが、扱あつかいやすいし、伝令によると五百以上

の兵隊をかき集めて、ちゃんとジェードリまでたどりついてみせたのだから、決して無能じゃない。上手に使ってやれば、いい道具になるだろう。

「イオネア・ブラントロウ。いや、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ北騎士館長〝サー・バーソロミュー〟と呼ばせてもらおう。主たるロシュは、俺たちのことをちゃんと見てくださっている。これは、そのロシュの声を聞くことができるサー・ジューダスの判断だ。お前さんにならできるってな。サー・ジューダスが間ま違ちがいを犯おかすと思うか？」

「……いいえ……いいえ！　とんでもありません！　サー・ジューダスは、〝真のザ・預言リアル・者ワン〟は、いつも正しくあらせられます！　それはもう、疑う余地もなく！　絶対に！」

「そうだ。俺もそう思う。サー・フィリップ、サー・ピーター、お前さんたちも同感だろ？」

「むろん」と、サー・フィリップことリリアン・イヌテロは、おそらく内心で半分呆あきれながらも、一応、話をあわせてくれている。

「はい」サー・ピーターことロイ・チャーチルは、若いくせにヘンリー以上にタチが悪い。あの慈いつくしみに充みち満ちているようにしか見えない笑みはどうだ。いっそのこと、詐さ欺ぎ師しにでもなりやがれ。

「そらみろ、みんなこう言ってる。サー・ジューダスが誤った決定を下すはずがない。お前さんが、これから北騎士館長として我が血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツを支えることも──そうだな、ロシュの意思だと言っちまっても差し支えあるまい。だとしたら、やるしかねえだろ？」

「……ええ……ええ、そうですね！　サー・アンドリューのおっしゃるとおりです！　ありがとうございます、サー・アンドリュー！　あなた様のご助言がなければ、わたくしはまた罪を深めるところでした……！」

「いいんだよ、べつに。気にするなって。同志じゃねえか、なあ？」

「同志……！　ああ、そうですね！　まさしくそうです！　すばらしいことです！　わたくしのような下げ賤せんの者が、気高く勇ゆう敢かん無比の皆みな様さまとともに、志を同じくしてロシュの御おん為ためめに働くことができるなんて！　感激です……！」

　少女みたいに胸の前で両手を組みあわせて天を仰あおぐ姿が、なんとも滑こつ稽けいだった。ヘンリーは思わず苦く笑しようしそうになって、寸前でなんとかこらえた。

　まあ、この女には役に立ってもらわなけりゃならんしな。集めてきた兵隊が使いものになるのかどうか、そのあたりを見み極きわめる機会もすぐにやってくる。それにしても、まさかとは思うが、サー・ジューダス。あの野や郎ろう、少し焦あせってるんじゃねえのか。こんなにどんどん駒こまを進める必要があるのか。それとも、俺が戸と惑まどってるだけか。速い流れについていけてねえのか。

　ふと、ヘンリーの足に何かがふれた。

　見れば、あの赤い首輪をつけた灰色の猫ねこが、ヘンリーのズボンに背中をこすりつけていた。

「猫か」

　リリアンがそう呟つぶやくなり、猫をつかまえようと手をのばしたが、まんまと逃にげられた。へたくそめ、ざまあみろ──と、内心ほくそ笑んでいたら、金属音がして鳥とり肌はだが立った。

　抜ぬきやがった。ロイ・チャーチルだ。

　やつは、間違いなく、猫を斬きろうとして、腰こしにつるしていた鞘さやから片かた刃ばの剣けんを抜き放った。

「素す早ばやい猫ですね」

　間かん一いつ髪ぱつ、ロイの斬ざん撃げきから逃のがれた灰色の猫は、さすがに全速力で離はなれてゆく。おいおい。どんなリアクションすりゃいいんだ？　たとえば、お前さん、なんで薄うす笑わらいなんか浮かべてやがるんだとか訊けばいいのか？　まいるな。俺はこれでも常識人だからよ。まあ、こういうときは副団長様のサー・フィリップだな。リリアン、頼たのんだ。

「ともあれ、イオネア・ブラントロウ」

　──って、ロイと猫の件についてはスルーかよ。

「貴公にはこれから一度、ゲヘナ聖堂に入ってもらうが、すぐに別命が下り、〝計画〟のために尽じん力りよくしてもらうことになりそうだ。船旅で疲つかれてもいようが、むしろ罪の自覚とロシュへの忠誠を証あかし立てる好機と考えてもらいたい」

「すぐに……？　ああ！　すぐに、とおっしゃいましたか？　わたくしのような薄うす汚ぎたない元海かい賊ぞくに、こんなに早くロシュの御為に働かせていただける機会をお与あたえくださるなんて……！　疲れなど！　そのようなもの、仮にあったとしても、大いなる喜びの前に吹ふき飛んでしまうことでしょう！　微び力りよくながら、粉ふん骨こつ砕さい身しんさせていただきます……！」

「頼もしいことだ。貴公のごとき篤とく信しん者しやが多く集つどえば、〝計画〟が成る日もちかいぞ。く」

「……おい、なんだ、その最後の『く』は？　まさかそれでダジャレのつもりかよ？　だとしたら苦しいよな？　苦しすぎだろ。それなのに、なんで哀れむみたいな顔で俺を見てんだ？　あ？　なんだ、そのお話にならねえ、みたいな笑い方は。言っとくが、お話にならねえのは俺じゃなくて、リリアン、お前のほうだからな」

「つまり、ユーモアを解せん男には何を言っても無む駄だだということだろう」

「違うな。場が白けちまうだけだから、ユーモアのセンスがねえやつは、無理にシャレなんざ口にしようとするなってことだ」

「私にはあてはまらないので、無関係だな」

「俺はお前に向けて言ってんだよ。リリアン・イヌテロ、お前さんだけに」

「で、それが貴公の冗じよう談だんか。つまらんな。やはり、貴公はセンスがない」

「いずれにせよ、不毛ですね」

　人を小こ馬ば鹿かにしたようにロイ・チャーチルが言った。イオ

ネア・ブラントロウはきょとんとしている。彼女が率いてきた船団は、すでに全船、桟さん橋ばしに係留され、続々と人間と馬と積み荷を吐はきだしている最さ中なかだ。その後、船は廃はい棄きされる。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは──サー・ジューダスは、このジェードリを第二のゲヘナに決めたのだ。

　そして、ゲヘナは拡大する。

　自分自身や同志たちの生死は別としても、サー・ジューダスがどこまでやれるかという点について、ヘンリーはわりあい楽観的だった。何せ、俺たちには〝罪そのもの〟がいる。誰だれがあの化物を止められる？

　問題は、あの化物の存在があまりに決定的すぎて、いまいち緊きん迫ぱく感かんがないってことだ。

　まあ、俺にとっちゃあ、むしろそっちのほうが大問題だがな。

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区

〝サンブレイク・ホテル〟

chapter.10

わからないことだらけで

　なんでそこまでと訊ききたくなるくらい、目つきの鋭するどい男だ。

　よく見ると、右目が一ひと重え瞼まぶた、左目は二重瞼で、顔の右半面と左半面の印象がずいぶん違ちがう。かといって、どちらかは意外といい人っぽい顔だとか、そんなことはまったくない。両半面とも、冷れい酷こく無情な殺さつ人じん鬼きにありがちな顔つきだ。

　トマトクンや髭ひげほどではないが、背はかなり高い。白いシャツにグレーのネクタイをきっちり締しめて、タイトな黒いスーツを隙すきなく着こなしている。短く整えた金色の光こう沢たくを持つ栗くり色いろの髪かみの毛は、つかんだり引っぱったりしづらそうだ。実用性重視のヘアスタイルなのだろう。

　そんな男に、もう一分以上、腰を折った姿勢のままでいられると、なんだか逆に威い嚇かくされているような気分になる。

　それはマリアローズだけではないようだ。

　トマトクンも困こん惑わくしたように片方の眉まゆをつりあげて、唇くちびるをひん曲げている。

「……まあ、そろそろ頭を上げたらどうだ。俺たちは、べつにたいしたことはしちゃいない」

「いいえ。あなたがたには、チーロ坊ぼつちゃんを助けていただきました。受けたご恩には、身体からだを張ってでも報むくいる。それが親おや父じの流りゆう儀ぎでした。私たちにできることなら、なんなりとおっしゃってください」

「助けたといってもな。焼けた木材をどけたり、穴を掘ほったり、コンクリぶち壊こわしたりするのを手伝っただけだぞ」

「おかげで作業が早く終わりました。もっと時間がかかっていたら、その間に連中に嗅かぎつけられていたかもしれません。それに、お連れのお二方が、チーロ坊ちゃんを診みてくださっています。腕うでのいい方々のようで。これで意識が戻もどりでもしたら、二代目の命の恩人ということになります」

「うむ……」

　トマトクンは眉根をよせて顎あごを撫なでながら、ちらりと隣となりのマリアローズを見た──って、どうしてそこで僕を見るわけ？　もしかして、自分はもうめんどくさいから、僕が彼の相手をしろって……？

　冗談じゃないよ、と言うつもりで、マリアローズは窓に目をやったが、あいにくここは三階だ。しかも、カーテンが閉め切られている。バルモア地区の湾わん岸がん道路沿いでひときわ目立つサンブレイク・ホテルは、エルデンの高層寺院を彷ほう彿ふつさせる高くて立派な建物なのだが、三階からでは、カーテンを開けても夜景を拝むことはできないだろう。

　ちなみに、こういった宿しゆく泊はく施し設せつは、上階へ行けば上階へ行くほど、だいたい豪ごう華かで値段もお高いものだ。この部屋も、調度は上等だが、さして広くはない。ただ、二台のベッドが運びだされているせいで、妙みように広々としているように感じるし、最上階のスイートルームを利用していないのは、お金がもったいないから、ではないようだ。

「とりあえず──」トマトクンはあきらめたように一つ息をついた。「うちのユリカと髭が、二代目とやらの命の恩人になってやれるかどうかはこれからだ。お前……なんていったか、そうだ、カルト・ポッチだったか」

「カルロ・ボッシです」

「ああ、そうだったな。カルロ・ボッシ、いいかげん頭を上げろよ。話しにくくてかなわん」

「申し訳ありません。ですが、私たちはあなたがたに借りができた。そのことはゆめゆめお忘れにならないでください」

「わかった、わかった。そこまで言うなら、この貸しはいつか何かで返してもらうさ。それでよかろう」

「はい。ありがとうございます」

　カルロ・ボッシはさらに深々と頭を下げてから、ようやく上体を起こして向かいのソファに座った。

それにしても、なんだかおかしなことになりつつある。

あるいは、もうなってしまっている。

マリアローズはお尻しりをもぞもぞさせた。なんだか上質すぎて、座り心地がいいのか悪いのかよくわからないソファだ。いや、ソファのせいだけではないだろう。隣のトマトクンはとりわけ図太い神経の持ち主だから別としても、その隣のサフィニアはいかにも気づまりといったかんじで身をすくめているし、さらにその隣のカタリもやけに静かで、そのまた隣のピンパーネルにいたっては彫ちよう像ぞうのように微び動どうだにしない。まあ、むやみやたらとやかましい半魚人と違い、用がなければ黙だまっているのはピンパーネルの美点なのだが、この静せい寂じやくは異様だ。

なんとなく、ロム・フォウがいてくれたらと思う。いつも自然体の彼女がいれば、空気がやわらぎそうな気がする。

でも、残念ながらロム・フォウは、ホテルへの立ち入りを断られたアルファと一いつ緒しよに、今ごろどこかを散歩しているだろう。ユリカと髭も、別室でチーロ・パンカロの治ち療りようにあたっているため、ここにはいない。で、そのかわりに──といっても、かわりになんかなるはずもないが、向かいのソファにカルロ・ボッシが座っている。それだけでもいやなかんじなのに、彼の隣で自分の指をおいしそうに舐なめている太った男はなんなんだろう。いや、彼がパンカロ屋や敷しきの地下から救助された者のうちの一人で、その名もボボ・ファッチョといい、どうやらあれでもパンカロ・ファミリーの一員らしいことはわかっている。さっきまで、ルームサービスで頼たのんだピッツァやらホットドッグやらを一人でムシャムシャ食べていたから、彼の指はその味がするのかもしれない。それもわかるが、やっぱり変だ。彼の行動というか存在自体が、この状じよう況きようにまったくそぐわない。はっきりいって、見ているだけでちょっと不快だ。

それに、部屋の隅すみっこで所在なげに縮こまっている女の子は、いったい何者なのか。ボボ・ファッチョやチーロ・パンカロ、家政婦っぽいオバサンや医術士夫妻とともに、パンカロ屋敷の地下室に身をひそめていたようだが、どう見ても彼女は一いつ般ぱん人じんだ。まだ若そうだし。たぶん、マリアローズよりも年下だろう。

「事情が……」マリアローズはやや上うわ目め遣づかいでカルロ・

ボッシを見た。「知りたいんですけど。できるだけ、くわしく。聞く権利、ありますよね。僕らには」

　カルロ・ボッシはトマトクンをいちべつしてから、軽くうなずいた。

「私が把は握あくしていることであれば、お話しします。ただ、私もあなたがたのことをよく知らない。恩義には必ず報いますが、だからといって、あなたがたを信用しているわけじゃない」

「まあ、そりゃそうでしょうけど……べつに、僕らだって成り行きでこうなっただけで、信じてもらおうとか思ってないし」

「じゃあ、なぜウチの者に手を貸してくださったンです。ド・ジョーカーのお知り合いとのことだが、そのよしみですか」

「……僕はパス。あのとき『事と次し第だいによっては手伝うぞ』とか言ったの、トマトクンでしょ。はい、答えて」

「む？　俺か？」トマトクンは片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげ、うーむ、と低く唸うなった。「──そうだな。まあ、ジョーカーのこともあるが、この目で見ちまった以上、無視するわけにもいかんだろう」

「それだけ？」

「うむ」

「……ようするに、きみって基本的に結構お節せつ介かい焼きなんだよね」

「そうか？」

　トマトクンは意外そうな顔をしているが、考えてみるといい。マリアローズだって、鉄てつ鎖さの憩いこい場で鬼き畜ちく変態野や郎ろうに羽は交がい締じめにされていたところを救われた。ラハン大陸から泳ぎと徒歩でエルデンにたどりついたピンパーネルも、とうとう力つきて行き倒だおれ、死ぬ寸前に拾われたらしい。ユリカもトマトクン（と髭ひげ）に助けられたクチだ。サフィニアだって、大だい凶きよう運うんを祓はらうため、『炎ほのおをまといし聖なる断罪の剣けんを振ふるう破は天てん万ばん象しよう七星の一』とやらに会うべくエルデンにきてトマトクンを見つけ、さんざ

ん迷ったあげくに話しかけて事情を明かしたら、「だったら、うちに入るか」とあっさりＺＯＯ加盟をすすめられたのだという。

　とはいえ、そんなトマトクンのおかげで、今のマリアローズがあるわけだから、非難するわけにもゆかない。

　マリアローズはため息をついて頭をかいた。

「……というわけなんで。こっちとしては、そういう性しよう分ぶんなもんで、首突つっこんじゃったってかんじかな。疑うなら勝手に疑えばいいんじゃないですか？　時間の無む駄だだと思うけど」

「無駄かどうかは、あなたがたが決めることじゃない。今の私たちに加担するメリットがあるとは、どうしても思えないンでね」

「だから、加担なんかしてないって言ってるでしょ？　少なくとも、今のところ、敵でも味方でもないんだから。せいぜい善意の第三者ってところで」

「善意ですか。いい言葉だ」

　皮肉なのだろうか。カルロ・ボッシはあの怖こわい目つきのまま、表情も口調も一いつ切さい変えないので、真意が読みとれない。でも、なんだか癪しやくに障さわる言い方だ。

「善意って言葉が気にくわないなら、心意気とか俠おとこ気ぎとか任俠道とか漢おとこ道どうとか、適当に言い換かえてもいいですけど。てゆうか、もし善意じゃなくて悪意があるなら、なんで汗あせ水みず垂らして煤すすまみれになってまで会ったこともない人を助けたりするのか、説明してもらいたいですね」

「お前じぶん、力仕事はほとんどしてへんかったやん」

「うっさいな。人が真ま面じ目めに話してるんだから、水かけないでよ、腐くされ半魚。だいたい、人には向き不向きってものがあるの！　僕だって、ただ闇やみ雲くもに掘ほるんじゃなくてああしたほうがいいとかこうしたほうがいいとか、いろいろ考えたりしてたでしょ？　頭脳労働！　プリン脳のきみには絶対無理な貴重で重要で重大な役目！」

「誰だれの脳がプリンじゃボケェッ！　見たんかい！　わしのドタマかち割って脳みそ見て確かめたんかい、おお！」

「や、見てないけど。あ、ごめん、見もしないでそんなこと言うのはちょっとずるいよね。そうだ、じゃ、今から見てみようよ。それより、きみ、自分で確かめてみたら？　そうしたらプリン脳じゃないって証明できるかもしれないし」

「なるほどな。それもそうやな。ほな、いっちょわしの頭ず蓋がい骨こつまっぷたつに──って、確かめる前に死んでまうわ、アホ！」

「だから、死んじゃえばっていう意味で言ったんだけど、ようやく伝わった？」

「回りくどすぎや！」

「つまり、僕の頭脳がきみのよりずっと高度だってことだよね。比ひ較かく対象がアレすぎるから、ぜんぜんうれしくないけど……」

　話もずれちゃったし。

　マリアローズはカルロ・ボッシに向きなおって、一つ咳せき払ばらいをした。

「──とりあえず、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーが今どこにいるのか、知りませんか。あなたたちにそれを尋たずねようっていうのが、そもそも一番の目的だったんで」

「さあ」

　カルロ・ボッシは軽く首を振って目を伏ふせた。

　あれ、と思った。

　なんとなく、だけれど、この男、ジョーカーさんのことが好きじゃないみたいだ。

「申し訳ないが、お教えできることはありません。もともと、ド・ジョーカーは親おや父じの──エンツォ・パンカロの個人的な知ち己きです。ファミリーとはなんの関係もない。あの御ご仁じんが親父を弔とむらいもせず、私たちに何も告げずに、どこへ行ったのか。私の関知するところじゃない」

「そう……ですか」

　なんだか、いろいろな人から聞けば聞くだけ、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーに対するイメージが悪くなってゆく。どうしてそんな人がＺＯＯなわけ……？　マリアローズはちらりとトマトクンを見た。トマトクンはマリアローズの視線に気づいて「ん？」という顔をしたが、隣となりのサフィニアが少しずつ距きょ離りを縮めるべく、さっきからひそかに奮ふん闘とうしていることには頓とん着ちゃくしていない様子だ。がんばれ、サフィニア。ロム・フォウがいないうちに。そんなことやってる場合じゃないような気もするけど……。

「まあ、ジョーカーのことはひとまずいいんじゃないか」

　と、トマトクンが後ろ頭をかくために持ちあげた右手に身体からだがふれそうになって、サフィニアがビクッと飛びのいたりする姿はちょっとおもしろいので、いっか。

「あれはあれで何か考えがあって動いてるんだろうし、放ほうっておけばいいさ。もともと、他人をあてにするような男でもない。その必要があれば、なんでもかんでも勝手に利用して、どうにかしちまうのがやつのやり方だ」

「……どんな最低人間？　それ？」

「悪いやつじゃないんだがな。いいやつでもないが」

「どっちだよ……」

　不安になってきた。ジャン・ジャック・ド・ジョーカーのことだけじゃない。これから何が起こって、自分たちはどうするのか。
はっきりと見えない現状が、どうにも気持ち悪いのだ。

　このままでは、どこへ向かって進めばいいのかわからない。

　いっそのこと、早く方向を決めて欲しい。

　でも、そう感じるのと同時に、なぜかどこにも進みたくない。何かを選せん択たくしないといけないと考えると、どうも気乗りしない。ここにとどまっていたい。そのほうがいいような気がする。不意に、マリアローズは強く思った。帰りたい、と。

　エルデンに。

僕たちの街に、帰りたい。

あとになってから、何度も考えた。僕はあの思いに従うべきだったのかな？　どうしてもこの街から離はなれたいんだ、今すぐエルデンに戻もどりたいんだって、みんなに伝えるべきだったのかな……？　とりたてて理由もなく？　髭ひげの事情を無視して？　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの暴ぼう虐ぎゃくなんかどうでもいいし、関係ないし、と、何もかもきれいさっぱり忘れて？　──わからない。わからないんだ。本当にわからない。原因はたくさんある。どれもこれもが結果に繋つながっている。でも、どの選択が間ま違ちがいだったかなんて、正確にはわからない。少なくとも、あの時点ではわからなかった。僕は何もわかってなかった。言い訳じゃない。わかるはずがないんだ。そんなこと、わかるはず、ない。ただ、僕がそう思いたいだけかもしれないけれど。

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・赤線地区
〝ゾルメイラム墓地〟

chapter.II

君に捧げる詩

お父様。お恨うらみ申しあげたこともありました。

寝しん台だいに横たわるお父様が、少しずつ凍こおりついてゆき、朽くちることもなく、静かに、安らかに、ご自分だけ安らかにおやすみになられているお姿を、わたくしはただ見つめていたのです。見つめていることしかできなかったのです。

何年も。

何十年も。

何百年も。

いつか時がついえるまで。

ねえ、お父様。

お父様は、わたくしをそのために、そんなことのために、おつくりになったのですか？

お一人で永い夢を見ていらっしゃるお父様を、ひたすら見守るために。

わたくしは、お父様の最後の娘むすめは、凍いてつく森のローク・ララウィー城で、ひとりぼっちの墓守でした。身動きをとることもできず、一人でした。北の果ての氷に閉ざされた海の底のように、一人きりでした。この方がわたくしを見つけてくださった、あのときまでは。

「クローディア、酒をよこせ」

「はい、主様マスター」

クローディアは、左手に提さげているバスケットの中から、マルロッサの瓶びんをとりだした。マルロッサはカレーナの酒で、果実酒に数種の果か汁じゆうや香こう草そうと砂糖を加えたものだ。酸味も若じやつ干かんあるが、とにかく甘い。カレーナでは、大人はストレートかロックで、こどもは水や炭酸水で割って飲むという。酒というより、喉のどの渇かわきを潤うるおすための一いつ般ぱん的な飲み物だ。少なくとも、彼女にとってただ一人の主あるじであ

る男の好みではない。

　男は酒を愛する。

　香かおりが強く、酒精の成分が多い酒を。

　独特の風味があれば、それに越こしたことはない。

「三つ子の魂たましいというやつだよ」と言って、マルロッサの深い甘みをひそかにめでていた年上の友を、いつか男は嘲あざ笑わらった。「五感はおのが意思と行こう為いによって躾しつけ、はぐくみ、豊かにし、研とぎ澄すませるものだ。ことに味覚はな。歯の抜ぬけた老人が、駄だ菓が子しにむしゃぶりつく姿を思い浮うかべてみろ。みじめだろうが。仮にそうしたくとも、堅けん忍にん不ふ抜ばつの精神で自身の全的向上を志すのが、理性と良識ある成熟した人というものだ」

　友は憤ふん然ぜんとして、「たかが飲み物の嗜し好こうのことで、そこまで言われる筋合いはない」とマルロッサをさらに一いつ杯ぱい。「うまいものはうまいのだ。たとえ喉のど元もとに刃やいばを突つき立てられようと、うまいものをまずいとは言えん。私はあんたと違って、根っからの正直者なのだ。愛と同じだよ、ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。女によう房ぼうにも、出会ってすぐ結けつ婚こんを申しこんだ。理り屈くつも何もない。私には生しよう涯がいこの女以外いないと思った。この女だけが私にとっては女なのだと。それを隠かくしとおせるものではない。何より私は、私自身を偽いつわれん」

　そう。

　男は、わたくしのただ一人の主様マスターは、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーは、正直者とはとうてい言えない。その青みがかって黒く昏くらい、それでいてぎらぎらと激しく輝かがやく瞳ひとみの奥に、何を隠しているのか、主様マスターは誰だれにも明かそうとしない。

　主様マスターをへそ曲がりだとそしる人がいる。陰いん謀ぼう家と見なす人もいる。単純に腹黒い悪人だと思う人もいるだろう。主様マスターは、そのいずれも否定しない。誰に何を言われようと、ご自身の生き方を変えることはない。気まぐれのように見えて、ご自身の求める何かを、ひたすら求めつづけている。飽あくことな

く。どれだけの回り道を強しいられようとも。たとえ目をふさがれ両手両足を奪うばわれても。何度絶望しても。断だん崖がいから突き落とされても。

　主様マスターのご友人がたは、おそらくそのひたむきさを、純じゅん粋すいさを理解していらっしゃる。

　主様マスターも、ご自分と似た何かを思ってらっしゃる方を、「友」と呼ぶ。

　面と向かっては言わないかもしれないが、「友」として遇ぐうする。

　エンツォ・パンカロ。彼は、まぎれもなく主様マスターの「友」だった。

　主様マスターがクローディアの手からマルロッサの瓶を奪うようにとりあげた。

「貴様の好きな酒を持ってきてやったぞ。こんなものを酒と呼ぶべきか否いなかについては、なお議論の余地があるだろうがな。貴様のような極きわめつきの悪相で白しら髪が頭あたまの馬ば鹿か正直な愚おろか者が最後に飲むには相応ふさわしかろう。せいぜい感謝するがいい」

　応こたえるように、夜風が吹ふき抜けていった。

　ジェードリのほぼ全体を見下ろせる、城じよう壁へきを背にした丘おかの上だ。

　風は、時折、強い。

「マルロッサでも、高級な銘めい柄がらのものではなく、安物がいいなどと貴様はのたまっていたな。舌がべとつくほどに、品がないくらいに甘い、やや濁にごりのある、安いマルロッサが。貴様の望みどおりのものをわざわざ選んできた。ベルッチオ・サンドレのレッドレーベル。ジェードリで手に入るマルロッサの中では、これより下はない。最下級だ。見ろ。蓋ふたもコルクではない。粗そ末まつな口金だ」

　主様マスターは、瓶に蓋をしている口金に親指をあてがい、造作もなく開けてしまった。すかさずクローディアがバスケットの中か

らグラスを二つとりだして、さしだした。

「一つでいい。己おれがこんなまずい酒を飲むと思うか。馬鹿者め」

「申し訳ありません」

「己おれはいらん」

　呟つぶやくようにそう言って、グラスを一つだけ手にとった主様マスターの目の前には、木製の墓標が立っている。

　それは、細長い板を組みあわせただけの簡素なもので、見るからに間に合わせだ。

　近いうちに、その墓標の隣となりに寄り添そっている白い墓石とそろいのものが用意されるだろう。

　決して派手ではなく、このソルメイラム墓地に並ぶ他ほかの墓石と比べても、とくに大きくもない、ただ、数百年の風雨にも耐たえうる上質の墓ぼ碑ひが。

　そして、もはや永遠にわかたれることのない夫婦の脇わきに、息むす子こたちが眠ねむるのだろう。

　すでに、長男の墓標が右に、次男の墓標が左に立てられている。

「──しかし、貴様も、親不孝な息子を持って幸せなことだな」

　主様マスターがマルロッサをグラスにつぎながら、低く笑った。

「どいつもこいつも、結局は貴様似だ。あの麗うるわしい奥方とは似ても似つかん。だが、喜ぶがいい。一人生き残ったぞ。貴様らが守ろうとした末っ子だ。図ずう体たいばかりでかくて頭の足りないあの戯たわけに、それだけの価値があるものかどうか。己おれはかなり懐かい疑ぎ的だがな」

　死者たちの囁ささやきさえ聞こえない闇やみの中、主様マスターはしばらくの間、マルロッサで満たされたグラスを見つめていた。

　不意に、口をつけた。

自分はいらないとおっしゃったくせに。

傾かたむけて、一息で飲み干した。

「まずい」と言いながらも、ふたたびそそいだ。「ひどい味だな。貴様の顔がすこぶる悪いわけがようやくわかったぞ。餓が鬼きの時分からこんなものを飲んでいたら、顔もゆがもうというものだ」

二杯はい目は墓標の前に置いた。

主様マスターは夜空を仰あおいだ。

「──君よYo.。

旅立ちにAl　Memoer　wu際して、Talu,君よyo.。

死の振るAl　舞いにnapre恐れdiyanbscetおののくこと　Widoeなかりしsi　ことをCexalyrour.。

君は言うYo　Alor.。

死はWidoeあらゆる　loe終着Widoe　siである　Sylxerra.。

死はWidoe　loe世界を　Jyzerra断ち切るMorto斧である Malur.。

死はWidoe生の　loe果てに　axi待ちOcnoer　受けるlagaciyoque最大のRendsi　陥穽であるAdraTalur.。

死はWidoe逃れる　loeことのjexi　叶わぬOcnoer最悪のyo noa　罠であるfia　Dedarue.。

余はMo　罠にMouis　かかりOcnoer旅路dan　Memoerにつくdu死神のloe　獲物でVictoe　あるsi　Wigdore.。

君よ、Yo,　だが、lasst,死のAl　振るnapre舞いに　diyan恐れdiyanbscetおののくこと　Widoeなかりしsi　ことをCexalyrour.。

生あるAdemor　Edam者はwyroeおのがLamun　noために　no生きて、Adra　Via死者はsor　生者のman　うちでdan生者がnoために　no生くるがWidoe定めと知れ　Via.。

こたびYo　死したWidoe君よ、　etol,君はyo　死してWidoeな

お　lasst余のVia　うちにてan　生き存え、Man,余Mo　とてsalue　いずれ　li君のあとTarciを追う　yo.。

　君よ、Yo,　旅立ちにAlMemoerwu際して、Talur,君よ、　yo,余はMo　君をnoa　弔わず、Cydoe　dan死してacue　生くるEno君を　yo思うWidoeのみと　cel　せんViaah.」

　クローディアのただ一人の主様マスターは、共通語はもちろん、上古ハイ高位語ハイロメオンから派生した各地の地方言語だけでなく、すでに話す者とていない古き言語も多く解する。そのなかでもっとも愛している言語は、暗黒大陸の〝神聖なるAlune暗黒のwiz言葉　Yew〟だ。主様マスターはかの大陸の詩しい歌かを千単位で諳そらんじているが、この詩はめったに詠うたわない。クローディアは主様マスターの背中を見つめている。お父様につくっていただいたこの目は、闇を見通し、激げき烈れつな陽光に灼やかれることもない。お父様は亡くなられる前に「娘むすめよ。私にとって最後の娘よ。おまえが望めばなんでも見ることができる。どんな歌をも聴きくことができる。おまえの両手はなんでもつかむことができる」とおっしゃった。けれども、わたくしが見ていたいのはただ一人だけ。主様マスター。あなたのことだけ。わたくしが聞きたいのはあなたの声だけ。わたくしの心を揺ゆらがせるのは、あなたが感じる痛みだけ。わたくしはあなただけのもの。お父様の最後の娘、わたくしはあなただけのマイネイヒ。

　だから、わたくしは泣いているのです。

　主様マスターのかわりに泣くのです。

「クローディア」

「はい」

「死は、ごく一部の不届き者をのぞいて、ほぼ万人に等しく訪おとずれる。それは摂せつ理りであり、真理だ。違ちがうか」

「違いません」

「貴様が死ぬとき、己おれも死ぬ。己おれが死ねば、貴様も死ぬ」

「はい」

「いのちは、始まり終わるからこそ美しいのだ」

「はい」

「ゆえに、己おれは憎にくむ。その理ことわりから外れる者がいるのなら、必ずやその秘密をあばきだしてやる。己おれは会ったのだ。Ｍ．Ｔ．Ｄ．の深奥聖堂ザ・デプス・オブ・デプスで、太古より生きる人じん竜りゆうレインドゥラス・ヴィシュクラトーと。かつては人であり、竜と化して不死をえたやつは、雄おゝおしく戦い散った同どう胞ほうの竜どもを悼いたみ、糞くそ生意気なことに、我ら定命の人を不ふ憫びんがってみせた。あのような者の傲ごう慢まんを己おれは赦ゆるさん。愚おろかだろうが、くだらなかろうが、はかなかろうが、みずからの選せん択たくで死にゆく者どもには誇ほこりがある。それを、高みに立ったつもりで哀あわれみ穢けがす下げ劣れつな阿あ呆ほうを、己おれは認めん。たとえ、それが神だろうと、だ」

　主様マスターはマルロッサの瓶びんを墓標のそばに置いて、ジェードリの街をひと眺ながめした。クローディアはすでに見てとっていた。遥はるか遠くに動きがある。風がざわめいている。また始まろうとしている。そして、いつか終わる。すべては終わらなければならない。それは悲しいことではない。つらくもない。わたくしは主様マスターと一いつ緒しよに生きて、死ぬ。何も怖こわくない。そこには喜びしか存在しない。お父様。わたくしをつくってくださって、ありがとうございます。

「往ゆくぞ、クローディア」

「はい、主様マスター」

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区

“サンブレイク・ホテル前”

chapter.12

僕があまりに無邪気だったとして

　やっぱり、あのカルロ・ボッシという男とは馬が合いそうもない。愛想がなくて、つっけんどんで、人相が悪いのはまだしも、人間的に隙すきとか余よ裕ゆうとか可愛かわいげとかがなさすぎて、同じ部屋にいると息苦しくてかなわないのだ。

　まあ、頭は目つきほど悪くないらしく、話は誤解しようがないくらい簡潔明めい瞭りようで、かなり理解しやすかった。おかげで、パンカロ・ファミリーと血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが正面衝しよう突とつするにいたった経けい緯いとか、連中の戦力とか、実際に戦ってみた感かん触しよくとか、有益な情報を短時間でたくさん入手できた。でも、そのあたりのことを一通り喋しやべり終えた途と端たん、カルロ・ボッシはむっつりと黙だまりこんでしまった。こっちの意向を尋たずねるとか、場を繋つなぐとか、なごやかなムードを作るとか、そうした考えはあまりないようだった。いや、一いつ切さいないとしか思えなかった。人間っていう社会的な動物の一個体として、それってどうなの？　それとも、もしかして、嫌いやがらせ？　話せることは話したから、もうさっさと出てけってこと？

　そっちがそういう態度なら──と言いたいところだったが、ユリカと髭ひげがチーロ・パンカロの治ち療りよう中で、そんなわけにもゆかない。トマトクンや、その隣となりにいられるだけで他ほかには何もいらないかんじのサフィニア、それにピンパーネルは平気そうだったけれど、マリアローズとしては我が慢まんしきれなかった。カタリも沈ちん黙もくに耐たえきれず、暴発寸前だった。それで、一応、トマトクンに断ってホテルの外に出て、ロム・フォウとアルファでも捜さがそうと思ったのだが。

「おお！　屋台やないか！　屋台がありよるで！」

「……ほんとだ」

　たしか、きたときはなかったはずだ。それにしても、おそらくジェードリで一番立派で値段も高いサンブレイク・ホテルの絢けん爛らん豪ごう華かな玄げん関かんの真ん前に、屋台なんて。場ば違ちがいもいいところだが、そんなことより、この屋台、ずいぶんでっかい。間口は五メーテルくらい、奥行きは七、八メーテルほどもあるだろうか。派手にライトアップされた店内には、さまざまな商品が所ところ狭せましと陳ちん列れつされていて、掲かかげられ

た看板には、白地に黒字で「安値品しな揃ぞろえ世界一！　出張販はん売ばい高価買取！　土産みやげ上等！　㊥商店」と大書してある。なかなかに豪ごう快かいな達筆だ。

「マルナカ商店……って読むのかな、あれ」

「せやろな。のぞいてみよか？」

「いいよ。きみがなんかおごってくれるなら」

「なんでわしがお前じぶんにおごらなあかんねん」

「きみのお金は僕のお金。僕のお金は当然僕のお金」

「どないな理り屈くつやっ！」

「生きとし生けるものは、みんないつか死んじゃうでしょ。それと同じだよ」

「アホか。明らかに同じちゃうやろ」カタリは呆あきれたようにそう言いながらも、首筋を掻かきつつ考えこむ仕草をした。「──ええで」

「へ……？」

「なんか買こうたるわ。せやけどな、安いもんやで。予算無制限っちゅうたら、お前じぶん、むちゃくちゃなもん買わせよるやろ」

「それはもちろん──って、でも、なんで？」

「なんでて。マリアローズ、お前じぶんがおごれゆうたんやないか」

「そうだけどさ」

「わしはもともと気前のええ、よすぎるほどの漢おとこやで？」

「そりゃ、まあ……ケチ、ではないよね、必ずしも」

「あたりまえやん。腐くさっても鯛たいっちゅうやッつや。わしを誰だれや思とるん。こう見えても、元王子様やで。プリンスや、プリンス、プリィィーンスッ！　殿でん下かやっちゅうねん！」

「ほんっと、ぜんっぜん見えないけどねー」

「やかましいわ。ほれ、行くで」

　カタリに背中を押されて屋台に近づいてゆくと、いいにおいがぷうんと漂ただよってきた。どうやら、マルナカ商店では食べ物も販売しているらしい。そういえば、結構おなかがすいている。でも、せっかくカタリが日ひ頃ごろの半魚人ぶりを悔くいあらためて何か買ってくれるっていうんだから、食べ物程度ですませては損だ。じゃなくて、もったいない。ではなく、カタリに悪い。その心意気に遠えん慮りよなんかするほうが失礼だ。もっともっと高いもの。カタリが悲鳴をあげながらも、ギリギリ出せるくらいの高価なものがいい。

　俄が然ぜん、気合いが入ってきた。マリアローズは鼻息を荒あらくして、マルナカ商店のノレンをくぐった。「あー。いらっしゃいまテー」と振ふり向いたのは、奥の陳ちん列れつ棚だなの前で商品にハタキをかけていたらしい、人間だかなんだかよくわからない生物だった。

「この店で一番高いもの！　何！　出して！　大至急！」

「いきなりそれかい！」

「はー。高いものでトゥかー」

「てゆうか……」

　マリアローズは組みついてきたカタリを引き剝はがしながら、ハタキを手に持って首を傾かしげている生物をまじまじと見た。

　そいつは、黄色い。毛むくじゃらで、全身に黒い縞しま模も様ようがある。二本足で立っていて、手も二本あり、青いオーバーオールを着て、白いエプロンをつけているとはいえ、どうも人間ではないような気がする。いや、待て。なんか、ネコ科の獰どう猛もうな獣けものっぽい動物の顔をかわいくデフォルメしたような、大きすぎるあの頭部。よく見ると━そんなによく見なくても、変だ。あまり鋭するどくない牙きばが並ぶ開きっぱなしの口の中に、何かが見える。

　人の顔っぽい。

「なんで着ぐるみ？」

「──ち、違ちがいまトゥ！」着ぐるみは今にも泣きだしそうな声で否定しつつ、マリアローズに背を向けた。「違いまトゥ！　わたーティは、あの有名ィーな伝説の獣人トラービトの生き残りの末まつ裔えいなんでトゥ。ちりぢりになったトラービトを捜すために、商売しながら世界中を旅してるんでトゥ。わたーティの名前はマルナカでトゥ！」

「な、な、な、なんやてェェッ！　太古の昔に滅ほろんだっちゅう、あの幻まぼろしの獣人トラービトの、お前じぶんが生き残りなんかァァッ……！」

「や、あからさまに違うでしょ？　ほら、首の後ろから背中のとこ、チャックついてるし」

「ん。せやな。よう考えたら、トラービトとか聞いたことあらへんし」

「ち、ち、違いまトゥ！」マルナカは首の後ろを押さえようとしたが、手が届いていない。着ぐるみを身につけたままでは、身体からだの動きが制限されてしまい、無理のようだ。「こ、これはスイッチなんでトゥ。我々トラービトが人間の姿に変身するためのスイッチなんでトゥ！」

「じゃ、やってみせてよ、変身」

「やややややらいでか！」

　マルナカはそう言うなり、ハタキを床ゆかに置いて、両手を背中のチャックにのばそうとした。けれど、どうしても届かない。いくら頑がん張ばっても届きそうにない。

　仕方ないので、マリアローズはカタリと目配せしあい、マルナカを手伝ってやることにした。マリアローズがエプロンの紐ひもをほどいて、カタリがオーバーオールを脱ぬがし、それからマリアローズがチャックを下ろせば、あとはマルナカが自力でなんとかした。中身が裸はだかだったらイヤすぎるので、ちょっとドキドキしたけれど、よかった。変身（？）後のマルナカは、ちゃんと服を着ていた。

　灰色のトレーナーと、青いオーバーオールを。

　よくわからないが、ずいぶんとまあ、オーバーオールが好きらしい。

「あ、ありがとうございまトゥ、としか、今は言えないでトゥ……」

「はい、どういたしまして。でも、まだ頭のかぶり物が」

「こ、これはダメでトゥ。我々トラービトの誇ほこりなのでトゥ。というか、かぶり物なんかじゃないんでトゥ！」

「いいけどさ……」

「よくないでトゥ！　ぜんぜんよくないでトゥ！　わかった！　わかったよ！　ハイハイわかりました！　そこまで言うなら見せてやるよ！　俺様の本当の姿ってヤツをよう！」

「口調変わってるし」

「うるせえ！　黙だあって見てろ！　トラービトォォッ！　チェーンジ！　フォーム！　ヒューマンスタァァァイルッ！　ワンッ！　トゥッ！　ヘンッ！　シィィンッ……！」

　マルナカが叫さけびながら頭のかぶり物に手をかけて、勢いよく脱いだ。

　あらわれたのは、黄色と黒の塗と料りようで縞しま々しまにペイントされた、彫ほりの深い人間の顔だった。

「……へー」「……しかも、ペイント剝がれかけとるやん、汗あせで」

「ばっ！　だっ！　こ、これはペイントじゃねえっ！　俺の肌はだの色だ！　生まれつきだ！　由ゆい緒しよ正しいトラービト色だ！」

「帰ろっか、カタリ」

「せやな」

「待て待て待てぇぇい！　帰るな！　帰らないでください！　お願いします！　ホントごめんなさい！　ちょっぴりおふざけがすぎま

した！　ほんの茶目っ気です！　許して、マジで！　頼たのむ！　このとおり！　商売は真ま面じ目めにやってますんで！　嘘うそじゃなくて！　ほら、これ、ペイント！　ただのペイント！　ふきますから！　て、と、とれねえ！　油性塗料コワッ！　どうすんだよ！　俺は一生このままか！　小こ粋いきなイタズラのつもりだったってのに、トラービトになっちまうのかよ！　ていうか、トラービトってなんだよ！　教えろよ！　誰だれか！　誰か俺に教えてくれよプリーズ！」

「……塗料は油性でもそのうちとれるでしょ。毎日顔洗ってれば」

「そ、そうなのか！　俺は助かるんだな！　トラービトにならなくてすむんだな！」

「すむんじゃないの。たぶん」

「たぶんかよ！　確実じゃねえのかよ！　でも、贅ぜい沢たくは言えねえよ！　だって、そうだろ？　もとはといえば、俺の、俺自身が犯おかした過あやまちなんだから……！」

「あーそーだねー……」

「──というわけで、当店名物千客万ばん来らいいらっしゃいませコーナー終わりっ！　安値品しな揃ぞろえ世界一！　出張販はん売ばい高価買取ィッ！　土産みやげ上等ォォッ！　マルナカ商店へよッおッこッそッ！　何をお探しですかーッ！」

「いらっしゃいませコーナー長っ」

　そもそも、いらっしゃいませコーナーって何？　という話だが、それを尋たずねる前に、マリアローズの目がある商品に釘くぎ付づけになった。

「あ、ハニワ！」

「おっと、そいつに目をつけるたあ、お客さん、お目が高い」

　マルナカがそう言いながら奥の陳ちん列れつ棚だなからとりだしてきた高さ十サンチほどの物体は、まさしくハニワだった。

　ハニワとは、龍りゅう州しゅうで王様の墓に埋うめるという素す焼やきの人形だ。その昔、龍州には、貴人が死んだとき、その従者

や配はい偶ぐう者しやを殉じゅん葬そうするという風習があって、その代役として作られるようになったのが、ハニワである――なんて、まことしやかに語られているが、それにしては小さいし、どこか愛敬があって、見ようによっては結構かわいらしい。とりあえず、現在はもっぱら土産みやげ物ものとして売られているようで、どういうわけかエルデンでもたまに見かける。マリアローズも、思わず一つ衝しょう動どう買がいしてしまって、今も部屋に置いてある。ひそかに、お気に入りだったりする。

「……けど、なんで龍州のお土産が、エルデンとかジェードリにあるわけ……？」

「ふっふっふっ。エルデンのことはエルデニアンじゃねえ俺の知ったことじゃねえがな。言っただろ、俺は商売しながら世界中を旅してるんだ。マルナカ商店は、各地の土産物を仕入れていろんな場所で売り歩く、ワールドワイドなお土産物屋さんなのさ！」

「おお！　なんやようわけわからんけど、すごそうやな！」

「や、わけわからないってほど複雑なことは言ってないし……」

「そう！　簡単なことさ！　珍めずらしいものを安く買う！　珍しがる客に高く売る！　差額で儲もうける！　俺はマルナカ！　創業三百二十四年のマルナカ商店十二代目店主、俺がマルナカだ！」

「え、三百二十四年？　ずいぶん歴史あるんだね。意外」

「嘘だ！　俺は二代目！　でも、そのうち美人の嫁よめさん見つけてこどもに店を継つがせて、マルナカ商店を三百二十四年以上存続させるのが俺の夢だ！」

「あっそ……てゆうか、何代とか何年とか、そんなのはどうでもいいんだけど、お土産って、ちゃんと旅先でその土地のものを手に入れないと意味なくない？」

「おお。それもそうやな」

「あっはっはっはっ。細けえことは気にするなよ！　ワールドワイド！　ワールドワイド！　時代はグローバルなんだって！　おかげであんたもこのハニワに出会えたわけだろ！」

「出会えたって――僕はべつに、買うって決めたわけじゃ……」

「ノンノンノン！　いいかい、出会いってヤツはいつだって唐とう突とつだし、君だけのマァイ・ストーリィは突とつ然ぜん始まるもんなんだぜ！　チャンスは逃のがしちゃいけねえよ！　そら！」

　マリアローズはマルナカに無理やり押しつけられたハニワを、しぶしぶ、だが、じっくり観察してみた。でも、本当に、欲しいとかカタリに買わせたいとか思ったわけではないのだ。ハニワは一個あれば十分だし。むしろ、一個がいい。同じものは何個もいらない。一個を大事にしたい。うまく説明できないけど、二つも三つもあったら、最初の一個がかわいそうっていうか。だから、そうではなく、ぱっと見た瞬しゅん間かん、気になったのだ。似ていたからだ。

「……これってさ。身体からだは人間だけど、頭が魚みたいじゃない？」

「マァァーリアロォーズ、お前じぶん、なーにをまたアホなことぬかし──て、ホンマや！」

「だから、お目が高いって言ったじゃねえか。それはありきたりなハニワじゃねえんだよ。龍州には魚人ってのがいてな。いや、実在するのかどうかは定かじゃねえんだが、昔っからいるっていわれてるんだ。そのハニワは魚人をかたどったもんなのさ。まあ、このジェードリじゃあ、今でもたまに人魚が目もく撃げきされるって話だから、魚人くらいいてもおかしかねえよな！」

「うわ……こんなことがあるんだね。僕、なんか感動しちゃった。よかったね、カタリ」

「を？　何がや」

「龍州はちょっと遠いけど、きみの同類なかまがいて」

「おお！　そうゆうことか！　せやなあ！　正直、わしももう、半ばあきらめとったからな。この世にわしみたいなのんは一匹ぴききりかいっちゅうてな。寂さびしいて寂しいて、生きてかれへん思て、なんべんもな、みずから命を絶とうと──するかボケェッ！　誰が中ちゆう途と半はん端ぱ人類で進化の途と上じようじゃ！　わしは魚人ちゃうわ！　正しよう真しん正しよう銘めい、に・ん・げ・ん・やァァ───ッ！」

「そういうふうに思いこまないと、生きてこられなかったんだよね。かわいそうに……」

「やかましいわ！　よっしゃ、そっちがそうくるんやったら、こっちにも考えがあるで！　マルナカ！　そのハニワ、お買い上げや！　わしが買うたるわ！　ナンボや！」

「へいへい、まいどまいど、こちらの龍州特産魚人ハニワ、通常価格十万二千ダラーのところを、今なら大特価三万九千八百ダラーになりまーす」

「そらまたものごっつお得やんけ、十万が三万かい！　さんま──て、高ァァッ！」

「バッカヤロウ……！」

「な──まぼごっ！」

　カタリが奇き声せいを発して近くの陳列棚に突つっこんだ。マルナカにぶん殴なぐられたのだ。でも、なんで？　思いっきり客の左頬ほおに渾こん身しんのパンチを見み舞まって、さらに声を震ふるわせながら「馬ば鹿か！　この馬鹿！」と罵ののしる店主がどこにいるだろう。まあ、いるけど。ここに。

「たしかに……そう、たしかに、俺は自営業者であんたは客だ！　俺はあんたたちから金をむしりとらなけりゃ生きてけねえ！　それは事実だ！　ああ、事実さ！　だけどな！　人間として、いや、一人の男として、見過ごせねえことだってある！　たとえば、今、あんたがしようとしていたことなんかは、それにあたるんだぜ！　ズバリだ！」

「……わ、わしが、今、しようとしとったことが……？」

「ああ、そうさ！　あんた、今、魚人ハニワの値段が思ったより高かったからって、買うのをやめようとしただろう！」

「そらそうやろ！　あんなハニワ、三万九千八百ダラーて！」

「バッカヤロウ……！」マルナカは左手でカタリの胸むなぐらをつかんで持ちあげ、右拳こぶしを振ふりあげた。また殴るのかと思ったが、やめたようだ。マルナカはなぜか半べそをかきながら「ババババ、バッカヤロウ……！」と叫さけんで、ゆっくりと右手を下ろし

た。「──情けねえこと……情けねえこと言いなさんなよ！　あんた、買うって言っただろ！　一度、買うって言ったじゃねえか！　ちょっとくらい値が張るからって、それを取り消すなよ！　がっかりするだろ、俺的に！　ぬか喜びだろ！　あんた、男じゃねえのか！」

「……お、漢……」

「そうさ！　男に二言はねえ！　違ちがうか！」

「ち、違わん！」

「じゃあ、買うよな！　買ってくれるよな！　男なんだろ！」

「あたりまえや！　いったん決めたことはやる！　やりとおす！　それが漢の道や……！」

「そうこなくっちゃ！　お買い上げありがとうございます！　プレゼント用ですか、ご自宅用ですか！」

「プレゼント用で頼たのむわ！」

　カタリが片目をつぶって親指を立てると、マルナカも涙なみだを流しながらウィンクをして親指を立て、少し舌を出してみせた。

「作戦成功！」

「作戦かい！」

「作戦もかなりアレだけど、引っかかるほうはもっとバカでしょ……」

　なんだかもう頭が痛くなってきた。頭痛薬が欲しいところだけれど、さすがにそんなものまでは売っていないだろう。いや、もしかしたら、探せばあるかも。カタリが悔くやしがりつつ支し払はらいをし、マルナカがいそいそと魚人ハニワを包装している間、店内を見て回ったのだが、この店、本当に品しな揃ぞろえが豊富だ。各種まんじゅう、アイスクリーム、「おでん」と銘めい打うたれた串くし刺ざしの煮に物ものから、置物、提ちよう灯ちん、旗、キーホルダー、装そう飾しよく品ひん、変わった形の武具、書物、魔ま術じゆつの触しよく媒ばいまで。それ以外にも、何に使うのかよくわからない物品が山ほどある。それらのほとんどに小さな値札が貼はっ

てあるのだが、高そうなものが妙みように安かったり、単なる石ころに目玉が飛びでるような値段がつけられていたり。これって、テキトーなんじゃないの？　だって、あの魚人ハニワが三万九千八百ダラーで━美しい光こう沢たくのある透すきとおった石と、きらきらした石でできた、この小さくて精せい巧こうな細工物が、一個九十八ダラー？　やけに安くない？

「……なんか、かわいいかも、これ」

　大きさはせいぜい三サンチくらいだろう。いろいろな形のものがある。これはイルカで、あれはウミガメ。カニ。貝。これは、ヒトデ？　それから、船の錨いかり。種類はよくわからないけれど、何かの花。輪りん郭かくは必ずしも写実的ではなく、愛らしくアレンジされていて、飾かざりはどこまでも精せい緻ちだ。全体としてはかわいくて、部分部分はすごく美しい。見れば見るほどよくできている。これが一個九十八ダラー？　本当に？

「おっと、お客さん、今度はそいつを見つけたのかい。やっぱりお目が高いねえ」

　マルナカが隣となりにしゃがみこんで、マリアローズの手て許もとをのぞきこんできた。きれいに包装してリボンまでかけた魚人ハニワは、すでにカタリが抱かかえている。

「そいつはヤラ・ナイヤっていう職人の作品でね。この街に住んでる錬れん金きん士しなんだが、そういう工芸品ばかり作ってる変わり者のばあさんなんだ。だから、材質は錬金術で生成されたやつだし、手作業じゃちょっと無理そうな細工もしてある。裏に、シリアル・ナンバーが刻まれてる小さなへこみがあるだろ。そこを爪つめの先っぽでクイッと押してみな」

「え？　うん━わ、光った」

「すげえだろ！　そのシリーズは全世界に三百七個しかないんだぜ。しかも、一つ一つぜんぶ違う形なんだ。でも、貴重さを抜ぬかしたって、いいもんはいい！　本当の値打ちってのは金額じゃねえ。そいつを持つ者、もらう者の心をどれくらいズドーンと打つか、それで決まる！　違うか？　いや違わねえ！　違うわけがねえ！」

「たしかに……これ、買っちゃおうかな」

安いし。どうせ、お土産みやげは何か買おうと思っていた。ベアトリーチェには何がいいだろう。これがいい。ウミガメ。医術式修行中のベアトリーチェに、ゆっくりでも、確実に、焦あせらず、地道にがんばって、という意味をこめて。何より、このウミガメが一番かわいい。それから、モリーには優ゆう雅がな巻き貝。ちょっと大人っぽいかんじがするし、これなら、モリーの机の上に置いてあっても、おかしくないだろう。あとは──これって、薔ば薇ら……？

胸が、とくん、と鳴った。

何？

いったいなんだっていうわけ？

薔薇、が──薔薇が、なんだよ？　どうかした？　なんで思い出すわけ？

消したい。消し去ってしまいたい。忘れたいのに。僕を──好きだなんて、言うな。いやなんだ。慣れてないんだ。怖こわい。失って。ぬくもりを。僕をひとりぼっちにした思い出が。愛。愛？　愛なんて──そんなもの。わからない。わかるはず、ない。僕には無理なんだ。不可能なんだ。そんなこともわからないくせに、言うな。言わないでよ。ぜんぶわかるって？　嘘うそをつくな。わかるわけがないじゃないか。何がわかるっていうんだ。僕は、違う。違うんだ。違う。違う。僕は。だけど。あのとき。

『見るな……！』

あれ、は──、

僕が見て、見なかったことにしたあれは、なんだったんだろう。

僕は訊きくべきだったんだろうか。

きみは、何？

と。

たしかめるべきだったんだろうか。そうしていたら、何か変わっていただろうか。

「……これは、自分用」



　言い聞かせるように呟つぶやいた。そうだ。自分用。安いし。モノはいいし。買っておいて損はない。むしろ、是ぜ非ひとも買っておくべきだ。でも――そうだ、他ほかにも何か買っておいたほうがい

いかもしれない。予備というか。臨機応変な対処のためというか。備えあれば憂うれいなしというか。ぱっと思いつかないけれど、お土産を渡わたすべき相手が、まだ誰だれかいるかもしれないし。見れば、ちょうど近くの棚たなに、大量のキーホルダーがぶら下がっている。髑どく髏ろを模したものとか、小動物のミイラとか、昆こん虫ちゆうの標本とか、とんでもないものも混じっているが、その中から、手て頃ごろな価格で、港町を感じさせるものを五、六個選んだ。ネタになるかなと思い、「港と人魚の街・ジェードリ」の三角旗も一つ買うことにした。マリアローズの計算によると、総額三千二百九十四ダラー。ヤラ・ナイヤの細工物がとにかく安いので、かなりお得感のある買い物だ。

「じゃ、これちょうだい」

「へいへい、まいどまいど！」

「あ、くれるの？　嘘。マジ？　なんか悪いねー。でも、せっかくだから……」

「やらねえよ！　売るんだよ！　あんた、鬼おにか！　悪あく魔まか！　俺を飢うえ死にさせるのがあんたの役目か！　それって残ざん酷こくすぎるよ！　ああ、そうさ、あんたの冷血非情さは世界一だよ！」

「ちょっとした冗じよう談だんでしょ？　ちゃんとお金払はらうってば」

「前言撤てつ回かいまいどありーん。ええっとお、お会計、二十九万七千ダラーになりまーす」

「はい、二十九万──なわけないだろ！」

「うぐぉっぢ！」

　思わずマルナカの向こう脛ずねを蹴け飛とばしてしまった。あまり手加減しなかったことについては、ほんの少しだけ申し訳ない気持ちもあるが、二十九万ダラー以上騙だましとろうとした罪は、たとえ冗談だとしても重い。重すぎる。許せるはずもない。

　マルナカは、感心なことに、商品をしっかり抱えたまま床ゆかにうずくまっている。

　マリアローズはその額に籠こ手ての矢の照準をあわせた。

「細工物が一つ九十八ダラー、三つで二百九十四ダラー。その他のものは予算三千ダラーに収めるつもりで選んで、きっかりその額だから、あわせて三千二百九十四ダラーでしょ？　これ以上ふざけたことぬかしたら、撃うつよ？」

「──いや、ち、違ちがいますって！　う、撃つな！　死んじゃう！　撃たないで！　て、ヤラ・ナイヤの細工物が一個九十八ダラーって！　そんな安いわけあるかァァ───ッ！」

「だって、値札にそう書いてあったもん」

「はァァ？　値札にィィ？　うっそォォォん。そんなわけなァァ───いはずなのに書いてるーしィ！　ばっちり九十八って！　やべえ！　お、俺としたことが、うっかりゼロつけんの忘れてたァァッ！　しかも、三つもォォォッ……！」

「忘れすぎ……」

「だ、だ、ダメ！　これ、一個九万八千だから！　ありえないから！　ヤラ・ナイヤの細工物が九十八ダラーって！　百万とか余よ裕ゆうでするやつもあるんだって！　九万八千でもかなり良心的なお値段だから！　ほんと、マジで！」

「あのさ、情けないこと言わないでくれる？」

「な……？」

「きみ、男でしょ？」

「お──」

「一度値札に書いた値段、間違ってたから、今さらそれ取り消す、なんて、男のすることじゃないよね？」

「せやなあ。漢おとこの道に反するわ。反しまくりやで、それ」

「あ……」

　マルナカはうつむいて全身を震ふるわせた。

　やがて、顔をあげて絶ぜつ叫きようした。

「わァァァかったよッ！　ハイハイわかりました！　俺も男だァッ！　男としてそんなことはできません！　お会計三千二百九十四ダラーのとこ、めんどくせえからもう三千ダラーでオッケーだァァァ！　持ってけ泥どろ棒ぼうォォォッ……！」

「泥棒じゃないから」

「ハイハイハイお客さんですよね！　すみません！　ごめんなさい、お客さん！」

「わかればいいよ」

　そんなこんなでまんまと上等なお土産みやげをせしめ、ついでに肉まんじゅうをいくつか買って、マルナカ商店をあとにしてから気づいた。

「──あ。そうだ」

　マリアローズは肉まんじゅうをほおばっているカタリの腕うでを引っぱった。

「な、な、なんやひやねへん！」

「戻もどる！　忘れてた！　きみにおごってもらうって約束！」

「ま、待てや！　お前ひふんにはもう買こうてやひやったやろひやほ！」

「はあ？　何をだよ」

「もちろひほん、これへやひや……！」

　カタリは肉まんじゅうをごっくんと飲みくだしてから、ピンク色の包装紙と赤いリボンで飾かざりつけされた十サンチほどの物体をマリアローズの鼻先に突つきつけた。マリアローズは勢いに押されて受けとってしまったけれど、「──って、これ、きみがまんまと買わされた魚人ハニワじゃないか！　いらないよ、こんなの！」とすぐさま投げ捨てた包みを、きわどいところでカタリがダイビングキャッチした。

「──だっ、とっ、こっ、このボケェッ！　このハニワ、いくらしたと思とるん！　約四万やで！　捨てんなや！」

「だっていらないし！　僕が何おごってもらうかは僕が決めたいし！」

「アホダラァッ！　わしがおごるんやから決めるんはわしじゃ！」

「そうやって、つきあってもいない女の子にいきなり変なものプレゼントして迷めい惑わくがられた経験ない？　あるでしょ？　あるよね？　あるって顔してるもん」

「おお、あるわ！　あって悪いんか、おお！　どうせならそんなくだらんもん買うたぶんの金よこせとかゆわれて、めっちゃへこんだこともあるっちゅうねん！」

「それは相手が悪いけど、そんなやつにプレゼントなんかあげたきみの見る目のなさも悪い」

「一ひと目め惚ぼれやってん……むっちゃかわいかってん……わしも学んだっちゅうねん……人は見かけやないんやなぁ……」

「まあね。きみだって、腐くさった半魚人みたいな顔してるけど──」

　けど、何？　僕、何を言おうとしてるわけ？

　マリアローズは慌あわてて言葉をのみこみ、きょとんとしているカタリの手から魚人ハニワの包みを奪うばいとった。それも、どうして自分がそんなことをしたのか、よくわからなかった。本当に、いらないのに。魚人ハニワなんて。不細工だし。ちょっとかわいいけれど。一つずつ箱に入れてもらい、背負い袋ぶくろにしまってあるヤラ・ナイヤの細工物よりも割れ物注意っぽいし。

「……エルデンに帰るまでのあいだに、壊こわれちゃいそうだよね、これ」

「ナハハハッ。せやなあ、ゆうても粘ねん土どの素す焼やきやからな。せやけど、わしが持っとるよりは、お前じぶんが持っとるほうがまだ安心ちゃうか」

「かな？　それは、まあ、そうかも……」

「せやで。そのハニワ、わしに似とんのやろ。お前じぶんがそうゆうたやんけ。せやったら、わしやと思て大事に持っとってくれや」

「きみだと思ったら、大事にはできそうもないんだけど」

「そうゆうなや。言葉の綾あややねんか。とりあえず、せっかくタダでやるっちゅうとんのやから、もらっとったらええやろ。なんやお前じぶんが損するわけでもなし」

「べつに得もしないけどね」

「お前じぶんの頭ん中は損得勘かん定じようだけかい……」

「そんなことないよ？」

　カタリはそれには答えずに起きあがって、小こ脇わきに抱かかえていた袋の中からまた肉まんじゅうをとりだした。ダイビングキャッチなんかしたのにもかかわらず、どうやらつぶれてはいないらしい。湯気が立っていて、おいしそうだ。

「一個ちょうだい」

「ん？　おお。これやるわ。結構いけるで」

「……あ。ほんと。おいしい」

「やろ？　皮に肉にく汁じゆうがたっぷりしみこんでんねん。そんでも、具に達すると、ちゃあんとまだ肉汁が出てきよる。ええかげんな仕事しとったらこうはならんで」

「侮あなどれないね、マルナカ商店」

「せやな」

　とか、どうでもいいようなことを話しながら、マリアローズとカタリはサンブレイク・ホテル玄げん関かん前の石段に腰こしを下ろして、肉まんじゅうをたいらげた。途と中ちゆうからは、食べることに集中して、二人とも黙もく々もくと咀そ嚼しやくと嚥えん下かにいそしんだ。

　空腹だったせいもあるけれど、マルナカ商店の肉まんじゅうはかなり美味だったのだ。トマトクンたちにも買っていってあげようか

な。そんなことを考えたりもしつつ、気まずいというほどでもない軽さの沈ちん黙もくがなんだか少し心地よくて、マリアローズは包装ずみの魚人ハニワを握にぎったまま、しばらく口をつぐんでいた。

「わかっとるで」

　出し抜ぬけに、カタリが言った。

「マリアローズ、お前じぶんが損得勘定だけで動いとるわけやないっちゅうことは、な━わしだけやのうて、みいんなわかっとる」

「……あ、そ」

「せや。わしらは━ＺＯＯはな、これはわしの考えやねんけど、賢かしこうないんや。誰だれも彼もな。アホの集まりやねん。朱しゅに交われぱっちゅう言葉もあるけどな。たぶん、類は友を呼ぶのほうやろ。もともと似たもん同士なんや。どこもそうなんかもしらんけどな。わしらは、底そこ抜ぬけのアホダラの集まりやねん。怒おこんなや？　お前じぶんもアホやろ」

　カタリごときに、アホ呼ばわりされるなんて。

　怒るな、と言われても、ここは怒るべきところかもしれない。

　でも、不思議と怒いかりはわいてこなかった。

　もう十一巡じゆん月げつで、朝晩はかなり肌はだ寒ざむい季節だし、海がすぐそこで、風は冷たいのに、どういうわけか、ちょっとあったかいや。なんでだろ。

「なんかのために、ぎょうさん損してな。後こう悔かいして、やめよ思ても、なかなかやめられへん。せやったら、一人っきりでおるしかないもんなあ。わしはわし、他は他ってな。知らん顔してな。笑うなや？　わしは一時そうやってん。故郷から出て以来、一人やったしな。頼たよるもんもおらへんかったからな。ゆうても餓が鬼きや。親切にしてくれよるもんがおったら、そら、信じてまうがな。信じたいやろ。おかげで、とんでもない目にも遭おうたわ。なんべんもな。せやけど、それで人間ぜんぶロクデナシや思いこむんもアレやろ。負けてもうたみたいで、悔くやしいやろ。実際、どうしようもないやつもおれば、マシなもんもおるんや。仲間のためなら、命くらいナンボでも捨てよるアホもな。探せばおらへんことも

ない」

「きみみたいなアホとか？」

「ボケ。わしはな。アホの中のアホや。キング・オブ・アホやで。それでええねん。わしはワレの生きたいように生きるて決めとんのや。もともと望まれもせんと生まれて、闇やみに葬ほうむられるはずやった命やからな。この命はもうわしだけのもんや。わしがどう使おうと勝手やろ。わしは、わしが信じるもんのためにガッツンガッツン生きて、いつか笑わろて豪ごう快かいに死んだるわ」

「きみらしいね」

「かっこええやろ」

「ちょっとだけ」

「だはっ。そうくるとは思わんかったで」

「裏をかいてみたんだけど」

「お前じぶんらしいわ」

　カタリはひとしきり笑ってから、マリアローズを見て一つ息をついた。

「あんまりな。頑がん張ばりすぎたらあかんで」

「……え？」

「気張りすぎっちゅうことや。正直、トマトクンも悪い思うねんけどな。お前じぶんに任せすぎやろ。ちゅうか、あれはお前じぶんに頼たよっとんのや。おそらくな。わしもようわからんけど、そんなに得意やないんちゃうか。人、まとめたりとかな。もちろん、能力はあると思うで。せやけど、好き嫌きらいとできるでけへんはちゃうからな」

「それは……まあ、そうだよね」

「大おお雑ざっ把ぱやしな。わしも他ひ人とのことゆわれへんけど」

「たしかに」

「うなずきすぎやで、お前じぶん」

「でも━トマトクンが、僕に頼ってる、なんて……」

「おかしいか？」

「うん」

「なんでやねん。べつに、おかしいことないやろ。信しん頼らいされとんのや。ただそれだけの話やないか」

「けど、さ……もし、僕が何か任されて、失敗したらどうするの？」

「しゃあないやんか、そんなもん。失敗せえへん人間なんかおらんがな。任せるっちゅうことは、それもふくめてどーんとこいやろ。当然、ぜーんぶ受け止めるっちゅうことや」

「……なんか、重いね。それって」

「そこや、そこ。わしが言いたいんは、そこやねん」カタリは石段をぺたぺた叩たたいた。「重うてたまらんかったらな、捨ててまえばええねん。馬ば鹿か正直に、押しつぶされてまうまで我が慢まんしとる必要はないねんで」

「━だけど、それじゃ、逃にげるみたいだし……」

「逃げて何が悪いん。そら、誰やって逃げたいときくらいあるやろ。あたりまえやんけ。それに、どうせ逃げたってな。追い回すで。あいにく、わしらはしつッこいんや」

「そうはいうけどさ。せっかく信じてもらっといて、裏切るみたいな真ま似ね……」

「あー、ならへん、ならへん。そんなん裏切りのうちに入らへんがな。お前じぶんは真ま面じ目めに考えすぎや。トマトクンもな、そのあたりはわりかしええかげんやから、たぶん、軽い気持ちでお前じぶんに頼っとるん。せやから、お前じぶんも軽い気持ちでやっとったらええねん」

「軽い、気持ちで……？」

「一人やないっちゅうことは、そういうことやろ。明るく、楽しくな。くだらんことでも笑て話せる相手がおるっちゅうことや。なんや面めん倒どうがあったときもな、ようするに、明日、またみんなで笑うために頑張るのんとちゃうか。あとのことは、オマケみたいなもんやねん。あくまで、わしにゆわせれば、やけどな」

　今まで、そんなふうに考えたことはなかった。

　一人じゃないということは、マリアローズにとって、もっと重大で、深刻だった。それ自体が重かった。まぶしすぎて、ぬくもりと同時に、戸と惑まどいをもたらす光だった。たまに、眩暈めまいに襲おそわれて、足あし許もとがふらついた。すべてが幻まぼろしであるかのように感じることもあった。夢なら覚めないで欲しいと。いや、いっそのこと、覚めればいいと。早く覚めたほうが、夢だとわかったときの痛みが軽くすむにちがいないから。そんなことを思った。何度も、思った。

　失わないためには、何をすればいいだろう？　どうすればいい？　みんなの期待に応こたえないと。期待なんかされてないかもしれない。だとしたら、期待してもらえるようにならないと。必要とされたい。みんなが好きだよ。僕なんかのことを仲間扱あつかいしてくれる、みんなが好きだから、一いつ緒しよにいたい。

　切実だった。

　真しん剣けんだった。

　一生懸けん命めいだった。

「……そう、だね」

　マリアローズは短く笑った。

　知らぬ間に肩かたに入っていた力が、ふっと抜ぬけた。

　バカみたいだ。

　それで笑え顔がおが強こわ張ばってしまったら、なんの意味もないじゃないか。だって、僕は―、

僕は、ずっと笑いたかったんだ。

お父さんやお母さんと暮らしていたとき、なんの疑いもなく、不安なんか吹ふき飛ばして、声を立てて笑っていた、あのころみたいに。

僕は、心の底から笑いたかった。涙なみだを流して笑いたかった。転げまわって笑いたかった。

今、僕は笑っている。

笑えるんだ。

みんながいるから。

たとえ何か困難にぶちあたっても、みんなで力をあわせて、それを乗り越こえて、明日になれば、また笑えるんだ。そう思っていた。

僕は、あまりにも浅はかで、無む邪じゃ気きだった。

「そろそろ戻もどろか」

カタリが腰こしを上げてのびをした。マリアローズも、魚人ハニワを背負い袋ぶくろにしまってから、立ちあがりかけて、マルナカ商店をちらりと見た。みんなのぶんの肉まんじゅう、買って行ったほうがいいかな。だけど、ユリカと髭ひげがチーロ・パンカロを治ち療りようしてあげてるんだし、食事くらい、パンカロ・ファミリーにおごらせるべきじゃないか。どうも、うちの連中はそろいもそろってお人好しなのか、そのあたりが鷹おう揚ようすぎるように思えてならない。まあ、それがいいところでもあるのだろうけれど、そんなことより、ふと目に入った、橙だいだい色いろの照明に照らされた湾わん岸がん道路を、西の遠くからこっちに向かって息せき切って走ってくる、あれは──、

見み間ま違ちがえようがない。

黒い肌はだの長身の女性と、巨きよ大だいな白い狼おおかみ。

ロム・フォウとアルファだ。

「散歩の帰りっちゅう雰ふん囲い気きでもなさそうやな」

カタリの声こわ音ねがわずかに緊きん張ちようしている。その手が腰の斧おのにふれた。マリアローズも素す早ばやく立ちあがって、軽く唇くちびるを噛かみ、籠こ手ての具合を確かめた。やだな、と思った。なんとなく、やなかんじだ。どうやら、何かが起ころうとしていて、それどころか、この街ではとっくに何かが起こっていて、その輪りん郭かくまでは見えている。やつらは不ふ愉ゆ快かいな姿をしている。少なくとも、味方ではなさそうだ。でも、まだ手ざわりがわからない。なんだか、僕は冷静すぎる。いや、そうじゃなくて、むしろどこか頭がぼんやりしている。気持ちが高まらなくて、集中しきれない。

いけない。こんなことじゃダメだ。しっかりしないと。

マリアローズは自分の頬ほおをぴしゃりと叩いた。カタリがもとから妙みような顔にいっそう変な表情を浮うかべてこっちを見た。なんでもないよ。そう言うかわりに、マリアローズはロム・フォウとアルファがくるほうへと駆かけだした。間を置かず、カタリもついてきた。マリアローズとカタリに気づいたアルファが、うおんと短く吠ほえた。

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区

〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.13

ロシュよ

　──ああ、私には聞こえる。ロシュの声が。そして、罪ある者たちの声が。見える……。

　穢けがれし者よ。あなたは我が裁きの手から逃のがれて罪を深め闇やみで息をひそめている。

　私はあなたを救いたいのだ。すでに後あと戻もどりのできぬあなたを私ならば救うことができる。

　死をもって。

　穢れし者に焦こがれ待つ哀あわれな娘むすめをも私は救うことができる。

　死をもって。

　私に付き従う罪ある者たちよ。あなたがたを蒙もう昧まいと妄もう執しゆうから救うことも私にはできる。

　死をもって。

　リリアン・イヌテロ。盗ぬすみ姦かん淫いんし罪を悔くいロシュにすがり私を援たすける道を選んだ者よ。

　あなたは道から外れることなくロシュにつくしいずれ死ぬだろう。

　ヘンリー・ブラックモア。罪を罪とも思わず日々罪を重ね深めるもっとも罪深き者よ。

　あなたはまさしく人である。私はあなたのような人さえ救うだろう。

　ロイ・チャーチル。純真と猜さい疑ぎ心しんの狭はざ間まにあって苦しみおのが無力に悶もだえる罪深き騎き士しよ。

　私はやがてあなたに力を与あたえ救いの道を示そう。

　向こうデア見ずデビル。ロシュの名すら心になくただひたすら私

を盲もう信しんする罪深き猪ちよ突とつの戦士よ。

　あなたにも私は力を与えることができる。

　イオネア・ブラントロウ。おのが心弱さによって傲ごう慢まんを挫くじかれし愚おろかで無体で純情な女よ。

　あなたが望むのならば私はあなたにも力を与えよう。

　モニカ・トトゥーア。〝罪そのもの〟よ。

　あなたはあなたが何をすべきかすでに知っている。ただひたすらになすべきことをなせ。

　そして、あなたがたはおのれが死すべきとこころえしまさにそのときに死ぬがよい。

　それはロシュの御み心こころである。私がもたらす救いである。

　ああ、私には聞こえる。ロシュの声が。

　見える。

　見えるのだ。

　──おまえは、誰だれだ？

　おまえは、炎ほのおをまとっている。

　その手に持ちたる刃やいばに宿る輝かがやきは、この世のものではない。

　おまえは、誰だ……？

　ああ、聞こえる。ロシュの声が。

　彼あれは、天を、万ばん象しようを、破らんとする七星の一である。

　彼あれが身にまといし炎は──、

　彼あの手にある刃は──、

　は──？

　は？　ハ？　わ？　ワ？　炎？　刃？　彼あれ？　ロシュ？　ロシュよ？

「ロシュ……ロシュよ……」

　彼は大いなる祈いのりの場の中央で頭を押さえてうずくまった。幼いころから断続的に彼を襲おそいつづけている激しい頭痛だ。その痛みは次し第だいに、少しずつ、確実に強まってきている。彼を殺そうとしている。

　彼は自然と悟さとり、覚かく悟ごしていた。ぼくに残された時間は決して多くはないのだろう、と。

　だが、養父は、養母は、彼とともにいるだけで笑ってくれた。彼も笑うことができた。だから、彼は耐たえた。彼を殺そうとする痛みを殺した。しかし、養父はもういない。養母も死んだ。養母は、自死する間ま際ぎわに、彼の頰ほおを両手でつつんで言った。
「笑って。笑って、アロンズ。お願いだから、そんなに悲しそうな顔をしないで。笑って、アロンズ」彼は笑った。痛みをこらえて微笑ほほえんだ。どうせ、ぼくに残された時間は多くないのだから。せめて、養父と養母のために、笑って死のう。お父さん。お母さん。あなたたちがいてくれたおかげで、ぼくはこうして笑うことができます。見てください。すぐおそばにまいります。

　それなのに、私は死なぬ。

　痛みだけが強まり、死は私から遠ざかる。

救いは訪おとずれない。

そうして、私は痛みのなかで笑いながら、声を聞いたのだ。

長らく聞いていなかった、あの声を。

あの日、養父はその声を「ロシュの声だ」と言った。

そうか。

ロシュ。

これが、ロシュの声。

──私は、ロシュの声を聞くことができる。

彼はおのれの左手を見つめた。

人差し指に黒い石の指輪がはめられている。

それは、肉どころか骨まで食はみ、ほとんど指そのものと化していて、もう外れない。

彼はその指輪を大聖堂の宝物庫から奪うばった。

本来、〝計画〟のために収集された、いくつもの力ある道具が、〝聖遺物レリック〟──罪深い司教たちの権けん威いの象しよう徴ちようとして、宝物庫に所蔵され、ただ眠ねむらされていたのだ。

であれば、当然、彼は〝裁き〟にそれらを用いるべきである。〝聖遺物レリック〟は彼に用いられるべきである。

この〝破戒のフオーレン指輪・リング〟しかり。

彼が身にまとう〝血の鎧ブラッドアーマーしかり、〝執行者のエクスキユーシヨナーズ陣羽織タバード〟しかり。

そして、愛馬アバドンの鞍くらにくくりつけてある〝長大ロンなる槍ギヌス〟しかり。

「……ロシュよ、声を……」

彼は指輪に口づけした。

　痛みは引かない。

　終わりが近いのか。

　しかし、それは〝裁き〟が果たされるときなのだと、彼は知っている。

　アバドンが鼻はな面づらを近づけてきて、彼の髪かみを軽く噛かんだ。

　彼はアバドンの顎あごを撫なでながら顔を上げて微笑んだ。

「──大だい丈じよう夫ぶです、アバドン。〝裁き〟は必ず成ります。たとえ、彼あれが何ものであろうと、私を止めることはできない。〝罪そのもの〟もいます。〝聖遺物レリツク〟の力もある。罪は裁かれねばならない。すべて清められねばならないのです。私は止まらない。私は救います。何もかもを。死をもって」

　それから、彼は奥歯をギリリと噛みあわせて、ひっそりとつぶやいた。

　こんな薄うす汚ぎたない世界など、滅ほろびてしまえ。

onlookers

猫と姫

　ジェードリでサンブレイク・ホテルに次いで高い建物といったら、同じバルモア地区にあるエッラの斜しや塔とうだろう。

　フリッツ・ブローという人物によって建てられたこの塔とうは、設計に欠けつ陥かんがあったのか、工事に手て抜ぬきがあったのか、とにかく完成して二年で傾かたむきはじめた。それ以来、徐じょ々じょに傾いていって、今は約八十二度。ぱっと見ただけでわかるくらい傾けい斜しゃしている。このままでは倒とう壊かいの危険があるし、取り壊こわすべきなのだろうが、現在の所有者であるフリッツ・ブローの曽ひ孫まごはその決断を下そうとしない。なんでも、亡なきブロー氏は、若くして病やまいで死んだ彼の妻エッラの墓標としてこの塔を建てたらしく、実際、塔の地下には彼女の亡なき骸がらが納められている。塔を壊してしまえば、彼女の安らかな眠りを妨さまたげてしまいかねない──というのがブロー家の言い分だが、だったら、「世にも珍めずらしい傾いた塔」と銘めい打うって見物客を集め、閲えつ覧らん料をとって、地下の墓所まで見学可能にしているのは、いったいどういうわけなのか。噂うわさでは、だんだん傾いてきたという話も嘘うそで、じつは最初から今のごとく傾いていたのだともいう。

「──まあ、噂というか、それが真相だったりするんですけれどね」

　そんな愚ぐにもつかないことを、一匹ぴきの猫が含ふくみ笑いをしながら語っている。

　猫が香こう箱ばこを作っているのは、きらびやかな東部風の着物を身にまとった女の膝ひざの上だ。

　女はエッラの斜塔の屋上のへりに腰こしかけて、つまらなそうに足をぶらぶらさせている。

　目の周りを赤や黄、青で縁ふちどって、小さな花びらのような唇くちびるに紅をさし、黒い髪の毛を六本の角のような形に結ゆいあげている女の姿は、ちょっと異様だ。ただ、奇き妙みょうな化け粧しょうをしていても、頬を思いっきりふくらませて、顔に退たい屈くつだと書いてあるような表情は、どこかあどけない。身体からだつきも華きゃ奢しゃなので、少女めいて見える。

「あらら。つまんないですか？」

「うん。非情につまらん」

「非常に？」

「違ちがう。非情に」

「それはまたちょっと独創的な表現ですねえ。今度使わせてもらおうかな」

「使うなら権利料をよこせ。一億万ダラー」

「一億かける一万で一兆ダラーってことでしょうか。それは高すぎるなあ」

「わらわは非情につまらん。だが、高いところは嫌きらいではない」

「じゃあ、いいじゃないですか」

「ダメ」女はそう言うなり、猫の首根っこをつかんで持ちあげた。「非情につまらんから、おまえをこっから落として遊ぶ」

「わ、わ、わ、それは勘かん弁べんしてください」

「勘弁してやろ」女はあっさり猫を膝の上に戻もどした。「わらわは汝なれのことなんか大だい嫌きらいだけど、にゃんこは好きだから」

「ありがとうございます」

　猫は尻尾しっぽをピンと立てて、愛あい嬌きようたっぷりの高い声でにゃーと鳴いてみせた。猫だけに、女の細い腿ももの上でも危なげがない。女はそれがおもしろくないのか、わざと足全体を左右に振ふったり、身体を揺ゆすったりした。「わ、わ、落ちる、落ちる、落ちたらどうするんです」「わらわが拾うてくれる」「拾う前に落とさないでくださいって」「やだ」「やだじゃないですって、この身体には代えがないんですから」「それゆえに、おもろいのだろが」「ぼくはぜんぜんおもろくないですって」「わらわがおもろければいいのだ」「そんな──あ、待って、阿麽李アマリ、そろそろ始まりそうなかんじですよ、ほら」「ほ。そのようだの」阿麽李アマリと呼ばれた女は、ようやく退屈しのぎのお遊びをやめて、猫が示した方向へ目をやった。「ところで、ジュジ」

「はい。なんでしょう」

「わらわを阿麼李アマリと呼び捨てにするのはいいかげんよすがよい。むかつく。殺すぞ」

「では、なんとお呼びすればよろしいでしょうか」

「そうよの」阿麼李アマリは一寸ちよつと考えこんでから、満面の笑えみを浮うかべた。「──巫女神シビリリス、あるいは、姫と呼ぶことを許す」

「これはこれは、ありがたき幸せです、姫」

「ん。やっぱやめ。阿麼李アマリ姫にせよ」

「わかりました。阿麼李アマリ姫」

「汝なれのことはにゃんこと呼ぶからの」

「お好きなように」

　阿麼李アマリは灰色の猫をぎゅっと抱だきしめて頰ほおずりした。

「ふふ」

Omenage 897 11th revolution 7th day

サンランド無統治王国ジェードリ・バルモア地区

〝サンブレイク・ホテル前〟

chapter.14

言い訳のように

あいつは敵に回しちゃいけないと思った。アルファのことだ。

アルファは先頭を切ってサンブレイク・ホテルの玄げん関かんに頭から突つっこんでいった。硝子ガラス張りのむやみやたらとでかいドアは閉まっていたが、おかまいなしだった。ドガッシャアアアアアアアアァァァァァンと割れた。木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけ散った。ロビーにいたホテルの従業員や警備員たちの驚おどろきはいかばかりか。しかも、アルファはそのままロビーのど真ん中まで走っていって、大だい音おん声じようで吠ほえた。うおおおおおおおおおおおおおおおん！

「……さっさと逃にげろ、腰こし抜ぬけども、と言っているみたいだよ」

通訳してくれたロム・フォウも、さすがに半分苦笑いしている。一方、マリアローズとカタリは苦く笑しようもできない。一応、アルファにつづいてロビーに入りはしたものの、正直、いいのかな、これ、というかんじだった。だって、これじゃあまるで、僕らがホテルを襲しゆう撃げきしちゃってるみたいじゃない……？

まあ、幸いなことに（？）、ホテルの従業員は腰を抜ぬかしているし、警備員たちも身構えるくらいがせいぜいで、アルファに立ち向かわんとする勇ゆう敢かんというか無む謀ぼうな者は一人もいない。それはそれで問題かもしれないが、好都合といえば好都合だ。何が好都合なのか、もうよくわからないけれど、そう思うことにしよう。そうとでも思わないと、やりきれない。

だいたい、ドアをぶち壊こわす必要性なんて、これっぽっちもないはずだし。

もしかして、ホテルへの立ち入りを断られたことに対する報復だったりして。

ありうる。ないとは言いきれない。

アルファはずいぶんプライドが高いみたいだし。

「──とりあえず、上に……！」「おっしゃ！」「うん」わおおおぉん！

　マリアローズたちは、やはりアルファに先導される恰かつ好こうで、ロビーの大階段を駆かけのぼった。遅おそまきながら、数名の警備員が追いかけてきたが、目的のフロアは三階だ。二段飛ばしで、あっという間だった。三階はパンカロ・ファミリーが貸し切っている。下の騒さわぎを聞きつけたのか、それとも別の理由か、すでに騒そう然ぜんとしていた。スーツ姿の男たちが、何やら叫さけんだり言いあったりしながら、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、そこにマリアローズたちというかアルファが現れたものだから、さあ大変。なかにはアルファを見知っている者もいたはずだが、いきなりこんな場所で、こんなに大きな白い狼おおかみに遭そう遇ぐうしたら、そりゃあびっくりもするだろう。アルファもアルファで、怯おびえる者を嘲あざ笑わらうように、うおん、と吠えたりして、彼としてはからかっているつもりなのかもしれないが、やられたほうはたまったものじゃない。

「ひっ」思わず逃げ腰ごしになる者がいる。

「わっ」と足がもつれて、ずっこけそうになる者もいる。

「──どおっ！」たまたま廊ろう下かの脇わきに止まっていたワゴンに誰だれかがぶつかって、食器だの食べ物だのが、ドンガラガッシャングワラガラと音を立てる。

　そうなるともう、ちょっとしたパニックだ。

　マリアローズは顔を覆おおいたい気分だった。隣となりで楽しげに「おほっ」とか言って目を輝かがやかせているカタリなんか、いっそのこと焼しよう却きやくされてしまえばいいと思う。でも、逝ってフアツまえキン半魚人と違ちがって、ロム・フォウは常識を持ちあわせていてくれたので、本当に助かった。

「アルファ！　遊んでいる場合じゃないよ！　もうよすんだ！」

　ああ、やっぱり遊んでるんだ。……あれで。

　ともあれ、ロム・フォウに叱しかられると、アルファは悠ゆう然ぜんとお座りの姿勢になって、後こう肢しの先で耳の後ろあたりを掻かいた。反省の色なんてまったく見られない。「なんだよ、うっせーな」みたいな態度だが、まあ、言うことを聞いてくれただけでも、よしとするべきか。何様のつもり？　いいけど。いや、あんまりよくないか？　……もうどっちでもいいか。

　いずれにしても、遊んでいる場合でもなければ、そんなことを考えている場合でも当然ない。マリアローズはトマトクンたちがいるはずの３１５号室に急ごうとした。でも、その必要はなかった。廊下の奥のドアが開いて、トマトクンとピンパーネルとサフィニアが出てきた。

「──トマトクン！　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが……！」

「ああ、そうらしいな」

　すでに、例のトマトクン独特の嗅きゆう覚かくで察しているのだろう。長身をいかした大おお股またでこっちへ向かって歩いてくるトマトクンの表情は、やや険しい。というより、また苛いらついているのか。いったい何に苛立っているのだろう。マリアローズは一いつ瞬しゅん、不安になった。正体のわからない、曖あい昧まい模も糊ことした不安だった。それがなんらかの形をとる前に、３１６号室のドアが開いて、髭ひげとユリカが出てきた。トマトクンたちは足を止めて、二人が追いついてくるのを待った。

「治ち療りようはだいたい終わったわ。完かん全じえんとはいえないにしても、今できることはじぇんぶやったというかんじね。脳に血けつ腫しゆが見ちゅかって、しょの処置にかなりてまどったけど──」

「最後は二人がかりの力ちか業らわざであったな。意識はまだ戻もどっておらぬが、これで快復できねば、残ざん酷こくなようだが、もう手の施ほどこしようがあるまい」

「動かせるのか」

　トマトクンにそう問われた髭は、顎あごをしゃくって３１６号室を示してみせた。

「問題ないとは言えぬがな」

　その「問題ないとは言えぬ」状態の巨きよ漢かんが、担たん架かにのせられて３１６号室から出てきた。担架の両りよう端はしを持っているのは、たいそう趣しゆ味みの悪い紫むらさき色いろのスーツを着たイビツと、肥満気味のボボ・ファッチョだ。彼らのために、内側からドアを開けて支えていたカルロ・ボッシが、あとに

つづいた。それから、医術士服を身にまとった中年の男女。３１５号室から、あの野暮ったい服装の女の子も出てきた。三階の警備をしていたパンカロ・ファミリーの連中が彼らを取り囲んで、マリアローズたちもトマトクンの周りに集まり、皆みなで一団となって、さあこれからどうするという態勢だ。

　もっとも、トマトクンの腹はもう決まっているようだった。この状じよう況きようで、さっさと逃げだそうとしないわけだから、そういうことだろう。

　それなのに、トマトクンの前に進みでて、

「あなたがたは部外者だ」

　なんて言ってみせるカルロ・ボッシという男のことが、マリアローズにはどうしても理解できない。とことん素す直なおになれない人なのかな。僕が言えた義理じゃないけどさ。

「見てのとおり、私たちは動きが鈍にぶくならざるをえません。これまでの連中のやり口を考えれば、最悪、このあたりも火の海になる。巻きこまれるのはごめんでしょう。あなたがたはとっとと逃げてください」

「もう半分巻きこまれちまってるようなものだと思うがな」

「うちは今、負ふ債さいだらけだ。これ以上、貸してもらっても、返済できそうにないンですよ」

「なんなら、踏ふみ倒たおしてもかまわんぞ」

「それも善意ってやつですか」

「どうとでもとればいい。俺はただ、乗りかかった船から途と中ちゆうで降りるのは性しように合わん。それだけだ」

「あてにはしません」

「好きにしろ。俺たちも好きにするさ」

　トマトクンは唇くちびるの端はしで笑ってみせ、ユリカと髭を、それからサフィニア、ピンパーネルに次いで、カタリ、ロム・フォウ、マリアローズを順々に見た。

「ピンカラ・ファミリーの避ひ難なんを掩えん護ごする。いいな」

「……それをいうなら、パンカロ・ファミリーでしょ？」

「うむ。そうか。まあ、細かいことは気にするな」

「そんなに細かいことかな……」

「ちゅうか、毎度毎度、お前じぶんはいちいち細っかいねん」

「顔まで非人間的なくらい大おお雑ざつ把ぱすぎるきみからすれば、そう感じるのかもね」

「人間的じゃ・ナイ……」

「のう、ピンプ、そこで何かをあきらめたみたいなため息つくんはやめてくれへんかな？　あと、悲しげに首を横に振ふるのもな。憐あわれむみたいな眼まな差ざしもやで。つらいからな。地味にこたえるやん？　ちゅうか、いつからそないに表情豊かな男になったん、お前じぶん？」

「……人は……変わってゆくものです……」

「さもありなん。至言だな」

「しょうね。といっても、なかにはじぇんじぇん成しえい長ちようしない人もいるけど」

「そ・こ・で・わしを見るなァァッ！　しかも、なんで全員一いっ斉せいに見よるんや！」

　わおおおおん！

「──って、お前じぶんもかい！」

「仲間はずれにされて、少し怒おこっているみたいなんだ」

「ん？　そうか。そいつはすまなかったな、アルファ」

　うおおおおおん！

「……あの、なんかさ、牙きば剝むいて、猛もう烈れつに威い嚇かくしてるようにしか見えないんだけど……僕の気のせい……？」

「いや、気のせいじゃないよ。なんだろう。トマトが嫌きらいなのかな」

「ドァハッ！　種族を超ちよう越えつしたライバルっちゅうわけやな！」

「ライバル？」

　ロム・フォウは尖とがった顎を指でつまんで首をひねっている。どこか浮うき世よ離ばなれしている人だから、もしかして、知性とは別の部分で、とんでもなく鈍いところがあるのかもしれない。

　でも、まあ、なんにしても、トマトクンが決断したのなら否いなやはない。状況も切せつ迫ぱくしている。カルロ・ボッシあたりにはすっかり呆あきれられている。いつまでもこんなことをやっているわけにもゆかない。そんなマリアローズの気持ちが伝わったのかどうか。

「──よし」トマトクンがもう一度、皆を見まわした。今度はアルファもふくめて。「とりあえず、外に出るか」

「了りよう解かい」「よっしゃァァァ──ッ！」「うむ」「はイ」「わかったわ！」「……はい！」「うん」うおおおぉん！

　アルファの返事はまだ若じやつ干かん不ふ穏おんな威い圧あつ感かんをはらんでいたものの、ひとまずＺＯＯの一員として行動するつもりはあるらしい。ピンパーネルが先せん陣じんを切って駆かけだすと、アルファはその横について併へい走そうした。彼らの後ろにトマトクン、ロム・フォウ、マリアローズの順でつづいて、カタリ、サフィニア、ユリカ、髭ひげが最さい後こう尾びだ。パンカロ・ファミリーは、イビツとボボ・ファッチョの担架を囲んで、ＺＯＯの後ろを移動する恰かつ好こうになった。ロビーからマリアローズたちを追ってきた警備員たちは、上階で騒さわぎ立てている一いつ般ぱん客きやくの対応に追われているようだ。サンブレイク・ホテルの高級感たっぷりで品のいい静せい寂じやくは、もう完全に破れていた。ロビーから始まって、三階に伝染した騒そう動どうは、全体に広まってゆきつつあった。階段を駆け下りているあいだ、マリアローズはそれを肌はだで感じていた。

　作りあげられ、守られていたいろいろなものが、壊こわれてゆく。

人々が混乱する。

あるいは、猛たけり狂くるう。

右往左往する。

バラバラになる。

エルデンではわりとよくあることだ。でも、ジェードリでは違ちがう日々が待っているはずだった。そう思っていたのに。甘かったんだ。だって、結局、ここはサンランド無統治王国、法もない、秩ちつ序じよもない、そんなものが欲しいのなら自分でなんとかするしかない、最低最悪な自由の国なんだから……！

「今度はサンランドじゃなくて、どっか別の国がいいかも！　どうせ行くなら！　旅行！」

「せやなあ！　ユニオン・カバナなんかどや！　えらい風ふう光こう明めい媚びなとこらしいで！」

「白くホワイト長いロング海岸コーしゆトね！　前に、本で読んだことがあるの！　見み渡わたしゅかぎり、白い砂しゆな浜はまがじゅーっとちゅぢゅいてるんでしゅって！」

「ワタシ、ソコ・泳ぎつきマシた」

「おお！　ほんだら、ピンプは土と地ち勘かんあるんやな！」

「や、そこは『泳ぎついたんかい！』とかってツッコむところでしょ！」

「をぅ？」

「しょういえば、ユニオン・カバナは、カジノでも有名みたいよ！」

「……わ、わたしがいると……大負けしてしまうかも……！」

「ガハハッ！　それもまた一興ちゅうやつやないか！」

走りながらのそんな会話を聞いて、トマトクンが顔を半分だけ振り返らせ、ニヤッと笑った。なぜだか、その表情にすごく勇気づけ

られた。大だい丈じよう夫ぶだと思えた。平気だ。いつもの雰ふん囲い気き、いつものＺＯＯだ。僕らは━━僕は、やれる。なんとかなる。これまでだって、やばいことは何度も経験してきた。それらをぜんぶ乗り越こえて、今、僕らはこうして、ここにいる。僕はもっと自信を持っていい。もっと楽観してもいいんじゃないか……？

　気張りすぎだって、カタリに言われた。

　いちいち細かいって。

　そのとおりかもしれない。たしかに、思いあたる節はある。一度気になりだすと、なんでもかんでも気になって、すべてがびしっと整っていないと、不安で仕方ないし。その性しよう分ぶんのおかげで、錬れん金きん術じゆつの第一段階である混合生成や反応生成は、かなり上達が早かった。嬉うれしくなんてなかったが、子し爵しやくには筋がいいと言われた。それについては、まあ、今も役に立ってはいるけれど、自分でもちょっとどうかなと思うことがある。融ゆう通ずうがきかないというか。極きよく端たんすぎるというか。何事につけ、無理にでもはっきり白黒をつけないと気がすまなかったりするし。カタリは「それで人間ぜんぶロクデナシやて思いこむんもアレやろ」と言った。「実際、どうしようもないやつもおれば、マシなもんもおるんや」って。僕だって、それはわかっていた。わかっていたはずなのに、いつかの僕は、決めつけて、あきらめて、それで楽になれるわけじゃないと薄うすうす気づいていながら、楽になろうとしていた。楽になりたかった。

　どうせ、人間なんてものは、信用に値あたいしないんだ━━と、思うことで。

　いい人間も、そりゃあいるのかもしれない。でも、ようするに、同じだ。人間は人間だ。いざとなれば、掌てのひらを返すにちがいない。そう考えておいたほうがいい。だって、どうやって見分ければいいのさ？　いい人。悪い人。いい人に見えて、本当は悪い人。悪いように見えて、いい人。僕にはわからない。人は、どこまでいい人でいられるものなのか。親切な人が、自分に害が及およびそうになった瞬しゆん間かん、豹ひよう変へんする。そんなことはザラにある。ありふれている。僕だって、そういうときは、彼らと同じことをするかもしれない。その可能性がないとはいえない。つまり、僕も彼らと同じく信用に値しないんだ。だから、彼らを責める権利なんて、僕にはない。

マリアローズは、ちらりと振ふり返ってカタリを見た。

一人きりで、何回もとんでもない目に遭あいながら、それでも人を信じようとして、絶望や失望をはね返しながら、実際、カタリは人を信じてきたんだろう。

強いね。

すごいよ。うん。本当に。絶対、言わないけど。心の底から、すごいと思う。

もし、だよ？　もし、きみがいなかったら――あの日、あのとき、閉へい鎖さ魔ま宮きゅうで、僕のせいで死んじゃったのに、僕のことを気にかけてくれて、捜さがしてくれて、つかまえて、声をかけてくれた、きみがいなかったら。

僕はここにいなかったかもしれない。ＺＯＯに入ることはなかったかもしれない。

ＺＯＯに入って、僕はようやく見つけることができた。

信じる強さを。

それは、きみが持っている強さにはとうてい及ばないに違いない。

でも、僕のなかにもあったんだ。

小さな、本当に小さな勇気と、ほんのちょっとの強さが。

そのことに、気づかせてくれた。

なんとかなる。

そうだ。

どうとでもなるよ。

みんながいるんだ。僕だけじゃない。僕はもう少しいいかげんになってもいい。いつだったか、カタリに怒おこられたっけ。「ええかげん、もうちょいわしらのこと信じて、アテにしてくれたってもええんちゃうか！」って。僕は部外者のカルロ・ボッシとは違ちが

う。あてにしてもいい。頼たよっていいんだ。

　そもそも、考えてみるといい。

　僕はＺＯＯで一番頼りない。そんな僕が背負うことのできる荷物なんて、たかが知れているはずじゃないか？

　分不相応は身を滅ほろぼす。そうなったら、結果的にはみんなに迷めい惑わくをかける。身の程ほどをわきまえて、自分にできることを、できる範はん囲いでやる。失敗しても、仲間たちがフォローしてくれる。僕だって、可能なかぎり仲間の手助けをする。お気楽に、というわけじゃなくて。ただ、必要以上に肩かた肘ひじを張ることはない。どのみち、大おお袈げ裟さに力んでみたところで、僕は僕以上のものにはなれないんだから。

　なんだか、少し身体からだが軽くなったように感じた。

　一階のロビーまで下りて、アルファがぶち破ったドアから一気に外へ飛びだすと、十一巡じゅん月げつの夜気がちょっとだけ心地よかった。

　これから先、行く手に何が待ち受けていても、平気だと思った。

　すぐに考えなおした。

　そうでもない、かも。

「……すごい数なんだけど」

　サンブレイク・ホテルは湾わん岸がん道路に面して立っている。旧埠ふ頭とうと新埠頭を繋つなぐジェードリの幹線道路の一つである湾岸道路は、夜でも橙だいだい色いろの半永久灯に照らされていて、見通しがいい。おかげで、やつらの姿もはっきりバッチリ見える。

　騎き馬ばの群れだ。

　数は、よくわからないが、たぶん二百とか、三百とか。

　駆かけてくる。

　怒ど濤とうのように迫せまってくる。

　マリアローズたちがいるホテル玄げん関かん前の石段まで、もう五百メーテル──いや、四百メーテルくらいだろうか。そんな距きょ離り、人間の足で走っても、一分か二分だ。ここで問題です。じゃあ、馬なら？（正答例）考えている暇ひまがあったらさっさと逃にげなさい。

　そういえば、さっきまでホテルの真ん前にあったマルナカ商店が、どこにも見あたらない。なかなかに目ざといというか、逃げ足が速いというか。あのでかい屋台が、この短時間でどうやって移動したのか謎なぞだが、マリアローズたちもマルナカ商店に負けてはいられない。振り返って見ると、カルロ・ボッシらパンカロ・ファミリーの一団は、ホテル脇わきの小道を抜ぬけて北へ向かおうとしているようだ。さあ、さっさと逃げないと──いけないのだが、そう簡単にはゆきそうもなかった。

「まずいな」トマトクンが片方の眉まゆをつりあげて、大たい剣けんの柄つかに手をかけた。

　まったくだ。本当に、まずい。だいたい、パンカロ・ファミリーはチーロ・パンカロを運ばなければならないので、全速力で脱だつ兎とのごとく走り去るというわけにはゆかない。さらに、ホテルから一いつ般ぱん客きやくが次々と飛びだしてきて、ワーワーギャーギャーわめきながら、玄関前であたふたしたり、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、なかにはなぜかパンカロ・ファミリーについてゆこうとする者もいたりして、邪じや魔まで邪魔でしょうがない。とはいえ、彼らを強制的に排はい除じよするわけにもゆかないし、そんな暇だってないわけだし。

「ま、まあ……でも、べつに、僕たちを狙ねらってるわけじゃないかもしれないし、ね……？　こっちに向かってくるのも、単なる偶ぐう然ぜんだったり……」

「賭かけでもするか」

　トマトクンは少しだけ笑った。こんなときでも、やたらと落ちついている。いつものことだけれど、いったいどういう神経をしているんだか。

「……やめとく。絶対に勝てる賭けしかしない主義だから」

「百パー勝ててまうギャンブルがどこにあんねん」

「だから賭け事は一いつ切さいしないんだけど」

「つまらん人生やのう」

「余計なお世話。きみみたいにおもしろおかしい人生送って、顔までおもしろくなっちゃうよりはずっとマシだし」

「顔面凶きよう器きdeath」

「わしのツラは人殺しかい！　女殺しやったらよかったんやけどな！　むしろわしが女にキルされまくりでな、残念なことにな、たいがい精神的にやけどな……！」

「やむをえんな」トマトクンが一つ息をついて、大剣を抜いた。「ここでやつらを足止めするぞ。サフィニア、魔ま術じゆつを頼たのむ」

「……は、はい……！」

「俺とピンプ、髭ひげは前だ。他ほかはサフィニアを守れ。散るなよ。退ひき時は俺が指示を出す」

　マリアローズたちは返事もそこそこに隊列を組んで、騎馬の群れを待ちかまえる態勢になった。ドキドキしてきた。というか、しばらく前からずっとドキドキしっぱなしだ。知らずに呼吸が荒あらくなる。あとせいぜい百メーテルくらいか。もっとあるか。どっちにしても、もうかなり近い。騎馬。騎馬ども。敵。敵──なんだろうか？　まだ実感がわかない。連中は赤地に黒十字の旗を持ったり陣じん羽ば織おりを着たりしているが、どうも装備が不ふ揃ぞろいで、勢いはあるけれど、決して足並みがそろっているとはいえないように見える。あれが、敵？　血塗れブラツド聖堂テンプル騎士団ナイツ。そう、敵だ。敵らしい。

　マリアローズはベルトのホルダーに手をかけた。

　やっぱりやめて、偽にせ劫ごう火かの柄を握にぎった。

　妙みような感覚があった。

　まるで、自分の後ろにもう一人の自分がいて、そこから自分自身をじっと見つめている、みたいな。

僕は、冷静──なのかな……？

周りのものがよく見えるし、音もはっきりと聞こえる。しっかりと状じよう況きようを把は握あくできていると思う。僕は少し緊きん張ちよう気味で、若じやつ干かん硬かたくなっている。それもわかっている。でも、なんだか変だ。感情。そう、気持ちが抜けている。おかしい。いろいろあって、トマトクンがやると決めた。髭のことだってある。髭にとって、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは仇かたきだ。だから、僕もやる。それでいいじゃないか。それ以外に何が必要なわけ？

戦う理由なんて、そんなものに思いを巡らしているあいだに、僕をとりまく景色はどんどん変わってゆくのに。

あたりの空気は、もうすぐ噎むせるような血なまぐささをはらんで、潮の匂においなんて消し飛んでしまうだろうに。

「極羅雪怨慈励印ＲｅｕＬａｕＲｕ度律……」

でも、やっぱり、賭けなんかしなくてよかった。

騎き馬ばどもは、まっすぐこっちへ向かって走ってくる。

呪じゆ文もんの詠えい唱しようがもうすぐ終わり、サフィニアの魔術が発動しようとしているとも知らずに。

「□□ＭａｕＬｅｕ浄土Ｄｕｇｕｓ痕厳頑玄月結氷獄」

それは地面から噴ふきあがって、白波のごとく騎馬の群れの先頭を襲おそった。湾わん岸がん道路の一角のごく一部だけを直ちよく撃げきした、十一巡じゆん月げつどころか真冬のさなかでもありえないような異常気象だった。というか、二十メーテル以上離はなれているのに、こっちまで寒い。寒いなんてものじゃない。

冷気。すさまじい冷気だ。ほとんど一いつ瞬しゆんだった。十か二十の騎馬が、見る間に真っ白になってゆき、動きを止めて、悲鳴をあげることもできず、折り重なって地面に倒たおれた。後続が彼らに蹴けつ躓まずいて前のめりに転てん倒とうし、そいつらがさらに障害物となって、石段の前にちょっとした人馬の塀へいができた。これで少しは足止めできるか。サフィニアだけに働いてもらった形で悪いけど、もう逃げちゃってもいいんじゃない？　マリアローズがそう思いかけたときだった。

　トマトクンが猛もう然ぜんと突とつ進しんしていって、倒れた人馬の塀を飛び越こえ、大たい剣けんを一いつ閃せんさせて、人間を馬ごとザバァンと叩たたき斬きった。

　そのときにはすでに、ピンパーネルはトマトクンを追い越して、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣で血肉の輪舞曲ロンドを奏かなでていた。

　髭はちょっと遅おくれた。

　ただ、トマトクンを上回る巨きょ体たいが華か麗れいに宙を舞まい、一頭の馬の胸に「拝ッ……！」と掌しよう打だを見み舞まうと、恐おそるべきことが起こった。

　ボウゥンッ、と弾はじけたのだ。

　皮ひ膚ふが。肉が。骨が。

　当然、馬は絶命して崩くずれ落ちた。乗っていた人間は、地面に転がり落ちたところを、髭の拳こぶしでたやすく粉ふん砕さいされた。頭部だった。粉々になったようにしか見えなかった。あのう。兜かぶととか、かぶってたみたいだけど。おそらく、金属製の。素す手でで、ぜんぜん問題なし？　マジで？　何もの？　超ちよう人じん？　──髭は合がつ掌しよう瞑めい目もくして天を仰あおいだ。

「ううむ……またもや殺生を。しかも、馬に罪はないというのに。しかし、拙せつ僧そうの筋肉が、筋肉が騒さわぐのだ、筋肉がハァァッ……！　恩師ダイダラン・ムソーはおおせになった。『無数の罪と矛む盾じゆんを負うてぬしは生きよ』と。これもまた宿業なり。なれば、拙僧は打ち砕くだかん！　破は壊かいせん！　我が筋肉の導きに従いてェェハァッ……！」

　いや、ぜんぜん意味がわからないんですけど。もしかして、なんか変なスイッチ入っちゃってる……？

　はっきりいって、とくに髭については、仲間のマリアローズでもそうとう怖こわいので、敵はもっと恐れをなしているだろう。

　実際、髭の右に大剣をかつぐように構えたトマトクンが、左に雌雄一対の短剣を両手に提さげたピンパーネルが立って、敵をひと睨にらみすると、何十人もが一いつ斉せいに息をのむ音がした。敵の動きが止まった。連中は明らかに気け圧おされていた。

おそらく、それこそがトマトクンの狙ねらいだったのだろう。一気に畳たたみかけて、敵の意気をくじき、その隙すきに逃にげるというわけだ。その目もく論ろ見みは成功しそうだった。トマトクンが駄だ目め押しをするように、不敵に言い放った。

「悪いが、ここから先は通行止めだ。他をあたれ」

むろん、そんなふうに言われて「はい、そうでしたか、すみません」と引き返す馬ば鹿かはいまい。とはいえ、トマトクンが発した言葉の意味を誤解する愚おろか者もめったにいないだろう。つまり、トマトクンは暗に通行料を要求していて、その料金は安くない。それどころか、高い。非常に高い。命だ。ようするに、「死にたければかかってこい」とトマトクンは言っている。さらに嚙かみ砕いて言えば、お前たちが二百いようと三百いようと、お前自身は一人だ、たとえ数の力で俺たちを殺せたとしても、お前は死ぬかもしれない、それでもいいなら、こいよ、殺してやる──そんなふうに言われて、「いいですよ、べつに」と即そく答とうできる命知らずも多くはないだろう。

とりわけ、近くで見た彼らは、顎あご鬚ひげを奇き妙みような形に編んでいたり、垢あかにまみれた不潔ヅラだったり、ハクをつけるためとおぼしき傷きず跡あとだらけだったり、汚きたならしく日に焼けていたりで、悪党というよりも蛮ばん人じんの風情ふぜいがある。たとえていえば、山さん賊ぞくか海賊がお仕着せの装備を身につけて、なんとかそれらしい恰かつ好こうをとりつくろっているといったかんじだ。この手の連中は、概がいして押しは強いが、押されると弱くて粘ねばりがない。決めつけはよくないかもしれないけれど、事実、彼らは逃げ腰ごしになっていた。

あと一押し。もう一押しすれば。

「──この×ン×ス野や郎ろうども！　お前たち、男だろう！　男のくせに、タマはついてないのか、××タマは！　お前たちが股こ間かんにぶらさげてる×ン×はただの飾かざりかよ、だったらケツでも掘ほりあってろ、腐くされオカマファ野郎ギーどもめ……！」

そう。

そんなふうに、ものっすごく汚い言葉で叱しつ咤た激げき励れいして──、

「って、え……？」

「―ち……？」

「あ！　ダメ、サフィニア！　うっかりとかついとかでもその先は言っちゃダメだから！」

「……はっ！　は、はい……」

「しょれにしても―」

「な、なんちゅう卑ひ猥わいな……」

　しかも、女の声だった。当然、声だけ、なんてことはない。隊列をかきわけて、というより強ごう引いんに押しのけて前に進みでてこようとしている葦あし毛げの馬にまたがっているのは、まぎれもなく女性のようだった。

　獅し子しの鬣たてがみを思わせる、すごい金きん髪ぱつだ。

　金属板で補強された革かわ鎧よろいを着ているが、防具としてはあまり役に立ちそうもない。というか、寒くないのだろうか。防具としてはあまりにも露ろ出しゆつ度どが高すぎる。鍛きたえ抜ぬかれた、だが、十分以上に女性らしい身体からだを誇こ示じしたいのか。それとも、全身に彫ほられた刺いれ青ずみを見せびらかしたいのか。十じゆう字じ架かと祈いのる女性をモチーフにした、精せい巧こうで美しいものの、なんともおどろおどろしい、赤と黒の刺青を。

　まあ、それよりも何よりも、目を奪うばわれてしまう特とく徴ちようが、彼女にはあるのだが。

　思わずじっと見てしまって、目をそらす。

　顔だ。

　右半面は、かなりの美女といってもいい。

　でも、左半面は―あれは、火傷やけどの痕あと、だろうか。目も、鼻も、唇くちびるも定かではない。見るも無残だ。しかし、その気になれば頭とう髪はつで隠かくすことだってできるだろうに、彼女は堂々とその左半面をさらしている。傲ごう然ぜんと。不ふ遜

そんなまでに。

　そして、唇をぺろりと舐なめ、腰こしに丸めて提げていた鞭むちをひっつかんだ彼女は、それで近くの騎き馬ばをビシィッと打ちすえた。馬上の男は赤地に黒十字柄がらの布を首に巻いて、革鎧を着ていたが、あの鞭は単なる鞭じゃない。鉄鞭だ。痛いと思う。実際、かなり痛そうだった。

「──ギヒイッ！」

「アハ！　もっといい声で鳴けよ、ケツメド野郎！」

　つづけざまにもう一発。さっきより力強い一発を背中に食くらった男は「ギャヒャァァッ！」と悲鳴をあげながら馬から転げ落ちて、地面の上でのたうちまわった。

「アハハ！　痛いか！　痛いだろう！　それが罪！　罪の痛みだよ！　罪は痛いんだ、どこまでも痛い、世界を徹てつ底てい的に痛めつける！　ようするに、そのことをお前たちはまるっきりわかってない！　お前たちは、おのれの無知を自覚できてない愚かなペド野郎だ、下げ劣れつなマゾだ、無能で早そう漏ろうで短小でまったく使えないあたしの下げ僕ぼくどもだ！　わかったか！　何？　わからない？　そうだろうと思ったよ。お前たちの頭で理解できるはずがない。それでも、救われる方法はある。簡単だ。死ねばいい……！」

　女は右半面に凄せい艶えんな笑えみを浮うかべながらそう言ったかと思うと、いきなり激しく首を横に振ふって、鞭を持ったままの右手で自分の胸をかきむしるように押さえた。

「──ああ……！　はしたない、なんてはしたないのでしょう、わたくしとしたことが！　やはり過去は断たち切ろうとしても断ち切れるものではないのですね！　逃げても逃げても追ってくるもの、それが過去！　それもまた罪……！　グランドマスター・サー・ジューダス、どうかわたくしをお許しください！　いいえ、お許しいただけなくてもよいのです！　わたくしはただつとめを果たします！　サー・ジューダスとロシュの御おん為ために！　そうよ、そうだわ、わたくしのこの汚けがれた身と魂たましいはそのためだけに……！」

　正直、「あのー、もしもし、あなた、大だい丈じよう夫ぶです

か？（主に脳みそとか）」と声をかけたい気分ではあった。ついそんな気分になってしまうくらい、呆あつ気けにとられていた。

　そのせいで、完全に時機を逸いつしたことに気づいたときには、もう遅おそかった。

　やばい、と思った。それとほぼ同時だった。

　女が鉄鞭で地面を叩たたいて、騎馬の群れに鋭するどく命じた。

「さあ、醜みにくく愛らしい哀あわれな下僕ども！　わたくしの鞭に打たれて殺されたくなくば、あの者たちを殺して死になさい！　ロシュは偉い大だいにして寛かん大だいです！　死者は平等に救ってくださいます！　今こそ救いをもたらし、救われるのです！　ついでに、雄お々おしく働いた者は、わたくしがたっぷりかわいがってア・ゲ・ルゥゥゥゥゥッ……！」

　醜く愛らしい哀れな下僕どもは、それで一気に息を吹ふき返した。

「うぉぉ！」「お嬢じようのために……！」「イオネア様万ばん歳ざい！」「お嬢の命令だ！　殺せ！」「お嬢！　お嬢……！」「やっちまえ……！」

　──どうも、彼らの中では、罪だの救いだのとは必ずしも結びついていないようだが。

　まあ、動機が女に対する忠誠心であれ、ロシュだかジューダスだかの意思だかに添そうためであれ、マリアローズたちにとっては同じことだ。敵は敵だ。

　トマトクンは最初に突つっこんできた騎馬を大たい剣けんでズッパリ斬きり上げたが、それでも連中は怯ひるむ様子を見せない。髭ひげじゃないけれど、あっちもスイッチが入ってしまったらしい。このままでは、乱戦になる。そうなれば、こっちは数でいえば圧あつ倒とう的に不利だし、全員が全員、トマトクンのような一騎当千の強者ではないのだから──というか、マリアローズとか、マリアローズとか、マリアローズとか、少なくとも個人的な戦せん闘とう能力の面では微び妙みようすぎる人員がいる以上、いずれはほころびが生じるだろう。真っ向勝負は現実的じゃない。そんなことは百も承知だろうトマトクンが、踵きびすを返して叫さけんだ。「──退

ひけ……！　マリア！」

　自分でも少々驚おどろいた。ちょっとすごいかも、と思って、鳥とり肌はだが立った。

　ただ名前を呼ばれただけで、マリアローズはトマトクンの要求を正確に理解したのだ。身体も瞬しゅん時じに動いてくれた。ベルトのホルダーに手をのばす。カバーを外して、ハーレム・ゴードンの小こ瓶びんを抜く。右手で二本。左手で二本。爆ばく弾だん、計四本。マリアローズは、騎馬どもに追われながらこっちへ駆かけてくるトマトクン、髭、ピンパーネルの向こうに狙ねらいを定めた。息を吸い、止めた。投げた。爆弾が地面か人馬にぶつかって割れる前に、ためらわずに方向転てん換かんして、先に逃にげだしたユリカたちの背中を追いかけた。「──爆ばく発はつするから……！」一応、そう注意しておいた。その直後だった。

　ドンドンドドンンンンン……ッ！　閃せん光こうと爆ばく音おんと衝しよう撃げきが立てつづけにきた。悲鳴や騎馬連中がぶっ倒たおれる音はよくわからなかった。爆弾四本の材料費がいくらだとか、それで敵にどれだけ被ひ害がいを与あたえられただろうかとか、そんなことも考えなかった。

　振り返らない。足を動かす。走れ。走れ。走れ。今はひたすら走れ。先頭はアルファだ。その後ろにロム・フォウがついて、ユリカとカタリがサフィニアの両りよう脇わきをかため、マリアローズがいて、髭、ピンパーネル、トマトクンの三人は、たぶんほとんどひとかたまりになって駆けている。ＺＯＯの八人＋αはサンブレイク・ホテルの玄げん関かんを横切って、パンカロ・ファミリーが先に行った小道を目指した。さっきまでホテル前を混雑させていた一いつ般ぱん客きやくたちは、すでに見あたらない。もう逃げたか、逆にホテル内へ引き返したか。わからないが、そこまで気にしてはいられない。自分たちのことで手て一いつ杯ぱいで。そのわりには、折にふれていろいろなことに首を突っこんでいるような気もするけれど。とりあえず、それはそれとして、今は逃げないと。爆ばく炎えんやら煙けむりやらが目くらましになって、敵の出足も多少は鈍にぶっているはずだと考えたいところだが、過度の期待はしないほうがいい。下手に期待なんかすると、裏切られたときがつらい。

　いずれにせよ、小道まではもうすぐだ。アルファが急角度で左折して小道に飛びこんだ。すぐにロム・フォウも。せいぜい三メーテ

ルほどの幅はばしかない、石いし塀べいと建物に挟はさまれた狭せまい道だ。敵が追いついてきても、数的有利をいかしてこっちを包囲することはできない。それが慰なぐさめといえば慰めで、そんなことを考えながらマリアローズは角を曲がり、小道に駆けこんで、行く手を見た途と端たん、「……あ」と声がもれた。立ち止まりはしなかったが、足が止まりかけた。

　なんてことだ。

　敵は、あいつらだけじゃなかった……？

　つまり、そういうことだろうか。

　そうとしか思えない。

　だって、まさか、偶ぐう然ぜんではないだろう。今、このタイミングで、たまたま小道の向こうのさらにずっと向こうで火の手があがり、おびただしい煙が夜空を襲おそって、どうやらバルモア地区全体が揺ゆれ動きつつある──なんて、そんなことあるはずがない。あってたまるか。

　やつらの仕し業わざだ。

　昨夜、名人街を焼き払はらって、その前は赤線地区を焼け野原にした血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが、今夜はバルモア地区を灰かい燼じんに帰してしまおうとしている。いったい、なんのために……？

　知ったことか。どうでもいい。それより、問題は、これはもう、どう考えたって他ひ人と事ごとじゃないということだ。

　マリアローズたちは、完全に巻きこまれてしまった。それどころか、渦か中ちゆうにいる。逃げようにも、前は火事で、後ろは騎き馬ばだ。いや、風向きのせいもあるかもしれないけれど、焦こげくさい匂においはしない。正確な距きょ離りはちょっとわからないが、火災はまだ遠いようだ。とにかく、今は前へ前へと進むしかないか。トマトクンからも、べつに他ほかの指示は出ていない。人間じゃないのであたりまえだが、人間離ばなれして足の速いアルファは、間もなくパンカロ・ファミリーやら一いっ般ぱん人じんやらの集団に追いつくだろう。

　迷うな。

僕が迷ったって仕方ない。

マリアローズは気合いを入れなおして、地面を蹴ける足に力をこめた。

でも、なんだか、落ちつかないんだ。胸がざわざわする。けど、それがどうしたっていうんだ。大だい丈じよう夫ぶだ。僕なんかが、いちいち何か感じとったり判断したりする必要はない。トマトクンがいるんだ。仲間がいるんだ。任せればいい。信じていい。頼たよっていい。僕は、僕にできることはやっているし。実際、やったし。トマトクンのごく短い、指示ともいえないような指示を、僕はちゃんと受けとった。あんなこと、以前の僕では考えられない。僕は──ほんの少しずつかもしれないけど、進歩している。成長できている。しっかりやれている。卑ひ下げしなくていい。僕はちっぽけで、役立たずで、出来損そこないで──そんなふうに考えなくていい。僕は、だから、みんなに頼っていいんだ。その資格があるんだ。

信しん頼らい。

そんな言葉が、僕の胸に刻まれる日がくるなんて、想像もしていなかったけれど。

信じてもいいですか？

そんなふうに自分から訊きくことなんてできない。

だって、なんだか恥はずかしいし、断られたらと思うと怖こわいし、自分みたいな人間が心底から誰だれかを信じられるのか自信も持てないから、いつも立ちすくんで、うつむいて、引き返して。

僕は一人だった。

でも、こいつらってば、そろいもそろってお人好しで、変人ばかりで、僕を一人にしてくれない。カタリの言うとおりだ。バカなんだ。底なしのバカばっかりなんだ。僕はこいつらから逃げられそうもない。逃げるつもりもない。結局、僕はもう信じている。ＺＯＯの皆みなを信じている。どこまでも信じ抜ぬこうとしている。後こう悔かいなんかしない。絶対にするものか。僕は、せっかく見つけたんだから……！

だから、こんな窮きゆう地ちも切り抜けないといけない。いや、

切り抜けられる。平気だ。ぜんぜん余よ裕ゆうだ。

　たとえ、前方のパンカロ・ファミリーが急に止まって、怒ど号ごうと悲鳴と雄お叫たけびが一いつ斉せいにわき起こっても。

　突とつ然ぜん、ロム・フォウが足を止めて振ふり返り、弓に矢をつがえるなり発射しても。

　僕は慌あわてない。混乱なんかしない。わかっている。ちゃんと把は握あくしている。前の集団はどこかの道に出て、そこで敵の一団と遭そう遇ぐうし、もう戦せん闘とうが始まっている。後ろからは騎き馬ばの一隊が追いついてこようとしていた。挟まれた。挟きよう撃げきされる。どうしよう。どうすればいい？　前には敵。後ろからも敵。左はサンブレイク・ホテルの広い敷しき地ちへの侵しん入にゅうを阻はばむ高い石塀。右はほとんど隙すき間まなく建てられた真新しい建物群。逃にげ場はない。金属同士が激しくふれあう音。剣けん戟げきの音。足音。自分のものじゃない。人？　馬？　僕は、慌ててはいないつもりだけれど、やっぱり焦あせっているのかもしれない。立ち止まって、前を見て、後ろを見る。そんな無む駄だなことを、何度か繰くりかえした。トマトクンが叫さけんだ。

「──後ろは俺と髭ひげが止める！　ロム・フォウも掩えん護ごしろ……！　他は前だ……！」

「おう！」「了解Aye, sar.」うぉん！「よっしゃ！」「はイ」「わかったわ！」「……はい！」「う、うん！」「──があああああ……！」野や獣じゆうめいたトマトクンの声に、生き物がぶった斬ぎられるおぞましい音がつづいた。矢羽が風を切る音も聞こえたような気がした。狭い小道に、髭の狂くるったような高笑いが響ひびき渡わたった。アルファの吠ほえ声もした。マリアローズはそれらに背を向けて、パンカロ・ファミリーの一団に近づいていった。あと三十メーテル。二十メーテル。一般人らしき男女が、ワーキャーオーヒャー騒さわぎながらうろうろしていて邪じや魔まだ。どけ。どけったら。でも、彼らの気持ちもわからなくはない。

　何しろ、マリアローズは背が高くないのでよく見えないが、小道の出口は鎧よろい兜かぶとで身をかためた多数の兵士たちによって、完全に封ふう鎖さされているようだ。小道を筒つつに見立てると、両側に蓋ふたをされて、閉じこめられ、外に出られない。しかも、その蓋は迫せまってくる。筒の中にいるマリアローズたちを圧

殺してしまおうとしている。その圧あつ迫ぱく感かんはすごい。呼吸が乱れるどころか、息が止まりそうになる。恐きよう怖ふに支配されて、何も考えられなくなってしまえれば、いっそ楽かもしれないと思う。場数を踏ふんでいなければ、これはつらいだろう。いくらか修しゆ羅ら場ばをくぐり抜けてきたマリアローズでも、正直、あまり楽観できる状じよう況きようではないと考えざるをえない。まあ、考えるより動けという意見もあるだろうが、一般人はよけたり申し訳ないが突つき飛ばしたりしてなんとかなるとしても、パンカロ・ファミリーの連中が密集しすぎている。前になんか行けそうもない。

　ただ、見通しもクソも関係なく、とにかく主人の命令に従って、殺して殺してひたすら殺しまくる、敵にとっては恐おそろしい、味方にとってはこのうえなく頼たのもしい男がＺＯＯにはいて。

「──ピンパーネル……！」

　砂色の元アッサシンは、前がつまっていると見るや、二メーテル以上あるだろう塀へいに軽々と飛びのって、その上を駆かけていった。そうか、その手があったか！

　いや、塀は結構高いとはいえ、とんでもなく高いわけではないので、マリアローズでもやってできないことはないけれど、めちゃくちゃ目立つし。人目を引くということは、そのぶん狙ねらわれるわけだし。ということは、危ないし。

　そのあたりをまったく考こう慮りよしないどころか、むしろ、自分の実力を顧かえりみずに望んでそうしたリスクを引き受けたがる特大バカ半魚人も、ＺＯＯにはいて。

「おっしゃ！　わしも……！」

「止めないよ？　止めないからね？　どうなっても知らないよ？」

「た、高いわね……！　わたしの背しえだと届かないわ！　カタリ、ごめんなしゃい、ちょっと手を貸して……！」

「おお！」

「──って、なんでユリカまで！」

「うう……マ、マリア……た、助けてもらえると、助かるのです

が……」

「サフィニアも！」

　しかもサフィニアは、左手に杖つえを持ったまま塀の縁ふちに右手をかけて、なんとかぶら下がっているという情けない恰かつ好こうだった。しょうがないので、マリアローズは自分の肩かたを台にして、サフィニアを塀の上に登らせてやった。サフィニアは「……ご、ごめんなさい……」と恐きよう縮しゆくしきりだったけれど、謝るくらいなら、最初から無む謀ぼうなことはしないほうがいいと思うよ？

　どっちにしても、こうなったら一人だけここに残るわけにもゆかない。マリアローズは自力で塀によじ登って、サフィニアを背中にかばう形で前を行く半魚人とユリカを追った。この高さなら、よく見える。すでにピンパーネルは小道の向こうの通りにいて、雌し雄ゆう一対の短たん剣けんを縦じゆう横おう無む尽じんに振るっていた。その近くで、大振りのモトロール刀を手に獅し子し奮ふん迅じんの働きを見せているのは、カルロ・ボッシか。というか、まともにやりあえているのは、あの二人だけだ。あの二人だけが小道から突とつ出しゆつして、ちょっと広い通りのど真ん中で、大勢の敵に包囲されつつ、これを一人二人と斬り倒たおしている。あとの連中は小道に封ふうじこまれて、斬り立てられ、突っこまれて、後退せずにこらえているので精せい一いつ杯ぱいというかんじだった。それも、いつまでもつか。

「——百……は、いないと思うけど、でも……」

　後ろには、少々減っているかもしれないが、二百の騎き馬ば。前にも、完全武装した大勢の兵士たち。それだけじゃない。火。あちこちで火の手があがっている。この匂におい。焦こげくさい匂いがする。近い。近くでも火が？　バルモア地区は、わりと高めの建物が密集している街なので、見通しはよくないが、それでもわかる。西のほうでも。東のほうでも。北のほうでも。何かが起こりつつある、のではない。もう起こっている。

「——たはっ！　しっかし、とんだ旅行になってまいよったなァッ……！」

「日ひ頃ごろの行いのしぇいかしら！」

「……わ、わたしの、せいかも……」

「とにかくみんな、無理はしないで！　とくに、カタリは！」

「ダァホ！　こないな燃えるシチュエーションで、無理の一つもせえへんかったら、漢おとこがすたるっちゅうもんやろが！　行くで、行ってまうで、いてこましたるでェェイヤァァッ……！」

　カタリは愛用の変形斧おのニノシーとホノゴをくるくる回しながら、塀の上を突っ走っていった。くそ、半分魚のくせに、こういうときはやたらと足が速い！　ユリカも極限クライマツクス九手ナイン棍ポールを手に半魚人のあとにつづいたが、完全に置いてゆかれた形だ。もちろん、その後ろのマリアローズとサフィニアも。まったく、きみはトマトクンとか髭ひげとかピンパーネルとは違ちがうっていうのに、どうしていつもいつも無茶しようとするわけ？　手がビヨーンと伸のびるなら強ごう引いんにでも止めたいところだが、そんなことはできないし、悪いけど、僕のほうがやっぱりユリカよりも足は速いし、でも、塀の上だから、追い抜ぬくなんて不可能だし、全速力で追いかけることはできなくて──ああ！　だけど、もうちょっとで！　というところで、カタリは「漢おとこ一匹ぴき！　只ただ今いま見けん参ざんやッ……！」とかわけのわからないことを叫さけびつつ塀から跳とびあがり、一人の兵士にドッカーンと飛び蹴げりを見み舞まった。そいつを吹ふっ飛ばして、着地まで華か麗れいに決めたら誉ほめてあげてもよかったが、残念ながら見事に無様だった。無謀にも、空中で鮮あざやかに一回転して地面に降りようとしたカタリは、回転しすぎて、したたかに背中を打った。「──ぁどぶぉっ！」

「カタリ……！」「あのバカ！」「カタリさん……！」

　当然、地面に仰あお向むけで大の字になったカタリを、敵が見み逃のがすはずはなかった。二人か三人の敵兵がカタリに殺さつ到とうしようとしたが、こっちだって手をこまねいてはいない。ユリカだ。ユリカが跳ちよう躍やくした。

「把はぁぁぁぁぁ……！」

　その手に握にぎられた極限クライマツクス九手ナイン棍ポールの先が変形して、幾いく股またにも分かれている。

　斬。砕。掛。抉。突。払。打。裂。弾。

　達人が用いれば、それら九種類の攻こう撃げき方法が可能になるという、鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術独自の武具の、それこそが真の姿だった。

　ユリカは実演してみせた。

　極限クライマツクス九手ナイン棍ポールはかく使うべし、と。

「──鵺流古式戦闘術、打だ連れん珠じゆ……！」

　過激だった。

　苛か烈れつで、壮そう烈れつで、壮そう絶ぜつで、なおかつ可か憐れんで、華麗だった。

「破汰汰汰汰汰汰汰汰汰汰ぁぁぁぁ……！」

　極限クライマツクス九手ナイン棍ポールは思うさまに斬り裂さき、引っ掛かけて弾はじき、突つき砕いて、抉り、打ち払った。

　ユリカがやったのだ。

　空中から、そして、カタリのすぐそばに着地して、地上から。

　ユリカの女性用医術士衣は返り血で染まった。そこらじゅうに人間の腕うでだの手首から先だのが転がっている。ぶっ倒れた兵士たちも、それを見ていた兵士たちも、一いつ瞬しゆん、何が起こったかわからなかったかもしれない。あるいは、我が目を疑ったかもしれない。せいぜい十歳か十一歳くらいにしか見えない少女が、たった十秒かそこらの間に、こんな大仕事をやってのけるなんて。たぶん、彼らはそう思ったことだろう。それで、仰ぎよう天てんして、啞あ然ぜんとしている間に、マリアローズとサフィニアは、ユリカとカタリの近くめがけて塀へいから飛び降りた。半魚人とは、慎しん重ちようさとか冷静さとか陸上でのバランス感覚とか種族とかが違うので、二人ともきれいに着地できた。その大おお馬ば鹿かは、ようやく立ちあがって──まだ、ぜんぜん、さっぱり懲こりていないみたいだ。

「ふっふっふ……。わしらのハイパァーなパゥワァーにビビリまくりで、声もよう出されへんようやなァッ！」

「……や、呆あきれてものが言えないのはこっちだから」

「ゆうとるやん？」

「ね、比ひ喩ゆ表現ってわかる？　わかんないか。わかるはずないよね。わかるような顔してないもんね」

「昔の人は言いよったァァッ！　人は見かけで判断してはあきまへんで、てなァ！」

「でも、人間かそうじゃないかくらいは見ればわかるでしょ」

「──爆ばく条Ｍｅｘｅｓ雷らい來らい礼れい」

　断っておくが、これは日頃から培つちかっている共通理解と、とっさの機転によって実現した巧たくみな連係プレーだ。つまり、カタリが醜しゆう態たいをさらし、ユリカがそれをカバーして、マリアローズがツッコみ、敵をぽかんとさせて、その隙すきにサフィニアが得意の爆ばく雷らい索さくを発動させる。こう言うと、嘘うそくさく聞こえるかもしれない。マリアローズとしても、若じやっ干かん苦しいような気がしないでもない。しかし、結果としてはおおむね上う手まくいったのだから、つべこべ言うより、さっさと次の手を打つべきだろう。そう──サフィニアの杖つえから発せられた幾いく条じようもの雷かみなりが、夜に浮うかびあがるジグザグの軌き跡せきを描えがいて鎧よろい兜かぶとの兵士たち五、六人を一挙にとらえ、感電させて、薙なぎ倒した。それで敵勢に走った動どう揺ようは小さいものではなかった。逃にげだす者はいなかったが、少なくとも、心理的にも、空間的にも、空くう隙げきができた。そこにつけこまない手はない。

「ピンパーネル、こいつら、一人も逃がさないで……！」

　マリアローズが偽にせ劫ごう火かを抜きながら叫ぶと、カタリがニノシーとホノゴを振ふりあげて一番近くにいた兵士に襲おそいかかった。七、八メーテル離はなれた場所にいるピンパーネルは、返事がわりに雄おすのグレアデで一人の兜を剝はぎとるなり、雌めすのリレッザでそいつの喉のど笛ぶえを搔かき斬って、別の一人に足あし払ばらいをかけつつ、これまた違うやつの右腕を手早く解体してみせた。ユリカはマリアローズと一いつ緒しよにサフィニアを守る構えだ。さっき見せたような大だい胆たんさと、今みたいな慎重な部分が、仲間にとってどれだけ頼たのもしいか。マリアローズ自身、初めてＺＯＯに面々と閉へい鎖さ魔ま宮きゆうに行ったときから、ユリカには助けられっぱなしだ。

いつか、逆にユリカを助けてあげられるようになれればと、心の底から思う。

これもそのための一歩だなんて、おこがましいことを言うつもりはない。

ただ、マリアローズの一声をきっかけに、パンカロ・ファミリーの連中が勢いづいたことはたしかだった。もちろん、マリアローズなんかよりも、ユリカやサフィニアの働きがむしろ決定的だった。マリアローズもそれくらいわかっている。わかってはいても、正直、ちょっと気持ちよかった。それほど、見る間に、鮮やかに、おもしろいように形勢が逆転した。

「──殺せ！」カルロ・ボッシがそう怒ど鳴なりながらモトロール刀でバッサバッサと斬りまくれば、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの一人に対して二、三人のパンカロ・ファミリーが身体からだごとぶつかってゆき、押し倒たおして、斬るというよりも突き殺ころす。たとえ、三人のうち一人が相討ちになって相手の剣けんに斃たおれても、残りの二人はすぐさま別の敵に突っかかってゆく。決してスマートな戦い方とはいえない。ひどく荒あらっぽい、荒っぽすぎるといっても過言ではないが、これなら多少の戦せん闘とう技術なんて問題にならない。装備の差もさしたる障害にはならないだろう。

押して、とにかく押しまくって、圧あつ倒とうして、殺して、潰つぶす。

彼らにとって一番必要なものは、おそらく、気合いだ。なんだか、カタリみたいでイヤだけれど、これが彼らのやり方なのだろう。精神論だけでは、どうしようもない場合だってきっとあるだろうが、とりあえず、今はいいかんじで押している。小道を抜ぬけた先のＴ字路は、パンカロ・ファミリーと死体と戦闘不能の重傷者たちに制圧されつつある。

そして、とうとう血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの一人が「うわあぁっ」と盾たてを放ほうり投げて逃げだした。

そうなると、あとはもう連れん鎖さ反応だった。

我先に遁とん走そうする者が続出した。

左へ。

左の道へ。

彼らがもときたほうへと。

だが、そうはさせじと、その背中にスーツ姿の男たちが飛びかかった。彼らは憎にくき敵を引き倒して、次々と刀剣を突き立てた。「──何逃げてんだ、ああ！」「ヒギイッ！」「血をSangue！」「復讐をVendetta！」「復讐をVendetta！」「た、助け……！」「ざけんなコラァッ！」「聖なる、せ、聖なる炎ほのおに、焼かれ──」「上等だ！」「……ギャアアッ……！」

そうして、あちこちで血がまき散らされた。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは、その名のとおり血にまみれた。

多くは、自分たちの血で。

凄せい惨さんな光景だった。でも、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツに同情する気持ちには、とうていなれなかった。パンカロ・ファミリーの男たちは、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの死体を執しつ拗ように傷つけながら、口々に誰だれかの名前を叫さけんでいる。なかには泣いている者もいる。彼らにとって、これは単なる殺さつ戮りくではない。復讐なのだ。もしかしたら、彼らはずっとこらえていたのかもしれない。嘆なげき、悲しみ、怒いかり、それらを爆ばく発はつさせる機会が訪おとずれる時を、ひたすら待ち焦こがれていたのかもしれない。その気持ちは理解できなくもないが、危険だ、と思った。

ほとんどひとかたまりだったパンカロ・ファミリーが、ばらけてゆく。

我を忘れたように敵を追う者。死体に馬乗りになったまま呆ぼう然ぜんとしている者。指示を仰あおぐようにカルロ・ボッシを見る者。イビツとボボ・ファッチョの担たん架かは、小道を出たところで止まっている。その後ろから、アルファとロム・フォウが駆かけてきた。髭ひげとトマトクンもくる。騎き馬ばどもはまだ遠いか。まさか、トマトクンたちが壊かい滅めつさせちゃったとか？　さすがにそれはないか。あとは──担架のそばで、足がすくんでしまって

いるのか、半分腰こし砕くだけになっている女の子が目に入った。ホテルの部屋にいた子だ。大だい丈じよう夫ぶかな……？　あの子のことだけじゃなくて。この状じよう況きようぜんぶだ。てんでんばらばらで、とりとめがなくて。それに、何かを忘れているような気が──いや、実際、忘れていたのだ。

「──っ……！」

　なんだろう。

　よくわからない。

　すごい音がした。

　たぶん、それなりに遠いけれど、そのわりにはずいぶん大きな音だった。しかも、音だけではなかった。衝しよう撃げきだ。地面が大きく揺ゆれた。ひょっとして、地じ震しんだろうか。エルデンではめったにないものの、ジェードリではどうかわからない。結構あるのかもしれない。でも、違ちがう。揺れは、ズシィ…………ンズゥ……ンズン……と、それだけで終わった。マリアローズも自分では数回しか体験していないが、地震ってこんなものじゃないはずだ。だいたい、これは。この光は。光……？　いや、そうじゃない。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツが逃にげていったのとは、逆方向だ。

　マリアローズは東のほうへ目をやった。土と地ち勘かんがないので、くわしいことはわからない。ただ、記き憶おくしている地図に頼たよれば、このＴ字路を右にずっと進むと、おそらくバルモア大通りにつきあたるはずだ。まあ、まっすぐな道ではないし、高い建物に視界がさえぎられて、よくは見えないのだが──たぶん、そっちのほうだと思う。

　赤い。

　東から北東にかけて、空が燃えるように真っ赤だった。

　炎だ。

　失念していたが、どこか遠くの方で火の手が上がっているらしいことは、さっき確かく認にんしていた。でも、その比じゃない。バ

ルモア大通りか、その近辺で、尋じん常じようではない大火災が起こっているようだ。というか、あれは今、起こったのだ。いきなり？　突とつ如じよとして？　そんなことってある？　━ないとは言いきれない。ありうる。マリアローズは傍かたわらのサフィニアを見た。サフィニアは東の空をにらんで、唇くちびるを嚙かんでいた。間違いなさそうだ。

「魔ま術じゆつの、炎」

　マリアローズが呟つぶやくと、サフィニアが顎あごを引くようにうなずいた。

「……ものすごい規模の……魔術です。今まで、感じたことのないような……こんな魔力は、お姉様でも……」

「お姉様って━あの有名な閃せん光こうの魔女マチルダだよね……」

「……お姉様は、ご自身の力を……かつての魔導王に比ひ肩けんしうるものだと、考えていらっしゃいます……もちろん、弟で子しのわたしたちにも……簡単に手の内を見せたりはしませんが……それにしても……」

「魔導王は、一人で一国を制しえいしたとも言われているわ。魔導王同士が本気でやりあったら、全じえん世しえ界かいが焦しよう土どと化してしまう。しょれで、魔導王時代の末期には、互たがいに決めたルールにのっとって相あい争あらしよう、遊ゆう戯ぎ戦しえん争しようを繰くりかえした……」

「もし、そんなのと匹ひつ敵てきする何かがいて、あれがそいつの仕し業わざだとしたら━」

　マリアローズは燃える空を見上げてから、もう一度サフィニアに視線を移した。サフィニアの表情は、いつになく険しく厳しい。何か思いつめているようでさえある。たしかに、事態は深刻だけれど、それにしてもサフィニアは切せつ迫ぱくしすぎているように感じられる。いったいどうしたんだろう━なんて、考えているうちに、抜ぬき差しならない状況に追いこまれる。よくあることだ。あって欲しくはないけれど、望もうが、望むまいが、結局、物事は起こるべくして起こるわけで。それを唐とう突とつだと思うのは、読みきれなかった、洞どう察さつ力が足りなかった、ただそれだけ

のことで。まあ、人間には限界というものがあって、なんでもかんでも見通し、知りえるはずがないから、しょうがないといえば、しょうがないのかもしれないが。

　でも、やっぱり、迂う闊かつだった。

　東の異変にかまけていて、気づくのが遅おくれた。

　今度は西だった。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの歩兵たちが逃げていった方向だ。

　それを追いかけていったパンカロ・ファミリーの数名が悲鳴をあげた。マリアローズは振ふり返る途と中ちゆうに小道から駆けでてくるトマトクンたちを見た。カルロ・ボッシがジャケットを脱ぬいでシャツの袖そでで返り血をぬぐいつつ何か叫んでいた。何を叫んだのかは聞きとれなかった。それよりも西へ向かう道だ。くる。なんでだよ。やめてよ。騎馬。騎馬だ。すごくたくさん。それも、今度の連中は、さっき相手にしたやつらより整然としていて、統率がとれているかんじがする。まず、隊列がきれいだ。装備も統一されている。それでいて、猛たけ々だけしい。彼らは、パンカロ・ファミリーの数名だけでなく、逃げてきた仲間たちをも無造作に轢ひき殺し、撥はね飛ばして、そのままの勢いで押しよせてくる。どんどん迫せまってくる。気のせいだろうか。マリアローズは、その先頭にいる兜かぶとをかぶってない縮れ毛の中年男の声が聞こえたような気がした。

「獲え物もの発見♥」

　たぶん、男はそう言って、さも愉たのしそうに笑った。それから、右手の騎き兵へい槍やりで天を突ついてみせ、これは間違いなくはっきりと大声で叫さけんだ。

「──踏みSmashつぶせ　it！」

「そんな、冗じよう談だんじゃ……」ない、と言いたい。強く言いたい。強きよう硬こうに主張したい。

　マリアローズとサフィニア、ユリカ、カタリはT字路のど真ん中あたりで、ほとんど無防備に突っ立っている。ピンパーネルにしても、カルロ・ボッシも、担たん架か組も、他ほか十人かそこらのパンカロ・ファミリーも、あの女の子も、だいたい同じだ。トマトク

ンたちだって、小道から出てきたところで、万ばん全ぜんの態勢とは言いがたい。というか、とても言えない。

　こんな状態で、あれだけの数の──どれくらいいるかよくわからないが、とにかくそうとうな数の、しかも、かなりスピードにのっている騎馬集団の突とつ撃げきを、まともに食くらったら。

　どうなる、なんて、考えたくもない。

　考えられない。

　だって、考える間もなく、もうそれは目前に迫っている。

　僕以外は、そのときに備えて、行動していたりするんだろうか。サフィニアは魔術を？　さすがに間に合わないと思うけど。ユリカはやっぱり最後まであきらめずに極限クライマックス九手ナイン棍ポールを振るうんだろうか？　カタリはどうするだろう？　ピンパーネルは？　トマトクンは僕たちを助けようとすると思う。髭ひげも。ロム・フォウやアルファは？　パンカロ・ファミリーはどうするつもりだろう？　ああ、だけど、僕は──、

　ダメだ。

　何もできない。できっこない。身体からだが動かない。頭が働かない。何も思いつかない。心臓の音がする。大きな音だ。頭ず蓋がい骨こつのてっぺんあたりまで、どくん、どくん、と響ひびいている。僕はちらっと思った。いざとなったら、こんなものなんだよね。僕なんて、所しよ詮せん、この程度で。何かしないといけないのに。でも、これでいいのかな？　本当にいいのかな……？

　いいわけ、ないよ。

　だって、僕は、さよならさえ言ってないのに。

　いいわけが、ない。

　だからってわけじゃないけれど、僕は動こうとした。

　あと十メーテル。

　いや、せいぜい、七、八メーテル。

僕は動こうとした。

何をすればいいのかわからないまま、とにかく何かしようと。

穢けがれし者よ。

「うるさい」

私はあなたを救うことができます。

「だまれ」

あなたに救いを。

「いらない」

──救いなんか、いらない。

どうせ、おれを救うことなんて、誰だれにもできない。

穢れし者。今も訳知り顔で遠くからおれに語りかけてくるいまいましい男よ。たしかに、おまえの言うとおりだ。おれは穢れている。穢れきっている。

地べたを這はいまわるちっぽけな虫のような生き物として生まれたときから、おれは穢れていた。穢らわしい存在だった。おれはそれを知っていた。自分だけでは生き抜くこともできない。自分以外をとりこんで、我がものとして、とりつくろわなければ、おれはおれでいることもできない。生まれ落ちてすぐ、おれは呼吸をするために同どう胞ほうを喰くらった。それは兄弟だったかもしれない。それとも、たまたまそこらにいた蛆うじ虫むしかもしれない。羽虫かもしれない。とにかく、おれは喰わねば生きられなかったから、喰った。よりよく生きるために、大きくなるために、多様な機能を身につけるために、喰らった。喰らいつづけた。おれはある時点か

らその行こう為いに自覚的だった。おれには知能らしきものが芽生えていた。おれは理解していた。

　おれに喰われるものの痛みを。苦しみを。悲しみを。おれに向けられる憎ぞう悪おを。恨うらみを。

　わかっていて、おれは喰らった。喰らわなければならなかった。おれは、なりたかったんだ。おれは憧あこがれていた。あの日、おれを見下ろした、あの美しい生き物に。冷たい、薄うす青あお色の瞳ひとみで、蔑さげすむでも、憐あわれむでもなく、ただおれを見ていた。おれはなれる。あのひとのように、なれる。おれは喰って、喰らって、形を変えて、あのひとのように、なれるはずだ。

　ひとに。

　おれはなりたかったんだ。

　だって、おれは知っていたから。

　おれのような、醜みにくい、おぞましい、穢らわしい生き物は、誰にも愛されない。誰もおれを認めない。おれを見つけたものは、おれを殺そうとする。いまわしい。気色が悪い。殺せ。殺してしまえ。おれは彼らの恐おそれ、憎にくしみまで、一いつ緒しよくたに喰ってしまう。喰って、おれは逃にげる。逃げながらも、喰わずにはいられない。喰わなければ、死ぬ。死にたくない。おれは喰うこと以外、何もしてない。そんなもののままで死にたくはない。

　そんなときに、おれはあのひとに会ったんだ。そう、会った。おれはあのひとを知っている。知っているんだ。深い、深い、地下の、奥深い地下の片かた隅すみで、あのひとはおれを見つけた。殺されるかと思った。でも、あのひとはそうしなかった。おれを見下ろして、静かな、冷たい眼まな差ざしで、じっと見つめて、こう言った。

「キミも生きたいのか。だったら、生きるがいい。ボクも生きる。ボクにできることはそれしかないんだ。生きることでしか、ボクはボクを証明できない」

　あのひとは美しかった。あの穢れし者どもの国にいる他ほかの連中とはまるで違ちがっていた。おれは強く願うようになった。なりたい。あのひとみたいになりたい。おれは生きたい。生きたいん

だ。悪いことか？　生まれたから、生きる。喰ってでも、生きて、生きて、生き抜ぬく。何かを目指す。おれは、おれを生かすために、生きる。それが、そんなに悪いことか？

　あのひとは逃げたと聞いた。

　違う。捨てたんだ。

　穢れし者どもの国が、あのひとに捨てられたんだ。当然だ。

　あのひとに、あの国は似合わない。あのひとは、あの国の連中の慰なぐさみものになるには、高貴すぎる。美しすぎる。おれだって、気高いあのひとが、おれと大差ない醜しゅう悪あくな化物どもからそんな扱あつかいを受けるなんて、耐たえられない。想像もできない。でも──おれなら？　おれは、どうだ……？

　愛されるかもしれないと思った。

　愛することだってできるかもしれない。

　おれは、あのひとの代わりになろうとした。

　修道僧モンクたちも、おれの素質を認め、多くの同胞を殺して喰ったおれに特別の恩おん赦しやを与あたえて、機会をくれた。

　おれはあのひとみたいになる。

　あのひとの代わりに、みんなを慰める。

　だから、どうか、おれを愛して。

　お願いだから、誰かおれを愛してくれよ。

　──おれを、助けて。

　救って欲しい。

「むり、だ……」

　失敗したんだ。

　おれには、できなかった。

　言い訳だけど、あの女とも思えないような女は、おれの身体からだを舐なめまわすだけじゃ飽あきたらず、おれに嚙かみつこうとしたんだよ。おれを、あのひとそっくりなおれを、こともあろうに、傷つけようとしたんだよ。怖こわかったよ。何が？　わからない。あの女が？　自分が？　わからない。とにかく怖かったよ。恐ろしくて、カッとなった。

　喰ってやったよ。

　愛するなんて無理だったよ。

　愛される資格なんてないと思ったよ。

　おれには、無理だ。

　どだい無理な話だ。

　でも―、

　穢けがれし者どもの国から追放されて、流れついたジェードリで、おれは夢を見た。

　長い夢だった。

　夢の中で、おれはルカに拾われて、ローラの世話になって、ステラや、ジョルジュや、ラッチャや、テッドや、アンナやミミと一緒に暮らしていた。近所のハーヴェイはいつもことあるごとに突つっかかってきたけど、母親思いで、根はいいやつだった。パンカロ・ファミリーの人たちは、強こわ面もてだけど、身内にはすごく親切だった。カルロさんは、なんだか年の離はなれた兄貴みたいだった。

　夢の中で、おれは、幸せだったんだ。

　夢の中で、おれはみんなを愛していた。

　夢の中では、おれを愛してくれる人たちがいた。

　夢だった。おれは夢を見ていたんだ。すべてを偽いつわって、過去を消したつもりになって、何もかもなかったことにして、穏おだやかな眠ねむりの中で、おれは夢を見ていた。

誰だれも見ないでくれ。

おれの本当の姿を見ないでくれ。

おれが何かを喰くらう姿を見ないでくれ。

おれが人間を喰うところを見ないでくれ。

人間を喰らって、死体とはいえ、知りあいの人間を喰って、また人間になろうとした、浅ましいおれを見ないでくれ。

そこまでして、夢を見つづけようとした意い地じ汚きたないおれを、どうか見ないでくれ。

もうおれは夢から覚めた。

当然の報むくいだ。

俺は壊こわれている。

なぜ？　知らない。原因なんてわからない。あの男にやられて、死にかけた、あの傷のせいか。それとも、おれの中で何かが少しずつ狂くるってきていて、その蓄ちく積せきの結果として、今、破は綻たんしてしまったのか。あるいは、やっぱりすべては夢だったのか。わからない。わかったところで、それはおれに絶望をもたらすだけの答えでしかないかもしれないけれど、とにかく──、

戻もどらない。

戻らないんだ。

どうしても戻らない。

力は入るのに。

身体は動くのに。

戻らない。

いくら願っても。化けようとしても。どれだけ試みても、顔だけなんだ。顔だけで精せい一いっ杯ぱいなんだ。顔だけは、あのひとのように。けれど、あとはダメだ。違う。違いすぎる。おれの皮ひ膚ふは鈍にび色いろで、あまりにも硬かたい。手足が異様に長く

て、両手両足の獰どう猛もうな爪つめはおれが天性の「捕ほ食しよく者しや」であることを証明している。かつて、おれは強さを欲ほつしていた。捕とらえて、喰らうために、おれは強くなければならなかった。そのために有利な形質を、喰らった相手からとりこんで、穢らわしい地底の王国の、暗い、暗い、何もかもが腐くさったような匂においがする闇やみの中で、おれは生きのびた。おれのような生き物は他ほかにもたくさんいた。おれは彼らをも喰らった。貪むさぼり喰った。生きるために。そうして手に入れた身体だった。あのひとに成り代わるために、捨てたはずの身体だった。

　ルカ。

　こんな腕うでででは、抱だきしめたおまえを傷つけてしまう。

　こんな姿では、おまえを怖がらせてしまうよ。

　おれは、おれを覆おおい隠かくそうとして、死体から剝はぎとった衣服を、外がい套とうを、この忌いまわしい身体に巻きつけた。あのひとに似た顔も隠した。ふと、おれは思った。もうおれは、おれではないのかもしれない。おれ以外の、何か。それがおれだと思っていた自分自身は、もうどこにもいない。だとしたら、おれ以外のものに成り果てたおれは、いったいどうすればいい？　夢から覚めたおれは、また別の夢を求めてさまようしかないのか？　夢を見ることでしか、おれは生きてゆけないのか……？

　いや──、

　結局、おれはまだ夢を見ているんだ。

　あの夢を見つづけようとしてるんだ。

　だから、エンツォ・パンカロの屋や敷しきに行ったりした。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの襲しゆう撃げきに遭あって、危あやういところだったカルロさんやイビツさんたちを助けたりした。

　なんのつもりだ？

　どうせ、戻ることなんてできないのに。

　どうしておれは探すんだ？

夢なんか見るな。

無む駄だだ。

じゃあ、おれはどうすればいい？

おれがなすべきことは？

ない。

何もない。生きていたって、おれには居場所がない。生きのびることに意味が見いだせない。

助けてくれ。誰か、助けて。おれをひとりにしないでくれ。おれをやさしく慰なぐさめてくれ。おれのために歌ってくれ。おれを抱きしめてくれ。おれを愛していると言ってくれ。そうした思いが、身の程ほど知らずな願いが、望みが、欲求が、そもそも醜みにくいのだと──この姿は、むしろ、おれにはお似合いだなんて、考えたくないんだ。薄うす々うす気づいてはいるけれど、これ以上、絶望したくないんだ。

誰のせいだ？

何が悪かったんだ？

おれだけか？　果たして、おれだけのせいなのか？

おれは、バルモア地区に建ちならぶ建物の屋根から屋根へと飛び移りながら、声にならない叫さけび声をあげた。

火。

ああ。

火の匂いがする。

夜のジェードリに争いの気配が芽生え、人々の意思を養分にしてそこかしこで育ち、血なまぐさい花を咲さかせようとしている。

──そうだ。

血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。

やつらだ。あいつらさえ現れなければ、おれは！　おれは、いつまでも夢を見つづけていられたかもしれないのに……！

やつらが神の名のもとに聖なる炎ほのおで街を焼き払はらおうとするなら、おれは憎ぞう悪おの炎でやつらを焼きつくしてやる。

おれは探す。敵を探す。憎にくたらしい敵を探す。殺す。殺して、喰くってやる。喰って、おれは強くなる。もっと強くなって、もっと、もっと殺す。おまえたちを殺して、殺しつくしてやる。あの男、神の代理人気どりの、サー・ジューダスも。あの化物も。ぜんぶだ。皆みな殺ごろしにしてやる。喰ってやる。おまえたちはおれの餌えさだ。そうだ。おれは怪かい物ぶつだ。否定はしない。おれは怪物でいい。おれは捕食者に戻もどろう。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ、おまえたちの天敵になろう。おれは餓うえた怪物だ。ああ、腹が空いた。喰いたい。喰いたい。人間を喰いたい。穢けがれし者どもの国の連中とは違ちがって、人間はうまい。屍し肉にくでもうまかった。生きたまま喰らったら、どんなにうまいだろう？　なおかつ、それが憎むべき敵だとしたら？　きっと余計にうまいはずだ。そうだろう？

おれは探した。

敵を探した。

さほど手間はかからなかった。

見つけた。

──いた。

バルモア地区の、サンブレイク・ホテルにほど近い道だ。おれはありあわせの布で作った覆ふく面めんをまくりあげて、口の部分を露ろ出しゆつさせた。唾だ液えきがどんどん出てくる。空腹なんだ。喰いたい。あの騎き馬ばの群れを、ぜんぶ残らず喰ってやりたい。連中は走ってゆく。おれは追いかける。屋根を伝って追いかける。これくらいなんでもない。おれは人間じゃない。怪物だ。おれは追う。逃にがすものか。追いながら、おれは狙ねらいを定める。隊列の先頭に、兜かぶとをかぶっていない騎き士しがいる。まるで人間のように、おれは考える。あいつが指揮官か。怪物の食欲がおれに訴うつたえる。あいつが一番うまそうだ。決めた。まずはあいつを喰ってやる。そうなると、もうやつしか目に入らない。おれは

やつに夢中だ。やつをこの爪つめで引き裂さき、適当な大きさにちぎって、咀そ嚼しやくし、のみくだす、そのときの快感、充じゆう足そく感、それだけしか考えられない。喰いたい。喰いたい。喰いたい。喰いたい。なぜなら、おれは怪物だからだ。おれはもともとそういう生き物なんだ。おれは、所しよ詮せん、あのひとのようにはなれない。そんなことは、とっくにわかっていたはずじゃないか。

　いいんだ。

　もういい。

　無理をしなくていい。

　おれは舌なめずりをしながら、獲え物ものめがけて建物の屋根から飛び降りた。やつは、右手に持った騎兵槍ランスを振ふりあげて、人間の言葉で何か命じた。その直後だった。

「──な……ッ！」

　だが、驚おどろいたことに、やつは反応した。こっちに顔を向けたかと思うと、とっさに上体をひねって騎兵槍ランスを突つきだしてきた。やつの顔は、しかも、驚きよう愕がくしてはいたものの、恐きよう怖ふしてはいなかった。騎兵槍ランスはしっかりとおれの顔面を狙っていた。やつは、ただやすやすと捕食者に狩られて喰われる運命を甘かん受じゆする獲物ではない。そういうわけか。いいじゃないか。おまえのような人間を喰えば、おれはさらに強くなれる。おれは首を曲げて騎兵槍ランスを紙一重の差でかわした。騎兵槍ランスがとらえたのは、おれの覆面の端はしだけだった。騎兵槍ランスに引っかかって覆面が剝はがれたが、かまわずおれはやつに襲おそいかかった。両手をのばして、やつの頭部を握にぎりつぶそうとした。そこでもやつは非ひ凡ぼんなところを見せた。「──この、化物が！」鞍くらの上で上半身を倒たおして、鐙あぶみから外した足でおれの顎あごを蹴けりあげたのだ。「ＧＵＨ……！」おれは感心した。感心しながら、やつの馬の腹を蹴ったくった。「──ＳＨＨＨＨ！」「……おおっ！」やつは馬ごと倒れた。隣となりの騎馬がそれに巻きこまれ、おれもまた、別の騎馬を巻き添ぞえにしながらも、即そく座ざに態勢を立てなおした。ついでに、おれはその馬に乗っていた人間の頭をわしづかみにして、力任せに首を引きちぎってやった。おれはたぎっていた。なんだか、大きな、大切なものを失うかわりに、おれは、でも、何かをとりもどしたのかもしれ

ない。

　強さを。

　衝しよう動どうを。

　ちっぽけな蟲むしだったおれを生かしてくれた、根源的な力を。

「ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　おれは殺す。殺してやる。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。おまえたちはおれの餌だ。おれに喰われるために、おまえたちはいる。そのことを、おまえたちに教えてやる。

　やつは馬の下した敷じきにはならず、起きあがって、舌打ちをしながら腰こしの鞘さやから剣けんを抜ぬいた。騎馬の隊列は乱れに乱れた。おれは、なんだかそれがとても可お笑かしくて、もっとだ、もっとめちゃくちゃになれと思った。近くを通りすぎようとした馬の足を殴なぐり払い、ぶっ倒して、突っこんできた別の馬の顔面を爪で斬きり刻み、おれは昂たかぶるまま、猛たけるままに、連中を傷つけた。その血を全身で浴びた。おれは唇くちびるを舌で舐なめ、どす赤い液体を味わって、恍こう惚こつとし、ふたたびやつを見た。やつはまた「……化物め」と呟つぶやきながら、だが、やる気のようだった。やつは薄うす笑わらいを浮うかべている。熱に浮かされたような、ある種の狂きよう気きに取り憑つかれたような目つきだ。やつはモトロール刀を両手持ちして、周りには目もくれず、じり、じり、と距きよ離りをつめてこようとしている。向かってくるのか？　おれに？　怪かい物ぶつのおれに？　やろうっていうのか？　このおれと……？

　まるで、おれみたいな身の程ほど知らずだ。

　いい度胸じゃないか。

　殺してやる。

　喰くってやる。

「ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　おれは咆ほう哮こうをあげて駆かけだそうとした。そのときに

なってようやく気づいた。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツは突とつ撃げきしようとしていた。当然、その相手がいるはずだった。喰いたい。殺せ。殺して、喰え。憎ぞう悪おと怪物の衝動だけに支配されていたおれは、そんなことも考えていなかった。まるで頭になかった。おれはやっと知った。

　おれの獲物が東のほうを一いち瞥べつして、わずかに顔をしかめた。つられて、おれもそっちを見た。血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの隊列は、おれのせいでかき乱されて、転てん倒とうする者、足を止める者もいたが、一部は前進をやめていなかった。今もおれや獲物の脇わきを通り抜けてゆく騎馬がいた。ただ、道を埋うめつくすように列を作って突とつ進しんしていたときの勢いはない。べつに、それを意図したわけではないが、結果的におれは連中を大いに妨ぼう害がいした。違う言い方をすれば、図らずも、おれは助けたことになる。

　統率された騎馬の群れによって、今まさに蹂じゆう躙りんされつつあった者たちを。

　おれは、彼らのことなんか知らない。

　驚きよう異い的な跳ちよう躍やく力で、向かってきた騎馬に飛びかかり、一いつ対ついの短たん剣けんで鞍あん上じようの兵士を鮮あざやかに斬り刻んでみせた、砂色の衣ころもを身につけている男も。棍こんを巧たくみに操あやつって馬をぶっ倒した、医術士の服を着ている少女も。大剣を振るう、やたらと大おお柄がらで派手な鎧よろいを着けた男も。僧そう服ふく姿の巨きよ漢かんも。おれは知らない。でも──、

　あの、弓で矢を射る女。

　そのかたわらにいる大きなイヌ。

　見覚えがある。

　おれは、知っている。

　知っている。知っているとも。

　彼らと肩かたを並べて、大おお振ぶりのモトロール刀を騎馬に叩たたきつけている、長身の男は──、

「どうした、化物……！」

　左ひだり肩かたから胸にかけて、何か焼けつくほどに熱いものが、灼しやく熱ねつのかたまりが衝しよう突とつした。それはおれの硬かたい皮ひ膚ふを傷つけて肉に及およんだが、そこで止まった。おれの肉体は瞬しゆん間かん的に打だ撃げきに対応して、それを受け止めた。最小限の被ひ害がいでおさめようとしたようだった。痛くはなかった。痛みを感じる機能など、おれにはもうないのかもしれない。おれの身体からだはすぐに活動を始めていた。喰おうとした。とりこもうとした。おれを傷つけようとした、斬り裂さこうとした刀剣を。

　おれの獲え物ものだったはずの男は、何か異様な手て応ごたえでも感じたのか、剣の柄つかから手を放してあとずさった。勘かんのいい男だ。おれはゆっくりとそいつを見た。そいつは冷や汗あせをかきながらも、やはり顔が笑っていた。

「──まったく、世界は広いな。想像もつかねえ化物がごろごろしてやがる。愉たのしくてたまらねえよ、実際」

　そうか。

　おれはべつに愉しくなんかないんだ。

　ぜんぜん愉しくない。

　痛いんだ。

　すごく、痛い。

　傷は痛まないのに、どうしてか、おれはとても痛い。

　おれはやつの剣の柄に手をかけて強ごう引いんに引き剝はがした。皮膚と肉が悲鳴をあげたが、それはおれのものじゃないかのようだった。おれがおれである証しよう拠こは、いったいどこにあるのか。おれにはもうわからない。この痛みの正体は何か。おれにはわからない。おれはやつに向かって剣を放ってやった。やつは怪け訝げんな顔をしたが、それを拾った。

「……なんのつもりだ？　化物」

　さあ。

　わからない。おれにはわからない。いや、わかっている。正直に言っていいですか。

　カルロさん。

　帰りたいです。

　おれは帰りたい。

　みんなのところに、帰りたい。

　あれが夢だったなんて思いたくない。

　ぜんぶ現実で、いつかまた戻もどれる。そう思いたい。それが絶対に不可能なことだなんて考えたくない。

　おれは怪物じゃない。違ちがうんだ。そうじゃない。

　おれはこんな姿をしているけど、おれの過去はどうしようもなく穢けがれているけど、本当なんだ、みんなが好きだった、大事だった、嘘うそじゃない、偽いつわろうとしていたわけじゃない、おれは怪物なんかじゃない、人間じゃないかもしれないけど、怪物じゃない、おれは、おれだ。おれって、なんだ。おれは。おれは？　おれは……？　おれは、おれは、何かが痛くて、こらえきれないほど痛くて、両手で頭を抱かかえ、うずくまろうとして、自分の爪つめがひどくおれを傷つけていることを知った。その爪を、おれの肉体は喰らおうとしていた。とりこもうとしていた。おれは笑いだしそうになった。いや、笑った。「ＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……！」おれは、おれを喰おうとしている！　見てくれ、おれは、おれという存在は、こんなにも狂くるっている……！

「──チィッ！　化物もあれだが、何者だ、あいつら！　並みじゃねえ……！」

　その声を聞いて、はっとして顔をあげた。獲物だったはずの男は退ひこうか退くまいか迷っているようだった。おれのせいで足並みが乱れたとはいえ、これほどの数の騎き馬ばが、たったあれだけの人間たちに次々と各個撃げき破はされて、押されている。それは移り変わる情勢の一局面にすぎないのかもしれない。でも、現在、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの流れではないことはたしかだ。

　とくに、大剣の男が抜ばつ群ぐんだった。あの剣。波打つ琥こ珀はく色いろの剣身。男の膂りょ力りょく。その大だい胆たんさ。男がまったく恐おそれる様子もなく騎馬の行く手に立ちふさがり、あの大きな剣を、まるで小枝でも振ふるように軽々と振りまわすと、何もかもがたやすく両断された。おれは、瞬間、あの男に見とれた。強い。強い生き物だ。おれは立ちつくしたまま思った。もし、あいつを喰くったら、おれはどれだけ強くなれるだろう。

　もうおれは、そんなことしか考えられなくて。

　結局、それがおれの本ほん性しようで。

　おれはどこまでも卑いやしく、さもしくて。

　誰だれか。

　頼たのむから。

　おれを消してくれ。

　いっそ、その大剣でおれを斬きり殺してくれないか。

　おれは立ちつくしていた。

　不意に、おれの頭上を何かが通りすぎていった。誰かが何かを投げたらしい。背後で閃せん光こうが生じて、爆ばく音おんが鳴り響ひびき、複数の悲鳴のようなものがあがった。おれはぼんやりと、その何かを投げたとおぼしき者に目をやった。そいつは、大剣の男の後ろにいた。赤い髪かみをした女のようだった。なんだか、追いつめられたような、やけに真しん剣けんな眼まな差ざしが印象的だった。見たことのない、珍めずらしい、橙だいだい色いろの瞳ひとみだった。その目が、見開かれた。

　おれを見て。

　おれを見つめて。

　凝ぎよう視しして。

「──なんで……」

　声は聞こえなかったが、唇くちびるの動きでわかった。

アジアン？

と、その女は言った。

なんで？

こっちこそ訊ききたい。どうしてだ？

おまえは、なぜ、あのひとの名を知っている……？

女はそれから首を横に振って、違う、そんなわけ、ない、違う━そう呟つぶやいて、おれは、どう答えていいかわからず、どうすればいいかわからず、やはり立ちつくしていた。でも、違う。そのとおりだ。おれは、違う。おまえは知っているのか。あのひとを知っているのか。知っているのなら、わかるだろう。おれはあのひととは違う。それなのに、おれはあのひとの真ま似ねをして。あのひとのふりをして。あのひとになろうとして。この顔を。こんな顔を……！

こらえきれずに、おれは自分の頬ほおに両手の爪を突つき立てた。そのまま引き裂さいてしまおうとしたときだった。赤毛の女の向こうから、長身の男が飛びだしてきた。男は血の雨を浴びたように、頭から足の先まで真っ赤だった。モトロール刀を左手に持っていた。蓮れん華げ。彼が愛用している、サハ・リドル作のモトロール刀だ。



―カルロさん。

　カルロ・ボッシが、肩かたで息をしながら、袖そでで顔をぬぐって、おれを見た。

「お前……」

　ああ。

　おれは何をやってたんだ。立ち去るべきだった。すぐにこの場をあとにするべきだった。こうなることは目に見えていたのに。おれは両手に力をこめた。痛い。肉体の痛みじゃなくて。痛い。おれが、おれを喰らおうとする。それが痛いわけじゃなくて。痛いんだ。胸が。胸の奥が。今にも張り裂けそうで。破は裂れつしそうで。痛い。痛いよ。助けて。誰か助けて。

「ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」

　おれは痛みに耐たえかねて絶ぜつ叫きようしながら、思いきり両手を押し下げて、引き裂いた。そうしておれの両りよう頬ほほに刻まれた深く醜みにくい傷は、だが、すぐにふさがってしまうのだろう。欲しいのに。欲しくてたまらないのに。この痛みに相応ふさわしい傷が。おれにはそれすらも許されない。

　だから、せめて、めちゃくちゃにしてしまいたいんだ。この顔を。こんな顔は、もういらないんだ。あのひとの顔なんかいらないんだ。そうすれば、誰もおれがおれだとわからないはずだ。嘘うそつきのおれを、おれはもう捨ててしまいたい。おれはまた両手の爪つめを突き立てた。額のあたりに。そのまま目玉ごと切り刻んでしまおうとした。指の間から、見た。カルロさんの向こうだ。知っている顔がいくつかあった。ファミリーの人たちだ。イビツさんとボボ・ファッチョが担たん架かの両りよう端はしを持っていた。担架の上にはチーロ・パンカロが寝ねかされていた。

　そのすぐ近くだった。

　どうしてだ。

　なんでこんなところにいるんだ。

　こっちを見ている。見られたのか？　気づいた？　気づかれた？　わからない。ああ、でも、会いたかった。おまえに会いたかった。もう会えないと思っていた。会わないほうがいいと。どうか、おれを見ないでくれ。おれがおれだと気づかないでくれ。

　ルカ……！

なんでここにいるんだ。

こんなにそばにいるのに、どうしておれは、おまえに駆かけよって「ただいま」を言うことさえできないんだ。

おれはすべてに背を向け、何もかもを振ふり払はらうために、跳とんだ。「──待て……！」おれを呼び止める声はむなしく、空々しかった。カルロさん、だって、どうするんですか？　こんなおれに、どうしろっていうんですか？　おれが戻もどれるとでも？　帰れるとでも？　何かいい方法がありますか？　ないくせに。あるはずがないのに……！

だから、おれは逃にげた。たどりつく先がどこでもかまわなかった。どのみち、方法なんかない。進むべき道がおれにはない。建物の屋根から屋根へと飛び移って、あてもなく逃げながら、おれは思った。今、この心の痛みすら喰くらいつくして、何も感じられなくしてくれるのなら、おれはもう怪かい物ぶつでいい。怪物のままでいい。

──わけがわからない。考えがまとまってくれない。

もちろん、自分が何を見たのか、それはわかっている。錯さつ覚かくだとか、幻げん覚かくだとか、そんなふうにごまかすつもりもない。マリアローズは、はっきりと目にした。間ま違ちがいなかった。そっくりだった。

ただ、顔だけだ。

あいつがいくら鬼き畜ちくで異常で独りよがりで気持ち悪くて邪じや魔まくさくて特大迷めい惑わくで破は廉れん恥ちで変態な変質者でも、あんな身体からだはしていない。腕うでと足が二本ずつあって、胴どう体たいから首がのびていて、その上に頭がついていて、二本足で直立歩行する人間の姿に似てはいるものの、明らかに

違う。あれは完全に別の生き物だった。汚よごれた布か何かで全身を覆おおっていても、人間と異なる身体的特とく徴ちようは隠かくしようがなかった。手足や首が不自然に感じるほど長いとか、肩や腰こしが奇き妙みようなくらい張りだしているとか、いちいち細かく挙げるまでもない。あれを見て人間だと思う者は、まずいないだろう。

　化物、だ。

　そうとしか言えない。それ以外に、何か適当な言葉があるだろうか。マリアローズも最初はそう思った。化物だ、と。

　エルデンでならともかく、ジェードリまできて、あんな化物に出くわすなんて。そんなやつが、まさか──あいつそっくりの顔をしているなんて。いったいなんの冗じよう談だんだろう？　誰だれかが僕をからかおうとしてるのかな？　なんのために？　てゆうか、なんで僕はこんなに動どう揺ようしてるわけ……？

　落ちつけ。落ちつかないと。落ちつくんだ。だって、そんなはず、ない。あれは、あいつじゃない。そうだ。目が。あいつの目は薄うす青あお色だ。あの目は、違った。赤かった。顔立ちは気味が悪いくらい似ていたけれど、目の色が違う。いや、それ以前に、あんな身体なわけがなくて、でも、あいつは──、

　あのとき、『見るな……！』と僕に言った、哀あい願がんしていた、泣きだしそうな顔で叫さけんだ、あいつの右手が、内側から爆はぜて、何か、黒い、管のようなものが、たくさんの、うねうねした、あれは──、

　あれは、何……？

　心臓が今にも壊こわれてしまいそうだった。

　悲鳴をあげかけていた。

　目の前か、頭の奥の方か、とにかくどこかで、いろいろな光景や、さまざまな思考が浮うかんでは消え、とどまろうとして、形を保っていられずに砕くだけ、僕はそれらをかき集めてつなぎあわせようとして、かえってぐちゃぐちゃにしてしまい、途と方ほうに暮れた。

「……マリア！」

　呼ばれても、すぐには気づかないくらい。

「マリア！」

「──マリアローズ！　どないしたん！」

「あ」

　僕はどうかしてた。考えすぎだ。

　だって、あいつのことは、みんなだって知ってる。でも、なんとも思わなかったみたいだ。それとも、ちゃんと顔を見なかったのか。そうかもしれない。あの化物は、まるで顔を隠そうとでもするかのように、自分の頬ほおに獰どう猛もうそうな爪を突つき立てて、引き裂さいた。あの顔はすぐに傷だらけになった。一いつ瞬しゅんだった。マリアローズだって、あれが本当にあいつと瓜うり二ふたつだったかと訊きかれれば、絶対に、間違いなくそうだったと言いきれる自信はない。もう一度、確かく認にんしたら、やっぱりちょっと違うかもしれないし。確かめる前に、化物はどこかへ行ってしまったし。叫びながら、逃げるように──あの声が、まだ耳に残っている。痛い、声だった。聞く者の胸を抉えぐるような、悲痛な叫び声だった。それで、余計に揺ゆさぶられたのかもしれない。

　でも、そんなこと、ぜんぜん言い訳になんかならなくて。

「……ご、ごめん、僕──」

　言い訳している暇ひまがあるなら、さっさと現状に対応して動けという話で。

　雲の上を歩いているような覚おぼ束つかなさから抜ぬけだせないまま、マリアローズは周囲に目を配った。ぞっとした。

　あの化物が横よこ槍やりを入れてきたことで、相手の隊列はさんざん乱れて、突とつ撃げきの矛ほこ先さきが鈍にぶった。おかげで、ピンパーネルやユリカ、カタリで敵の先せん鋒ぽうをどうにか食い止め、その間にトマトクンや髭ひげ、アルファが前に出て、ロム・フォウがこれを掩えん護ごする形に持ちこむことができたのだが──どうも、そのまま押しきるというわけにはゆきそうもない。

　まったく、何がどう作用して、どちらに転ぶか、わからないものだ。

　こっちに傾かたむきかけていた流れのなか、マリアローズが爆ばく弾だんを投げて、化物が消えた。その結果、生じた空くう隙げきを、相手のほうがうまく利用した。ようするに、そういうことなのだろうか。

　敵はいったん距きょ離りをとろうとしている。こっちに突っこんでくる騎き馬ばはもういない。下がる。下がってゆく。化物に奇き襲しゅうされて落馬した相手側の指揮官とおぼしき中年騎士が、いつの間にか別の馬に乗って、ぐるぐる回りながら叫んでいる。たぶん、ここで止まれとか、動くなとか、そういうたぐいの命令だ。隊列を整えて、もう一度、突撃してくるつもりだろう。トマトクンは、カタリとピンパーネル、髭、ユリカ、あとはカルロ・ボッシとともに、ほとんど横一列に並んで、それを真正面から受け止める気のようだ。というか、そうせざるをえないだろう。矢が尽つきたらしいロム・フォウも、モトロール刀を抜いて、その列に加わろうとしている。そうなれば、アルファも、ということになって、彼らの後ろにマリアローズとサフィニア、担たん架か組と、女の子をふくめたパンカロ・ファミリーの生き残り数名がいる恰かつ好こうだ。

　そして、今、目と耳で把は握あくした状じよう況きようが、一瞬後には別の様相を呈ていする。

　止まらない時のまっただなかで、マリアローズは一人、戸と惑まどうばかりだ。

　次に何が起こって、どうなるのか、さっぱり予想がつかない。怖こわい。怖くて仕方ない。ダメだ、ダメだ、ダメすぎる。何、やってるんだろ。あいつと似た顔の化物が出てきたからって、それがなんだっていうんだ。どうでもいい。忘れろ。忘れるんだ。そんなことより、集中しろ。集中だ。集中しないと……！　そうしないと、途と切ぎれることなく変化してゆく情勢に、今にも押しつぶされてしまいそうで。

　まあ、いくら神経を張りつめさせて、気持ちを高めても、場合によっては両手をあげて降参するしかないわけだが。

「髭、ピンプ」トマトクンが前を向いたまま低く命じた。「後ろをやれ」

　━後ろ、って……？

　すぐにぴんとこなかったマリアローズは、やはりまだぼんやりしているのかもしれない。髭とピンパーネルが「うむ」「はイ」と答えて列から抜け、後ろへ──Ｔ字路の交こう叉さ点てんへと向かった。二人を目で追いながら、ようやく思い出した。そうだった。敵はまだいる。そもそも、そいつらに追われて、僕らはここまで逃にげてきた。忘れてた？　信じられない。ほんのちょっと前の出来事じゃないか。間ま抜ぬけにも程ほどがある。呆あきれるよ、実際。呆れて、呆れすぎて、頭にくる。こんな自分が、もどかしくて、歯がゆくて、じれったい。僕だって進歩してる、成長してると思った途と端たん、このザマで。毎度毎度のことだけれど、いいかげん、どうにかならないのかな？　一歩進んで二歩下がって、二歩進んで一歩下がり──結局、同じ場所じゃないか。こんなことばかり延々繰くりかえしている自分が、僕は嫌きらいだ。心底嫌いだ。大嫌いだ……！

　だけど、ここにいたいから。

　まだまだみんなと一いつ緒しよに笑いたいから。

　そうしたら、いつか僕自身を認めて、許してあげられる日がくるかもしれないから。

　僕は頭をフル回転させる。

　手を後ろにのばした。

　背負い袋ぶくろの中に突っこんだ。

　お土産みやげとか、魚人ハニワとか、いろいろ入っているけれど、今、必要なものはケースだ。はぐれの機術士〝ショコラット〟に格安で作ってもらった。というか、恫どう喝かつして無理やり作らせて買い叩たたいてやった。ふだんはあまり持ち歩かないけれど、旅行中ということで携けい帯たいしている。各種小こ瓶びんをがっちり固定し、保護して、収納できる特製のケースだ。小瓶自体、かなり小さいので、ケースもさして大きくないのだが、これでもぜんぶで二十四本入っている。それをとりだして、蓋ふたを開ける前に、マリアローズは手を止めた。深呼吸した。他ほかの人は「なんだ、そんなこと」と思うかもしれないけれど、マリアローズにとってはそうとう勇気がいる。でも、訊いておかないと。

「あの、さ……」

　怖くても、確かめておかないと。

「思いついたことが、あって」

「む？」

　トマトクンがちらりと顔をこっちに向けた。

「なんだ」

「くわしく説明してる暇はないから──僕を……なんていうか、その……」

　初めてかもしれない。

　誰だれかにこんなことを言うなんて。

　だけど、ぐずぐずしている場合じゃない。時間がないんだ。急がないといけない。早く言え。さっさと言え。さりげなく言え。さらっと言っちゃえ。

「し、し、しし信じて欲しいんだけど」

「わかった」

「──って、早っ！」

「まあ、迷ってる暇ひまはなさそうだしな」

「それはそうだけど！」

　これじゃあ、バカみたいじゃないか。ためらって。どもったりなんかして。恥はずかしい。ああ、こっ恥ぱずかしい。わかっていたのに。答えなんて、予想がついていた。だから、何も躊ちゆう躇ちょしなくていい。たとえなかなか進めなくても、僕は足を前に出せばいい。

「──僕が合図したら、何があっても驚おどろかないで、とにかく東に走って！　絶対絶対絶対に立ち止まらないで！　何があっても、だよ！　パンカロ・ファミリーの人たちも！　いい？　わかった？　てゆうか、わかれ！」

　マリアローズはケースの蓋を開けて、少し黄みがかった透とう明

めいの液体で満たされた小瓶を二本、いや、四本、抜ぬきとった。これで在庫は終しゆう了りようだ。もともと未完成の代しろ物ものだし、ハーレム・ゴードンに比べれば用よう途とが限定されるため、今後、また生成することがあるかどうか。材料費だって安くないし、調達が難しい原料もふくまれているので、微び妙みようなところだ。そんなわけで、使うのは最後かもしれない。そのぶん、目めーいつ杯ぱい役立ってもらわないと。

「行くよ……！」

　マリアローズはケースを背負い袋にしまって、左右の手に小瓶を二本ずつ持った。

　ざっと皆みなを見まわした。大だい丈じよう夫ぶだ、と強く思った。

「□□ＧＯ！」

　そうして、叫さけびながら、投げた。いや、叩きつけた、と言ったほうが正しいだろう。

　地面に。自分の足あし許もとに。

　四本の小瓶が割れて、中に入っていたホムニアス・カーヴが、生クリームみたいな白い泡あわと化した。マリアローズは走りだした。少なくとも、前にいた者は誰だれ一人ひとりとして遅おくれなかったと思う。カルロ・ボッシさえも、マリアローズの合図とともに踵きびすを返して駆かけだしていた。半魚人のバカが「おおぅっ！」と歓かん声せいをあげたのは、蜥蜴とかげ四兄妹のときに、一度、ホムニアス・カーヴを食くらった経験があるからかもしれない。その意味でいえば、ユリカとピンパーネルも大丈夫だろう。サフィニアについてはちょっと心配なので、マリアローズは声を張りあげて言ってみた。「──トマトクン、サフィニアを！」

　マシュマロ状の固体となったホムニアス・カーヴは、すでに急速度で膨ぼう張ちようしはじめていたから、前方以外、視界はゼロだ。どうなったかわからないが、トマトクンは「ああ！」とかなんとか、短く返事をしてくれたような気がする。たしか、サフィニアの「きゃっ」みたいな嬉うれしげな声も聞こえたような。もしかして、だっこでもされちゃったかな？　ロム・フォウには悪いけど、やっぱり僕としてはサフィニアの肩かたを持ってあげたいかんじ

で。それはさておき、担たん架か組や他のパンカロ・ファミリーの動きが鈍にぶかった。明らかにまごついていた。「走れ！　走れってば！　何やってるのさ……！」まあ、マリアローズが罵ののしるまでもなく、彼らもマシュマロから逃げるように走りはじめてくれたが──一人だけ。めちゃくちゃ苦いマシュマロに完全にのみこまれて、前後左右上下何も見えなくなる寸前に、マリアローズは見た。

　あの女の子だ。

　交こう叉さ点てんに面した建物の外がい壁へきに背中をつけて、彼女はそこから動けないでいた。

　半分腰こしを抜かしているのか。きっと普ふ通つうの女の子なんだ。マリアローズはとっさに彼女の居場所を覚えておいて、息を止めてマシュマロをかきわけ、そこを目指した。もう何も見えないが、ここらへんかと思い、「こっち！」と言ってみたら、口の中にクソまずいマシュマロが侵しん入にゅうしてきて素す晴ばらしい苦味が広がった。うーん、超ちようがつくほどマジでビター。そうして人生の苦さ（？）を味わっている間に、ガンッ、と何かにぶつかった。痛っ。おでこ？「──あ、つうっ……」声。女の子の声だ。すぐそばだった。マリアローズは勘かんを頼たよりに手を伸のばして引っつかんだ。腕うでかな。たぶん、腕だ。「──きて！」

　僕、いったいなんでこんなことやってるんだろ、と思わなくもなかったが、彼女の姿が目に入ってしまったので仕方ない。わかっていて見捨てたのでは、寝ね覚ざめが悪いし。ぐっすり眠ねむって、さっぱり目覚めるのが健康の秘ひ訣けつだし。

　とにかく、女の子の腕をつかんだまま、マリアローズは走った。息を止めて、ひたすら、ひたむきにマシュマロの中を突つっ走った。女の子も、途と中ちゆうからは懸けん命めいについてきてくれた。

　それにしても、ホムニアス・カーヴ四本分のマシュマロは、ものすごかった。正直、ここまでひどいことになるなんて、マリアローズも思っていなかった。小瓶を割った場所から、数メーテルではきかない。十メーテルどころか、数十メーテル四方だ。白い、真っ白な、やはりマシュマロとしか形容しようがない硬かたさ、質感の物体によって、あっという間に埋うめつくされたこのＴ字路で、何が行われ、何が起こっているのか。外からはもう、まったくうかがい知れないだろう。中にいてもさっぱりだし。何やら、後ろのほうで

音はするけれど。それは、何かが激しくぶつかりあう音だったり、倒たおれるような音だったり、何事か叫ぶ声だったり。とりあえず、連中を混乱させることはできたみたいだが、やや心配ではあった。大丈夫かな、これ？　みんな、ちゃんと無事に突っ切ってこられるかな……？

「──ぷはぁっ……！」

　マシュマロを突とつ破ぱしたのと同時に口を開けて、思いっきり呼吸しながら、なおも十メーテルかそこら走った。「あ、あり、ありがとう……！」と女の子が叫んだ。マリアローズは返事をする間も惜おしんで、顔についたマシュマロを払はらいながら周りを見た。

　バルモア大通りはもうすぐそこだ。前にはトマトクンがいる。その腕に抱かかえられているサフィニアは失神寸前だ。ピンパーネルはもうバルモア大通りに出ていた。ロム・フォウとアルファも大通りの手前あたりだ。髭ひげはマリアローズのすぐ後ろで、ユリカを肩にのっけていた。うわ。似合いすぎ。でも、カタリは……？　まさか、あのバカ──と思ったときだった。半魚人が「どっしゃ───ッ！」とか叫びつつマシュマロから飛びだしてきた。叫ぶタイミングが早かったのだろう、大量のマシュマロが口の中に入ったようで、それを「ぺぺぺぺぺっ」と吐はきだしながら、マリアローズのほうへと駆けてくる。ほっとした。疑ってはいなかったけれど。みんな絶対に大丈夫だとは思っていた。ちょっぴり心配だっただけで。とくに、半魚人とか、腐くされ半魚とか、ドグサレ魚とか。

　ともあれ、これでＺＯＯは全員そろった。あとはパンカロ・ファミリーだが、彼らも少し遅れて次々とマシュマロ圏けんから出てきた。まあ、カルロ・ボッシと担架組以外は、何人健在だったか正確には覚えていないので、ひょっとしたら数名欠けているかもしれないが、そこまで責任は持てない。あとは各人にがんばってもらうとして、マリアローズは女の子を一いち瞥べつし、その腕から手を離はなした。「あ、あり、ありがとう」とまた言われたので、「あー、うん、まー、はい、どういたしまして」と曖あい昧まいに返しながら、バルモア大通りに向かって走った。なんかね、と思った。お礼言うのとか苦手なら、無理しなきゃいいのに。こっちも困るんだけど。いいけどね、べつに。わからなくもないし。そういう気持ちも。てゆうか、よくわかるし。でも、自分を見てるみたいで、微び妙みように恥はずかしくってさ……。

　素直になりたいよ。

　自分の気持ちを、きちんと、はっきり話して、伝えられるようになりたい。

　どうして、できないんだろう。なんで、それだけのことがこんなにも難しいんだろう。

　理由がわかれば、どうにかできるのかな。

　あいつなら──、

　いつも、しつこいほど自分の思いを言葉にのせてぶつけてくるあいつなら、その理由がわかるだろうか。

　いけない。あいつのことは考えないほうがいい。少なくも、今はダメだ。かためていたはずの決意。あいつの顔をした、あの化物。たぶん、お互たがいのために見なければよかった、あいつの姿。どう距きよ離りをとっていいかわからないんだ。仲間？　違ちがう。友だち？　そういうのでもない気がする。愛だとか、好きだとか、言うな。僕にはわからない。そんなもの、わかるはずがない。僕のことを「ぜんぶわかるサ」なんて言っておいて、なんでわからないんだよ？　わかってないじゃないか。ぜんぜん、わかってない。どうせ、わかりっこない。それは、何もきみだけじゃなくて。きみじゃなくたって、同じことで。だけど、わからなくても、ええやん、いいと思います、いいのよ、ＺＯＯの皆みなはそう言ってくれる。トマトクンは事もなげに言うだろう。「ここにいればいいじゃないか」って。こんな僕のことを「仲間だ」って。でも、あのとき、そのＺＯＯにいるべきだと言ってくれたのは、あいつで──頭がごちゃごちゃになる。だから、考えないほうがいい。考えちゃいけない。考えている場合でもない。

　マリアローズはバルモア大通りに入って、すぐ立ち止まった。先行していたピンパーネルとロム・フォウにアルファ、それからトマトクンも、そこで足を止めていたからだ。ロム・フォウがちらりとトマトクンに目をやった。こころなしか、冷たい視線だった。

「もう下ろしてあげたらどうかな」

「む？　ああ、そうだな」

　それでトマトクンの胸から離れる羽目になったサフィニアが、恨

うらめしげというか呪のろわしげな眼まな差ざしをロム・フォウに送りかけて、慌あわてて顔を伏ふせたことは言うまでもない。ヒヤリとさせられる瞬しゅん間かんだったけれど、まあ、まだ髭に肩かた車ぐるまされたままのユリカみたいにはゆかないだろう。ここはサフィニアにもあきらめてもらうしかない。繰くりかえすが、そんなことをやっている場合じゃないし。

　北、だ。

　正直、声が出なかった。なんて言ったらいいのかわからない。

　ただ、あれか、と思った。

　あれだ。

　さっきの爆ばく音おん。

　魔ま術じゆつの炎ほのお。

　あれがやったんだ。

　というか、そんなことはどんなクソ野郎モウフオでも見ればわかる。

　だって、今もやつの周囲にいくつもの火球がドゥンドンドゥンドン出現して、炸さく裂れつした。地面が震ふるえた。火球？　いや、あれはそんなかわいらしいものじゃない。遠いから──おそらく、ここから百五十メーテルくらいは離れているので、小さく見えるが、実際はゆうに一ひと抱かかえ以上あるだろう。やつは、そんなものを撒まき散らしながら、幅はば三十メーテルほどのバルモア大通りのどまんなかに居座っている。いや、道自体や、道の両りよう脇わきに建ちならぶ建物に被ひ害がいを与あたえつつ、ゆっくりと動いている。じりじり南下している。南下？　南ってことは──つまり、それって、こっちにくるってことじゃ？

「……な、なんや、あれ……」

　カタリがしごくもっともな疑問を口にした。

　答えたのは、担たん架か組につづいて追いついてきたカルロ・ボッシだった。

「やつだ。親おや父じたちは、あの化物に殺やられた」

「……贄にえの園、の……住人……」サフィニアの声が震えている。

「ってことは──」マリアローズの声も負けじと震えた。「誰だれかがあれを、召しよう喚かんした……？」

「普ふ通つうに考えれば……そういうことに、なります……」

「あんな、でっかいやつを……」

「おもろすぎる展開やな」

　さすがのカタリも、余よ裕ゆうぶった言葉を吐はいたあとで、生なま唾つばをのみこんだ。ツッコんでやってもいいのだが、さぞかし切れ味の鈍にぶい無様なツッコミになりそうだから、やめておいた。

「──てゆうかさ……」

　ぜんぜんまったくおもしろくないし。

　それどころか、途と方ほうもなく気持ち悪くて、吐き気しまくりなんですけど。

　何、あれ？

　いったい、何なんだよ……？

　青白い、ぬらぬらぶよぶよした巨きよ大だいな肉につ塊かい、とでもいえばいいのか。それが、無数の長い長い紫むらさき色いろの茨いばらのようなものに絡からみつかれて、なんだか臭くさそうな変な液体をだらだらぐじょぐじょ垂れ流しながら、ぼこっ、ぶりゅ、ずにょ、ぶるん、と蠢うごめいている。形は、球に近いものの、かなり崩くずれているというか、不定形だ。一定していない。やつを形づくっている肉は、どうやら結構やわらかいようで、重力にあらがえずに下へ落ちてゆく。ところが、やつの内部でなんらかの力が働くのか、また引っぱりあげられて、またずり落ちる。そんなことを繰りかえしながら、やつは少しずつ、何かの形をとろうとしているようだった。

顔、だろうか。

とはいえ、鼻になろうとした隆りゅう起きはすぐにどろっと崩ほう壊かいして、耳も垂れ下がって位置がずれ、唇くちびるは開いたり閉じたりするたびに左右のバランスがおかしくなる。顔って、違うよね？　もっとこう、しっかりしたものじゃない？　いきなり、ぐちゃっと変わっちゃったりしないはずだよね？　常識に縛しばられすぎるのもよくないかもしれないけれど、ここはむしろ守っておいたほうがよくない？　死守しておきたいギリギリのラインじゃない……？

しかしながら、どどめ色の口こう腔こうには、舌らしきものや、歯みたいなものも見え隠かくれしている。とろける瞼まぶたの奥には、ちゃんと目玉があった。全体としては、顔──それも、人間の、どうやら女性の顔らしいという印象を覆くつがえすための材料は、探すだけ無む駄だのようだった。

で、その十メーテルか十五メーテルかそれくらいの、やたらとでかくて醜みにくくて怖こわくて気味の悪い顔面的肉塊が、こっちへ向かってきているのだから、ここでぼーっとしていていいわけがない。

「カルロ・ボッシ」

トマトクンが顎あごをしゃくって東のほうを示してみせた。マリアローズたちがたどってきた道の延長線上だ。バルモア大通りから抜ぬけられる道がある。

「お前たちは先に行け。俺たちが後ろにつく。急げ」

カルロはそれには答えず、担架組に「行け」と短く指示を出してから、マリアローズを見た。

いや、そうじゃない。

マリアローズの横で息を切らしている女の子か。

カルロは彼女をじっと見つめて、一度、ぐっと奥歯を嚙かみしめたあと、少し掠かすれた声で、絞しぼりだすように「リクは」と言った。

「生きてる」

「……え」

「こい」

　カルロは女の子の腕うでをつかむなり、有無を言わさず引っ張っていってしまった。なんだろ、今のやりとり。まるっきり気にならないといったら嘘うそになるが、もっと気になってしょうがないことが他ほかにあった。

　マリアローズは舌打ちをした。殺傷力のないホムニアス・カーヴでは、所しよ詮せん、目くらまし程度にしかならない。ただ、場所がＴ字路で、二方向から敵が押しよせてくるという条件がそろっていたため、結構時間が稼かせげた。おかげで、挟きよう撃げきの危地から脱だつすることができたわけで、それで十分じゃないかと自分を慰なぐさめてあげたいところではあるが、引き延ばした命運をさらに繫つなげるかどうか。

　ようやく、というべきか、とうとう、というべきか。

　一騎き。二騎。三騎。それ以上だ。続々とマシュマロを突とつ破ぱしてくる。どんどんくる。騎馬だけじゃない。徒歩の兵士もいる。すべて血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツだ。敵だ。もちろん、やばい。やばいなんてものじゃない。だって、あいつらだけでも手に余るのに、あんな化物までいるのだ。なんだかもう、嫌いやがらせとしか思えない。むしろ、いじめだ。一いつ介かいの旅行者にすぎないマリアローズたちがいじめられなければならない理由なんて、どこにもないはずなのに。

　もっとも、その旨むねを伝えて「というわけで、僕らは無関係だから追わないで。じゃ！」と手を振ふってみたところで、確実に無駄だろう。

「──行くぞ！」

　だから、今はトマトクンに従って走るしかない。

　バルモア大通りの幅はばは三十メーテルくらいだ。全力で走れば数秒で渡わたりきれるが、前に担架組を真ん中に置いたパンカロ・ファミリーがいる。もっと時間がかかるだろう。その間に、後ろから迫せまってくる連中に追いつかれたら、なんてことを考えてもさして意味がない。贄の園の住人らしいあの化物が南下してくるから

には、とにかく足を止めるわけにはゆかないのだ。

　ただ、思うように速度が出せないぶん、余力はいくらかあった。後ろはともかく、横ならチラチラ見ることができる。マリアローズはサフィニア、カタリと並んで走りながら、あの化物の様子をうかがった。

　あれ、と思った。

　火球だの土つち埃ぼこりだのにまぎれて、さっきまでは見えなかったが——化物の向こうに、何かいる。しかも、たくさんいる。人だ。大勢の人間だ！　何やら喚かん声せいも聞こえる。もしかして、戦っちゃってるとか？　誰だれが？　なんで……？　わからないが、あの化物が敵だとしたら、敵の敵は味方、ということにならないだろうか。なればいい。是ぜ非ひなって欲しい。こっちは深刻な人手不足なのだ。

「トマトクン！　あの化物、誰かに……！」

「ああ、そうらしいな」

「——おお！　ホンマや！　矢ァぎょうさんぶちこまれとるやんけ！」

「逃にげてる……の？　押しゃれてる？」

　ユリカの声が少しも乱れていなかった。

　気になって振り返ってみたら、ユリカはまだ髭ひげに肩かた車ぐるましてもらっていた。

　まあ、トマトクン以上の体格を誇ほこる髭だから、ユリカ一人くらいどうってことはないのか。それにしても、体勢的に安定しすぎているというか、ハマりすぎていて、実の父おや娘こみたいでなんだか微笑ほほえましい——なんて、ほのぼのしてもいられない。マリアローズはまた化物のほうへ目をやった。化物はずいぶん近づいてきていて、もう五十メーテルあるかないかだ。いや、もっと近いか。身体からだが大きいせいで、ゆっくりに見えるが、実際はかなりのスピードで接近してきているらしい。どちらにしても、だんだんわかってきた。ユリカの言うとおりだった。

　化物は、押されている。そろいの制服を着た人間たちに。もちろ

ん、制服といっても、防護服のたぐいだろう。軍隊？　サンランドのお国くに柄がらを考えれば、私兵だろうか。だが、それにしては数が多い。たぶん、百や二百ではきかない。その倍か、倍以上いそうだ。彼らの装備は統一されていて、盾たてと、弩いしゆみと剣が一体化した弩剣ラバイユで武装している。統率もとれているようだ。彼らが前進しながら絶え間なく行う射しゃ撃げきを、化物は明らかに嫌がっている。まあ、あの巨きょ体たいだから、ハリネズミみたいに全身矢だらけにされたって死ななそうではあるが、痛いのか、痒かゆいのか、こそばゆいのか、とにかく、化物が彼らに背を向けて逃げようとしていることは事実のようだ。

　これで、化物の進行方向にマリアローズたちがいるのでなければ、全身全ぜん霊れいを捧ささげてあの連中を応おう援えんしてやってもいいのだが。

「──くそ、これじゃあ……！」

　間に合わないかもしれない。化物はずんずん迫ってくる。視界の中で化物の姿がどんどん大きくなってゆく。肉。肉。肉。ぶるぶるとろとろぼにょぼにゅしてる。なんだよ、あれ。茨いばらが食いこんだところから、噴ふきだしたり流れだしたりしてる膿うみっぽい液体。怖こわい。汚きたない。気持ち悪い。あんなのに潰つぶされちゃったらどうしてくれるんだよ。流れ矢もヒュンヒュン飛んでくるし。危ないって。あたったらただじゃすまないって。死ぬよ？　死んじゃうよ？　冗じよう談だんじゃない！　やだ。やだ、やだ、やだ。「ドオオォォウォッシャ───ッ！」カタリが叫さけぶ。「むむむ……！」髭が唸うなっている。「はっ……はっ……はっ……！」サフィニアの苦しそうな息づかいが聞こえる。マリアローズの前を行くロム・フォウは振り返らない。その隣となりのアルファは首だけ振り向かせて「鈍どんくさいやつらめ」みたいな目でこっちを一いち瞥べつした。ピンパーネルは化物をじっと見すえたまま駆かけている。目指す道の入り口まで、約十メーテル。パンカロ・ファミリーの先頭はもう道に突とつ入にゅうした。担たん架か組もあとを追う。カルロ・ボッシと女の子がそれにつづこうとしている。突とつ然ぜんだった。

「──お前たちは止まるな……！」

　トマトクンがそう叫ぶなり立ち止まった。マリアローズたちは全員、アルファもふくめて、その声に従った。ときとして、トマトクンの命令にはあらがいがたい力が宿る。逆らう者は誰もいなかっ

た。皆みな、足を止めて振り返ったトマトクンを次々と追い抜ぬいていった。ただ、トマトクンにぜんぶ任せて、あとは知らんぷりをするような薄はく情じよう者ものもまた、一人としていなかった。トマトクンが最さい後こう尾びにつく形になった直後だ。ほとんど同時に全員が後ろを見やった。

　その瞬しゆん間かん、じつにいろいろなことが起こった。

　最初はトマトクンのすぐ向こうに騎馬の群れがいて、彼らはもう七、八メーテルとかそのあたりまで接近していたから、うわ、近い、と思った。ところが、連中の最前列にいたあの中年男が、急に馬の手た綱づなを引きながら何か叫んだ。やつは北へ目を転じていた。マリアローズもつられてそっちに視線をやった。化物も近かった。だいたい二十メーテルくらいだった。超最低ＳＵＣＫ。やばくない？　──とりあえず、それほどやばくもなかった。マリアローズたちが飛びこもうとしていた道よりも北寄りの、一本先の道からだった。飛んできた。矢だ。横よこ殴なぐりの矢の雨だった。すごい数の矢が側面から化物を襲おそった。マリアローズはそのとき初めて見た。化物の、額、といっていいのだろうか。そのあたりから、にょきっと生えていた。首だ。首から上だ。女だ。髪かみの長い女性だ。でも、瞼まぶたが──あれは、縫ぬいあわされて、綴とじられている……？　なんで？　どうして、そんなことを？　てゆうか、なぜ首が？　しかも、あの首、動いてる。生きてる。まあ、贄にえの園の住人といえば、悶もだえる者だの、蠅はえたかり姫ひめだの、万まん眼がん王おうだの、悼いたみの君だの、人間の常識に敢かん然ぜんと挑ちよう戦せんしてくるようなやつが勢せい揃ぞろいしているので、いちいち驚おどろくだけ損なのだろうが、見事に損をしてしまった。びっくりした。ただ、驚きよう愕がくしながらも、横っ面つらに矢を浴びせられた化物がいきなり方向転てん換かんを試みたのは、もしかして、あの首をかばうためなのかな、と思ったりした。北と東から攻せめ立てられた化物は、西へ向かおうとしていた。とはいえ、何しろ図ずう体たいがでかい。さっと身をひるがえす、というわけにはゆかない。回転半径だけでいっても並なみ大たい抵ていではない。結構時間がかかる。その最さ中なかだった。

「ＭｅｌｇＺｅｌｇＲｅｖＮａｖ遠炎近火ＫｒｅｙＢｒｅｙ動乱砲危黄回廻ＪｅｎＲｅｎＤ」

　ＲｙｙｙｙｙｙｙｙＳｈｈｈＡｈｈｈｈｈｈＲｙｙｙｙｙｙｙｙＡｈｈｈｈｈ．

「──あ」「魚ぎよっ」「……あれは、呪じゆ文もん……！」「みんな、しゃがって──」「むう……！」うぉん！「くっ……！」みんなが口々に何か言った。どれが誰のものかまではよくわからなかった。ただ、トマトクンがこっちを見て怒ど鳴なった。その声だけは、はっきり聞こえた。「伏ふせろ……！」そうだ。伏せなくちゃ。次の瞬間、身体が勝手に動いていた。マリアローズは地面に伏せた。その地面が飛び跳はねるように震ふるえた。ドゥンダドガドン爆ばく音おんが轟とどろいた。何かが落ちてくる。硬かたいものがパラパラ地面を叩たたく音がする。僕、死んだ？　生きてる……？　──生きてる。どうやら生きているようなので、すぐに顔を上げた。見まわすと、化物はすでに巨体を西へと向けていて、魔ま術じゆつの火球が炸さく裂れつした痕こん跡せきがそこかしこにあった。バルモア大通りに面した何棟むねかの建物の一部が破は壊かいされていた。道路に穴がいくつもあいていた。遠くに死体が散らばっていた。そこらじゅうに火の粉や何かの破は片へんが舞まっていた。化物に方向転換を強しいた射撃はやんでいた。一本先の道は、出口あたりが陥かん没ぼつして、もうめちゃくちゃだ。その先からおびただしい黒こく煙えんもあがっている。直ちよく撃げき……？　まともに食くらったのか。くわしい状じよう況きようまではわからないが、不意に鬨ときの声があがって、その道からバラバラと飛びだしてくる者たちがいた。被ひ害がいは受けただろうが、全ぜん滅めつしたわけじゃなかった。そういうことか。制服に、盾、弩剣ラバイユ。やはり、北から化物を追いこんできた連中といつ緒しよだ。別働隊か。でも、どういう人たちなんだろう。その正体は？　目的は？　──考えかけて、心臓が止まりそうになった。忘れていた。

　血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツ。僕らはもうちょっとで追いつかれそうで。それで、トマトクンがしんがりまで下がって。それなのに、見れば、やつらはさっきよりもずっと遠くにいた。南だ。バルモア大通りを、南へ、南へと逃にげてゆく。よかった。助かった。とりあえず、ほっと胸を撫なで下ろしたいところだけれど、なんでやつらは逃げるんだろう……？

　なんとなくわかった。

　きっと、危険だからだ。

　つまり、ぜんぜんよくないんだ。まだ助かってなんかいない。のんびり一安心している場合じゃないんだ。

　そんなこと、わかりたくもなかったが、思い知らされる羽目になった。

　化物は、逃げても追い払はらおうとしてもしつこく群がってくる小こ癪しやくな人間どもに、とうとうブチキレた──のかどうか知らないが、足（？）を止めた。そして、吠ほえた。とんでもない声だった。声量がとてつもなく大きいだけではなくて、声質も最悪だった。あれは、怨えん嗟さの声だ。憎ぞう悪おのかたまりだ。呪じゆ詛そだ。死ね。死ね。死ね。死ね、死ね、死ね死ね死ね死ね死ね、死んでしまえ、すべて死ね何もかも死ね死に絶えろ。そうした負の感情を声という形にしたら、おそらくこんなふうになるだろう。もちろん、そうした感情をいくらこめても、人間はあんな声など出せない。たぶん、やつだからできる。

　化物だから。

　贄の園の住人だからだ。

　禍阿阿……！

　世界中に呪のろいを撒まき散らかさんとするかのような絶ぜつ叫きようだった。少なくとも、ジェードリは呪われてしまったのではないかと思えた。というか、その声自体がもはや災さい厄やくだった。瞬間、マリアローズの脳天が痺しびれた。肌はだが粟あわ立だって身体からだ中から変な汗あせが噴ふきだし、何か変なことを口走りそうになった。あいつはやばい。マジでやばすぎる。そんなこと、わかってるし。見ればわかるし。聞けばわかるし。身体がわかりまくってるし。怖こわくて、怖くて、僕ぼくは動けない。地面にうつぶせになって、顔をあげて、あの化物を見上げている、その体勢のまま、身じろぎもできない。呪じゆ縛ばく。そうだ。僕は呪縛されている。身も心も、何か見えないものに縛しばられてしまっ

ている。もしかして、あの声……？

　そう思った途と端たんだった。身体が動いた。自分の意思で。心臓はまだバクバクいっている。呼吸も乱れている。でも、動ける。そうか。あの声だ。あの声には、実際、聞く者を恐きよう慌こうに陥おとしいれる効果があったのかもしれない。ただ、声だけでは終わらなかった。本番はここからだった。

　それは、化物のあちこちからニョキニョキ生えて、すさまじい勢いで伸のびた。マリアローズは、呆ぼう然ぜんと、髪かみだ、と思った。なんてことだろう。発毛だ。僕は発毛の劇的瞬しゆん間かんを目もく撃げきしてしまった。矢や継つぎ早というより、ほとんど同時に、数十本、数百本、もしかしたらそれ以上の髪の毛みたいな細い管状のものが──もっとも、それは化物の体色と同じ色で同じ質感だったが、とにかく、生えて生えて生えまくって、爆ばく発はつ的に伸びた。もう頭皮付近に元気のない人々への挑ちよう発はつとしか思えない。だって、ただの発毛じゃない。生えたての化物の髪は、やたらと積極的で攻こう撃げき的だった。

　襲おそいかかってくる。

　髪が。

　生白い肉の管が。

　伸びて、伸びて、飛びかかってくるように、降りそそぐように、こっちめがけて──いや、こっちもあっちもない、全周囲だ。逃にげ場なんかない。くる。みるみるうちに迫せまってくる。こんなの、どうすればいいわけ？　僕にどうしろって？　どうもこうもない。まず、立て。立つんだ。素す早ばやく起きあがれ。起きあがりながら、備えろ。抜ぬけ。偽にせ劫ごう火かを抜くんだ。前ではもうトマトクンが大たい剣けんを構えている。ピンパーネルが雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を抜きつつトマトクンの横に進みでた。髭ひげは素手で、ユリカは極限クライマックス九手ナイン棍ポールを手に身構えている。カタリはマリアローズの左ひだり隣どなり、やや前だ。後ろにいるはずのロム・フォウやアルファを振ふり返る余よ裕ゆうはない。サフィニアは……？　そのときだった。

　きた。速い。斜ななめ上からだ。マリアローズは夢中で偽劫火を右下から左上に振るった。間かん一いつ髪ぱつ、斬きった。ぬちゃっとした嫌いやな手て応ごたえだった。切断した部分から先

が、身をくねらせながら、変な液体を撒き散らしながら、地面に落ちた。まだバタバタしてる。生きてるっぽい。顔をゆがめている間に、次がきた。というか、もう目の前だった。間に合わない。ダメだ。ダメじゃない！　みんな自分のことで手て一いつ杯ぱいなんだ。こんなときくらい自分でなんとかしないと。これくらい自力で……！　マリアローズはとっさに上半身を左に傾かたむけた。ギリギリだった。肉の管が右頬ほおをかすめていった。本当に少しかすっただけなのに、結構な衝しよう撃げきだった。脳がぐらっと揺ゆれた。「—くあっ……！」それでも、マリアローズはすぐさま手首と肘ひじを返して、肉の管に偽劫火を叩たたきつけた。叩き斬ってやった。ビシャッと飛び散った膿うみみたいな液が少し顔にかかったが、気にしていられない。なんかすっごい臭くさいけど。やってられないってかんじだけど。でも、正面方向からくる管はトマトクンたちが防いでくれているわけで、そのぶん僕は楽をしている。これくらいで取り乱すわけにはゆかない。僕は慌あわてず騒さわがず反応しなきゃいけない。そうだ。反応しろ。また別の肉管が、さっきよりも急角度で、これは僕じゃなくて—僕の少し斜め後ろにいる、サフィニアに……！

「サ—」

　名前を呼ぶよりも、足を、手を、動かすべきだった。そう思ったときにはもう、肉管の先せん端たんがサフィニアの顔面あたりに衝しよう突とつしかけていた。そう、しかけただけで、しなかった。その寸前で、サフィニアの身体が後ろ向きに倒たおれたからだ。

　アルファだった。

　ぐっと体勢を低くしたアルファが、後ろからサフィニアの両足にバッコリ体当たりして、転ばせたのだ。

「—うくっ！」サフィニアはとっさに首に力を入れて、なんとか受け身をとったようだ。地面にぶつけたのは両りよう肘ひじとおしりと背中だけで、頭は打たなかったらしい。銀色の杖つえは両手に持ったままだった。それに白い肉管が絡からみついていた。とりあえず、狙ねらいがそれて、サフィニア自身は無事だったので、まずは安心—なんてしていられない。サフィニアの身体が、ぐっと浮うきあがった。引っぱられている！　肉管が引っぱっているのだ。サフィニアを持ってゆこうとしている。

「—そんなこと……！」ふざけるな。ふざけるなっていうんだ。マ

リアローズは渾こん身しんの力をこめた偽劫火を肉管に叩きつけた。「させるかぁっ……！」ぶりょん、と斬れた。ざまあみろ。やらせるか。やらせない。マリアローズは、だが、その間、化物に対して背を向けていたことになる。あいにく、背中には目がついていないので、後ろは見えない。まずいかな──と、ちらりと思ったが、数十サンチの高さから地面に落っこちたサフィニアが心配だった。でも、やっぱりまずい。振り返らないと。前を向かないと。そんな少しの逡しゅん巡じゅんが命取りになったとしても、驚おどろくに値あたいしない。もし、僕が一人きりだったら。

　だけど、僕は一人じゃない。

　僕には仲間がいる。

「Ｓｈ……！」

　彼女は肉にく食しよく獣じゆうをあっさりと突つき放す草食獣のように軽けい捷しようで、かつ、一瞬の隙すきをついてそうした草食獣をしとめる肉食獣のごとく機き敏びんだった。

　しなやかな身のこなしだ。無む駄だがないというよりもよどみがない。ロム・フォウはマリアローズの脇わきをすり抜けていって、舞まうようにモトロール刀を躍おどらせた。独特のリズムだった。あれはおそらく天性のものだろう。きっと、ロム・フォウは、楽器を演奏したり、歌ったりしてもすごく上手なんじゃないか。トマトクンの豪ごう快かいな剣技や、ピンパーネルの高速解体術とはまるで違ちがう、音楽的とでもいうべき太た刀ち筋すじだ。ロム・フォウのモトロール刀は、ズズダーン・ズダ・ダーンッと何本もの肉管を斬りまくった。弓矢だけじゃなくて、剣の腕うでもこんなにすごいんだ。アルファが惚ほれるのも無理はないってかんじ？　そのアルファは、切断されながらもロム・フォウの足に絡みつこうとしていた肉管を踏ふみつけて、おれの女にさわるな、薄うす汚ぎたない外道の分際で、とでも言いたげに一吠ほえした。うおおおおおおおぉん……！

「サフィニア！」

　マリアローズはその間にサフィニアを助け起こした。サフィニアはちょっと目が回りかけているようだが、どうにか大だい丈じよう夫ぶみたいだ。手を貸してあげたら、ちゃんと立ちあがることができた。

「……ご、ごめんなさい、わたし……」

「そんなのいいから！　今は──」

「せやでえェェッ……！　どっしゃァァァ───ッ！」

　至近距きよ離りでバシュンバシュンやたらといい音がした。

　少しだけ癪しやくだが、助けられてしまったみたいだ。

「ガッハハハハハッ！　なんやよーわからんけど、今こ宵よいのニノシーとホノゴは血に飢うえまくっとるでえ！　まさしく！　絶ッ好ッ調やァァァァッ……！　どっせいッ！」

　なんだかよくわからないけれど、たしかにカタリの身体からだはかなりキレていた。キレまくっていた。右手のニノシーと左手のホノゴが、まるで別々の生き物のように動いて、襲いくる肉管を斬きる。「──だりゃぁ！」次々と斬る。「でいっ！　どおっ！　りえい！」斬り払はらって、斬り落として、めった斬りにする。「──あたたたたたァッ！　ヤッホーイッ……！」

　ただ、ロム・フォウとは正反対で、飛んだり跳はねたり回したり外したりひねったり、余分な動きが多すぎる。そのせいで、ほどなくカタリは肩かたで息をしはじめた。あげく、肉管をよけようとして、自分の左足に右足を引っかけるという器用な芸当を披ひ露ろうしてすっ転び、地面に顎あごを打った。

「──ぶだゎっ！」

「調子に乗るから……！」

「あ……！」

「え？」

　マリアローズはカタリに駆かけよりかけて、足を止めた。

　見れば、サフィニアが空を仰あおいでいる。空？　なんで？

　いや、なんでというよりも、あれは──、

　なんだろう……？

　マリアローズは目を凝こらしてみた。形は、何かこう、黒い球体の下に、籠かごみたいなものがぶら下がっているというか、つり下げられているというか、そんな形状の物体だ。それが、飛んでいる。浮いている。どっちでもいいが、上空何メーテルくらいだろう。数メーテルではない。十メーテルは遥はるかに超こえている。だって、それは、十五メーテルくらいはありそうな化物の、ちょうど真上に浮ういているのだ。ということは、最低でも数十メーテル。もしかしたら、それ以上か。

　角度的によく見えないが、黒い球体には、灰色で何やら紋もん章しようらしきものが描えがかれているようだった。

　確信は持てないけれど、道化師の顔みたいな……？

　道化師。

　──道化師ってことは。

「てゆうか、あれ、どうやって空を……」

「……聞いたことが、あります……実物を見たことは、ないけど……気球といって」

「ききゅう？」

「はい……空気よりも、軽い気体で満たした……大きな、風船みたいなもので──」

　サフィニアがそこまで言ったときだった。マリアローズは何かを感じて、反射的にサフィニアを押し倒たおした。肉管！　危なッ……！　やばいって！　のんびり空なんか見てる場合じゃない！　それはまさしくそのとおりなのだが、サフィニアと抱だきあう恰かつ好こうで地面に転がりながら、マリアローズはちらりと視線を空に向けた。予感があったのだ。あんなものが、あんな場所に、なんの意味もなく浮いているわけがない。何か意味がある。そこには何ものかの意図が介かい在ざいしているはずだ。それは間もなく姿を現した。

　気球とかいう飛行物体の籠の部分から、何かが身を乗りだしてきた。

　人だ。

　間違いない。

　人間だ。

　一人じゃなくて、二人……？

　二人は、ちょうど今のマリアローズとサフィニアに似た体勢をとっているようだ。つまり、一人がもう一人を後ろから抱いている。前が女で、後ろが男だろうか。くわしい容姿まではわからないが、体格や服装からそのように見える。その二人が──嘘うそでしょ？　マジで？　いったい何考えてるわけ？　ひょっとして、自殺？　身投げ？　心中？　わざわざ気球とやらで飛んできて、こんな場所で？　よりにもよって、こんなときに？

　とりあえず、マリアローズの目の錯さつ覚かくではないようだ。

　二人は本当に籠のへりに足をかけて、そこから一気に飛び降りた。



しかも、頭を下に向けて。

真っ逆さまに、二人は落ちる。

落ちてゆく。

──化物めがけて。

「まさか……！」「あ、あれは……！」「──ジョーカーか！」「なんやてェッ！」「……う、嘘……！」「むう、彼奴あやつ！」「クローディア……！」いくつもの叫さけび声が交こう錯さくするなか、マリアローズは見ていた。落ちてゆく二人を。女の全身から、何か黒っぽい靄もやのようなものが噴ふきだして、彼女の手の中でそれがなんらかの形をとろうとしている、その場面を。男は左ひだり腕うでを女の腹のあたりに回して、右手で女の右手首をがっちりとつかんでいた。守るように。手助けするように。事実、男の身体からも淡あわく光る粒りゅう子しのようなものが放散され、それは女に吸いこまれて、女は黒い靄をどんどん放出し──今や、彼女は両手で握にぎっている。

それは、大きい。

きわめて柄えの長い、武器だ。

柄だけでも、おそらく四、五メーテル、いや、それ以上あるだろう。その柄の先から直角に突つきだしている獰どう猛もうに湾わん曲きょくした刃はも、二メーテルか三メーテルはゆうにある。とにかくでかくて、黒い、やや緑がかった、正体不明の、見たことがないような物質でできた、あれは──鎌かま、だろうか。

長柄の大鎌だ。

「──グリムサイズ……！」

誰かが叫んだ。誰の声だろう。わからない。どうでもいい。

マリアローズは目を離はなさない。

二人は落下する。

落ちてゆく。

やはり、化物だ。化物の、頭頂部より少し前だ。額といっていいのかどうか。そこから生えている。髪かみの長い、両目を綴とじられた女の首から上が。

ああ──と、思った。そういうことか。そういうことなんだ。それが狙ねらいだったんだ。化物の動きは止まっている。グリムサイ

ズ。あの恐おそろしい黒き大鎌が頭上に迫せまっていることに、首女はまだ気づいていない。無数の肉管は、今このときも、マリアローズたちを、そして、盾たてと弩剣ラバイユで武装した集団を襲おそっている。頭上から迫りくる二人に、やつはまったく気づいていない。気づいていないぶん、こっちは大変だ。くる！　てゆうか、きてる！　思いっきりきまくりやがってる！　肉管！　肉管！　肉管の嵐あらし！　雨あめ霰あられ……！

「ぶっ……！」

　息ができない。肉管が━首？　首だ。首に絡からみつかれた。みんなは？　自分のことを棚たなに上げて、そんなことが頭をよぎった。苦しい。苦しすぎ。マジで苦しいって。引っぱられてるし。「だめ……！」サフィニアがマリアローズにしがみついて、逆方向に引っぱってくれているけれど、そのせいで余計に苦しかったりして。

　でも、楽になっちゃったら終わりだ。終わりたくない。終わるわけにはゆかない。途と切ぎれてしまいそうな僕ぼくの意識よ、決して消えるな。もう目の前が真っ赤というか真っ白というか、なんだかよくわからない状態で、頭がガンガン痛くて目玉は飛びだしそうだけれど、がんばれ。がんばれ、僕。あきらめるな。ねばれ。僕にはまだ、やりたいことが、すごしたい時間が、一いつ緒しよにいたい仲間が、抱かかえたままで説明できないたくさんの思いがあるんだ。死ぬなんて、ごめんだ……！

　とはいうものの、人間には限界というものがあって。

　どうしようもないことは、どうしようもないわけで。

「……くう……あっ……！」

　サフィニアごと持っていってしまうくらい、肉管の力はすさまじく強くて。

　マリアローズとサフィニアの身体が、ふわりと浮ういた。

　地面から離れてしまえば、踏ふんばることもできない。

　ああ、なんか飛んでるっぽい。

　引っぱられる。

やだなあ。

やめてよ。

勘かん弁べんしてよ、もう。

何もできないじゃないか。

これじゃあ、抵てい抗こうするすべがないじゃないか。

せめて、仲間を巻きこみたくない。

マリアローズはサフィニアをふりほどこうとしたが、力が入らなかった。なんで！　なんでだよ？　どうして！　こんなときに……！

僕は。

夜空が。

地面が。

サフィニアが。

視界がぐるぐる回る。自分がどこを見ているのか、自分がどこにいるのか、わからなくなる。このまま何もわからなくなって、その状態で終わってしまうのなら、わりと楽かもしれない。でも、楽だろうが苦しかろうが、終わりたくなんかなくて──僕は、見る。見ている。

化物を。

落ちてくる二人を。

禍まが々まがしき大いなる黒のグリムサイズを。

頭を下にしたまま、二人がグリムサイズを振ふりかぶる姿を。

首女が、ようやく気づいたのか、顔を上に向けた。

遅おそかった。

その顔面を直ちよく撃げきした。

——〝大粉碎GIGA　SMASH〞…………！

　斬ざん撃げきではない。それは破は壊かいだった。撃げき滅めつの一撃だった。首女は一いつ瞬しゅんで砕け散った。化物の上半分もろともだった。弾はじけた。爆はぜた。ぶっ壊こわれた。ぶっ飛んだ。めちゃくちゃになった。飛び散った。マリアローズの首に巻きついていた肉管がゆるんだ。失速する。落ちる。「──サ、フィ……！」とっさにサフィニアを抱えこんだ。「──ぐ！」「……ふぁっ……！」たぶん、肩かたから落ちて、背中を打って、息がつまって、腰こし骨ぼねも痛くて、気が遠くなりそうだったが、生きてる。ぜんぜん生きてる。身体からだのあちこちが痛いのも、生きている証しよう拠こだ。息を吸いこむたびに肺がズキズキして、吐はくたびに喉のどがヒリヒリしようが、呼吸できているのだから、問題ない。今ごろになって、かすった肉管に抉えぐられていたらしい右頬ほおがジクジクする。あーこれ結構深いかも。骨とか見えてたりして。

　でも、いい。

　生きてるんだ。

　サフィニアだって、低く唸うなりながら身じろぎしている。

　生きてる。それなら、いい。

「──マリア！　サしやフィニア……！」

　ユリカの声が聞こえた。足音が近づいてくる。そっちに身体を向けようとして動かした右足に、ぞっとするような痛みが走った。ただ、もう一度、ゆっくりと右足を地面について力を入れてみたら、それほどでもない。まったく痛くないわけではないが、我が慢まんできる範はん囲いだ。たぶん、たいした怪け我がじゃない。

　マリアローズは、サフィニアを抱えたまま上半身を起こして、駆かけよってくるユリカや髭ひげを一いち瞥べつしてから、化物のほうを見た。

　まず、思ったよりも近くて驚おどろいた。だいたい、六、七メーテルといったところか。本当にやばかったんだ。助かった。いや、助けられたのか。あの二人に。

高さも幅はばも十五メーテルくらいあった化物は、今や半分程度になっていた。

その目や鼻は跡あと形かたもなく吹ふっ飛んで、口もかろうじて下した顎あごや舌らしきものだけが残っている有様だ。

そこらじゅうに、根元からぶち切れた、というより、その根元自体を失った無数の肉管が、ぐったりして地面に横たわっていた。まだ化物に繋つながっている肉管も同様だ。

例の私兵のなかにも、マリアローズたちのように肉管にとらえられて、間かん一いつ髪ぱつ、難を逃のがれた者が結構いるらしい。残念ながら間に合わなかった不運な者は、化物の口の中で、化物の周りで、不完全な人体標本となって、恨うらめしげに虚こ空くうや生者をにらんでいた。にらむこともできないほど、原形をとどめていない者もいた。

しかし、あたり一帯に漂ただよっているこの匂においはなんだろう。甘あまったるいのだが、ちょっと饐すえたような、腐くさった果実のような—悪あく臭しゆうとまではいえないものの、嗅かいでいると、ちょっと胸が悪くなってくる。もしかして、原因はあれか。肉。化物を形づくっていた肉だ。もうぐずぐず崩くずれて、とろとろ溶とけはじめている。今はまだなんとかもとの姿を想像できるが、そのうち何がなんだかわからなくなるだろう。これは、もしかして、あの肉の—肉といっていいかどうか知らないが、それが死にゆく匂いなのか。

いずれにしても、化物は死んだのだ。

「マリア」

ユリカがすぐそばにしゃがんで、マリアローズの顎をそっとつまんだ。

「怪我、してるわね」

「あ……うん。ちょっとだけ」

「サしやフィニアは？　大だい丈じよう夫ぶ？　意識はあるわね」

「……は、はい……わたしは、大丈夫です。マリアが、かばってくれたので……」

「しょう。よかった。じゃあ、立ってみて。立てる？　無理はしちゃダメよ。ふらふらしたりしゅるなら、正直に言って」

　さいわい、サフィニアは無事のようだった。打ち身が何箇か所しよかあるようだが、危なげなく立ちあがってみせたし、歩くこともできた。それを見てほっとしている間にユリカの医術式が始まって、動くと怒おこられるし、じっとしている他ほかなくなった。そのうち皆みなが集まってきた。

「ダッハハ。マリアローズ、なんやお前じぶん、毎度毎度怪我してばっかりやな。負傷率高すぎやろ。気をつけなあかんで」

「……や、きみに言われたくないし。顎、めっちゃ血出てるよ」

「おおぉっ、ホンマや！　気づかんかった！」

「ふむ。ユリカは今、手が離はなせぬようだ。ここは拙せつ僧そうがやさしく治ち療りようして進ぜよう」

「いや、その、やさしくっちゅうのがな……どうもな……」

「手て荒あらに治療して欲しいのか。それでもよいぞ。拙僧としては、むしろそのほうが得手とするところだ。この鍛きたえ抜ぬかれし筋肉でな」

「筋肉でって、どんな治療だよ……」

「死ねバ・治療、必要・なイ」

「そらまたアレやな。究極っちゅうたら究極の治療法やな。ようするに、そんなんただの殺人術やけど──って、わしを殺す気かい！」

「だから、拙僧はやさしく治療して進ぜると申したであろうが。ムッフフ」

「そのミョーな髭笑いがなかったら、信じたってもええねんけどな。怖こわいやん？　あとで後こう悔かいしたくないやんか？」

「……後悔は……必ず、あとでするものだと、思いますが……」

「うっさいわボケ！　そんなんわからんやろ！　前もって後悔することも、たまーにはあるかもしれへんやんか！　天地が逆さまにな

りよっても絶対ないて言いきれるんか、おお！」

「ないない。絶対ない」

「うむ」

「……ありえません、ね……」

「ナいデス。頭モ・良くナい」

「もってなんじゃ、もってェェ――ッ！」

「あなたたち」

　と、ユリカが手を止めて、カタリ、髭、サフィニア、ピンパーネル、そしてマリアローズをにらみつけた。

　かなり、そうとう怖かった。

「治療の邪じや魔まだから、静しじゆかにしてくれる？　しょれから、マリアはじっとしてなしゃい。いいかげんにしないと、怒るわよ？」

　てゆうか、もう怒ってるよね？

　―なんて、今のユリカにツッコむ勇気はなかった。

「……はい」

「……へい」

「……ご、ごめんなさい……」

「……モう・しまセン」

「あ、あいすまぬ」

　首をちぢめるようにして謝る髭ひげの姿がちょっとおもしろかったが、ここで笑いでもしたら、ユリカにもっと怒られるだろう。マリアローズはぐっとこらえて、神しん妙みような表情を作ろうとした。すると、腐れ半魚人のバカがユリカの背後に移動して、親指を唇くちびるの端はしに引っかけ、中指で目め尻じりを引っぱり、鼻の穴に小指を突つっこんで広げるという暴挙に出た。思わずふきだ

しそうになったけれど、我が慢まんだ、我慢。でも、どういうわけか、我慢すればするほど可お笑かしい。てゆうか、なんで僕ぼくが歯を食いしばって笑いを嚙かみ殺したりなんかしなきゃならないんだよ？　半魚人め。半魚人のくせに。あの腐れ魚。手当てが終わったら、目にもの見せてくれる。マリアローズは固く決心して目をつぶり、痒かゆいような、ひりひりするような、傷が癒いえてゆくお馴な染じみの感覚に耐たえた。それほど時間はかからなかった。ユリカがマリアローズの顔から手を離して、何か言おうとした。そのときだった。

「──ジョーカー……」

　ロム・フォウの声だった。全員が一いっ斉せいにその方向を見た。死んだというより、半はん壊かいして、崩ほう壊かいしつつある化物のほうを。

　それにしても、どうして今の今まで、誰一人としてそっちに近づいてゆくどころか、言げん及きゅうすることすらなかったのだろう。皆、わかっていたはずなのに。マリアローズだってわかっていた。すっかり忘れていたなんてことはないと思う。それなのに、ロム・フォウとトマトクン以外は、まるで今、ようやく彼らの存在に気づいたかのように振ふる舞まっていた。不思議といえば不思議だが、やはり、あの二人にはそうさせる何かがあったのだ。

　男は、女を胸に抱だいて、化物の巨きょ大だいな死し骸がいのすぐそばに横たわっていた。

　二人もまた、亡なき骸がらめいて見えた。

　あたかも、彼らの周りの時間だけが静止しているかのようだった。

　見ることはできるが、ふれることはできない、どこか遠くの世界に彼らはいる。

　彼らは、氷の棺ひつぎに閉じこめられたように、永遠にあのままでいるのだ。

　二人きりで、悠ゆう久きゅうの時をすごすのだ。

　侵おかしがたい。

余人が侵してはならない。

彼らの眠ねむりを妨さまたげてはいけない。

だから、男がやおら起きあがったことは、むしろ意外で、驚おどろきだった。

「生きているようだね」

ため息まじりにそう呟つぶやいたとき、ロム・フォウはどんな顔をしていたのだろう。マリアローズからは、アルファの頭を撫なでているロム・フォウの後ろ姿しか見えないので、わからない。

男は──ジャン・ジャック・ド・ジョーカーは、女を抱いたまま立ちあがって、化物の残ざん骸がいをしばらく眺ながめてから、こちらに向きなおった。

そして、どういうつもりか、鼻先で笑ってみせた。

「なぜ貴様らがこんな場所にいるのだ」

「──って……」

いきなりそうくる？　第一印象最悪すぎ。こうなると、肩かたまで届く黒い髪かみの毛けも、きれいに整えられた髭も、あからさまに貴族っぽい上品ぶった顔立ちも、すべてを見下しているかのような青みがかった黒い目も、ぜんぶむかつく。なんだよ、あのケバケバしい服装。秀ひで麿まろとか、ギョームとか、デルベッチオとか、ナフタリとか、ものすごく高くて、庶しよ民みんの手なんか届くはずもない、しかも、ぜんぶ高級プレタ既製服ポルテじゃなくて、高級オート注文服クチユールだ。もちろん、デザイン性重視で、普ふ段だん着ぎには向かないどころか、有名ブランドお抱かかえのファッションモデルしか着こなせないような、ある意味、芸術作品といってもいい。それが、どうしてなんの違い和わ感かんもなく似合っちゃってるわけ？　べつにいいけれど、なんだか腹が立つ。

だいたい、なぜも何もクソもミソもない。マリアローズたちは呼ばれたからきたのだ。で、呼んだのは他ほかの誰でもない、きみじゃないか──と、抗こう議ぎしようとして、思いとどまった。

ジョーカーの髪の生え際ぎわから、赤い液体がどろっと流れでて

きた。

　結構な量だった。ジョーカーの顔は見る間に赤く染まった。怪け我がを……？　頭、か。

「ふん……」

　ジョーカーは、だが、血をぬぐおうとしなかった。女を抱いたまま、歩いてくる。たしかな足どりだ。ふらついたりはしていない。とはいえ、あれだけ出血している。平気なわけがない。無理をしているのか。やせ我慢か。だとしたら、それはそれでたいしたものだが、ふとマリアローズに目をとめて、こんなことを言いやがったので、やっぱり「ぜんぜんさっぱりたいしたことない」に訂てい正せいせざるをえなくなった。

「貴様──まさか、ＺＯＯか。ほう。珍めずらしく下げ手て物もの以外だ。まだ若いが、美しいな。女は美しいに越こしたことはない。五年後が楽しみだ」

「……五年後はないと思うけど」

　マリアローズが引きつった笑え顔がおを浮うかべながら右手を上げると、ジョーカーは少し怪け訝げんそうに眉まゆをひそめた。その眉み間けんに照準をあわせた。

「てゆうか、きみには明日もないから……！」

「ちょ、マ、マリア！」

「離はなして、ユリカ！　ああゆうのは、どうせ口で言ってもわからないんだよ！　言ってみたわけじゃないけど、僕ぼくがそう決めたから！　物事は最初が肝かん心じんだしさ！　一回目で思い知らせてやらないと、なめられるし！」

「……なんだ？」

　ジョーカーが説明を求めるように視線を送った相手は、トマトクンだった。よりにもよって、何もそいつじゃなくてもという人間ぶっちぎりでナンバー１の園長マスターを選ぶなんて、愚おろかにも程ほどがあるってものじゃないか。

「うむ」

案の定、トマトクンの答えは、しばらく考えこんだわりに、えらくあっさりしていた。

「よくわからんが、習性みたいだ」

「見た目はともかく、中身はやはり下手物というわけか」

「だーれーがっ！　ゲテモノだぁぁぁっ……！」

「だ、誰か、手伝ちゆだって！　一いつ緒しよにマリアを押しゃえて……！」

「おお！」「……は、はい……！」「はイ」

「相変わらず、無む駄だにやかましいな。いや、数が増えたぶん、前にも増して騒そう々ぞうしいか」

　ジョーカーはかすかに首をひねって、不ふ愉ゆ快かいそうに顔をゆがめた。偉えらっそうに。何様のつもりだよ。不愉快なのはこっちだっての。

「トマト、いいかげん貴様も、下手物を蒐しゆう集しゆうして回る下げ衆すな趣しゆ味みはやめたらどうだ。まあ、趣味以前に、貴様の卑いやしい性しよう根ねが取るに足らん下手物どもを引きよせてやまんのだろうがな。そうはいっても、心がけ次し第だいで人は進歩しうるものだぞ。それが亀かめの歩みであっても、無よりはいくらかマシだ。その程度のことは、痴ち愚ぐ魯ろ鈍どんな貴様でも理解できよう」

　しかし、ここまでムチャクチャなことを言われたら、いくら物事にこだわらないタチのトマトクンでも、少しくらいはムッとするだろう。その予想は見事に裏切られた。

「ふむ」トマトクンは一息ついただけで、「──ところで」と、何事もなかったかのように話題を変えようとした。マリアローズは見み逃のがさなかった。その瞬しゆん間かん、ジョーカーが、すうっと目をすぼめた。血が目に入ったから？　違ちがう。あれは明らかにピキッときていた。ブチキレる寸前だった。そうか。その手があったか。意図的にやったのかどうかはわからないが、さすが園長マスター。見直した。僕も見習おう。できれば。我が慢まんできたら。無理かな？　無理かも。トマトクンはざっとあたりを見まわした。「こいつはぜんぶお前の仕掛けか」

「己おれ一人で遊んでやるには、少々勿もつ体たいない相手だったのでな」

「囮おとりに使ったのか」

「勘かん違ちがいしてもらっては困る。己おれとバルモア商会私兵隊の諸君とは、偶ぐう然ぜん利害が一いつ致ちしたから共きよう闘とうした。ただそれだけのことにすぎん」

「物は言いようだな」

「世界の半分は麗うるわしき欺ぎ瞞まんに充みち満ちた建て前でできている。親愛なる心弱く優やさしき人々は、何い時つ如い何かなる時も真実の刃やいばで他者を、自己を傷つけたくはないのだ。己おれは仙せん人にんではなく世捨て人でもない。ならば、俗ぞく世せの慣習には唯い々い諾だく々だくと従うべきだ。何はともあれ、それが渡と世せいというものだろうが？」

「お前が渡世なんて言葉を使うと、冗じよう談だんにしか聞こえんが」

「戯ざれ言に聞こえんのだとしたら、こうして貴様と話をしていること自体が不可解だな。脳がまともに機能していないのに、なぜ口がきけるんだ？」

　ジョーカーは人を食ったような態度をとりもどして、短く嗤わらった。本当に、いちいちむかつく男だ。普ふ通つうに応対しているトマトクンが信じられない。頭にこないのかな？　それとも、僕が狭きよう量りようなだけ？　皆みな、べつに気色ばんでいる様子がないところを見ると、慣れやあきらめもあるのだろうか。まあ、こういう人間だってことは承知しているし、好きに言わせとけ、みたいな？　でも、それにしては、みんなずいぶん気づかわしげに、ジョーカー、ではなく──その腕うでに抱かかえられている女の人を見ているようだった。そういえば、誰？　あの女の人……？

「平気なのか」マリアローズの疑問をくみとってくれたわけではないだろうが、トマトクンが尋たずねた。「──クローディアは」

　どうやら、それが彼女の名前らしい。

　目を閉じてぐったりしているが、よく見るまでもなく、彼女はすごい美人だ。とくに、金色とも銀色ともつかない色の髪かみの毛な

んて、今までお目にかかったことがない。脚あしも長くて細くて、すばらしくきれいだ。というか、スタイルがいいのだろう。ジョーカーも背は百八十サンチくらいあって、頭が小さくて、どんな服でも似合いそうな体型だが、クローディアも女の子なら誰しもがうらやましがりそうな細さだ。

　で、誰……？

「余計なお世話だ」ジョーカーはクローディアを一いち瞥べつして、吐はき捨てるようにそう言うと、ふたたびトマトクンに顔を向けて首をひねってみせた。「己おれがこうして二本の脚で立って歩いている。それ以外に何か説明が必要か」

「いや……そうだな」

「少しばかり力を使いすぎただけだ。時が経たてば戻もどる。己おれもさすがに疲つかれた。貴様のごときうつけと口をきいたせいだな。忌いま々いましいことだ。すべて貴様らのせいだぞ。貴様らが雁がん首くびそろえてこんな場所にいるせいで、気が抜ぬけた。その足りない鳥頭を絞しぼって反省しろ、馬ば鹿か者、ども、め──」

　唐とう突とつだった。

　ジョーカーが、クローディアを抱えたまま、まったく姿勢を変えずに、バッタンと後ろへ倒たおれた。

　ロム・フォウがため息をついた。

「やせ我慢にも程ほどがあるよ」

「うむ」髭ひげは腕組みをしてうなずいている。「まあ、此こ奴やつらしいといえば、そういえぬこともないがな」

「──って、冷れい静しえいに呆あきれてる場合じゃないでしょう！　手当てしないと……！」

「大だい丈じよう夫ぶだろう。この程度でくたばるタマじゃないしな」

「トマトクンまで！　もう！　どこが大丈夫なのよ！　じぇんじぇん大丈夫しょうには見えないじゃない！」

「そうか？」

「しょうでしゅ！」

「あの、さ……」マリアローズはジョーカーめがけてかっ飛んでゆくユリカの背中を見送りながら、そばにいたカタリに声をかけた。「一つ質問があるんだけど」

「を？　なんやねん」

「だーれもふれないってことは、どうもわかってないのは僕ぼくだけっぽいけど──あのくそったれジョーカーってクソ野郎モウフオはいいとして、クローディアさんって？」

「ほえ？　って──て？　手？」

「や、だから、どういう人なのかなーって。関係とか……」

「関係もなんも、ＺＯＯやろ？」

「へ？」

「せやから、ジョーカーのオッサンといっつも一いつ緒しよにおるわけやし、わしらもめったに会われへんけど、一応、クローディアもＺＯＯの一員やん？」

「やん？　とかいわれても……僕、聞いてないけど？」

「ゆうてへんかったか？」

「一言も。ついでに、きみだけじゃなくて、だーれも」

「フゥーム」

　カタリは顎あごを撫なでながらサフィニア、ピンパーネル、トマトクン、髭を見て、右手で左の掌てのひらをピシャンと叩たたいた。

「ま、うっかりしとったんやろな」

「……全員が全員？」

「そないなこともあるがな。生きとったらな。あるやろ。わりと

しょっちゅうな」

「ないと思うよ？　普通」

「細かいやっちゃのう。ええやろ、べつに。たいしたことやあらへんやないか。一人や二人多かったかて、なんや困ることでもあるんかい？　ないやろ？　ないはずやで？　あってたまるかいな！」

「そりゃまあ、困るってほどのことはないけどね……」

　呆れ果てるだけで。

　いつものことではあるけれど。

　だからといって、慣れてしまうのも癪しやくというか、なんというか。せめて、自分だけは正しい常識と良識を持ちつづけていよう。うちの連中に流されすぎないようにしないと。いくらここが無法、無む秩ちつ序じよのサンランド無統治王国でも、こんな日常があたりまえだなんて考えるようになったらおしまいだ。正直、ついてけない部分も多々ある。てゆうか、ありえないったらありえない。やめてよ。次から次へと。お願いだから。もういいでしょ？　勘かん弁べんしてよ。そんなふうに感じるのが当然なんじゃないかとマリアローズは思うのだ。

「……む」

　トマトクンが背中の大たい剣けんに手をかけた。

　ロム・フォウをかばうようにアルファが前に出て、全身の毛を逆立てながら唸うなりだしたのも、それとほぼ同時だった。

　地面に座っていたマリアローズも、胃が圧あつ迫ぱくされるようないやな感覚を味わいつつ、立ちあがった。その途と中ちゆう、右の足首に、ズンッと重い痛みが走ったが、気にしてはいられなかった。

　あの、匂におい。

　吐き気を催もよおさせるほど濃のう厚こうな甘あま酸ずっぱい匂いが、いつの間にか変質していた。

　いつからだろう。少しずつ？　それとも、急激に？

　わからないが、とにかく、今、マリアローズが嗅かいでいる匂いは、まぎれもなく芳ほう香こうだ。うっとりするほどかぐわしい。たとえば、昆こん虫ちゆうを誘さそう花の匂いのような。なんだか頭がぼんやりして、気持ちが安らいで、幸福さえ感じるような。

　思えば、ついさっきまで、やけに緊きん張ちよう感かんがなかった。マリアローズだけならともかく、誰も彼もだ。まさか、この匂いのせい……？　それはさすがにうがちすぎかもしれないが、いずれにしても、もう目が覚めた気分だった。異変は匂いの変化だけじゃなかった。というより、匂いの件については、あとから気づいたのだ。

　プツッ、

　ブツッ、

　ピチッ、

　プルッ、

　プフッ、

　プツッ、

　ポツッ、

　ピルッ、

　プチッ……、

　泡あわ立だっている。

　半はん壊かいした化物の残ざん骸がいが。

　そこらじゅうに転がっている無数の肉管が。

　ジョーカーがユリカの手を押しのけてむくりと上体を起こし、周りを見て、怒ど気きをふくんだ声で叫さけんだ。

「なんだ、これは……！」

　それはしごくもっともな疑問ではあったが、訊きたいのはこっちだ。誰か教えて欲しい。これは、何？　いや、そんなことより、いったい何が起ころうとしているのか？　それは危険なことなのか？　だとしたら、どうすればいい？　そんなふうにまごまごしている間にも、腐くさったような、それでいて花の匂いがする白い肉の表面に、無数の気き泡ほうみたいなものがブツプツプチポツ現れては弾はじけ、弾けては現れている。

　マリアローズはふと、精せいーいつ杯ぱい楽観的に考えてみた。この現象は、なんていうか、そう、断だん末まつ魔まみたいなものだったりはしないだろうか。贄にえの園の住人の残骸らしいあの肉が、ああして本格的に滅ほろびようとしている。もちろん、常識には著しく反するけれど、何しろ相手は贄の園の住人だ。蠅はえたかり姫ひめや万眼王の同類なのだ。どんな滅び方をしてもおかしくはない。当然、それと同じように、あそこまで徹てつ底てい的に破は壊かいされておきながら死んでいなかったとしても、驚おどろくに値あたいしないわけだが、そんなことは考えたくないのが人情というもので、しばしば考えたくない方向に事態が進展してしまうのも、人生の現実というやつで。

「……下がれ」

　トマトクンが大剣を抜ぬきながら低く命じた。そのときを待っていたかのようだった。

　亞ー、

　于ー、汚ー、

　那ー、夷ー、禍ー、

　喪ー、禍ー、那ー、夷ー、

　亞ー、于ー、禍ー、那ー、死ー、

　于ー、亞ー、汚ー、禍ー、那ー、亞ー、

　屍ー、禍ー、亞ー、汚ー、夷ー、那ー、于ー、

汚ー、夷ー、那ー、夷ー、屍ー、亞ー、禍ー、喪ー、

不ー、亞ー、禍ー、屍ー、那ー、汚ー、夷ー、

夷ー、禍ー、那ー、夷ー、禍ー、亞ー、

禍ー、汚ー、那ー、于ー、屍ー、

那ー、夷ー、禍ー、汚ー、

于ー、汚ー、喪ー、

屍ー、不ー、

亞ー、

──声。声だ。声？　なんの声？　誰の……？　これは、どこから？　ここだ。そこも。あそこからも。すぐ近くで。遠くで。亞ー。于ー。禍ー。夷ー。汚ー。那ー。屍ー。喪ー。不ー。声がする。呻うめき声か。それとも、理解不能の言語で何かを呟つぶやく声だろうか。苦しそうだ。嬉うれしそうでもある。女の声。男の声。老人の声。赤子の声。そのどれでもあって、どれでもない。

本当は、わかっていた。

ただ、認めたくなかったのだ。

だって、耐たえがたいくらい気持ち悪いんだもの。

それは肉の声だった。もはや化物の残骸を、肉管を覆おおっているものは、泡あわなんかではなかった。大小様々の口だった。なかには口と呼ぶには無理がある形状のものもあったが、やはり口としかいいようがない。動いて、声を出しているからだ。そして、呼吸をしている。彼らは空気を吸い、花の匂においがする息を吐はく。亞ー、于ー、禍ー、夷ー、汚ー、那ー、屍ー、喪ー、不ー、と声を出す。恨うらみがましい声を。喜びに打ち震ふるえる声を。呪のろいの声を。祝福の声を。なんにせよ、一つだけ、これだけは間ま違ちがいない。彼らは、生きている。

マリアローズはあとずさりした。踵きびすを返して走りだすのはためらわれた。それから目を離はなしてしまうことが怖こわかった。見ているのも恐おそろしかった。見える恐きよう怖ふと、見え

ない恐怖、どっちをとるか。それが問題だ、なんて、悠ゆう長ちょうに考えていたわけじゃない。ただひたすら気色悪くて、おっかなくて、怖くてたまらなくて、一いつ杯ぱい一杯だった。肉は、残骸は、肉管は、今や、歌っていた。そう。あれは歌だ。

　愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ屡憧ＲｅｙＨＯＨＯ

　妾×狂×求××愛×生×全××

　愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ屡憧ＲｅｙＨＯＨＯ

　妾×狂×求××愛×生×全××

　愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ屡憧ＲｅｙＨＯＨＯ

　妾×狂×求××愛×生×全××

　声が、さまざまな声が、輪唱している。低い声と高い声が、異なる旋せん律りつで歌い、響ひびきあう。美しい歌だ。信じられないくらい、美しい。美しいと感じる自分が、おぞましい。何やってるんだろ。僕ぼくは、何を？　涙なみだ。泣きそうだ。感動してる。叫さけびたい。愛を叫びたい。真実の愛を求めてやまない。欲ほっする。命を。永遠に生きたい。狂くるおしいほどに。力だ。力は愛をもたらす。愛の意味を。それが歌だ。この歌の内容だ。上古ハイ高位語ロメオンなんてわからない。でも、伝わってくる。同化しそうになる。寄り添そってしまいそうになる。わかる。わかるよ。僕もそう思う。同じだ。僕だって同じだ。マリアローズはひざまずきそうになる。うつむいてしまう。視線が落ちる。その先で、地面で、肉管がうごめいていた。口。口。口。口。歌っている。それだけじゃない。生えている。どんどん生えてくる。なんだろう。手？　足？　そうしたたぐいのものだ。肉管は、まるで百足むかでのように、動きだす。移動する。最初はゆっくりと。やがて素す早ばやく。歌いながら、向かう。この肉管も。あの肉管も。残ざん骸がいの周りに飛び散った肉にく片へんも。集まろうとしている。集まってゆく。化物の残骸に。いや、残骸だったはずのものに。

「━━マリアローズ！」

　肩かたを引っぱられた。カタリだった。はっとした。そうだ。ダメだ。ダメじゃないか。何やってるんだよ。逃にげないと。走らないと。

「ご、ごめん……！」

　もう怖いとかなんとか言っていられないことは明らかだった。マリアローズはカタリのあとを追う形で駆かけだした。右足を地面につけるたびに、頭の上のほうまで突つき抜けるような激痛が走った。でも、我が慢まんする以外にどうしろっていうんだ。右足をかばって走り方が変になったものの、必死だった。周りのことなんて、まるでわからなかった。誰がどこにいるのかとか、みんな無事なのかとか、考える余よ裕ゆうはなかった。ただ痛みをこらえて、カタリを追って走った。それしかできなかった。

　だから、本当の意味で我に返ったのは、なんとかパンカロ・ファミリーの連中が逃げていった道までたどりついて、振ふり向いたときかもしれない。

　とはいえ、平静なんて言葉はこの地上に存在しないんじゃないかと思えるような、ひどい精神状態ではあった。

「……な……なんだよ、あれ……」

「あの、歌──」

　トマトクンは道の入り口で仁に王おう立だちして、大たい剣けんをかつぐように構え、マリアローズに背中を向けている。

　見れば、カタリはもちろん、ユリカも、サフィニアも、ピンパーネルも、髭ひげも、ロム・フォウとアルファも、それからクローディアを抱かかえたジョーカーも、マリアローズのそばにいた。

「あれは……」

　道に入ってすぐのところで、皆みなが身を隠かくすように建物の外がい壁へきを背にしているなか、トマトクンだけが遠くの化物と向かいあっている。

　その正体を見み極きわめようとするかのように。

　あるいは、トマトクンにはもうわかっているのか。

そのようだった。

「サリア・ベルか」

「……サリア・ベル……」マリアローズの隣となりで、杖つえにしがみつくようにしているサフィニアが声を震わせた。「……〝責め苦のサリア・ベル〟……彼女を、召しよう喚かんするなんて……そんな、無む謀ぼうなことを……いったい、誰が……」

「召喚ではない」

ジョーカーは、傍はたから見てもかなりつらそうだった。呼吸がひどく荒あらく、目を開けているだけやっとというかんじだ。それでも、クローディアをしっかり抱だいて離さず、壁かべに背中をもたれさせて、なんとか立っている。声も、息づかいのわりには、乱れない。とんでもない意地っ張りだ。

「あれは、召喚ではない。憑依だ」

「……憑ひよう……依い……？」

「そうだ。花のLa　名を持つUlene　mon　災いのAmune　si娘よ　Meloer、己おれは貴様のような魔ま術じゆつ士しではないが、凡ぼん愚ぐの魔術士よりは物を識しっているつもりだ。ごく稀まれだが、記録には残っている。おのれの肉体を触しよく媒ばいとして、贄の園の住人を召喚した愚おろか者の末路に相応ふさわしいかどうかは知らんがな。あの化物には、生身の部分があった。あれは宿主の人間だろう」

「あの、首女──」

マリアローズがぽつりともらすと、ジョーカーはかすかに笑った。

「味も素っ気もない呼び名だが、そうだ。おそらく、あの女は魔術士で、化物の宿主に違ちがいないと己おれは踏ふんだ。召喚とは、厳密にいえば、対象物を呼びだすのではなく、〝契けい約やく〟と呼ばれる一連の手続きによって入手した情報をもとに、こちらの世界でそのものを擬ぎ似じ的に構築する超ちよう常じようの業わざなのだという。つまり、召喚されしものを存在せしめているのは、召喚者だ。ゆえに、召喚されしものは、召喚者に属する。召喚者が死ねば、召喚されしものは消しよう滅めつする。少なくとも、己おれ

の知っている限りにはおいてはな」

「それは……一いち概がいにはいえませんが、大筋では、間違っていません……」

「そうだろうよ。だから、己おれはあの首女とやらを滅ほろぼす手だてを考え、実行に移した。その結果がこの様ざまだ。なぜだ」

「……召喚と、憑依は……違うのです……違うと、いわれています……」

「違う、だと」

　ジョーカーが奥おく歯ばをギリッと嚙かんだ。怒おこっている。憤いきどおっているのだ。サフィニアはその激しさに怯おびえて目を伏ふせながらも、おそるおそる話をつづけた。

「……憑依の状態にあるものは……宿主の召喚者が、死んだ場合……召喚者の身体的、精神的な制限から解き放たれて……完全に、実体化する……そうした事例が、過去にいくつか、報告されていて……」

「何……？」

「……〝降臨〟、といわれています……異界生物フリークスが、異界の扉とびらを通らずに、この世界に確固として存在しはじめる……とても、非常に……珍めずらしい現象ですが……」

「己おれは──」

　ジョーカーはそこで言葉をつまらせると、しばらく黙だまりこくっていた。

　けれども、決して下を向いたりはしなかった。

「己おれは、しくじったのだな」

　嘆なげきではない。自じ嘲ちよう気味に呟つぶやいたのでもない。ジョーカーは事実を事実として認めただけのようだった。あの空白は、そのために必要な時間だったのだろう。

　そして、もう考えはじめている。

おそらく、次に打つべき手を。

その切り替かえの早さは見事だが、何かいい方法なんてあるのだろうか。

だって、すごいことになっているのだ。

マリアローズも、ＺＯＯに入って以来、レディ・麟りん霊れいだの、ＳＩＸだの、蜥蜴とかげ四兄妹きょうだいだの、いろいろと化物または化物じみたやつを見てきたが、今回はとびきりだった。ジョーカーが派手にぶっ壊こわしたときの姿は、ある意味、まだかわいいものだった。そんな言い方さえできるかもしれない。いや、あのときのほうが見た目はひどかったが、今のほうが、大きさは——そう、とにかく、ひたすら、恐おそれ入るほど、なんだか悲しくなってくるほど、涙なみだを誘さそわれるほど、でかい。肉管だの肉にく片へんだのが集まって、かたまって、合体し、ぼこっ、ぷふぉっ、ぶりゅん、どちゅっ、ぐりょっ——と、ふくれあがり、伸のびて、曲がり、さまざまに変形して、でかく、でかく、見る間にでかく、やつは、育ってゆく。こんな成長の仕方があるなんて受け入れがたいが、否定しようにも、現実にそれは起こっている。やつは、愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ蜃憧ＲｅｙＨＯＨＯ責め苦のサリア・ベルは、妾×狂×求××愛×生×全××最初、いかにも残ざん骸がいという無残な姿だったが、愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ蜃憧ＲｅｙＨＯＨＯ今はもう、巨きょ大だいな肉のかたまりと化していた妾×狂×求××愛×生×全××数百、数千、数万の歌う口と蠢うごめく手足を備えてそそり立つ、生なま白つちろい肉の塔とうこそが、今の彼女の肉体に他ほかならなかった愛全臥ＲｕＮａｄAhhhh,彌秘宵ＨｉｙｅAhhhh,邨帋Ｎａｒｅ蜃憧ＲｅｙＨＯＨＯ妾×狂×求××愛×生×全××……！

——なんか、どうにかなっちゃいそうだ。

気が狂くるいそうだ。

これは現実だ。わかってはいるけれど、やっぱり非現実的だ。

全高約三十メーテル。

ひょっとしたら、それ以上かもしれない。よくわからない。わかってたまるか。

あんなものをどうしろって？

というか、どうにかする必要があるのだろうか。ないんじゃ？　そのままにしておけば？　そうだ。それもアリだ。どんどん巨大化してはいるものの、現時点ではそれだけじゃないか。まあ、街のど真ん中にあんなものがあったら邪じや魔まだろうけど、そこは我が慢まんしてもらうとして、知ったことじゃないし、逃にげちゃえ。ここから逃げだして、帰ろう。僕ぼくたちのエルデンへ。愛するエルデンへ。麗うるわしのエルデンへ。ああ、自分があんなくそったれな街をこんなに愛いとおしく思っているなんて、ぜんぜん知らなかった！　もっとも、あの化物と比べたら、どこかの鬼き畜ちく変態助平野や郎ろうさえも、かわいくてかわいくて仕方ないってかんじだけど……！

「──うっ」

酸すっぱいものがこみあげてきた。嘔おう吐とする寸前だった。なんとかこらえたが、いつまでも耐たえられるかどうか、自信がない。

見たのだ。

見てしまった。

見ちゃった。

不意に、肉の塔が、その表面全体が、ズズズズザザザズズザザザザザズズズズザザザザザと細かく波打って、動いた。一いつ斉せいに動きだした。それぞれの方向へ。どこかを目指して。

まるで、億単位の虫がひとかたまりになって、今、何か別の形をとろうとしているかのようだった。というか、そうとしか見えなかった。マリアローズは人並みに虫が嫌きらいだ。侵入者クラッカー稼か業ぎようをやっていれば、いやだいやだと騒さわいでもいられないので、顔をしかめる程度でこらえているが、本当は思いっきり嫌いだ。だから、この光景は我慢ならなかった。最悪だ。悪夢に近いどころか、悪夢そのものだ。でも、途と中ちゆうで目をそらすことはできなかった。単純に、気になった。肉の塔は、いったい何に変わろうとしているのか……？　予感はあった。なんとなく予想はついていた。マリアローズは容よう赦しやなく襲おそいかかってくる吐はき気と闘たたかいながら見守った。いつの間にか歌がや

んでいた。終わるまで、かかった時間はどれくらいだろう。たぶん、それほどでもない。あっという間というほどではないにせよ、すぐだった。そうでなければ、吐いてしまっていただろう。

「……ハダカや……！」

　カタリが叫さけんだ。死んでしまえ、と真しん剣けんに思った。

　まあ、たしかに、彼女は裸ら形ぎようではあったのだが、身の丈たけ三十メーテルを超こえる、全身、髪かみの毛にいたるまで、あの生白い肉でできた巨きよ人じん（♀）が、裸はだかであろうと服を着ていようと、それがどうしたというかんじだ。

　彼女は、少女とはいえないが、まだ成熟しきっていない年ねん齢れいに見える。

　もし、彼女が一いつ般ぱん的な人間並みの大きさだったら、十分美しく、なおかつ可か憐れんだといっても嘘うそにはならないだろう。

　いずれにしても、両手を胸の前で組みあわせて、白い目で天を仰あおいでいる彼女は、でかい。とてつもなくでかい。人間を讃たたえる言葉など彼女には似合わない。似合ってたまるか。彼女にふさわしい言葉はもっと別にある。

　脅きよう威い、だ。

　それ以外にない。

　だって、あれだけでかいのだ。

　ただ大きいというだけでも、彼女は軽々と人間を圧あつ倒とうしてしまえるだろう。

　加えて、彼女は単なる巨人ではない――〝責め苦のサリア・ベル〟なのだ。

「サリア・ベルは……」

　トマトクンは、だが、ずっと同じ場所で、同じように彼女を見つめて、うろたえている様子もない。もはやマリアローズにとっては、それだけが唯ゆい一いつの慰なぐさめだ。心の支えだった。

「かつて魔ま導どう王だった。〝狂乱のフレンジー・乙女メイデン〟サリア・ベル。不老不死を求めて、悪魔に魂たましいを売り渡わたし、贄の園に堕おちた。哀あわれな女だ」

「……不老不死、だと……？」

　ジョーカーの声には聞く者をぞっとさせるような響ひびきがあった。憎ぞう悪お、だろうか。トマトクンはそれに気づかなかったのか、それとも意図的に無視したのか、静かに応じた。

「ああ。悪魔は人間と違ちがって長命だ。やつらはみずからを不死と偽いつわって、その秘密を取引材料にした。連中の詐さ術じゅつにかかった魔術士は少なくない」

「愚おろかしいな。救いがたい馬ば鹿か者ものどもだ」

「否定はできんな。悪魔は人間の敵だ。信用していい相手じゃない」

「己おれが言いたいのはそんなことではない！」

「落ちつけよ、ジョーカー」

「黙だまれ。貴様のような巫ふ山ざ戯けた名で世をたばかる下げ衆すに宥なだめられるいわれはない。己おれはきわめて冷静だ。実際、一つ思いついたことがある」

　ジョーカーは、べつに舌なめずりをしたわけではないだろう。おそらく、唇くちびるに垂れかかってきた血を舐なめただけに違いない。だが、その青みがかった黒い両りよう眼めは、悪いた戯ずらを企たくらむこどものごとく爛らん々らんと輝かがやきながら、陰いん謀ぼうを巡めぐらす策士のような昏くらい光を底のほうにたたえていた。それで、そんなふうに見えたのかもしれない。

「サフィニアよ」

　呼ばれたサフィニアは、びくっと全身を震ふるわせた。気持ちはわかる。だって、なんだかものすごく不ふ吉きつなかんじがするし。

「己おれが今まで会った魔術士のなかで、貴様はもっとも年若く、才能豊かで、将来有望な〝恐怖のドレッド操り手スター〟だ」

いきなり誉ほめるのも、あやしさ全開だし。

「魔術が世界を支配した時代が終わりを告げてのち、人は鋼はがねを身にまとい、その手に持ち、おのが欲望を満たすために振ふり下ろす刃やいばを血に染める野や蛮ばんな獣けものに堕だした──」

詩しい歌かでも口ずさむような口調がうさんくさいし。

「そう、我らは獣だ。限られた生命を有意義に使うことさえできん、頭の悪い、程度の低い、取るに足らん獣だ。ゆえに我らはせめて誇ほこりを持たねばならぬ。生きて決断して死ぬ。我らは決めねばならぬ。我ら自身の命を如い何かにして使うかを。それが人としての矜きよう持じというものだ」

だから、それが何？　ってかんじだし。

「──サフィニアよ、貴様はこのＺＯＯを愛しているか」

で、突とつ然ぜん、それですか。

「……は、はい……！」

サフィニアも、そんな力ちから一いつ杯ぱい答えなくても。気のせいかもしれないが、ジョーカーの術中にはまりかけているような。

「ふん。いい返事ではないか。それが貴様の意思であるのなら、これでも己おれとてＺＯＯだ。貴様を支持し、尊重しよう。いや、人として貴様は全く正しい。己おれはそう思う。だが、魔術士としてはどうかな」

「……そ、れは……」

「貴様にとっては言わずもがなのことだろうが、真の魔術士とは、人を超える者だ。人を超えようとする者にこそ、魔術士を目指す資格がある。魔術士はじつにさまざまなものを捨てる。それと引き換かえに力を手に入れる。その力で人間を超ちよう越えつする。自然発生的に生まれるのではない、真の意味での超越者となる。それが魔術士だ。見るがいい──」

ジョーカーは顎あごをしゃくって、バルモア大通りの真ん中あたりにいる彼女を示してみせた。

「人であることを捨て、人間を超えた、元魔導王があそこにいる！　あれこそ魔術士の鑑かがみではないか……！」

　魔術士であることとか、人間であることとか、マリアローズにはよくわからない。

　ただ、魔術士が何を犠ぎ牲せいにしてでも超越者を目指す者だとするなら、サリア・ベルがたどった道は一つの答えだろう。同じ魔導王の〝死霊女王スペクトラ・クイーン〟レディ・麟りん霊れいは、大量のムサドや偽ぎ魂こんを生みだしただけで、不死を手に入れることは叶かなわず、Ｄ９喪そう神しん街オレストロの奥底で永遠の眠ねむりについている。それに比べれば、サリア・ベルはこうして存在しているのだ。魔術を極きわめて、魔導王となり、さらなる力を求め、あがいて、ついには人以外のものとなり、そして、人以上の力を持って──ずっと祈いのるように天を仰あおいでいた彼女が、ふと視線を落として、何かに目をとめた。

　こっちじゃない。

　よかった。

　なんて、悠ゆう長ちように胸を撫なで下ろしていていいのだろうか。

　サリア・ベルは、そっちへ──北のほうへ向きなおって、不気味なくらい無む邪じや気きな笑え顔がおを浮うかべ、右手を高々とあげて、振り下ろした。そうしながら、彼女は透すきとおった美声で歌うように唱えた。ＡＲＵＵＵＲＥＵＲＡＲＡＲＵＵＵＵＵＵＵＵＡＲＵＵＵＵＵＵＲＡＵＲＥＲＡＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ……！

　その結果、何がどうなったのかはわからない。マリアローズがいる場所からは見えなかった。だが、キンッ──と耳鳴りがして、目の前の景色が一いつ瞬しゆんぶれて、地面が重々しく鳴動した。間ま違ちがいなく、何かが起こった。きっと、尋じん常じようではないことが。

　その何かを起こしたサリア・ベルは、自分の行こう為いにいたく満足しているようで、嬉うれしそうに甲かん高だかい声で笑いながら、ぴょんと北のほうへジャンプした。それから、何度も飛び跳はねた。やたらと楽しげだが、そのたびに何もかもがドシンドッシン

ドッシンドシン揺ゆれた。そのうち彼女は、左右の足で地面を踏ふみ鳴らすような動作を繰くりかえすようになった。どうやら何かを踏んづけているみたいだった。踏んで、踏みつぶして、すべて踏み殺してしまおうとしているようだった。

　それが何か、考えたくない。もしかしたら、人間かも、とか。バルモア商会の私兵隊とやらだったりして、とか。彼女にとっては、人間なんて蟻あり同然なのかもしれない、とか。考えると鬱うつになりそうなので、頭から追い払はらってしまいたい思考が、なぜか次々とわいてきて、なかなか消えてくれない。

「あれが魔ま術じゆつ士しだ」

　ジョーカーが吐はき捨てるみたいにそう言ってから、挑いどむような目つきでサフィニアを見た。

「貴様はどうだ？　人を超こえるためではなく、愛する者のためにすべてを捨てられるか。くだらん不死などのためではなく、誇りのためにその命を使えるか。愛する者のために、貴様は死ねるか」

「死ねます……！」

　即そく答とうだった。

　ジョーカーは満面に笑みをたたえて目を細めた。

「ならば、貴様は魔術士である前に人だということだ。その貴様に頼たのむ。この己おれが、だ。頭でもなんでも下げるぞ。土下座してやってもいい。貴様にしかできんことだ」

「……わたしに、しか……？」

「そうだ。戦略級ストラテジツク魔術・マジツク──」

　ジョーカーの口からその単語が出た瞬間、サフィニアの身体からだが強こわ張ばった。

「どうやら、知っているようだな。まあ、魔術士でもない己おれが知っているのだ。不思議はない。まして、貴様はあのマチルダの弟で子しだ。マチルダは、過去、中部諸ミツド国域ランズの戦場で戦略級ストラテジツク魔術・マジツクを実際に発動させたことがある。少なくとも、そのような噂うわさがある。確かく認にんするす

べはないがな。ジズヤ聖王国領ベトゥレナムの谷で、熾しき帝国の華沈黄フアンシンキ旅団は文字どおり全ぜん滅めつした。生存者ゼロだ。サフィニア、貴様は知っているのだな。かつて一部の魔導王が編みだし、世界各地を焦しよう土どと化さしめた戦略級ストラテジツク魔術・マジツクを。──それを、使え。あの化物に」

「……そんな……無理、です……わたし、には……」

「それは、物理的に不可能という意味か」

「……成功、しません……まだ、思考シミユ模擬実験レーシヨンしか……」

「試したことはあるのだな」

「ですから、実際には……思考シミユ模擬実験レーシヨンは、あくまで思考シミユ模擬実験レーシヨンでしか……」

「今、ここで、できるのか、できんのか、己おれはそれを訊きいてるんだ」

「…………でき……ません……」

「そうか」

　ジョーカーは目をつぶって、深々と息を吐はいた。サリア・ベルはまだ高笑いしながら狂くるったように飛び跳ねている。またあの歌うような呪じゆ文もんが響ひびき渡わたった。耳鳴り。地じ響ひびき。破は砕さい音。瞬間、息がつまった。さっきよりも近い。たまらずトマトクンが少し下がって建物の陰かげに入った。ジョーカーは目を閉じたまま、荒あらい息をしながら、何か呟つぶやいているようだ。考えろ。考えろ。考えるんだ。考えろ。やつを殺す。滅ほろぼす。どうする？　どうすればいい……？　何かないか。何か手は。──たぶん、そんなことを。この期ごに及およんで、まだあきらめていないのだ。どうしてそこまで？　何がジョーカーをそうさせるのか？　そんなこと、わかるはずもないが、ジョーカーは必死だ。サリア・ベルを斃たおすことに異様なほどこだわっている。それ相応の理由があるのだろう。だから、もう勝手にやっててよ。知らないよ。知ったことじゃない。僕ぼくは知らない。もう逃にげようよ。エルデンに帰ろう。ね、トマトクン──とは言えない。少なくとも、言いづらい雰ふん囲い気きだ。それに、無事に逃げおおせ

る保証もない。というか、結構やばいと思う。サリア・ベルはすぐそばにいて、付近一帯を猛もう烈れつに破は壊かい中なのだ。どうする？　何が最善なのか？　みんな、黙だまりこんで、それぞれ何か考えている。サフィニアも同じみたいだった。うつむいて、杖つえをぎゅっと握にぎりしめ、下した唇くちびるを噛かんで━━口を開いた。

「……わたしには……お姉様と同じことは、できません……」

「それはもうわかった」

　ジョーカーはすげなく応じたが、サフィニアに腹を立てているわけではないようだ。それでも、サフィニアは痛がるような、つらそうな顔をして、だが、話をやめなかった。

「……触しよく媒ばいなど……特別な、準備が必要です……戦略級ストラテジツク魔術・マジツクは、古代呪じゆ式しきにも匹ひつ敵てきする、大がかりな魔術ですから……無理、です。ですが……」

　全員の視線がサフィニアに集中した。もちろん、ジョーカーもサフィニアを見た。目を一いつ杯ぱいに見開いて、穴があくほど凝ぎよう視しした。サフィニアの手が震ふるえている。マリアローズはその手を握ってあげたい衝しよう動どうに駆かられたが、我が慢まんした。必要ないと思ったからだ。サフィニアはそんなに弱くない。

「……戦略級ストラテジツク魔術・マジツクは、無理ですが……大きな、魔術は……あります。用意も、してあります。時間は、かなり、かかりますが……成功の保証も、ありません。でも、わたしにできることがあるとしたら……それくらいしか……」

「充じゆう分ぶんだ」ジョーカーは血だらけの顔に会心の笑えみを刻んだ。「駄だ目めならまた別の手を考えればいい。それだけのことだ。よいな、トマト」

「一つ訊いていいか」

　トマトクンは首だけ振ふり返らせて、ジョーカーを見た。

　二人の目があった。

「なんだ」

「なんのためだ」

「……貴様には関係ない」

「ないこともなかろう。楽な相手じゃない」

　トマトクンの表情は平静そのものだった。一方、ジョーカーは視線でトマトクンを殺そうとしているかのような目つきだ。でも、トマトクンならずとも、それは是ぜ非ひ聞いておきたい。誰もがそう思っているはずだ。また、耳鳴り。地響き。ジョーカーはその音や振しん動どうにまぎらすように、低く言った。

「──カレーナ人には、カレーナ人に相応ふさわしい弔とむらいというものがある。血には血を、だ」

「わかった」

　トマトクンがそう答えた瞬間、皆みな、それぞれにうなずいて腹をくくった。マリアローズも、もう迷いはない──とはいわない。はっきりいって、怖こわい。やっぱり、こいつらって頭がおかしいのかも。なんで誰も反対したり取り乱したりしないんだろう。平気なのかな。あの巨きよ大だいな化物をどうにかできるって、本当に信じているのかな。僕は、正直、確信は持てない。サフィニアはたしかにすごい魔ま術じゆつ士しだけれど、あれはさすがに無理なんじゃないかと思わなくもない。ジョーカーは失敗したらまた別の手を、なんて言ったが、仕損じた結果、死んじゃうかもしれないわけだし。そうしたら、次はない。怖いよ。うん。怖い。すごく、怖い。でも、みんながやけに落ちついているから。

　そうだ。

　みんながいるから、マリアローズも、なんとかこうして物を考えていられる。

　一人じゃないから。

「……これから、わたしが使う、屠と竜りよう獄ごく滅めつ改かいは……その名のとおり、純血種ピユアリニアルの成竜を殺すために生みだされた古い魔術を……わたしが、自分なりにアレンジしたものです……詠えい唱しようをふくめた準備に……」

　サフィニアは目をつぶって何やらぶつぶつ呟いたあと、そっと瞼

まぶたを押しあげた。

「六分半、かかります」

　誰一人として、長いとも短いとも言わなかった。

　マリアローズは懐かい中ちゅう時計をとりだして、つつみこむように握った。

　六分三十秒、か。

「……それから、もう一つ……」

　サフィニアはいきなりローブの裾すそをまくった。そのこと自体、ちょっと驚おどろいたが、両りよう脚あしの腿ももにバンドが巻かれ、いろいろな物体がくくりつけられていて、びっくりした。軽装のくせに、なんだりかんだり持っているのが魔術士だけれど、あんな仕し掛かけもあったなんて。サフィニアはバンドから小さな短刀を抜ぬいて、顔を上げた瞬しゆん間かん、全員―とくにトマトクンの視線にさらされていたことに気づいて、大いに赤面した。

「……あ、あの……こ、こっこれを……サリア・ベルに……」





「成なる程ほど」ジョーカーは眉まゆをつりあげて一つ息をついた。「それを集中点として使うわけか。あとはただ息をひそめて、そのときを待っていればいいなどという考えは、たしかに少々虫がよすぎるな」

「……す、すみません……」

「何を謝ることがある」

　ジョーカーは腕うでの中のクローディアに目を落とした。

「──ロム・フォウ」

　返事はなかったが、ジョーカーはかまわずロム・フォウに近づいていった。

「頼たのむ」

「……あたしはきみが嫌きらいだ」

「そうか。だが、深いAlune 森の owin 黒真珠よmor Talnanoer、己おれは貴様以外に預ける気にはなれん。こいつも貴様にはいくらか馴なれているようだしな」

「きみはここでおとなしくしていればいい。どうせ、その怪け我がではろくに動けないだろう」

「見くびるな」

　ジョーカーはロム・フォウにクローディアを押しつけた。かなり無理やりだったが、ロム・フォウは長身だ。クローディアもかなり軽そうなので、抱だきかかえること自体はまったく問題なさそうだ。こうして両手が自由になったジョーカーは、いかにも高そうなスカーフみたいな布で顔をひとぬぐいし、それを頭に巻いて、形のいい口くち髭ひげをニィッとゆがめた。

「これしきの負傷で、この己おれがろくに動けんだと？　ありえんな。むしろ快調なくらいだ」

「強情者め」と髭ひげが苦く笑しようまじりにため息をつけば、ロム・フォウも処置なしといったふうに首を振って、トマトクンの背中も少し笑っているように見えた。

　ああ、なんだかんだ言って、結局、仲間なんだ。

　ちょっとだけ、壁かべのようなものを感じた。入りこめない、マリアローズにはうかがい知れない、いろいろなものを、記き憶おく

や、思いを、互たがいに積み重ねてきた時間のぶん、彼らは共有しているのだろう。

　なんだか、ほんの少しだけ寂さびしい。

　でも、今、僕ぼくらが直面している事態だって、あのとき、あんなことがあった、こんなこともあった、そんなふうに思い返せる思い出になるに違ちがいない。僕は笑って話すのだろうか。そこには、トマトクンがいて、サフィニアがいて、ユリカがいて、カタリがいて、ピンパーネルがいて、髭もいて、ジョーカーや、クローディア、ロム・フォウ、ひょっとしたらアルファもいるかもしれない。そのことを、僕は疑っていなかった。バカみたいに確信していた。いつしか恐きよう怖ふは薄うすらいでいた。

「サフィニア、それを己おれによこせ」

「……は、はい……」

　ジョーカーがサフィニアから短刀を受けとった。

　その手首を誰かがつかんだ。

　ピンパーネルだった。

「ワタシ・やりマス」

「何……？」

「ワタシの・ほうが速イ。アナタ・怪我シテなくてモ」

「下手物の分際で、生意気な口を」

「そウ──ワタシ・下手物かもシレナい。でも、ＺＯＯでス」

「ふん……」

　ジョーカーはピンパーネルの手を振ふり払はらい、短刀を見つめた。それは、短刀というよりも、小刀と呼ぶべきかもしれない。長さは柄つかと刃はをあわせても十五サンチ足らずだろう。材質は水晶様材クリスタリンで、一体成形だ。実用に耐たえうるとは思えないので、まさにそのためだけに作られた小刀なのかもしれない。

「よかろう」ジョーカーは、こどもに菓か子しでも恵めぐんでやるように、ピンパーネルにそれを突つきだした。「うまくやれなかったら、一生下げ僕ぼく扱あつかいしてやる。覚かく悟ごしておけ」

　ピンパーネルは無言で小刀を手にとると、サフィニアに向きなおって、少しだけ目め許もとをゆるめてみせた。すでに、表情だけではなく、全身に緊きん張ちよう感かんをみなぎらせているサフィニアは、笑え顔がおを返そうとして失敗し、なんだかおかしな顔になった。

「……お願い、します……どこでも、いいので。ただ、魔ま術じゆつの発動時に、外れてしまわないように……」

「はイ」ピンパーネルはジョーカーを一いち瞥べつした。「下僕・やデス」

「……そう、ですよね……」

「他ほかの誰でもない己おれの下僕だ。トマトの飼い犬でいるよりは、よほど意義深く、実りの多い、幸福な人生を送れると思うがな」

「そのむちゃくちゃな自信はどっからくるんやろな……」

「貴様のごとき下手物には、己おれのように恵まれた容姿と明めい晰せきな頭脳と多た彩さいな才能を生まれ持った者を理解することは能あたわんだろう」

「誰の顔が下手物じゃボケ！　それにな、蓼たで食う虫も好きずきっちゅう言葉もあるんやで！　世の中にはな！」

「や、カタリ、それ、ぜんぜんフォローになってないから」

「を？」

「しょうよ。しょれを言うなら、十人十色とか——」

「ユリカ、なんていうか、その、それもちょっと微び妙みようかも……」

「しょうなの？」

「まあ、そのとおりだとは思うけどね。人間なんていっぱい大勢たっくさんいるから、一人くらいはカタリを許容できちゃう天下の珍ちん品ぴんみたいな人もいるかもしれないし。もしかしたら」

「ナンボなんでも、そこまで確率低くないやろ！」

「だって、実際、ふられてばっかりでしょ？　つきあったこととかあるの？　ないよね？」

「ないけどな！　いっぺんもな！　やかましいわ！　なくて悪いんかい、ダァホ！」

「良くモ・なイdeath」

「せやな……わしもそう思うわ……実際な……寂しい人生や……せつないわ、そらな……」

「よし」

　と、トマトクンが皆みなを見まわした。いつもどおり、凪ないでいながらも、その奥底に何か強きよう烈れつなものを宿らせているかのような黄玉トパーズの目だ。

「やるぞ。俺とジョーカー、髭はピンプの掩えん護ごでサリア・ベルを攪かく乱らんする。他はここでサフィニアを守れ。時間は六分半だったな」

「……はい……」

「僕が」

　マリアローズは懐かい中ちゆう時計をぎゅっと握にぎりしめて、トマトクン、髭ひげ、ピンパーネル、それからジョーカーを順々に見た。

「合図する。十五秒前でいいよね」

「ああ。じゃあ、マリアの合図で待たい避ひだ。標的は離はなれすぎるとまずいのか」

「……視し認にんできる範はん囲いでしたら……」

「わかった。サフィニア」

「……はい……」

「自分を疑うな。俺もお前を疑ってない。大だい丈じよう夫ぶだ。お前はやれる」

　サフィニアはトマトクンの言葉に力強くうなずいただけで、何も言わなかった。でも、その瞬しゆん間かん、サフィニアの目つきが一変した。それまではどこかおどおどしていて、ちょっと頼たよりなげだったけれど、今は違ちがう。ものすごい気き迫はくだ。愛の力ってやつ？　そのあたり、なんの自覚もなく「俺もお前を疑ってない」なんて言ってのけるトマトクンは問答無用で有罪だと思うが、園長マスターとしては至し極ごくまっとうな発言だし、ロム・フォウもやや複雑な表情というか、少しだけうらやましそうにサフィニアを見ているように感じられたものの、気のせいかもしれないわけで━まったく、何もかも簡単じゃないけれど、それもこれも今はぜんぶ忘れて、集中し、皆で一いつ致ち団結して、敵かん然ぜんと立ち向かわなければならない。

　あの化物に。

　かつて魔導王だった〝狂乱の乙女〟、現在は身の丈たけ三十メーテル超ちようの贄の園の住人、〝責め苦のサリア・ベル〟に。

「二十三時五十三分四十七秒、四十八、四十九━」

　マリアローズが時計を見つめて秒読みを開始すると、示しあわせたように全員が配置についた。トマトクン、髭、ジョーカー、ピンパーネルは、もういつでもバルモア大通りに出られる位置だ。カタリ、ユリカ、マリアローズ、サフィニア、ロム・フォウとアルファは、その少し後ろについている。

「五十四、五十五、五十六━」

「行くぞ」

　トマトクンが無造作に道から飛びだすと、僧そう服ふくの上うわ衣ぎを脱ぬいだ髭がつづいた。ジョーカーも遅おくれずについていって、ピンパーネルは最後に走りだした。サフィニアも前に出た。隠かくれていたいところだが、サリア・ベルが見える位置じゃないと意味がない。マリアローズをふくめた護衛組は、サフィニア

を囲むように展開した。

「──五十四分」

　そして、始まった。これから六分三十秒後。多少の誤差は生じるかもしれないが、サフィニアは零れい時三十秒に魔術を発動させる。マリアローズは右足でぐっと地面を踏ふんでみた。少し痛むけれど、そんなことよりもトマトクンたちのことが気になる。サリア・ベル。責め苦のサリア・ベル。彼女はもう飛び跳はねてはいなかった。ようやくこの目で確かめることができた惨さん状じようは、想像していたよりむごたらしくはない。何がなんだかわからないからだ。道路がめちゃくちゃにへこんでいることはわかる。そのあたりをサリア・ベルが踏み踏みしている。彼女の足が赤黒く汚よごれている。何かが、いろいろなものの破は片へんが、残ざん骸がいが、そこらじゅうに飛び散って、彼女の身体からだにも付着している。だが、それが何かはよくわからない。いや、もちろん考えればわかるのだが、リアルに感じることができない。ただ、サリア・ベルが遊びに飽あきたように両りよう腕うでを上げて伸のびをして、首を回し、ぐるりと周囲に視線を巡めぐらせて、トマトクンたちに目をとめた瞬間、マリアローズの眼前に現実が奔ほん流りゆうのごとく押しよせてきた。突とつ風ぷうを食くらったような感覚だった。総毛立った。ＡＨＡＡ……！

　サリア・ベルは、笑った。みーつけた。そんなかんじだった。これほど邪じや悪あくでおぞましくておっかなくて死を予感させる「みーつけた」は初めてだ。どうか最初で最後になって欲しい。情けないことに、あまりに怖こわくて、マリアローズは思わずサリア・ベルから目をそらした。いや、そうじゃなくて、サフィニアの状じよう況きようを確認しようとしただけで──なんて、自分に言い訳をするのもむなしいが、とにかくサフィニアの様子をうかがった。サフィニアはすでに準備に入っている。見たこともない術式だ。サフィニアはきらきら光る青い粉みたいなものを右手の指につけて、絵のような、文字のような、紋もん様よう状の何かを自分の顔から首に描えがいている。左手の杖つえに巻きつけてある鎖くさりや紐ひもなどのたぐいは触しよく媒ばいだろう。すごい量だ。そんなことをしているうちに、そろそろ二十三時五十四分三十秒。マリアローズは弾はじかれるようにサリア・ベルに目を戻もどした。サリア・ベルが甲かん高だかい声で笑いだしたからだ。ＫＹＡＨＡ

ＨＡ……！

「──トマトクン……」

　カタリが低く呟つぶやいた。ユリカは極限クライマックス九手ナイン棍ポールを握りしめて微び動どうだにしない。クローディアを抱かかえているロム・フォウも、さすがにやや厳しい面おも持もちだ。アルファだけは、後ろ足で耳のあたりを掻かいたりして、かなり余よ裕ゆうがあるようだが、マリアローズなんかもう、心臓がバクバクバクバクいってぶっ壊こわれてしまいそうだった。というか、あらためて、自分は普ふ通つうというか凡ぼん庸ようなんだと思う。凡庸っていうのも悪くないとも思う。どう考えても、あれは無理だ。深夜にお日様がのぼるようなことがあってもあんな真ま似ねはできないし、したくもない。

　中央がトマトクンで、右に髭、左にジョーカーがつき、三角形を作るような隊形で、彼らはサリア・ベルに向かっていった。ピンパーネルの姿は見あたらない。たぶん、一人だけ別行動をとって、サリア・ベルに接近する機会をうかがっているのだろう。そのためにも、トマトクンたち三人がサリア・ベルの注意を引きつける必要がある。それは理解できるのだが、三人が脇わき目めもふらずにまっすぐサリア・ベルへと突つき進んでゆくのは、ちょっとどうなんだろう。何もそこまでしなくても。べつに、向かってゆかなくても、逃にげまわっていればいいんじゃないの？　なんだか、あれだと、本気みたいだ。真正面からぶつかっていって、あわよくば自分たちの手で倒たおしてしまおうとしているみたいじゃないか。当然、そうなったらそうなったでいいわけだが、できれば、の話だ。できるはずがない。できっこないよ。だって、この点については、いくら強調しすぎてもしすぎることはない。とにかく、サリア・ベルはやたらめったらでかいのだ。

　その超ちよう巨きよ体たいを誇ほこるサリア・ベルが、跳とんだ。両足をそろえてジャンプした。トマトクンたちを踏んづけてしまおうとしている。その意図は明白だ。そんなことは見ればわかる。トマトクンたちだってわかっているはずだ。

　ただし、わかっていても、ひょいとよけられるものじゃない。何しろ、サリア・ベルの足のサイズはメーテル級だ。おそらく、四メーテル以上あるだろう。そんな馬ば鹿かでっかい足が落ちてくるのだ。すごい勢いで。ものすごい速度で。あの超重量が！　ズッシ

イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイィィィィィィィィィィィィィンンン……！

　息が止まるかと思った。ふう、と息とも声ともつかないものが口からもれた。

　大だい丈じよう夫ぶだった。

　トマトクンは前方、髭ひげは右後方、ジョーカーは左後方へそれぞれ跳んで、間かん一いつ髪ぱつ、難を逃のがれた──だけでは終わらなかった。

　トマトクンだ。

　身体を少し横に傾かたむけた斜ななめ前転でサリア・ベルの大お御み足あしをかわし、彼女の後背に出たトマトクンは、そのまま距きよ離りをとるどころか、あろうことか、地面を蹴けって反転し、野や獣じゆうの咆ほう吼こうを轟とどろかせながら大たい剣けんを振ふりかぶった。「──があああああああああああああぁぁぁぁぁっ……！」

　すごい。あれは、斬きるなんてなまやさしいものじゃない。破は斬ざん。あるいは、斬ざん壊かい。サリア・ベルがいくらでかいといっても、足首はたかが知れている。ボッコオオゥゥゥンと吹ふっ飛んだ。大量の白い肉が飛び散った。左足首の半分以上だった。これには、さすがのサリア・ベルもバランスを崩くずした。ふらついて、後ろに倒れそうになった。そのときにはもう、トマトクンはサリア・ベルから三、四メーテル離はなれていたが、追い打ちをかけなかった判断は正しかった。

　トマトクンの大剣で破は壊かいされた部分の周りからだった。

　それは、白い肉の中から飛びだしてきた。

　何？　なんだよ、あれ……？　紫むらさき色いろっぽい──茨いばらのある、蔦つたのような、蔓つるのような、そんなものが、何本も、何十本も、たくさん、生えて、伸びて、暴れまわり、傷を覆おおって、サリア・ベルのふくらはぎに絡からみつき、太ふと股ももに巻きついて、腹から胸に達し、ついには首を絞しめた。

　そう、絞めたのだ。

　紫色の茨のおかげで転てん倒とうはまぬがれたものの、サリア・ベルは苦く悶もんの表情を浮うかべた。泣いた。白い涙なみだを流しながら、両手で頭を抱えて狂くるおしい悲鳴をあげた。禍阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿ＡＡＡＨＨＨＨＨ……！

「〝責め苦のサリア・ベル〟、か……」

　ロム・フォウの声には、憐あわれみの響ひびきすらあった。たしかに、贄の園の住人にふさわしく、あまりうらやましい姿ではないが、マリアローズとしては同情する気にはなれない。悪あく魔まの誘さそいに乗ってああなったのなら自じ業ごう自得だし、何より迷めい惑わくだ。迷惑なんてものじゃない。二十三時五十五分。マリアローズは一心不乱に魔法円や魔法陣じんを地面に描えがくサフィニアを横目で見ながら、早く終わって欲しいと思った。あと五分三十秒なんて長すぎる。ここで黙だまって待っているしかないのが、余計につらい。

　とはいえ、マリアローズにできることは何もない。見ていることしかできない。トマトクンたちの無事を祈いのるしかない。何もかもうまくゆくことを願うしかない。そんな無力な祈りと願いも時とともに流れて、二十三時五十五分二十四秒。トマトクンたちが少し離れて見守るなか、茨がもたらす痛みに耐たえかねてひとしきり暴れ狂ったサリア・ベルが、不意に側転した。側転、側転、月面ムーン宙返りサルト 。着地点は、バルモア大通りに面した大きめの建物の上だったが、サリア・ベルの重量を支えきれなかった。粉ふん塵じんと破は片へんと轟ごう音おんを撒まき散らして、建物は無残に崩ほう壊かいした。サリア・ベル自身も、その破壊行為によって、また身体からだの各所に手傷を負ったようだ。傷口から茨、茨、茨。もう全身紫色っぽい茨だらけになって、さらに苦しむ羽目に陥おちいった彼女は、白い髪かみを振り乱みだしながら、嘆なげくように、許しを乞こうように、両りよう腕うでを広げて夜空に叫さけんだ。いや、違ちがう。単なる叫び声なんかじゃない。あれは──、

　ＡＲＵＵＵＲＥＵＲＡＲＡＲＵＵＵＵＵＵＵＡＲＵＵＵＵＵＵＲＡＵＲＥＲＡＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ……！

　呪じゆ文もんだ。サリア・ベルが叩たたきつけるように両手を振り下ろすと、太古の魔術が発動した。キィンッと耳鳴りがした。耳

の穴に何かを突つっこまれたようなかんじだった。目の前の景色がぶれた。地面が揺ゆれた。重い！　身体が。空気が。すべてが……！　重くて、重すぎて、身動きがとれないどころか、立っているだけでつらい。呼吸も満足にできない。だが、マリアローズたちはまだマシだった。バルモア大通りのほぼ真ん中にいるトマトクンと髭ひげとジョーカーは、何か見えないものに上から圧あつ迫ぱくされているかのように、地面に膝ひざをついている。ひざまずいている。いや、ひざまずかされているのだ。サリア・ベルによって。

　やばい。やばいなんてものじゃない。サリア・ベルを向こうに回して、動けないのは致ち命めい的てきだ。五十五分五十七秒。サフィニアはこの異常事態にも惑わく乱らんすることなく、両手の指すべてに切り傷をつけて、みずからの血で魔法円や魔法陣に何か描き足している。すごい集中力だ。サフィニア、偉えらい。マリアローズにはとうてい真ま似ねできそうもない。というか、どうしよう。トマトクン。髭。ジョーカー。どうしよう。どうしようもないけど、どうしよう。なんだかもう、泣きたくなってくる。泣いたってしょうがないけど。わかってるけど。がんばれ。がんばって。お願いだから、がんばって。僕ぼくには応おう援えんすることくらいしかできなくて、もどかしくて、情けなくて──五十六分六秒。そんな祈りが彼らに力を与あたえたなんてことはないだろうが。

　まず、髭が上半身を起こした。髭の筋肉が異様なまでに盛りあがっている。ぴくぴくしてる。ちょっと気持ち悪い。今にも爆ばく発はつしそうだ。「──拙せつ僧そうの、筋肉を、なめるでない……」そして、髭は一気に立ちあがった。「憤怒怒怒怒怒怒怒怒……！」合がつ掌しようして、絶ぜつ叫きようした。「オウハアアアァァァッ……！」

　その直後だった。

　髭につづいたのは、マリアローズの期待と予想に反して、トマトクンではなかった。

　しかも、彼は髭よりも遥はるかに軽々と、事もなげに、むしろ優ゆう雅がに起きあがってみせた。少なくとも、そう見えた。

「……ふん。これしきのことで、力みすぎだ、生なま臭ぐさ坊ぼう主ず」

「負けず嫌ぎらいはいいが──」

　トマトクンは地面に突き刺さした大剣を支えにして立ち、唇くちびるだけで笑ってみせた。

「無理をしすぎて墓穴を掘ほる羽目になっても知らんぞ」

「己おれのどこが無理をしているように見えるというのだ、馬ば鹿か者ものめ」

「全体的に、な」

「相変わらず貴様の目は腐ふ乱らんしたままのようだな」

「わりとよく見えるほうだと思うんだが」

「見えておらぬものに気づく道理はない。貴様は見えていると勘かん違ちがいしているだけで、その実、何も見えていないのだ」

「まあ、そうかもしれんな」

「ヌエエエエエェェイ！　二人していつまでくだらぬ御ご託たくを並べておるのだ……！」

　まったく、髭の言うとおりだ。五十六分三十四秒。サリア・ベルは全身に絡みつき食いこむ茨いばらの傷みに身をよじりながら、トマトクンら三人をにらんでいる。いつしか耳鳴りは消えていた。さっきまでの重さも感じない。魔術の効果は失うせたようだが、安心してはいられない。サリア・ベルがまた動きはじめた。彼女はいきなり両手でガバッとつかんだ。何をするつもりなのか？　右手で胸のあたりの、左手で腰こしのあたりの茨をつかんで、いったい何を……？

　というか、すっごく痛そうだ。トマトクンの大剣で傷つけられた部分は白い肉がごそっと吹ふっ飛んだだけだったが、なぜか茨が食いこんでいる箇か所しよからは、膿うみみたいな、腐ふ汁じゆうのような、ねとねとどろどろした液体が流れだしている。もしかして、あれが彼女の血なのか。いやな血だが、とにかく、つかんだだけでも痛そうなのに、彼女は、その茨を──思いきり引っぱった。自分の身体から引っぺがした。禍阿阿阿ＡＡＡＡＡＡＡ

ＡＡＨＨＨＨＨＨＨ……！

　できることなら、まあ、可能とは思えないが、マリアローズはサリア・ベルに尋たずねたい。

　問い質ただしたい。

　ねえ、なんでそんなことするわけ？　痛いんでしょ？　だったら、やらなきゃいいのに。蠅はえたかり姫ひめとか万眼王もかなり破は滅めつ的な戦い方をしていたが、贄にえの園の住人には自己破は壊かい衝しよう動どうみたいなものでもあるのだろうか。そうかもしれないが、だからといって、彼らの行動原理がそれだけだとはかぎらない。いや、明白に違う。

　サリア・ベルは自分の身体から引き剝はがして適当な長さに引きちぎった茨を束ね、右手に持った。持っているだけでも痛そうだし、彼女は依い然ぜんとして白い涙なみだをだらだら垂れ流し、唇を震ふるわせていたが、考えてみれば、それは恐おそるべき凶きよう器きだった。

　鞭むちだ。

　長さ二十メーテルにも届こうかという、何本かわからないし、複雑に絡からみあったりもしているが、とにかくたくさんの茨を束ねた、いわゆる千条鞭というやつだ。

　サリア・ベルはその巨きよ大だいな茨の千条鞭を手に、全身の痛みに涙しながら、嗜し虐ぎやく的で不ふ吉きつでぞっとするような含ふくみ笑いをもらした。縊死死……！

「……とんだＳＭプレイやな……」

　カタリもふざけて言ったわけではないだろう。軽口の一つや二つ口にしないと、いてもたってもいられない気分だったのだと思う。その気持ちはマリアローズもわからないでもない。

　二十三時五十七分。あと三分三十秒。サフィニアは左手に持った杖つえの先を一つの魔ま法ほう陣じんの中心に突き立て、右手の人

差し指と中指で宙に何か描えがきはじめた。その軌き跡せきがぼんやり光る線となって浮うきあがっている。いったいどういう仕組みなのか。わからないが、魔術の準備は着々と進んでいるようだ。

　でも、もつだろうか。

　いや、もってもらわないと困る。

　もつと信じたい。

　信じないと。

　サリア・ベルが、トマトクンたちに向けて茨の千条鞭を振ふり下ろしたからといって、それがなんだっていうんだ。

　たしかに、ものすごい勢いだ。

　鞭が空を切る音はヒュンとかビュンなんてものじゃない。ビュオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォンだ。まるっきり暴風だ。

　それに、あの長さだから、よけるによけられない。

　トマトクンたちもそれがわかっているのか、逃にげようとしない。トマトクンは大剣をかつぐように構えて、髭は両足を肩かた幅はばに広げてファイティング・ポーズをとり、ジョーカーは刺し突とつ剣けんを右手にぶら下げて悠ゆう然ぜんと立っている──って、本当に逃げないんだ。逃げないで、どうするの？　大だい丈じよう夫ぶ？　大丈夫なわけがない。普ふ通つうだったら。でも、普通じゃなかったら……？

　狙隷穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢穢ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＹＹＹＹＹ……！

　ジェードリの夜が、歓かん喜きと興奮と苦痛と絶望に彩いろどられたサリア・ベルの叫さけび声によって切り裂さかれた。茨の千条鞭は地面をぶっ叩たたいて、壊こわすというよりも瞬しゅん時じに食い荒あらした。すごい、むしろやばい音だった。心が打ち砕くだかれてしまいそうな破は砕さい音おんだった。だけど、それどころか、僕ぼくは目を輝かがやかせている。

　僕は聞いた。

「ぬうううううあぁぁっ……！」「粉フンッ！　覇ハァァァァァァァッ……！」「ふん……」

　そして、見た。三者三様だった。頭上から怒ど濤とうのごとく襲おそいかかってきた茨を、トマトクンは大剣で爽そう快かいなくらい力強く薙なぎ払はらった。髭ひげは鉄てつ拳けんの鉄てつ槌ついを見み舞まってドカスカ弾はじき飛ばした。ジョーカーは正確な見切りと巧たくみな足捌さばきで茨と茨の合間に滑すべりこんでいた。

　三人とも、無事だった。

　だが、胸を撫なで下ろす暇ひまもなかった。

　サリア・ベルは獲え物ものを殺し損そこなったことを知ると、すぐに鞭を振りかぶった。忌遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺ＹＹＹＹＹＹＹ……！　もっとも、同じことを繰くりかえせば、結果だっておそらく同じになる。マリアローズも、一度目よりはいくらか気分が楽だった──一瞬だけだったが。すぐに頭が真っ白になった。「あぅ」と意味のない声がマリアローズの口からもれた。そうじゃない。違う。同じなんかじゃない。サリア・ベルは茨の千条鞭を振り下ろしたりしなかった。

　薙なぐつもりだ。横だ！　横よこ殴なぐりだ！　薙ぎ倒たおす気だ……！　しかも、踏ふみこんで、猛もう然ぜんと距きょ離りをつめて、トマトクンたちを一いち撃げきで確実に葬ほうむってしまおうとしている。束になった茨いばらが巨きょ獣じゅうの唸うなりをあげてトマトクンたちを打ちすえようとしている。ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオウウウゥゥゥゥゥンン……！　ああ、やだ。見ていられない。見たくない。怖こわい。その瞬間を、その場面を見たくない。目をふさぎたい。でも、目をそらすことがどうしてもできなかった。トマトクンが大剣を下向きに立てて身体からだの前に出した。髭は両足を踏んばって重心を低くした。ジョーカーだけはその場から動いた。走った。跳とんで、蹴けった。髭の背中を、それから、髭の肩かたを。「──むう！　拙せつ僧そうを……！」なんてやつだ、と思ったときだった。茨の千条鞭が、地面をズガガガガガゴザザザザザザザザザ削けずりながら──きた！　まともにぶつかった。直撃だった。めちゃくちゃ吹ふっ飛ばされた。トマトクンと髭だ。すごい飛び距きょ離りだった。二人は十メーテル以上ぶっ飛んで、地面に叩きつけられてからも、ゴミクズみたいに転がった。わずか数秒の出来事だった。それが永遠みたいに長く感じた。

声も出なかった。何を考えたらいいのかわからなかった。それ以前に、僕は何か考えるべきなんだろうか。わからない。わからない。わからない。ただ一人、髭を踏み切り板代わりにして高く、高く跳ちよう躍やくし、鞭をやりすごして着地したジョーカーに対する怒いかりらしきものだけが、胸の奥を疼うずかせている。以前、髭を踏み台にした経験のあるマリアローズが言えた義理ではないけれど、あれはひどい。ひどすぎる。仲間を犠ぎ牲せいにして、利用して、自分だけ助かろうなんて。でも、なんだかそれも実感が薄うすくて。自分の感情なのに、自分のものじゃないみたいで。

　マリアローズは時間が二十三時五十七分二十六秒で止まってしまったかのように感じていた。

　もちろん、そんなことはなかった。

　時計の針は動いている。

　時は流れる。

　五十七分三十秒。

　あと三分。

　ついにサフィニアが呪じゆ文もんの詠えい唱しようを始めた。

　だけど、もう終わりだ。おしまいだ。

「──三重詠唱トライアリア……一式アグニスマグナデルト……分解独唱リゾルヴ・ソロ……展開デイベロプ……」

　サフィニアの魔術が発動することは、たぶんない。

「瞑凰ＳｙａＮａ□ＭＵＮＤＡＲＩ□thamd'rasilfre'kmankind□涅具羅供屠ＰｈａＲａ□ＩＣＹＬＤＩＲＵ□D'yoneradvreykr'eyyond□崑霊ＩＮＧ□奔能渤界ＳｙｕＧａ□ＺＥＮＫＡＹ□煩悩嘸天愚・F'kysarathredond」

　だって、ジョーカー一人だけでは。

　そのジョーカーも、縊死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死と不気味に笑うサリア・ベルに見下ろされて──、

「己おれはやつらと違って繊せん細さいなのでな」

　ニィッと笑い返した。

　まるで、しばらくの間、マリアローズの心臓が止まっていて、今、また動きだした。そんなかんじだった。

　全身に血が巡めぐりはじめる。頭も回る。何かがこみあげてきて、マリアローズは拳こぶしをきつく握にぎりしめた。「……よしっ！」「──まあ、平気やと思っとったけどな……！」みたいなことを言ったカタリの声は震ふるえていた。ユリカはただただ深いため息をついた。ロム・フォウはさっきまでとほとんど変わらない。それこそ、最初から平気だと信じていたのかもしれない。

　ゆっくりと起きあがったトマトクンと髭は、だが、当然のことながら、無傷ではなかった。トマトクンは顔にいくつもの擦すり傷や切り傷がある以外、目立った外傷はないものの、全身鎧よろいの下にどんな怪け我がを負っているかわからない。半はん裸らの髭にいたっては血だらけだ。

　それでも、二人は生きている。トマトクンは大剣を支えにしているし、髭はまだ片かた膝ひざをついているが、なんとかちゃんと立っている。

「ふん。ひどい様ざまだな。鈍のろ間まどもめ」

「……黙だまれ。拙僧の、僧そう帽ぼう筋と三角筋を、踏みつけて足場にしておきながら……何を言うか」

「あんなものをまともに食くらう馬ば鹿かがどこにいる」

「たしかに、二度はごめんだな」

　トマトクンはペッと唾つばを吐はいた。

　いや、あれは唾じゃなくて、血か。

「──結構きいたぞ。やられたぶんくらいは返しておくか」

「むろんだ」

　髭ひげがすっくと立ちあがった。

「気張るなよ、みっともない」

　そう言って刺し突とつ剣けんで空を一薙ぎするなり、ジョーカーが駆かけだした。トマトクンと髭も走りはじめた。二十三時五十八分七秒。サフィニアの詠唱がつづくなか、奇き声せいを発しながら頭上で鞭むちを振ふりまわすサリア・ベルに、ジョーカーは真正面から、トマトクンと髭は向かって右から突つっこんでゆく。どう考えても無む謀ぼうとしか思えないが、何か秘策でもあるのか。あると信じたい。でも、なんだか疑わしい。三人は走る。ひたすら走る。脇わき目めもふらずに走る。サリア・ベルが鞭を振るうのが先か、三人が彼女の足あし許もとまでたどりつくのが先か。どうも、そんな勝負を挑いどんでいるような気がしてならない。それは見るからに分の悪い勝負だ。だって、サリア・ベルは鞭を振り下ろすだけでいいのに、トマトクンたちは二十メーテルかそこら走らなければならないのだ。

　案の定だった。

　鞭のほうが早かった。

　サリア・ベルは少しだけ迷うそぶりを見せてから、あの一撃をかわした小こ癪しやくな伊だ達て男おとこに狙ねらいを定めた。鞭は斜ななめに振り下ろされた。その瞬しゆん間かん、ああ、何はともあれ、トマトクンや髭じゃなくてよかった、なんてことは考えなかった。嘘うそじゃなくて、本当に。まあ、考える必要もなかった。

　あたらなかったからだ。

　サリア・ベルが鞭を振り下ろそうとする直前、ジョーカーはグンッと速度を上げた。鞭はジョーカーが通りすぎたあとの地面を盛大にぶっ叩たたいた。考えてみれば、あの男はトマトクンや髭よりも足が速い。それなのに、負傷した直後の二人と同じか、それ以下の速度しか出ていなかった。わざとだったんだ。とろくさく見せて、目測を誤らせた。言うだけなら簡単だが、そんな芸当を、あの巨きよ大だいな化物を相手に、落ちついて、冷静に、やってのけるなんて──まったく、たいした度胸だ。それについては認めざるをえない。

　そして、その結果、三人はサリア・ベルの足許に達した。いや、三人はそこで止まらなかった。さらに走って、ジョーカーは彼女の

足の間を通り抜ぬけ、トマトクンと髭は外側から回りこんだ。後ろだ。左足の踵かかとの向こうに出た。

「──やるぞ……！」「おうッ……！」「己おれに命令するな……！」

　最初は髭だった。髭の背中から肩かた、腕うでの筋肉がすさまじく膨ぼう張ちようした。とても人間の筋肉とは思えなかった。あれはもう別の生き物だ。筋肉生物髭僧そう侶りよだ。その両手から何か光のようなものが渦うずを巻いて噴ふきだしている。ユリカが叫さけんだ。「──奥おう義ぎ、環気旋カンキしえン……！」そのときだった。サリア・ベルのくるぶしの上あたりに、左右から挟はさみこむように、髭が両の掌てのひらを叩きつけた──のだが、何も起こらなかった。見た目上は。ただ、とっさに振り向こうとしていたサリア・ベルが、ぶるんと全身を震わせて、止まった。あからさまに不自然な静止の仕方だった。その間に髭は横っ飛びして離はなれ、すかさずそこにトマトクンが突とつ進しんしていった。

「──うおおおおおおりゃああああああああぁぁぁ……！」

　正直、我が目を疑った。あの大剣の威い力りよくは承知しているつもりだった。でも、そう思っていただけで、本当はぜんぜんわかっていなかったのか。それとも、髭の環気旋とやらが何か影えい響きようしたのか。

　大剣はズッドオオオオオォォゥンッと大だい炸さく裂れつして、大だい爆ばく発はつを引き起こした。そう、それはまさしく爆発だった。爆発としかいいようがなかった。爆心地は、大剣が叩きこまれたサリア・ベルの左足、くるぶしの上あたりだった。そこを中心として、左足の膝ひざ下したまでが、破裂するように砕くだけ散ってきれいさっぱり吹ふっ飛んだ。なんだか呆あつ気けなく感じるほどだった。サリア・ベルも「ありゃ？」みたいな顔をしていた。

　その表情のまま、彼女は倒たおれる。

　後ろ向きに倒れてゆく。

　もっとも、傷口ともいえないような白い肉の断面からは、早くも例の紫むらさき色いろの茨いばらが芽め吹ぶこうとしていた。

何本も。

何十本も。

もしかしたら、それ以上！

それは一瞬で育つ。見る間に伸のびる。伸びて、サリア・ベル自身に、そして、トマトクンに襲おそいかかってくる。茨が、茨が、茨が、茨が、茨が、茨が、茨が、茨が、茨が……！

そこで、あいつの出番だった。ジョーカーだ。ジョーカーがトマトクンの脇わきをすり抜けて前に出てきた。あんな野や郎ろうのことなんて誉ほめたくないが、完かん璧ぺきなまでに美しい構えギヤルドだった。どれだけ決けつ闘とう慣れした貴族でも、あれほど余分な力が入っておらず、自然体に近い、それでいてまったく隙すきのない正しいジス剣先をト・手首よりギヤル上げた構えドトをとることは難しいだろう。その構えギヤルドから、ジョーカーは悠ゆう然ぜんと剣を上下に振り、おもむろに突きフアントを繰くりだした。突いてフアント、突いてフアント、突いてフアント。払いパラド、突き返しリポスト、突いてフアント、突いてフアント。旋回トウルンウエイエして・エ・突きフアント、後退ロンペして・エ・突きフアント、払ってパラド、突いてフアント、前進してバレ突いたストラ。ジョーカーの剣けん捌さばきはきわめて正確だった。すべてだ。ジョーカーの刺突剣は、ぜんぶの茨を的確に、一つもあやまたずにとらえた。そのたびに、カッ、カッ、と、ごく小さい稲いな妻ずまが散った。しかし、茨は大小様々だが、なかにはかなり太いものもある。あんな刺突剣でブスッとやられたくらいで──これが、なぜか、ことごとくビシュンと身をよじって、それ以上伸びることも、動くこともなくなった。「──〝千の貫通サウザンド・ピアッサー〟」ロム・フォウがそう呟つぶやくと、カタリが頭をぶるんぶるん振ふった。「魔ま導どう王時代の秘宝や……！　ごっついお宝やで、実際！」そうか。そういうことか。つまり、あの刺突剣が特別なのだろう。とはいえ、当然、ジョーカーの技量があってこそだ。まるで腕が百本あって、それぞれに剣を持っているかのようだった。けれども、必死そうには見えなかった。ジョーカーはあくまで余よ裕ゆう綽しやく々しやくといったかんじだった。そうこうしている間に、片足でバランスをとっていられなくなったサリア・ベルが、とうとう尻しり餅もちをついた。ジョーカーは彼女を小こ馬ば鹿かにするように首を傾かしげてみせ、トマトクンと髭を引き連れてその場を離れた。「──ふん、つまらん役回りだ……！」

　二十三時五十八分三十秒。サフィニアの詠えい唱しようはつづいている。

「嘸騰士ＭｙｕＲａ□ＤＯＧＤＡＭＩ□Arsd'esfond'estangue□煩無妥毘ＳｙｕＮａ□ＫＥＹＭＯＮＤＯ□Lesgreymanf'ayd'ayjildilmil□梵鞍ＩＮＧ□韻憧全ＪｙｕＲａ□ＢＡＮＫＡＩ□全知全能・M'arselmthelmDelmdegavy」

　あと二分だ。マリアローズの心臓が高鳴っている。不安のせいじゃない。恐きよう怖ふはあるけれど、期待のほうがずっと大きい。いけるかもしれない。だって、もう四分半すぎた。半分をとっくに超こえている。あとたった二分だ。しのげないはずがない。いける。やれる。絶対にやってくれるに違ちがいない。

　トマトクンと髭ひげとジョーカーは、サリア・ベルから十メーテルくらい離れたところで、足を止めた。

　サリア・ベルの傷口の茨は、ようやく活動を再開して、傷を塞ふさぐというよりも、吹っ飛んだ足を補おうとしているのか。茨の集合体が足を形づくろうとしているようだ。もっとも、それもたいそう痛いらしい。サリア・ベルは茨の千条鞭むちを放ほうり投げて、悲鳴をあげながら身をよじっている。厭阿阿ＡＡＨＨＨ……！

　いっそのこと、もうそのままずっと苦しんでいて欲しい。

　えてして、そんな甘あまい望みが、あまり望ましくない事態を招くもので。

　不意に、サリア・ベルが両手で顔を覆おおって泣きやんだ。座った姿勢のままだ。束つか間の不気味な静せい寂じやくは、最初から破られるためにあるようなものだった。

　それは、彼女の右みぎ肩かたから、左肩から、胸から、背中から、ずりゅ、と生えてきた。

　突とつ起き。あるいは、角か。角……？　違う。そうじゃない。あれは、そんなものじゃない。その突起物には穴があいていた。あ

れは、あの形は、たぶん、唇くちびる。舌。口だ。動いている。喋しやべっているのか。それとも、もしかして、あの声は Ixt'azrdxnazrdxmazrdS'axdN'ekzxraMaigox-ybkeokmgaqwuya'saosamgajkuhkxagaaxxxiweこの声は……！　そして、サリア・ベルが顔を押おさえていた手をどけ、夜空に向かって絶ぜつ叫きようした。禍阿阿ＡＡＡＨＨＨ……！

　魔術だ。まぎれもなく魔術だった。でも、どんな魔術なんだ。口あり突起物の近くに、青白い光のかたまりのようなものが出現して、バチバチバチバチバチ周りに火花みたいなものを撒まき散らしていたかと思うと、それがボウンッと飛んだ。あっちへ。そっちへ。それから――こっちへ……！　飛んできた！　マリアローズは何もできなかった。棒立ちだった。ただ口をぽかんと開けて、近づいてくる青白い光のかたまりを見ていた。頭の中はからっぽだった。せいぜい、なんだろ、あれ、くらいのことしか考えていなかった。結果的に、マリアローズの頭上三、四メーテルを通りすぎていって、十メーテル以上後方の地面を直ちよく撃げきしたからよかった。いや、べつによくない。いいはずがない。

　振り返ると、地面が思いっきり陥かん没ぼつしていた。直径十メーテル以上の穴だった。深い。どれくらいだろう。少なくとも、五、六メーテルはある。たいした音はしなかったのに。ボシュッとか、ズシュッとか、そんなかんじだった。でも、威い力りよくはものすごかった。あんなものを食くらったら――なんて、考えるまでもない。死ぬ。絶対、死ぬ。死ぬに決まっている。というか、跡あと形かたもなく消しよう滅めつしてしまいそうだ。とりあえず、八つ当たり気味というか、ただ見境なくぶっ放しただけのようだから、トマトクンと髭とジョーカーは無事だし、マリアローズたちもなんとか助かったが、ちゃんと狙ねらわれたら一巻の終わりだろう。二十三時五十八分四十二秒。つまり、残りの一分四十八秒は、決して短くなんかないということだ。

「……元魔導王の肩書きは伊だ達てやないっちゅうわけやな……」

「しょんな、感心してる場合じゃないでしょう！」

「感心なんかしとらんがな！　めっちゃ怖こわいっちゅうねん！　正味の話、ちょこーっとだけちびってもうたわ！　せやけどな、び

びっとったかて──」

「そうだね。どうにもならない」とは言うものの、ロム・フォウの声も少々硬かたかった。「信じるんだ。トマトは退ひこうとしていない。まだ引き潮じゃないということだよ」

「でも……」マリアローズはそれだけ口にして、そのあとにつづけようとした言葉をのみこんだ。でも、だって？　でも、なんだっていうんだ。ロム・フォウの言うとおりだ。僕ぼくらは信じるしかない。トマトクンたちを信じるだけでいいんだ。簡単なことだ。気楽なものじゃないか。まったく、マリアローズと違って、三人は楽じゃない。

　サリア・ベルが立ちあがった。やや前まえ屈かがみの姿勢で、怖い顔をして、無于于于于于于于于于于阿阿阿阿阿于于于于于于ＵＵＵＵＵＨＨＨと唸うなっている。彼女の視線の先にいるのはトマトクンたちだ。にらんでいる。めちゃくちゃにらみまくっている。キレかけてるんだ。もうすぐブチキレる。いや、もうすぐじゃない。今だ。きた。きた！　跳とんだ……！　サリア・ベルは、怒いかりのままに、憎にくしみのままに、目をつりあげ、鼻に皺しわを寄せて吠ほえながら、トマトクンたちに飛びかかった。パンチだ。グーでズッガアアアアアアアアアァァァンとぶん殴なぐった。

　地面だった。

　地面だけだ。

　トマトクンたちは間かん一いつ髪ぱつ、ばらばらの方向へ逃にげていた。トマトクンは前へ、サリア・ベルの背後へ。髭は右へ。ジョーカーは左へ。だが、猛たけり狂くるうサリア・ベルは止まらない。右足の後ろ回し蹴げりでトマトクンを狙った。トマトクンが地面に身を投げだしてギリギリそれをかわすと、間かん髪はつ入れずに茨いばら製の左足でロー・キックを繰くりだした。トマトクンは、今度はよけなかった。即そく座ざに立ちあがって大剣で迎むかえ撃うった。「──があああああああぁぁぁ……！」茨が絡からみあってできた左足の甲こうのあたりだった。大剣にズジャズジャ斬きり裂さかれた茨が飛び散った。けれども、すぐに再生する。次々と茨が伸のびてあっという間に補強してしまうどころか、トマトクンを猛もう襲しゆうする茨もあった。「ええい……！」トマトクンは大剣でそれらを斬り払はらいながら、後退する。でも、後ろ向きだ。遅おそい。追いつかれる。このままでは、茨の渦うずにのみこまれ

てしまう。そのときだった。

　髭ひげが突とつ進しんしていった。サリア・ベルの右足だ。その踵かかとの上あたりだった。

　もしかしたら、初めて見たかもしれない。髭が拳こぶしではなくて足を使った。

　蹴ったのだ。

「砲ホウオオオォォォ羅ラアアアアアアァァァァァッ……！」

　それはただの回し蹴りだったが、ものすごく重い一撃だった。まず音が違った。巨きょ大だいな槌つちか何かで殴おう打だしたような音だった。その音は虚こ仮け威おどしではなかった。サリア・ベルの巨体が、揺ゆらいだ。瞬しゆん間かん、軸じく足あしだった右足に力が入らなくなったのか、身体からだが傾かたむきかけて、サリア・ベルはすぐに左足で踏ふんばった。トマトクンがその間に距きよ離りをかせいだ。ナイス、髭！　ただ、その結果、サリア・ベルは標的を変えて、髭に狙いを定めた。よりいっそう頭にきたみたいだ。もう我を忘れてしまっているかのようにも見える。サリア・ベルは一歩前に出て、素す早ばやく振ふり返り、超重量パンチでも、超絶大おお鉈なたキックでもなく、あろうことか、両りよう腕うでを広げて髭に覆おおいかぶさっていった。邪阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！

「──トワニング……！」ユリカが叫さけび、カタリは目を剝むいて、ロム・フォウは拳を握にぎりしめ、アルファはびくっとして、マリアローズは息をのんだ。ああ、これはさすがにダメかもしれない。そんな思いが頭をよぎったことは否定しない。だって、腕や足を出してくるならともかく、身体ごとこられたら、いくらなんでもよけられない。不可能だ。前に逃げても、後ろでも、右でも、左でも、間に合わない。髭に逃げ場はない。

　だから、髭は逃げなかった。その場で右足を高々と上げた──って、なんで？　何するつもり……？　ユリカが短く叫んだ。「──黄金脚……！」たしかに、黄金だった。光っている。髭の右足が淡あわく金色に光っちゃってる。よく見えなかったが、髭は輝かがやく右足を、地面に叩たたきつけたのか。「フハハハハハハ

ハァァッ！　筋肉万歳ハイパー・マツスルゥゥッ……！」その瞬間、そんな髭の高笑いが聞こえたような気がした。うつぶせだった。サリア・ベルが地面に倒たおれこんだ。

　二十三時五十九分七秒。サフィニアの詠えい唱しようがやけに大きく聞こえる。

　髭はいったい、何をしようとしていたのか。そして、実際に何をして、どうなったのか。サリア・ベルに押しつぶされた髭は、無事なのか。

　無事なわけがない。

　いくら髭でも、無理だ。

　突つきつけられた現実をどう受け止めるべきか、マリアローズは迷うというよりも戸と惑まどって、ただ首を横に振った。嘘うそだ。認めない。認めたくない。ロム・フォウやジョーカーは別としても、他ほかの皆みなと比べれば、一いつ緒しよにすごした時間は長くないけれど。それでも、トマトクンの家に住んでいたから、顔をあわせることはたくさんあって。妙みような蘊うん蓄ちくばかり言うから、うざかったりもして。頭はすこぶるいいはずなのに、筋肉筋肉うるさくて、変なやつだし。つきあい悪いし。だけど、泉セン里リのときは助けてくれた。いざというときには力を貸してくれる。仲間だった。だいじな仲間だ。嘘だ。髭が。髭が──そんなの、嘘に決まってる。ねえ、そうだよね？　そうでしょ、ユリカ……？

「大だい丈じよう夫ぶよ」ユリカはマリアローズを見なかった。サリア・ベルから目を離はなさず、顔は強こわ張ばっていたけれど、はっきりと断言した。「トワニングは、大丈夫」

　信じているのか。信じたいのか。僕も信じればいいのか。

　サリア・ベルが両手を地面について、身体を持ちあげようとしている。怒いかりに身を任せたボディスラムは、彼女自身をも傷つけていた。身体の前面が傷だらけだった。それらすべての傷口から紫むらさき色いろの茨があふれ、彼女に苦痛を与あたえている。怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨唸りながら、歯は軋ぎしりしながら、彼女は起きあがろうとして、顔を上げ、次の獲え物ものを求めて首を巡めぐらせた。

　その額に、プスッ、と突き刺ささって、小さな稲いな妻ずまが走った。

　サリア・ベルは「──惡ッ……」と妙な声をもらし、頭をブルッと震ふるわせた。

　剣けんだ。刺し突とつ剣だった。

　ジョーカーの〝千の貫通サウザンド・ピアツサー〟だ。

「さっさと起きろ、図ずう体たいばかりでかくて能のない醜しゅう悪あくな薄うすら馬ば鹿かめ……！　暇ひまつぶしくらいにはなるだろうと期待したが、買いかぶりだったようだな！　もういい、飽あき飽きだ、そろそろとどめを刺してやる！　雑ざ魚こが、さあ、こい！　きてみろ……！」

　言葉が通じたのかどうか、定かではない。だが、態度と口調で意味はだいたいわかっただろうし、ジョーカーの大だい胆たん不ふ敵てきな挑ちよう発はつを平然と無視できるほど、サリア・ベルは理性的ではなかった。というか、今、世界で一番理性という単語が似合わない存在は、おそらく彼女だろう。

　彼女は歯を剝きだして跳はね起きた。ジョーカーまでは十五メーテルかそこらだ。彼女の体格を考えれば目と鼻の先といってもいい。しかも、ジョーカーは武器を失った。〝千の貫通サウザンド・ピアツサー〟はサリア・ベルの額に刺さったままだ。どうするつもりなのかと思ったら、ジョーカーは羽織っていたカフタンを脱ぬいで、それを右手に持った。かなり高価そうだが、もうぼろぼろで、血だらけの上着だ。当然、殺傷能力なんかあるはずもない。にもかかわらず、ジョーカーは、貴様などこれで充じゆう分ぶんだといわんばかりにそれをヒラヒラさせながら、左手の人差し指をクイクイッと曲げてみせた。

「Dun-bi'afreid'ob-me,bitch. Ai-wana-jas'treat'u-with-love-laik'a-baby,heh」

　忌遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺ＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＨＨＨ……！

　今度は上古ハイ高位語ロメオンだったので、完全に通じたかもしれない。サリア・ベルは茨いばら製の左足を一歩踏ふみこませて、

右足でなんのひねりもない、だが、強きよう烈れつきわまりない蹴けりをぶちかました。猛もう風ふうが巻き起こった。すごい強風だったが、空から振ぶりだった。ジョーカーは完全に読んでいたようだ。蹴りの軌き道どう。タイミング。ただ、それでもギリギリだった。右方向に身体からだを投げだすように跳とんだジョーカーは、風にあおられて地面をゴロゴロ転がり、起きあがってすぐ、性しよう懲こりもなく右手のカフタンをヒラヒラさせた。「ハハハッ……！　やはり貴様は鈍どん臭くさい鈍重な愚ぐ図ずだな！　筆ひつ舌ぜつに尽つくしがたい下へ手た糞くそめ、どうせ無理だろうが、できるものなら己おれを──」その先はつづかなかった。サリア・ベルが飛びかかってきたのだ。サリア・ベルは思いっきり振りあげた両の拳こぶしを、ジョーカーに叩きつけようとした。

　むろん、ジョーカーもむざむざとやられはしない。サリア・ベルの場合、拳もメーテル級だし、尋じん常じようじゃないが、ジョーカーも並なみ大たい抵ていではない男だった。ジョーカーは、飛び退さがりはしなかった。横にも逃にげなかった。前だ。サリア・ベルの懐ふところに飛びこんだ。そうして地面をぶち抜ぬいたサリア・ベルの拳をカフタンでぺしっと叩きつつ、左方向へ駆かけた。脇わきから飛びだしたジョーカーを、だが、サリア・ベルもみすみす見み逃のがすつもりはないようだった。なんと、首をにゅっと伸のばして嚙かみつこうとした。ガッチィィ───ンッ！　上の歯と下の歯が嚙みあって凶きよう悪あくな音がした。前歯と前歯の間に、カフタンが挟はさまっている。ジョーカー自身はなんとか難を逃れたが、危なかった。いや、まだ危ない。ジョーカーは完全に体勢を崩くずしている。そこに、サリア・ベルの両手がきた。挟んで潰つぶしてしまおうとしている。やばい。やばいって。ジョーカーも身を起こして逃げようとしているけれど、間に合わない……！

「ぬうああああああぁぁぁぁ……！」

　そう、間に合わなかったはずだ。トマトクンが横合いから突っこんできて、サリア・ベルの右手首を大剣でぶった斬ぎってしまわなければ。

　おかげでジョーカーは、サリア・ベルの左手に強打されて、吹ふっ飛ばされただけですんだ、という言い方は適当ではないだろう。ジョーカーは、メタクタのグジャグジャに荒あれている地面の上を、すごい勢いで十メーテルほども転がったあげく、ようやく止まったものの、死体みたいにぐったりしている──って、死体……？　縁えん起ぎでもない。でも、僕ぼくだったら、とマリア

ローズは考える。あんな目に遭あったら、間ま違ちがいなく死んでる。生きているほうがおかしい。

　二十三時五十九分三十三秒。ついに、残り一分を切った。

　サリア・ベルは、切断された自分の右手首を左手に握にぎりしめて、ジョーカーのカフタンをガジガジ嚙みしめながら、憤ふん怒ぬの形相でトマトクンを見下ろしている。あらゆる傷口からあふれるおびただしい茨が、絶えず彼女を責め苛さいなんでいるのだ。苦しみ、憎にくみ、正気などとうに失って、ただひたすら暗く激しい衝しよう動どうに身を任せるだけの贄の園の住人と成り果てた彼女の真っ白い目に、しかし、ふと──気のせいだろうか、負の感情以外のものが浮うかんだように思えた。彼女は低く呻うめいた。不得得得得得得得得得得得得得得得ＵＵＵＵＵＵＵＵＵＨＨＨ……？

「どうした」

　トマトクンは大剣をかつぐように構えて、ぐっと腰こしを落とした。

「──休んでないでかかってこいよ。まあ、いくらやっても無む駄だだろうがな。どのみち、お前じゃ俺を殺せん」

　ジョーカーならともかく、トマトクンまでそんな安い言葉で挑発するなんて。それにまんまと乗せられてしまう、サリア・ベルもサリア・ベルだ。無理だとわかっているけれど、あえて諫いさめたい。できることなら、説得したい。ここは冷静になって。深呼吸をして、落ちついて。だって、そうしないと、こっちがやばいから！

　突とつ起き……！

　あの不気味な突起だ！

　サリア・ベルの肩かたから、胸から、背中から生えている突起物が、またうごめきだした。

　それにあわせて、今度はサリア・ベル自身も何か唱えはじめた。あれは Ixt'azrdxnazrdxmazrdS'axdN'ekzxraMaigoxybkeokmgaqwuya'saosamgajkuhl
あれは、呪じゆ文もんだ。魔ま術じゆつだ。さっきと同じ魔術だろうか。そうかもしれず、そうではないかもしれず、よくわからないが、トマトクンは逃げない。動かない。待ちかまえているのか。

トマトクンの外がい套とうがバタバタひるがえっている。

風。強風。淡あわく輝かがやく風だ。突起の口にあわせて呪文を詠えい唱しようするサリア・ベルが、その風の源のようだった。ありあまる魔力があふれだしているのだろう。いわば、魔力風とでもいうべきものだ。

そして、サリア・ベルの胸の前に、それは出現した。

最初は小さかったが、見る間に大きくなった。

でかい。

直径七、八メーテルはある。いや、もっとあるだろうか。

青白い光のかたまりだ。大きさだけじゃなくて、密度が高いとでもいえばいいか。バチバチどころかボンボンいっちゃってる。さっきは腹立ちまぎれにそこらにばらまいちゃいました、みたいなかんじだったが、今回は違う。狙ねらっている。サリア・ベルは、トマトクンを、トマトクンだけを滅ほろぼそうとしている。

それなのに、トマトクンは──と、マリアローズは目を瞠みはった。

あれは……！　そうだ。そうか。それだ。その手があった！

トマトクンが身にまとう全身鎧よろいの炎模様ファイヤーパターンがぼんやりと光っている。鎧の背中の部分が盛りあがってトマトクンの頭部を覆おおい隠かくし、全体のフォルムも猛たけ々だけしく変化していた。サリア・ベルの魔術が完成して発動したとき、トマトクンは下がらなかった。退ひくどころか、青白い光のかたまりに向かっていった。「おおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ……！」両者が衝しよう突とつした。光が広がって弾はじけた。予想よりすごかった。視界が白一色に塗ぬりつぶされた。音はあっという間に飽ほう和わした。しばらくの間、何も見えず、何も聞こえなかった。マリアローズは何度もまばたきをした。目をこすりもした。そのうち次し第だいにぼんやりと見えてきた。

魔術が炸さく裂れつした場所一帯の地面は、思いっきり陥かん没ぼつしているようだった。

上から見下ろしているわけではないので、よくわからないが、た

ぶんかなり大きな穴だった。

　トマトクン。トマトクンは……？　見えない。見えないよ。駆かけよって、確かめたい。もちろん、大だい丈じよう夫ぶだと思っている。信じている。でも、この目で確かく認にんしたい。そうしないと、止まらない。トマトクンの顔が思い浮かんで。トマトクンがかけてくれた言葉が頭を駆けめぐって。初めて会ったときから変な恰かつ好こうで、変なことばっかり言って、僕は戸と惑まどってばかりで。閉へい鎖さ魔ま宮きゆうで、きみは自分の感情を持てあましたような困こん惑わく顔で「死んだらどうするんだ」と僕に言った。「仲間が死んで帰ってこないなんて、冗じよう談だんじゃない」と少しだけ声を荒あらげた。泉セン里リ決戦のあと、きみは僕の頭を撫なでてくれた。「よくがんばったな、マリア」

　僕は覚えてる。ぜんぶ覚えてるんだ。一つ一つ、はっきりと覚えてる。

　だから、姿を見せてよ。僕を安心させてよ。せめて、声を聞かせてよ。



「……言ったはずだ」

　声を。

「──お前じゃ俺を殺せん、とな。いや……」

マリアローズは、たしかに聞いた。

「俺たちを、と言ったほうがいいか」

そして、見た。

サリア・ベルにぶん殴なぐられて、めちゃくちゃ地面を転がりまくったあげく、横向きでぐったりしていたのに。まるで、ちょっと昼ひる寝ねをしていて、今、目が覚めたとでもいいたげな起きあがり方だった。

「……ふん。得意げに言わずもがなのことを言うな、阿あ呆ほう」

もっとも、骨折でもしたのか、左ひだり腕うではだらんとしていて、全身傷だらけで、血ち塗まみれだ。あのざまで、よくもあんな憎にくまれ口を。

ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。

どうしてあそこまで片意地を張らないといけないのか。とにかく、筋金入りの意地っ張りとしかいいようがない。依い怙こ地じもあそこまでいったら天あっ晴ぱれだ。

ただ、行くところまで行っちゃっているもう一つの例については、称しょう賛さんよりも驚おどろき呆あきれる気持ちが先に立った。

ついさっき、サリア・ベルがボディ・スラムをぶちかました場所からだった。

「ムゥワハハハハハハハハハァァァァッ……！」

突とつ如じょ、哄こう笑しょうがわきあがり、ユリカが「あぁ……！」と叫さけんで、カタリは「うはっ」と歓かん声せいをあげ、ロム・フォウはため息をついて、マリアローズも安あん堵どまじりの乾かわいた笑いをもらした。

おそらく、天才と紙一重のなんとかのほうに違ちがいないＺＯＯの破は戒かい僧そうは、自身の黄金脚によって蹴けったくり空けた穴から跳とびあがると、空中で一回転して着地し、両腕の上腕ダブル二頭バイ筋セツプスを強調するポーズをとってから、背筋ラツトを思いきり広げてみせ、最後に身体からだを横向きにして胸の厚み

を誇ほこらしげに見せつけた。

「━左様ォォッ！　この程度で拙せつ僧そうの筋肉をどうこうしようとは、笑しよう止し千せん万ばんンンッ！　グワクハハハハハハハハハァァァッツ……！」

　なんだかものすごくいやだけれど、髭ひげの呵か々か大笑が十一巡じゆん月げつ八番日の訪おとずれを告げる鐘かねの音となった。

　零れい時。あと三十秒。

　トマトクンが穴から飛びだしてきて大剣で空を一薙なぎし、ジョーカーはゆったりと歩きだして、髭が全身の筋肉をよりいっそうおぞましく膨ふくれあがらせた。サリア・ベルにしてみれば、頭にきてしょうがない状じよう況きようだろう。実際、サリア・ベルは白い髪かみを振ふり乱して、天地を揺ゆるがすような怒ど号ごうを発した。そのときだった。図はかったかのようなタイミングだった。いや、事実、彼はこのときを、絶好の機会を、今の今までどこかにじっと身をひそめて、ひたすらうかがっていたに違いない。

　彼は闇やみに生まれし者だ。

　闇に親しみ、闇そのものとなって、命じられるがままに闇から闇へと人を葬ほうむる者だった。

　でも、今は違う。

　冷たい闇にひそむこともできるが、現在の彼には、身を横たえるあたたかい陽ひだまりがある。

　その陽のあたる場所を守るべく、両手に雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを持ち、口にはサフィニアから渡わたされた小刀をくわえて、彼は奔はしってきた。一いち陣じんの砂風が、後ろからだった。背後からサリア・ベルに猛もう接近して、一いつ片ぺんの躊ちゆう躇ちよもなく接せつ触しよくした。彼は駆けのぼった。サリア・ベルの右足を。二本の短剣を駆く使ししながら、蹴って、跳ちよう躍やくして、しがみついて、また跳んで、傷口からあふれる紫むらさき色いろの茨いばらを振りきって、ぐんぐんのぼっていった。

　あんな芸当、彼以外の誰にできるだろう。

できない。できっこない。無理だ。

ピンパーネル……！

すごい。さすがだ。拍はく手しゆしたい。さすがにしなかったけれど、鳥とり肌はだが立った。感動してしまった。ピンパーネルは、与あたえられたのではなく、みずから引き受けた使命を完かん璧ぺきに果たしてみせた。目にもとまらぬ早はや業わざだった。サリア・ベルが「──惡？」というかんじで自分の腰こしのあたりを見たときにはもう、ピンパーネルは雄おすのグレアデと雌めすのリレッザでそのあたりの肉をバシュバシュ斬きり破り、ザカザカ斬り開いて、茨をザクザク斬り刻み、バツバツ斬り落としまくっていた。

それからピンパーネルは、口から小刀を放すなり、跳びあがって一回転した。蹴った。いや、足の裏で小刀の柄つか頭がしらを押したのだ。まるで右足で小刀を扱あつかっているかのようだった。小刀は雌雄一対の短剣が作った茨だらけの傷口の中心に突つき立てられた。傷口はすぐに茨で覆おおいつくされ、小刀もその中に埋うもれて見えなくなったが、これで「魔ま術じゆつの発動時に外れないように」という要件は間違いなく満たされるだろう。無事、魔術が発動しさえすれば。

そのときを二十五秒後に控ひかえて、ピンパーネルが落下する。十メーテル以上の高さから落ちてゆく。え、嘘うそ、それ、やば──と思う間もなかった。ピンパーネルは着地した。足、腿もも、尻しり、背中、肩かたの順で接地して衝しよう撃げきを最小限に抑おさえる、すばらしい着地だった。それにしても、ぐるんぐるん何回かでんぐり返しして即そく座ざに立ちあがるなんて人間業じゃないと思うが、そんなの今に始まったことじゃない。その程度でいちいち驚いていたら、ＺＯＯではやってゆけない。だいたい、驚いている場合じゃない。憤怒怒怒ＵＵＵＨＨＨ……！

おそらく、無理に通訳すれば、「貴様ら、しつこくてしぶとい蛆うじ虫むしどもめ、虫けらの分際で妾わらわをさんざん虚こ仮けにしくさりやがって、ただですむと思うな、もう許さない、許すものか、絶対絶対許さないキー！」といったところだろう。サリア・ベルは、まずピンパーネルめがけて右足を繰くりだした。ピンパーネ

ルがザッと飛び退さがってこれをよけると、間かん髪はつを入れず、今度はトマトクンめがけて茨製の左足による回転回しローリング蹴りソバツトを飛ばした。トマトクンはかわさなかった。「──があああああああああぁぁ……！」恐おそろしい勢いで大剣を振り下ろして迎むかえ撃うった。もうそれは斬ざん撃げきじゃない。超斬撃だった。ズドゴオオオオオオオオオオオオオォォォゥンと茨製の左足に直ちよく撃げきして、ごっそりこそげ落とした。だが、サリア・ベルは、そのまま前方に転がって群がり襲おそってくる茨から逃のがれたトマトクンを追わなかった。髭を狙ねらった。右足でも、左足でも、握にぎりしめた右手と茨によって一体化しかけている左手でも、手首から先が茨のかたまりと化している左手でもなかった。胸のすぐ下あたりからだった。ずりゅっ──と、生えてきた。不完全な形だが、足らしきものだ。第三の足だった。それが、グンッと伸のびて、髭を踏ふみつぶそうとした。まだ胸の厚みを見せびらかすポーズをとっていた髭は、だが、慌あわてなかった。それどころか「ムフッ」と髭笑いをして、両足で地面をがっちり踏みしめ、何か球状のものを握るようにした両手を腰の横にもってきた。いや、実際、握っていた。あれは、なんだろう。光。光っている。光が渦うず巻まいている。「──気力充じゆう溢いつ！　絶ぜつ紹しようォォ……」そして、サリア・ベル第三の足に向かってその手を突きだした瞬しゆん間かんだった。「殲封センプウウゥゥゥゥゥゥ気キッ……！」髭の膨ぼう張ちようしきった両りよう腕うでや肩や胸や背中から血が噴ふん出しゆつした。光が炸さく裂れつして、凶きよう暴ぼうな竜たつ巻まきと化した。光の旋せん風ぷうは、第三の足の三分の一くらいをあっという間にズタズタのボロボロにして雲うん散さん霧む消しようしたが、あまりの激しさに髭も盛大に吹ふっ飛んだ。これにはさすがのサリア・ベルも驚おどろいたようだ。サリア・ベルは二秒か三秒、ぶっ壊こわれた部分から茨が噴ふきだす第三の足をぼんやり眺ながめていた。ジョーカーがニヤリと笑った。マリアローズは時計を見た。──零時十三秒。

　十四秒。

「──トマトクン……！」マリアローズは絶ぜつ叫きようした。

「退ひけ……！」トマトクンが鋭するどく命じた。

「──三重詠唱トライアリア……大呪結合マグダルユニオン……」すべての魔ま法ほう陣じんと魔法円が色とりどりに輝かがやき、サフィニアの詠唱が最終段階に入った。「JiHyd/Machil + Ognim = 23.6784Zakara/Sayten + Rayrakk = 35.2349（EgNogRogMagZokk）

＋（FondVondMond）/ElErakk = 41.0867」

　その間に、トマトクンたちは一目散に逃にげる。ひたすらサリア・ベルから離はなれようとする。トマトクンは北へ。ピンパーネルも北へ。髭ひげはジョーカーに蹴けり起こされて南へ。その髭を追い越こして、ジョーカーも南へ。サリア・ベルは突とつ然ぜんの事態に戸と惑まどっている様子だ。そのままずっとまごついていてくれると助かるのだが、そうは問屋が卸おろさなかった。折おり悪あしく、髭にふっ飛ばされた第三の足から伸びてきた茨の群れが、彼女の上半身を食い荒あらしはじめたのだ。茨は首を伝って口の中にまで入りこもうとした。愚喪惡惡惡ＯＯＯＨＨＨ……！

　それでまたブチキレたらしいサリア・ベルは、苦しみ悶もだえながら、さて、この怒いかりを何ものにぶつけるべきかと、首を巡めぐらせた。

　北を見て、南を見た。

　それから何かを思い出したように、こっちを見た。

「──って、こっち……？」

　なんで？　嘘でしょ？　だって、そんな──もしかして、さっきの声？　あの合図？　そうかもしれない。そうじゃないかもしれない。わからないが、あと約八秒。サフィニアの魔術はもう完成しつつある。「捕××給×獄×繋×不倶戴天×怨敵悪××竜」サリア・ベルは、どれくらいだろう。ここから二十メーテルくらい離れているだろうか。その距きよ離りは致ち命めい的てきなのか、それとも安全圏けんなのか。「我×古×力×改××行使××」なんとなくだが、大だい丈じよう夫ぶなんじゃないかと思った。サリア・ベルはまだ動きだしていない。間に合う。あいつがここに至る前にサフィニアの魔術は発動する。それでも、一応、マリアローズは偽にせ劫ごう火かを抜ぬいた。「──みんな、サフィニアを……！」「おっしゃ！」「ええ！」うぉん！「……っ！」ロム・フォウはクローディアを抱かかえているから、たぶん身動きがとれない。まあ、でも、なんとかなる。サリア・ベルはようやくこっちに向けて足を一歩踏みだしたところだ。馬ば鹿か馬鹿しいほど大きい一歩だけれど、無理だ。ここまでは到とう達たつできない。勝ちだ。僕ぼくら

の勝ちだ。サリア・ベル。ざまあみろ。そう思いながらマリアローズは笑った。いや、笑いかけた顔の筋肉すべてが、凍こおりついた。

　サリア・ベルが、ぐっと身体からだを反り返らせて、礼でもするように上半身を倒たおした。

　当然、なんの意味もなく、そんな真ま似ねをするはずがない。意味はあった。

　頭とう髪はつだ。真っ白い、数えきれないほどのサリア・ベルの髪かみの毛が、というか髪とは似ても似つかない細長いものが、一いつ斉せいに押しよせてきた。伸びた。伸びて、伸びまくって、ドバーッときた。マリアローズは限界以上に見開いた目で見た。それらの髪の毛もどき一本一本の先せん端たんには、指が、五本か四本か知らないが指のようなものが、つまり手みたいなものが生えていた。無数の手だ。襲いかかってくる。すごい速度で。どうする？いや、どうするも何も、守らないと。サフィニアを守らないと。マリアローズと、その右にいるカタリと、左にいるユリカで。アルファは後ろにいるロム・フォウをカバーするつもりか。だから、僕ら三人で。「破汰汰汰汰汰汰汰汰汰汰ぁぁぁ……！」ユリカは極限クライマツクス九手ナイン棍ポールを間断なく繰りだして、どんどん斬きり払はらい、弾はじき返して。「オシャシャシャシャシャシャシャァァァァッ……！」カタリも二本の変形斧おので斬って斬って斬りまくって。マリアローズもやらないと。前へ。前に出るんだ。前へ。足を。右足で踏んばって、左足を前に出そうとした。その途と端たんだった。

　ずぐぅん、

　――と、頭のてっぺんまで突つき抜けるような痛みが走った。

　マリアローズは腰こし砕くだけになって、尻しり餅もちをついた。一瞬、何がなんだかわからなかった。右足。何、これ。痛い。すごく痛い。そうだ。怪け我が、してたんだった。ちらりと右足を見た。ブーツを履はいているから、どうなっているかなんてわからない。でも、痛い。力が入らない。顔を上げた。ぞっとした。視界を覆おおいつくさんばかりの、生なま白つちろい、手、髪だったもの、手、手、元髪、手、元髪、手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手手。ああ。僕は。僕は。僕は――なんてことだ。何やってるんだ。こんなときに。ダメじゃないか。こんなことじゃ、ダメじゃ

ないか。立たないと。立って、守らないと。盾たてにならないと。でも、遅おそい。僕はもう立ちあがれない。間に合わない。僕には、できない。なんにもならないとわかっていながら、しゃがんだ体勢でむなしく偽劫火を振ふりまわすことくらいしか。そんなときに。

「──我流ゥッ！」

　きみは、僕を助けてくれる。そう。前にもこんなことがあったっけ。もしかしたら、ちょうど僕の真後ろにサフィニアがいたから、確実に彼女を守るため、ただそれだけを考えて、きみはそうしたのかもしれないけれど。

「大輪無限狂い咲ざきィィィヤァッッ……！」

　きみは横合いから僕の前に飛びだしてきて、愛用のニノシーとホノゴを思うさまに振るった。ものすごかった。さすがにジョーカーほどではなかったけれど、まるできみの腕うでが四本も六本もあるかのように見えた。絶好調だと言っていた。そうだったんだろう。きみは両手の斧をでたらめに振りまわしているようでいて、正確に、一本も逃のがさず、髪だか手だかなんだかわからない真っ白くて細長いものを、斬った。ズダッと斬って、バババッと斬って、ザンッと斬った。サクサク斬った。近くにいるはずのサフィニアの詠えい唱しようがやけに遠くに聞こえた。「我×屠×我×滅××全××鍵×言×葉×以×」

　僕は見ていた。

　ただ見ていた。

　待っていたんだ。

　サフィニアの魔術が完成して、発動するそのときを、僕は何もせずに、待っていた。

　きみが防いでくれていたから、バカみたいに薄うすぼんやりとして、待っていられた。

　愚おろかなことに、僕の中に恐おそれはなかった。僕は見ていた。ただ見ていた。

　勇ゆう猛もう果か敢かんに戦うきみの左手に、あの白い管状の気

色の悪いものが絡からみついて、その先の手みたいな部分が、きみの手首をがっちりとつかんだ。きみはそれを即そく座ざに右手のホノゴで叩たたき斬った。その隙すきに別の管がきみの首に巻きついた。左手のシノニーでそれをぶった斬ろうとしたきみの右足を、違ちがう管がとらえた。立てつづけに、左足も。左手も。

「くんぬっ……！」

　きみはそれらを振り払おうとして、身体をねじった。こっちを向く恰かつ好こうになった。それでも、管は離はなれなかった。さらに何本もの管が、その先の手が、きみをつかんでからめとった。

　誰かが叫さけんだ。「──カタリ……！」

　僕じゃない、誰かが。

　はっとした。僕は動こうとした。激痛をこらえて片かた膝ひざ立ちになった。こらえきれなくなったのか、クローディアを地面に下ろしてきたらしいロム・フォウが、僕の脇わきを駆かけ抜けて、前に出かけた。アルファもそれにつづいた。僕は遅おくれた。

　僕はやっぱり見ているだけだった。

　ただ見ていた。きみを見ていた。

　きみの胸の真ん中あたりから、何かがズシュッと突きだした。

　白いものが、一本、二本、三本、次々と。

　きみはそれに目を落として、少しだけ顔をしかめた。

　僕が「あ……」と声をもらしたとき、サフィニアの詠唱が終わった。

「──屠竜Ａ□Ｌ□Ｂ□獄滅Ａ□Ｔ□Ｒ改・Ｏ□Ｓ」

　最初、白色の稲いな妻ずまが夜空を引き裂さいた。

　一いつ瞬しゅん遅おくれで雷らい鳴めいが轟とどろいて、聴ちょう覚かくが飛んだ。同時に、青い雷かみなりがほの白く染められた天空を叩き割った。

赤い霹へき靂れきが大地を揺ゆるがせた。

緑色の稲いな光びかりが、上空ではなく地表すれすれの位置からわき起こった。

黄みがかった雷らい電でんは、サリア・ベルの身体からだから発せられた。

世界がバラバラになった。マリアローズにはそう感じられた。色も、形も、音も、匂においも、味も、空気の肌はだざわりも、上に空があって下に地面がある確固とした現実感も、何もかもが一瞬で喪そう失しつした。何か大変なことが起こっている。大規模な破は壊かいが行われている。かろうじてわかるのはそれだけで、あとは何も感じなかった。マリアローズは目を閉じていたのかもしれないし、耳をふさいでいたのかもしれない。舌を噛かまないように、口を閉めて歯を噛みあわせていたかもしれない。うずくまっていたかもしれない。何もせずに、ぼうっとしていたのかもしれない。

時間の感覚も失われていた。

ぼんやりと何かの輪りん郭かくが把は握あくできるようになってきても、しばらくの間、それがいったいなんなのか考えることができなかった。

あるいは、考えたくなかったのかもしれない。

後ろで音がした。

振り返ると、髪かみの長い痩やせた女が、地面に描えがかれた魔ま法ほう陣じんやら魔法円やらの上に倒たおれていた。

もちろん、サフィニアだ。

気のせいかもしれないが、サフィニアはこの短時間で、一回り小さくなってしまったかのように見える。身じろぎ一つしないものの、かすかに肩かたが上下しているので、息はあるようだ。生きている。

でも、助け起こすなり声をかけるなり、何かするべきだと思う。

そうだ。それなのに、どうして僕ぼくは地べたに座りこんだまま、動かないんだろう。動けないんだろう。どうして？　なんで

―って……？

　理由はある。わかっている。僕は目をそらそうとしている。

　けれど、逃にげられない。

　もうすぐ、突つきつけられる。たぶん、彼女が名前を呼ぶ。

「―カタリ……！」

　そうして、僕は振ふり向いて、今度はちゃんと、しっかりと、この目で確かめる。

　サリア・ベルの身体は、もはやあの白くて生々しい肉ではなかった。紫むらさき色いろの茨いばらさえも一いつ緒しよくたに、乳白色の巨きよ大だいな彫ちよう像ぞうのような物体へと成り果てていた。その全面に、黒い網あみ目めがびっしりと張はり巡めぐらされている。それが何かなんて知らない。サフィニアの魔術によるものだろうということしか想像がつかない。そんなことはどうでもよかった。

　カタリ。

　ああ、カタリ。

　ユリカが極限クライマックス九手ナイン棍ポールを放ほうり投げて、カタリに駆けよった。カタリは両手から斧おのがこぼれ落ちている以外は、ほとんどあのときのままの体勢だった。こっちを向いていた。胸から何本もの管状のものが突きでていた。それらはぬれていた。赤くぬれそぼっていた。赤い、赤い液体、鮮あざやかな赤い血液が、したたり落ちていた。マリアローズはびくっとした。カタリが動いたからだ。カタリは顔を上げようとして、咳せきをした。ごぼ、ごぼ、と、口からも血があふれた。ユリカが何か叫びながら、白い管にふれた。その途と端たん、崩くずれた。崩ほう壊かいが始まった。呆あつ気けなかった。サリア・ベルは、もしくはサリア・ベルだったものは、まず黒い網目に添そってバリバリパリパリ砕くだけた。そして、それぞれの破は片へんがどんどん細かくなってゆき、ついには砂のような粒りゆう子しとなって、さらさらと地面に降り積もった。カタリも崩れ落ちそうになった。とっさにユリカが支えなければ、砂の下に埋うもれてしまっていたかもしれない。

「──カタリ！　カタリ……！　しっかりしなしゃい、カタリ！」

　バルモア大通りは、純白の砂さ漠ばくと化していた。月明かりに照らされて、砂の一ひと粒つぶ一粒がきらきらと輝かがやいていた。ユリカは膝の下あたりまで砂に埋もれながらも、砂の上にカタリを横たえた。マリアローズのところにも、砂が流れてきた。その砂をつかんでみた。なんだか、変だ。僕が生きてる。それが変だ。おかしい。どうして僕が生きてるんだろう。なんでユリカは医術式を使わないのかな。おかしいな。変だ。ぜんぶ、変だ。



「──あ、は、はは……」

　きみはどうして笑いだしたりするのさ。

　こんなときに。

　なけなしの力をふりしぼって。

「ダメ……！　声を出しゃないで……！」

　ユリカが怒おこるのも無理はない。

　でも、きみは言って聞くような人じゃないよね。

「あ、は、ははは！　はは、は……！」

「やめて！　カタリ！　笑わないで！　今、わたしが、治ち療りようを……！」

「む、無む駄だや……！　は、ははは……！」

「無駄じゃない！」

「……そ、んなん、ユ、リカ、お前じぶんが、一番わかっと、やん、か、はは……！」

「わからない！　怒るわよ！　言うこと聞きなしゃい！」

「いや、や」

「カタリ……！」

「──笑わろて、な……」

　そう、きみは言っていた。

　ついさっきだった。少し前だ。

「笑て……死んだ、る……て……」

　本当に、かっこいいよ。

　きみにしてはかっこよすぎて、まいるよ。

　僕はユリカとカタリのほうを見ることができなかった。かわりにロム・フォウに目をやると、アルファの頭を撫なでながら、無言で顔を伏ふせていた。僕は今さら立ちあがろうとして、わざとらしく右の足首を押さえた。

「──い、つぅ…………」

Omenage 897 11th revolution 8th day

サンランド無統治王国ジェードリ・マーマン地区
〝ゲヘナ聖堂〟

chapter.15

赦されるためならば

顔くらい洗って何か腹に入れておきたいところだったが、サー・ジューダス団長殿どののお呼びとあっては、そう待たせるわけにもゆかない。

まあ、戦いくさってのは元来こんなもんだ。起きている間は気を張りつめっぱなしで、ごく短時間の睡すい眠みんが焦あせりどころか罪悪感さえ喚かん起きする。誰かに叩たたき起こされれば、「馬ば鹿か野や郎ろう、寝ねちゃいねえよ。起きてるよ、起きてるに決まってんだろ、阿あ呆ほう」と悪態をつく。勝つときもあれば、負けるときもある。いずれにしても、戦がつづけば、だんだんと皆みな、おかしくなってくる。殺しても、殺されても、追いこまれたような気分になってきて、そのうち終わりだけを待ちわびるようになる。そんななか、見えない出口を目指して必死に匍ほ匐ふく前進していると、思いがけず笑いがこみあげてくる瞬しゅん間かんがある。隣となりで喉のどをパックリ裂さかれて死んでいる戦友に、「口が一個増えちまったな。まったく、無駄におしゃべりだったお前さんには、これ以上ないくらいふさわしい死にざまだぜ」なんて軽口をたたいたりする。

戦場では、緊きん張ちように飽あいて、弛し緩かんしたやつから死んでゆく。

もっとも、気張っていたって、死ぬときは死ぬ。

度胸があるやつは、勇ゆう敢かんすぎて死ぬ。

気弱なやつは、臆おく病びようすぎて死ぬ。

人はあらゆる理由で死ぬ。

つまり、理由なんて、あるようでないってことだ。戦って、死ぬ。おそらく、真実はそこにしかない。死の前では、勝敗ですら、くだらなくて空くう虚きよな虚構にすぎない。本質的には意味などない。とはいえ、意味があってはつまらない。無意味だからこそ楽しめる。だって、笑える話じゃないか。無意味な勝利を手に入れるために、何もかも捨てて、すべてを賭かけて、こんなに一生懸けん命めいになっている。これ以上に高級なお遊びが他ほかにあるか……？

「貴公、楽しそうだな」

「そうかい」ヘンリー・ブラックモアは、肩かたを並べて大だい柱ちゆう廊ろうの石段をのぼっているリリアン・イヌテロに軽く肩をすくめてみせた。「まあ、退たい屈くつはしてねえな。そいつは間ま違ちがいない」

「少しは危機感というものを持ってはどうだ」

「あるさ。俺にだって、少しくらいはな。何しろ、俺たちは切り札を失っちまったんだ。それに、派手な恰かつ好こうの大剣使い。魔ま術じゆつ士し。バルモア商会の私兵隊。敵もわらわら増えた。楽観できる状じよう況きようじゃない」

「団長は、知っておられたのだろうか」

「うちの大将の神通力は万ばん能のうだろ」

「うむ……」

「疑ってるのかよ、サー・フィリップ」

「疑ってなどいない」

　嘘うそだな。ヘンリーはリリアンを横目でちらりと見て、ひっそりと笑った。

　まあ、リリアンは、情と理を天てん秤びんにかけたとき、基本的には理をとる男だ。サー・ジューダスには心しん酔すいしているものの、どこかでその自分を冷静に観察しているような部分もある。だから、口ではああ言いながらも、気づいているのだろう。

　今回は、今までとは違う。たぶん、サー・ジューダスは、このタイミングで〝罪そのもの〟を失うことになるなんて予想していなかった。見えていなかったのだ。今朝方、兵どもの撤てつ収しゆうを終えて、ヘンリーとリリアンがその旨むねを報告しにゆくと、サー・ジューダスは大いなる祈いのりの場の真ん中にひざまずいて、ひたすら祈っていた。顔を上げずに「わかっています」と答えた。「わかっています。彼女の罪はすべて赦されました。ロシュが彼女を救ってくださったのです」と。知っていたでも、見えていたでもなく、わかっています、と。

　そのとき、ヘンリーは思った。なんだ、動どう揺ようしてやがる。うちの大将にもかわいらしいところがあるじゃねえか。親しみ。共感。好意。どれも違うが、少し似ている。いずれにせよ、サー・ジューダスに対してそんなものを感じるのは初めてだった。同時に、こんなことも思った。おもしろくなってきやがったな。戦争はこうじゃねえとつまらねえ。

「貴公──」リリアンが分厚い唇くちびるをかすかにゆがめた。「やはり、楽しそうだ」

「気のせいだろ」

「そうとは思えんが」

「目とか耳が腐くさってんだよ、お前の」

「性しよう根ねが腐っている貴公に言われたくはない」

「否定はしねえけどな」

「したくてもできないの間違いではないか」

「どっちでもいいさ」

「私は貴公のそうしたいいかげんなところが嫌きらいだ」

「俺はお前さんのそういう几き帳ちよう面めんさがうざったくてかなわねえ」

「なおかつ、貴公はジョークを解しない」

「お前さんのはジョークってより冗句じようくだろ」

「つまらんシャレだ」

「シャレじゃねえよ……」

「わかっている。冗談だ」

「いや、それ、いつものダジャレより理解不能だぞ？　マジでどこがおもしれえのかさっぱりわからねえんだが」

「少々時代の先を行きすぎたか」

「きっと先でもあとでもねえよ。斜ななめ上か下あたりだろ。たぶん」

　リリアンは答えなかった。最後の石段をのぼり終えたからだ。

　すでに、大いなる祈りの場には、〝サー・フィリップ〟リリアン・イヌテロ副団長兼中央騎き士し館長と〝サー・アンドリュー〟ヘンリー・ブラックモア東騎士館長をのぞく、血塗れブラッド聖堂テンプル騎士団ナイツの幹部が顔をそろえていた。

〝裁きの石ジヤツジメントストーン〟隊長〝サー・ジェイムズ〟向こうデア見ずデビルが、巨きょ体たいをちぢめるようにしてうずくまっている。〝サー・ピーター〟ロイ・チャーチル西騎士館長も、お上品に片かた膝ひざをついて、気き障ざったらしくうなだれていた。〝サー・バーソロミュー〟イオネア・ブラントロウ北騎士館長にいたっては、もうほとんど平へい伏ふくせんばかりの体勢だ。獅し子しの鬣たてがみのごとき彼女の豪ごう奢しやな金きん髪ぱつも、今はなんだかしなびて見える。葬そう式しきじゃあるまいし、上役がこんな有様では、端はしのほうにずらりと並んでひざまずいている上級騎士たちも気の毒だ。

　だいたい、大いなる祈りの場の中央で、愛馬アバドンの頸くびを撫なでながら、彼らを見下ろしている我らが〝サー・ジューダス〟アロンズ・ニードルスピア団長の態度にこそ問題がある。

　いつもと違うからだ。

　ふだんのやつは、何があっても動じずに泰たい然ぜん自じ若じやくとロシュに祈りを捧ささげていて、ふと神しん託たくでも下ったかのように、静かに命令を出す。

　それが、どうだ。今のやつの目。苦く悩のうしているかのような、考えに沈しずんでいるかのような目つき。少し強こわ張ばった表情。何か決断しようとしていて、決めかねているみたいな顔をしている。

　正直、あんたがそれじゃ困るんだがな。

　困りはするんだが、おもしれえ。

　あんたも迷うことがあるのか。

　何に迷ってるんだ。

　教えてみろよ。

　この俺に。

「リリアン・イヌテロ、参上つかまつりました」

「ヘンリー・ブラックモア、顔も洗わずに只ただ今いま参りました」

　ヘンリーとリリアンは、サー・ジューダスを囲むように膝ひざを折っている向こうデア見ずデビルとロイ・チャーチル、イオネア・ブラントロウの後ろまで進みでた。向こうデア見ずデビルが一礼しつつ脇わきに移動して空けた場所にひざまずいて、そのまましばらく待っていたが、サー・ジューダスはなかなか口を開こうとしない。ヘンリーは少し顔を上げて、上うわ目め遣づかいでサー・ジューダスの様子をうかがってみた。何を考えてやがる。何をするつもりだ。何か楽しいことならいいんだがな。だが、どうも──なんとなくだが、そうじゃないらしい。

「〝裁き〟は必ず成し遂とげられねばなりません」

　サー・ジューダスは強い口調でそう切りだした。

　この男にしては、強すぎる。

　力んでやがるのか。

「何があろうと、です。たとえどのような犠ぎ牲せいを払はらうことになってもです。人に〝裁き〟は必要なのです。〝裁き〟を受ける以外、人が救われる道はありません。なればこそ成さねばなりません。我々がやらずして何ものがやるというのです。あえて今ここであなたがた罪ある者たちの意思は問うことはしません。あなたがたはすでに主に忠誠を誓ちかっています。その忠誠心はすでに示されています。私は問い糾ただすことなどしません。私と目的を完全に一とするあなたがたにそれは不必要だからです。ゆえに私はただ与あたえるのみです。私が聞くことのできるロシュの声を。そして、〝裁き〟のための力を──」

　ヘンリーは目をすぼめた。

　━━力？

　力、だと……？

　何やらきなくさい話だ。少し鳥とり肌はだが立っている。俺は、警けい戒かいしている。

　だが、力。その一言に対する皆みなの反応は激げき烈れつだった。さすがに、誰も立ちあがったりはしなかったが、身を震ふるわせる者、思わず顔を上げる者は何人もいた。

　なかでも、イオネアはすごかった。彼女はガンッと床ゆかに額を打ちつけて「……どうか！」と叫さけんだ。「どうか、無力で役立たずで無用の長物に等しいわたくしに力をお授さずけください！　どうか、力を……！　わたくしは、このままでは、このままでは、ロシュに、サー・ジューダス団長に、申し訳が立ちません！　お願いいたします、どうか何とぞ、ちっぽけでみじめなわたくしに力を……！」

　まあ、改心司教による洗脳の影えい響きようだろうが、イオネアはかなり精神状態が不安定だ。海かい賊ぞく連中をごっそり仲間に引き入れただけでなく、やつらに対して絶大な支配力を持っているので、北騎士館長だなんだとおだてて使っているものの、本来はそこまでの器うつわじゃない。彼女もどうやらそれを自覚し、過か剰じようなまでに意識しているようなので、その意味では、力とやらを求めることは理解できる。だが、まさかやつが真っ先に追従するとは思わなかった。

「私にも、どうか力を」

　ロイ・チャーチル。

「今の私では……力不足です。私は、力が欲しい。力が。我々の行く手を阻はばむ者どもを薙なぎ払う、力が……」

　買いかぶりだったか、と思った。ひねくれていて、どこか得体の知れないところがあるように感じていたが、意外と底が浅かったようだ。残念だな。それとも、自身の限界を知って自分に失望できるだけ、俺より若いってことか。べつに、どうでもいいが。

　どちらにしても、イオネアにロイがつづいたことで、あとは芋いも蔓づる式しきだった。まず、向こうデア見ずデビルが二人に負け

じと手を挙げた。他ほかの騎士どもも競きそうように「私も」「それがしも」「どうか私も」と申し出た。結局、俺だけか。いや、リリアンもだ。二人だけが、異様な熱ねつ狂きようの直中にいながら、のみこまれることなく、奇き妙みようなまでに醒さめていた。とはいえ、うつむいたままのリリアンが何をどう思っているのか、本当のところはわからないが、ヘンリーはやや居心地が悪いくらいだった。

　ただ、サー・ジューダスが何をしようとしているのか、興味はあった。さらに、ある確信めいたものもヘンリーにはあった。

　それを確かめるために、ヘンリーは傲ごう然ぜんと頭をもたげて、サー・ジューダスを見た。首を傾かしげて、眉まゆをひそめてみせた。

　果たして、サー・ジューダスはヘンリーと目をあわせるなり、かすかに笑った。

　そうか。そういうことか。これでいいってわけだ。俺とリリアンはこのままでいい。まあ、長いつきあいだしな。とっくに読まれてるし、こっちもだいたいわかる。あとは、あんたが何をするつもりなのか。

　さあ、見せろ。

　もったいぶらねえで、見せてくれよ。

「私はあなたがたに聖なる刻印を打ち力を与えることができます」

　サー・ジューダスが左手をゆっくりと前にさしむけた。その人差し指には、大きな黒い石の仰ぎよう々ぎようしい指輪がはめられている。いや、指輪と呼んでいいものか。それは、皮ひ膚ふを破り、肉どころか骨にまで食いこんでいて、もうほとんど彼の指そのものと化している。〝破戒のフオーレン指輪・リング〟。大聖堂の宝物庫に眠ねむっていた〝聖遺物レリツク〟の一つだ。

「えがたい力をえるために失うものを惜おしんではなりません。失うことを恐おそれる必要もありません。サー・ピーター、ここへ」

「はい」

　ロイが返事もそこそこに立ちあがって、サー・ジューダスの前に

ふたたび膝ひざをついた。向こうデア見ずデビルやイオネアにしてみれば、最初の指名が自分以外で少々不満かもしれないが、ロイが一番というのは好判断だと思えた。向こうデア見ずデビルやイオネアなら、たとえこれから何が起ころうと、次は自分がと手を挙げるだろう。だが、ロイはわからない。ふっと我に返って腰こしが引ける可能性もなくはない。あの男がそこまで考えていたとしても、ヘンリーは少しも驚おどろかない。

「これはあなたに課せられる試練です」

　半ば指輪と同化したサー・ジューダスの左手の人差し指が、急に伸のびたように見えた。一いつ瞬しゅん、目の錯さつ覚かくかと思ったが、そうではなかった。人差し指は、実際、五割増くらいになって、先せん端たんが鋭するどく尖とがっていた。束つかの間、大いなる祈いのりの場が騒そう然ぜんとしたが、ざわめきはすぐにかき消された。ロイがサー・ジューダスを振ふり仰あおいで、目を見開いた。何か声を発しようとした。逃にげはしなかったが、腰が浮うきかけた。ヘンリーは目をそらさなかった。サー・ジューダスの人差し指の先端が、ロイの額にふれた。すうっ──と、なんの抵てい抗こうもなく皮膚を、骨を突つき破やぶり、やすやすと侵しん入にゅうしていった。

「耐たえなさい」

　ロイが絶ぜつ叫きょうした。ヘンリーは自分の頰ほおが引きつるのを感じた。おいおい、いくらなんでも死んじまうんじゃねえのか、あれ。

『薔薇のマリア　VI.BLOODRED SINGROOVE』了

あとがき

　自分自身に何か大切なものが欠けているように思えて仕方なくて、それを求めて、さがして、もがいていた日々のことをたまに思い出します。

　僕はそれを見つけたのでしょうか。

　答えは、たぶん、いいえ、です。

　やっぱり僕は、今も足りないような気がしています。

　自分で書いた小説を読み返すと、否いや応おうなくそのことに気づかされます。

　おそらく僕は、埋うめようとして書いているのです。

　ただ、あまり苦痛を感じずにその作業をつづけていられるのは、この本を読んでくれる誰だれかがいるからです。

　あなたのおかげです。

　だから、せめて少しでも楽しんでもらいたいと願いながら、書いています。

　楽しんでいただければ、よいのですが。

　十文字青です。本書が八冊目の薔薇のマリア、ということになります。

　ザ・スニーカーで連れん載さいが始まってから、ほぼ二年。『I』の発刊から二年近く経たちました。

　二年が長いか、短いか、正直、僕にはよくわかりません。

　相変わらず、書けば書いただけ、僕の目の前には課題が積み重

なって、できることよりも、できないことが増えつづける毎日です。

　でも、相変わらず、あのときと同じように、生きているかぎりは、前を向いて歩いてゆこうと思っています。

　結局、それが僕にできることのすべてなのかもしれません。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして、今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、最大限の愛と感謝をこめつつ。

　またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

Ⅵ．ＢＬＯＯＤＲＥＤ　ＳＩＮＧＲＯＯＶＥ

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　Ⅵ．ＢＬＯＯＤＲＥＤ　ＳＩＮＧＲＯＯＶＥ』平成18年11月1日初版発行

平成20年9月25日7版発行

BOOK☆WALKER